秋田県文化財調査報告書第242集

東北横断自動車道秋田線発掘調查報告書XVII

—— 虫 内 Ⅲ 遺 跡 —

1994.3

秋田県教育委員会

東北横断自動車道秋田線発掘調查報告書 XVII

---- 虫 内 Ⅲ 遺 跡 -----

1994 • 3

秋田県教育委員会



1. 虫内Ⅲ遺跡遠景(航空写真 北東→)



2. 虫内Ⅲ遺跡調査前全景(航空写真 東→)



3. 後期調査中の虫内Ⅲ遺跡(航空写真 北々東→)



4. 虫内Ⅲ遺跡後期調査区全景(航空写真 北々東→)



5. 調査区南部土壙墓群発掘調査風景(南西→)



6. 調査区中央部土器棺墓群検出状況(北→)



7. SK10土壙墓 立石と断面状況 (北西→)



8. SK68土壙墓 埋土状況 (北→)



9. SK91土壙墓 石剣・勾玉・石製有孔垂飾品出土状況 (西→)



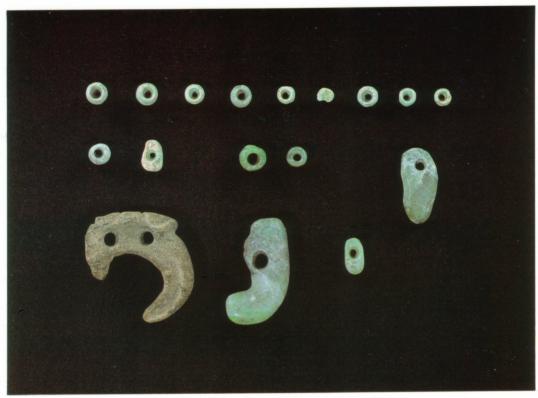
10. SK91土壙墓 石剣・勾玉・石製有孔垂飾品出土状況 (北→)



11. SK104土壙墓 赤色漆塗り櫛出土状況(東→)



12. SK125土壙墓 ベンガラの分布状況 (西→)



13. 土壙墓出土 小玉・勾玉・石製有孔垂飾品



14. SK91土壙墓出土 石剣



15. SR12·18土器棺墓 側面状況 (南→)



16. SR12·18土器棺墓 断面状況 (南→)



17. SR16土器棺墓 側面状況(西→)



18. SR51土器棺墓 側面状況 (北→)



19. SR52土器棺墓 検出状況(南→)



20. SR52土器棺墓 断面状況(北→)



21. SR54土器棺墓 断面状況(北→)



22. SR56土器棺墓 ベンガラ分布状況(西→)



23. SR74土器棺墓 検出状況 (西→)



24. \$R74土器棺墓 断面状況 (南→)

東北横断自動車道秋田線は、秋田県の高速交通体系の根幹となるものです。すでに秋田市から横手市までの57.4kmは、平成3年7月に開通し供用されており、現在は、横手市から岩手県湯田町までの区間15.8kmについての工事が進められています。

本区間の路線上には、多くの遺跡の存在することが確認されており、秋田県教育委員会では、平成2年から工事に先立って、 遺跡の発掘調査を実施して、記録保存に努めております。

本報告書は、平成4年度に調査しました山内村虫内III遺跡の 調査成果をまとめたものであります。

本書が、埋蔵文化財の保護に広く活用され、郷土の歴史や文化を研究する資料として、多くの方々に御利用いただければ幸に存じます。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行に際し、御協力を賜りました日本道路公団仙台建設局、山内村・山内村教育委員会、横手市教育委員会、増田町教育委員会、十文字町教育委員会をはじめ、関係各位に対し厚く御礼申し上げます。

平成6年3月

秋田県教育委員会 教育長 橋 本 顧 信

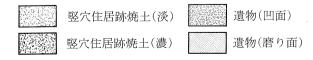
- 1. 本書は、東北横断自動車道秋田線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の17冊目の報告書である。
- 2. 本書は、平成4年度に発掘調査された山内村に所在する虫内Ⅲ遺跡の調査成果をおさめた ものである。
- 3. 調査の内容について、既にその一部が報告会資料等で公表されているが、本報告書の内容がそれらに優先する。
- 4. 本書の執筆は、第2章第2節、第6章を除いて大野が行った。
- 5. 第2章第2節は、専門指導員である板垣直俊氏から原稿を賜ったものである。記して感謝申し上げる次第である。
- 6. 第6章は、株式会社ズコーシャに分析を委託した報告であるが、遺構の名称など一部を補 訂している。
- 7. 土層図中の土色は、農林省農林水産技術会議事務局 監修、財団法人日本色彩研究所 色 票監修 『新版 標準+色帖』に拠った。
- 8. 挿図中の遺物番号は、土器と石器類ごとにそれぞれ通し番号を付してある。
- 9. 挿図遺物の縮尺は、土器は2分の1、3分の1のものと4分の1のものがあり、石器類は 2分の1で、各々スケールを付した。
- 10. 石器のアスファルトの付着はドットで示した。
- 11. 発掘調査及び本書作成に際し、宇部 則保、高橋與右衛門、大工原 豊、能登 健、藤田 亮 一、 三宅 敦気の各氏から御教示をいただいた。記して感謝申し上げる次第である。

凡

1. 検出された遺構には、検出順に番号と略号を付した。略号は以下の通りである。

竪穴住居跡=S I 土壙墓=S K 土器棺墓=S R 土坑=S K 配石遺構=S Q 柱穴様ピット=S K P 性格不明遺構=S X

2. 挿図に使用したスクリーントーンは以下の通りである。



3. 石器観察表の単位は、長さ・幅・厚さがmm、重さがgである。

目 次

巻頭図版	
序	
例言	
目次	
第1章 はじめに	
第1節 調査に至るまで	1
第2節 調査の組織と構成	2
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の位置と立地	4
第2節 遺跡周辺の地形と地質	6
1 地形と地質の概況	6
2 遺跡の地形と地質	11
第3節 周辺の遺跡	12
第3章 調査の概要	17
第1節 遺跡の概観・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
1 遺跡の推定範囲と調査区	17
2 遺跡の基本層序・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	17
第2節 調査の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	21
第3節 調査経過	22
第4章 調査の記録	24
第1節 検出遺構とその出土遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	24
1 竪穴住居跡	24
2 土壙墓	32
3 土器棺墓	92
4 土坑1	29
5 配石遺構1	30
6 柱穴様ピット1	32
7 性格不明遺構1	33
第2節 遺構外出土遺物1	36
1 土器	36
2 石器1	
第5章 まとめ1	
第 1 節 土壙墓1	
第 2 節 土器棺墓1	
第3節 虫内Ⅲ遺跡の埋葬区と墓群1	83
第6章 虫内Ⅲ遺跡から検出された遺構に残存する脂肪の分析1	89
写真図版	

挿 図 目 次

第 1 図	虫内Ⅲ遺跡の位置	4
第 2 図	横手 I ・ C 以東の路線と遺跡	5
第 3 図	対象地域	7
第 4 図	対象地域の地質図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	8
第 5 図	調査地域の段丘区分図	10
第 6 図	周辺の遺跡	13
第 7 図	虫内III遺跡の推定範囲と発掘調査区	18
第 8 図	工事計画と発掘調査範囲	19
第 9 図	基本土層図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	20
第 10 図	調査区の地形と検出遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	25
第 11 図	遺構・グリッド配置図	26
第 12 図	\$166竪穴住居跡	27
第 13 図	\$197竪穴住居跡	29
第 14 図	\$1100竪穴住居跡	31
第 15 図	\$166·97·100竪穴住居跡 炉埋設土器 ·····	33
第 16 図	SKO1・02・08土壙墓·····	36
第 17 図	SK10 • 15 • 17土壙墓·····	39
第 18 図	SK19・20・21・22土壙墓、SKP73柱穴様ピット	41
第 19 図	SK23・26・27・29土壙墓·····	43
第 20 図	SK32・37・38・40・43土壙墓、SKP33・45・47柱穴様ピット	47
第 21 図	SK44・46・67・70・71土壙墓······	49
第 22 図	SK68・69・72・77A・77B土壙墓	51
第 23 図	SK78・79・87・89・115土壙墓	55
第 24 図	SK90・91・92・109土壙墓 ·····	57
第 25 図	SK94・95・96・98・101・116土壙墓·····	61
第 26 図	SK102・103・104・105土壙墓·····	65
第 27 図	SK106・108・112・113土壙墓·····	69
第 28 図	SK119・120・121・122・123土壙墓	73
第 29 図	SK125 • 126 • 127土壙墓 ·····	75
第 30 図	土壙墓出土小玉・勾玉・石製有孔垂飾品	76
第 31 図	SK91土壙墓出土石剣	77

第 32 図	SK26・89土壙墓出土土器、SK77A・104土壙墓出土赤色漆塗り櫛 78
第 33 図	SK115土壙墓出土土器
第 34 図	土壙墓出土土器(1)
第 35 図	土壙墓出土土器(2) SKP・SX出土土器 81
第 36 図	遺構内出土石器(1) SK01・10・15 82
第 37 図	遺構内出土石器(2) ŠK15・17・21・26・67・68 SR58····· 83
第 38 図	遺構内出土石器(3) SK68・69・77A・87 84
第 39 図	遺構内出土石器(4) SK91・92・94・98・102・104・105・108・109 85
第 40 図	遺構内出土石器(5) SK113・119・120・122・125 86
第 41 図	遺構内出土石器(6) SK125・127 87
第 42 図	遺構内出土石器(7) SK01・10・15・17・68・78 88
第 43 図	遺構内出土石器(8) SK89・102・113・121・126 89
第 44 図	遺構内出土石器(9) SK07・37・38・128 … 90
第 45 図	遺構內出土石器(10) SX39····· 91
第 46 図	SRO3・04・06・12・18土器棺墓····· 95
第 47 図	SR13・14・16・24土器棺墓····· 99
第 48 図	\$R35・51・52・53土器棺墓、\$KP59柱穴様ピット103
第 49 図	SR54・55・56土器棺墓·······105
第 50 図	SR57・58・60・61・62土器棺墓107
第 51 図	SR63・74・75・80・81土器棺墓111
第 52 図	SR82・83・84・85土器棺墓······115
第 53 図	SR86・88・93土器棺墓·······117
第 54 図	SRO3・04・06・13・14土器棺······118
第 55 図	SR12土器棺······119
第 56 図	SR16 • 18 • 24土器棺······120
第 57 図	SR35・51土器棺······121
第 58 図	SR52・53土器棺······122
第 59 図	SR54土器棺·····123
第 60 図	SR55・56・58土器棺・・・・・・124
第61図	SR57・60・61土器棺······125
第 62 図	SR62・63・74・75土器棺······126
第 63 図	SR80・81・82・83・86土器棺・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

第 64 図	SR84・85・88・93上器棺	128
第 65 図	SK07・128・129土坑、SQ09・41配石遺構·····	131
第 66 図	SKP05柱穴様ピット、SX39・99・110性格不明遺構	135
第 67 図	遺構外出土土器(1)	138
第 68 図	遺構外出土土器(2)	139
第 69 図	遺構外出土土器(3)	140
第 70 図	剝片類・グリッド別出土数量分布図	142
第 71 図	出土石器分類模式図	143
第72図	遺構外出土石器(1)石鏃・石錐	149
第 73 図	遺構外出土石器(2)石錐・石槍・石匙・搔器	
第74図	遺構外出土石器(3)搔器・トランシェ様石器	151
第 75 図	遺構外出土石器(4)トランシェ様石器・篦状石器・	152
第 76 図	遺構外出土石器(5)篦状石器	153
第 77 図	遺構外出土石器(6)篦状石器	154
第 78 図	遺構外出土石器(7)篦状石器	155
第 79 図	遺構外出土石器(8)篦状石器	156
第80図	遺構外出土石器(9)篦状石器	157
第81図	遺構外出土石器(10)篦状石器	158
第 82 図	遺構外出土石器(11)篦状石器	159
第83図	遺構外出土石器(12)篦状石器	160
第 84 図	遺構外出土石器(13)篦状石器	161
第 85 図	遺構外出土石器(14)篦状石器	162
第 86 図	遺構外出土石器(15)篦状石器	163
第 87 図	遺構外出土石器(16)篦状石器	164
第 88 図	遺構外出土石器(17)篦状石器	165
第 89 図	遺構外出土石器(18)削器	
第 90 図	遺構外出土石器(19)削器	167
第 91 図	遺構外出土石器(20)削器	168
第 92 図	遺構外出土石器(21)鋸歯縁石器・両刃礫器	169
第 93 図	遺構外出土石器(22)凹石・磨石・角柱状礫	170
第 94 図	土壙墓の規模・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	173
第 95 図	土壙墓埋土の類型・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	174

第 96 図	土壙墓	基全部と各土壙墓群内における長軸方向
第 97 図	土壙墓	基群・土器棺墓群・墓群······176
第 98 図	土器机	5墓の類型181
第 99 図	土器析	i墓の大きさと埋設レベル模式図182
第100図	土器框	音墓・土壙墓内外での土壌試料採取地点190
第101図	試料中	ロに残存する脂肪の脂肪酸組成
第102図	試料中	1に残存する脂肪のスチロール組成
第103図	試料中	に残存する脂肪の脂肪酸組成樹状構造図197
第104図	試料中	に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関198
		巻 頭 図 版 目 次
巻頭図版]	1 1.	···-··
	2.	
巻頭図版 2	2 3.	後期調査中の虫内Ⅲ遺跡(航空写真 北々東→)
		虫内Ⅲ遺跡後期調査区全景(航空写真 北々東→)
巻頭図版 3	3 5.	調査区南部土壙墓群発掘調査風景(南西→)
	6.	調査区中央部土器棺墓群検出状況(北→)
巻頭図版4	7.	SK10土壙墓 立石と断面状況(北西→)
		SK68土壙墓 埋土状況(北→)
巻頭図版 5	9.	SK91土壙墓 石剣・勾玉・石製有孔垂飾品出土状況(西→)
	10.	SK91土壙墓 石剣・勾玉・石製有孔垂飾品出土状況(北→)
巻頭図版 6	11.	SK104土壙墓 赤色漆塗り櫛出土状況(東→)
		SK125土壙墓 ベンガラ分布状況(西→)
巻頭図版7	13.	土壙墓出土 小玉・勾玉・石製有孔垂飾品
		SK91土壙墓出土 石剣
巻頭図版8		SR12·18土器棺墓 側面状況(南→)
		SR12·18土器棺墓 断面状況(南→)
巻頭図版 9	17.	SR16土器棺墓 側面状況(西→)
	18.	SR51土器棺墓 側面状況(北→)
	19.	SR52土器棺墓 検出状況(南→)
	20.	SR52土器棺墓 断面状況(北→)
巻頭図版10	21.	SR54土器棺墓 断面状況(北→)

- 22. SR56土器棺墓 ベンガラ分布状況(西→)
- 23. SR74+器棺墓 検出状況(西→)
- 24. SR74土器棺墓 断面状況(南→)

図 版 目 次

- 図版1 1 虫内Ⅲ遺跡前期調査区全景(南→)
 - 2 後期調香区全景(南→)
 - 図版 2 1 調査区南部中央の土壙墓群(西→)
 - 2 実測風景
 - 図版3 1 SI66竪穴住居跡 土器埋設炉と焼土分布状況(東→)
 - 2 \$166竪穴住居跡 上器埋設炉埋設状况(北東→)
 - 3 \$197竪穴住居跡 土器埋設炉と周辺状況(南西→)
 - 図版 4 1 S197竪穴住居跡 土器埋設炉の検出状況(北→)
 - 2 \$1100竪穴住居跡 土器埋設炉の検出状況(北西→)
 - 3 \$1100竪穴住居跡 七器埋設炉の断面状況(南→)
 - 図版 5 1 SK01土壙墓 土層断面(西→)
 - 2 SK02土壙墓 土層断面(西→)
 - 3 SKO2土壙墓 完掘(北西→)
 - 図版 6 1 SKO8土壙墓 土層断面(北西→)
 - 2 SK08土壙墓 完掘(北東→)
 - 3 SK10土壙墓・SQ09配石遺構 検出状況(北東→)
 - 図版7 1 SK10土壙墓 調査風景(北→)
 - 2 SK10土壙墓 完掘(北西→)
 - 3 SK15土壙墓 完掘(南→)
 - 図版 8 1 SK17土壙墓 完掘(北→)
 - 2 SK19土壙墓 完掘(北東→)
 - 3 SK19土壙墓 北西隅部小玉出土状況(南東→)
 - 図版 9 1 SK20·21·22·23土壙墓 検出状況(西→)
 - 2 SK20 · 21 · 22土壙墓 完掘(西→)
 - 3 SK20土壙墓 完掘(北→)
 - 図版10 1 SK21土壙墓 土層断面(北→)
 - 2 SK22土壙墓 完掘(東→)

- 3 SK23土壙墓 完掘(南→)
- 図版11 1 SK26土壙墓 土層断面(西→)
 - 2 SK26土壙墓 完掘·壹形土器出土状況(西→)
 - 3 SK27土壙墓 完掘(南→)
- 図版12 1 SK29土壙墓 土層断面(東→)
 - 2 SK32土壙墓 完掘(西→)
 - 3 SK37・38土壙墓 SKP45・47柱穴様ピット 完掘(西→)
- 図版13 1 SK40·43土壙墓 土層断面(西→)
 - 2 SK40土壙墓 小玉出土状況(北→)
 - 3 SK43土壙墓 完掘(西→)
- 図版14 1 SK44土壙墓 完掘(西→)
 - 2 SK46土壙墓 土層断面(北→)
 - 3 SK46土壙墓 完掘(北→)
- 図版15 1 SK67・70土壙墓 土層断面(西→)
 - 2 SK67·70土壙墓 完掘(西→)
 - 3 SK67・70・71・105土壙墓 完掘(北→)
- 図版16 1 SK68土壙墓 調査風景(西→)
 - 2 SK68土壙墓 完掘(北→)
 - 3 SK69土壙墓 土層断面(南→)
- 図版17 1 SK70·71土壙墓 完掘(東→)
 - 2 SK72土壙墓 土層断面(北→)
 - 3 SK77A・B土壙墓 土層断面(南西→)
- 図版18 1 SK77A · B 土壙墓 完掘(東→)
 - 2 SK78土壙墓 土層断面(北東→)
 - 3 SK79土壙墓 完掘(南西→)
- 図版19 1 SK87土壙墓 土層断面(東→)
 - 2 SK87土壙墓 完掘(北→)
 - 3 (左から)\$K89・115・106土壙墓 検出状況(南西→)
- 図版20 1 SK89·115土壙墓 検出状況(西→)
 - 2 SK89土壙墓 小型壺形土器出土状況(東→)
 - 3 SK89土壙墓 完掘(北→)

- 図版21 1 SK90十墉墓 十層断面(北→) 2 SK91土壙墓 検出状況(南→) 3 SK91土壙墓 石剣・勾玉・石製有孔垂飾品出土状況(北→) 図版22 1 SK92·109土壙墓 検出状況(東→) 2 SK92·109土壙墓 完掘(西→) 3 SK94土壙墓 礫出土状況(東→) 図版23 1 SK95土壙墓 完掘(北→) 2 SK96土壙墓 完掘(北西→) 3 (手前から)SK95・96・101・116土壙墓 完掘(北西→) 図版24 1 SK98土壙墓 完掘(北→) 2 SK104土壙墓 櫛・勾玉・搔器出土状況(西→) 3 SK102·103·104土壙墓 検出状況(南→) 図版25 1 SK102土壙墓 検出状況(北西→) 2 SK102土壙墓 土層断面(北→) 3 SK102土壙墓 完掘(北西→) 図版26 1 SK105土壙墓 土層断面(南→) 2 SK105土壙墓 完掘(南→) 3 (左から)\$K106・115・89土壙墓 検出状況(東→) 図版27 1 SK106土壙墓 礫出土状況(南→) 2 SK108土壙墓 完掘(南西→) 3 SK112土壙墓 完掘(南→) 図版28 1 SK113土壙墓 完掘(北東→) 2 SK115·89土壙墓 土層断面(西→) 3 SK115土壙墓 深鉢形土器出土状況(西→) 図版29 1 SK115·89土壙墓 完掘(西→) 2 SK119土壙墓 完掘(東→) 3 SK120土壙墓 完掘(南→) 図版30 1 SK121土壙墓 完掘(南東→)
- 3 LA27・28グリッド 調査後の状況(西→) 図版31 1 SK125土壙墓 略完掘(西→) 2 SK126土壙墓 完掘(南→)

2 SK122·123土壙墓 完掘(西→)

- 3 SK127土壙墓 完掘(北東→)
- 図版32 1 LB30グリッド土器棺墓群 調査状況(北西→)
 - 2 SR03土器棺墓 断面状況(北→)
 - 3 SR04土器棺墓 断面状況(北→)
- 図版33 1 SR06土器棺墓 略完掘(西→)
 - 2 SR12·18土器棺墓 検出状況(北西→)
 - 3 SR12·18十器棺墓 略完掘(南→)
- 図版34 1 SR13土器棺墓 検出状況(北東→)
 - 2 SR13十器棺墓と木の根の状況(北→)
 - 3 SR14上器棺墓 断面状況(東→)
- 図版35 1 SR16十器棺墓 断面状況(西→)
 - 2 SR16土器棺墓 略完掘(西→)
 - 3 SR24土器棺墓 略完掘(北東→)
- 図版36 1 \$R35土器棺墓 検出状況(北西→)
 - 2 SR35土器棺墓 断面状況(北東→)
 - 3 LB30グリッド土器棺墓群 検出状況(北→)
- 図版37 1 SR51土器棺墓と底部土器片の状況(北→)
 - 2 SR52土器棺墓 断面状况(北→)
 - 3 SR52土器棺墓 略完掘(北→)
- 図版38 1 SR53土器棺墓 検出状況(北→)
 - 2 SR54土器棺墓 検出状況(西→)
 - 3 SR55土器棺墓 断面状況(西→)
- 図版39 1 SR57·58土器棺墓 側面状況(西→)
 - 2 SR57土器棺墓 略完掘(西→)
 - 3 SR58土器棺墓 断面状況(西→)
- 図版40 1 SR60·61土器棺墓 検出状況(北→)
 - 2 SR60土器棺墓 略完掘(北→)
 - 3 SR61土器棺墓 断面状況(北→)
- 図版41 1 SR62土器棺墓 断面状況(北→)
 - 2 SR63土器棺墓 検出状況(北→)
 - 3 SR74土器棺墓 側面状況(北→)
- 図版42 1 SR75土器棺墓 検出状況(東→)

- 2 SR80土器棺墓 断面状況(南→)
- 3 SR81土器棺墓 検出状況(東→)
- 図版43 1 SR82土器棺墓 検出状況(西→)
 - 2 SR83土器棺墓 側面状況(北→)
 - 3 SR83土器棺墓 断面状況(北→)
- 図版44 1 SR84土器棺墓 略完掘(南西→)
 - 2 SR85土器棺墓 検出状況(北→)
 - 3 SR85土器棺墓 断面状況(北→)
- 図版45 1 SR86土器棺墓 検出状況(北→)
 - 2 SR88土器棺墓 断面状況(北東→)
 - 3 SR93土器棺墓 検出状況(西→)
- 図版46 1 SK07土坑 完掘(東→)
 - 2 SK128土坑 略完掘(北→)
 - 3 SQ41配石遺構 検出状況(南→)
- 図版47 1 SKP73柱穴様ピット 完掘(西→)
 - 2 SX39性格不明遺構 土層断面(北→)
 - 3 SX39性格不明遺構 篦状石器出土状況(東→)
- 図版48 1 SX99性格不明遺構 土器検出状況(北→)
 - 2 SX110性格不明遺構 検出状況(西→)
 - 3 SX110性格不明遺構 検出状況(北→)
- 図版49 1 SRO3・04・12・13・14・16土器棺
- 図版50 1 SR18・24・35・51・52土器棺
- 図版51 1 \$R53 · 54 · 55 · 56 · 57 土器棺
- 図版52 1 SR58・60・61・62・63・74・75・80・81・82・83土器棺
- 図版53 1 \$R84 · 85 · 86 · 88 · 93 ±器棺、\$I66 · 97 · 100堅穴住居跡、\$K26 · 89 · 115 ± 壙墓、\$X99件格不明遺構、KT34遺構外

第1章 はじめに

第1節 調査に至るまで

東北横断自動車道秋田線は、首都圏への時間短縮と県内の陸上交通体系の改善など、地域の 生産活動と住民生活に必要な情報や資源の交流を促進することを目的に計画された高速道路で ある。道路は、東北自動車道から岩手県北上市で分岐し、横手市一大曲市を経て秋田市に至る 総延長108kmに達する。このうち、秋田一横手間57.4kmについては、昭和53年11月の第8次施 行命令によって具体化し、既に平成3年7月に供用が開始されている。

秋田-横手間の道路計画路線内に存在する合計27遺跡の発掘調査は、昭和60年~平成元年に実施され、それぞれに報告書が刊行されている。

横手インター・チェンジ(I・C)以東の横手一湯田間19.7kmについては昭和61年3月に第9次施行命令が下された。これに伴い昭和62年3月には、日本道路公団仙台建設局長から秋田県教育委員会教育長あてに、道路計画路線内に所在する埋蔵文化財包蔵地の分布調査の依頼があった。これを受けて秋田県教育委員会では、昭和62年5月と同63年6月に遺跡分布調査を実施し、平鹿郡山内村の計画路線内に11遺跡が存在することを報告した。また、横手I・C以東の横手市分についての分布調査は、横手一秋田間の分布調査と同時に、昭和56年と同58年に実施され、4遺跡の存在することが報告されていた。これら計画路線上に存在する合計15遺跡の取り扱いについては、昭和60年の日本道路公団と秋田県教育委員会の合意を踏襲することとした。15遺跡は横手I・Cから北上市側に、柳田I・柳田II・小松原・新町遺跡(以上、横手市)、茂竹沢・小田III・小田II・小田II・中島・相野々・上谷地・越上遺跡(以上、山内村)である。

発掘調査に先立って、横手市分として昭和62年には柳田 I ・柳田 II 遺跡、平成元年には小松 原遺跡西半部、平成 2 年には小松原遺跡東半部と新町遺跡南半部、平成 3 年には新町遺跡北半 部の範囲確認調査を実施した。その結果、柳田 I ・柳田 II ・小松原遺跡については遺跡の範囲 が計画路線に及んでおらず、また新町遺跡北半部については宅地造成などによる撹乱が著しく 遺構等が遺存していないため、これらは発掘調査の必要がないと判断した。

山内村分の遺跡範囲確認調査は、平成2年に虫内I遺跡、平成3年に茂竹沢・虫内II・岩瀬・中島・力石II・越上遺跡、平成4年に小田V・小田IV・虫内III・相野々・上谷地遺跡について実施した。その結果、中島・相野々・力石II遺跡については遺跡の範囲が計画路線内には及ばないことから調査が不要となった。なお平成2年に、虫内I遺跡の南東側と虫内II遺跡の西側、

及び上谷地遺跡の東側で縄文時代の遺物が採集され、この3つの地点にも遺跡の存在することが判明したことから、各々を虫内III遺跡・小田IV遺跡・力石II遺跡として登録し、範囲確認調査を行っている。これらのことから、横断道山内村分の発掘調査対象遺跡は、岩手県側から順に越上・上谷地・岩瀬・虫内III・虫内 I ・虫内 II・小田IV・小田V・茂竹沢遺跡の9遺跡となったのである。

横手市の1遺跡・山内村の9遺跡に対する発掘調査は、平成2年度の新町遺跡から開始され、平成3年には越上遺跡、岩瀬・虫内I遺跡の一部、虫内II遺跡、茂竹沢遺跡が、平成4年には上谷地・虫内III遺跡、虫内I遺跡の一部、小田IV遺跡、平成5年には小田V遺跡、虫内I遺跡の一部、岩瀬遺跡の残り部分が実施されている。また、これらの遺跡のうち、新町遺跡・茂竹沢遺跡・虫内II遺跡・越上遺跡の発掘調査報告書が、平成5年3月に公にされている。

第2節 調査の組織と構成

遺 跡 名 虫内Ⅲ遺跡

遺跡所在地 秋田県平鹿郡山内村土淵字虫内99外

調 査 期 間 前期調査 平成4年6月1日~7月3日

後期調査 平成4年9月8日~11月20日

調 査 面 積 600 m²

調 査 主 体 者 秋田県教育委員会

調 査 担 当 者 大野 憲司 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

武藤 祐浩 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

伊藤 攻 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

工藤 晃 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

専門指導員 小林 達雄 国学院大学文学部教授

林 謙作 北海道大学文学部助教授

岡村 道雄 文化庁記念物課文化財調査官

板垣 直俊 秋田県由利郡鳥海町立川内中学校教諭

総 務 佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

(現 秋田県立農業科学館主香)

皆川 清 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

(現 南教育事務所仙北出張所主香)

佐々木 真 (秋田県埋蔵文化財センター主任)

佐藤 広文 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

調查協力機関 日本道路公団仙台建設局横手工事事務所 山内村・山内村教育委員会

参考文献

1:秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書 I $\sim XI$ 』 秋田県文化財調査報告書

第150 • 166 • 180 • 186 • 189 • 190 • 191 • 205 • 206 • 207 • 209集 1986 ~ 1991 (昭和61 ~ 平成3年)

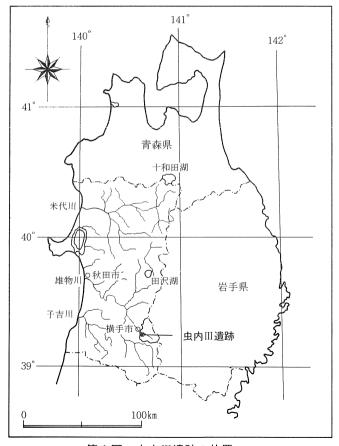
- 2: 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 3:秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第93集 1982(昭和57年)
- 4:秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第201集 1990(平成2年)
- 5:秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 6:秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第226集 1992(平成4年)
- 7:前述の小田I・小田II・小田III遺跡については、横断道の分布調査の際に付した遺跡名が、 既に別の遺跡として遺跡地図に登録されていたことが判明したこと、地形的には一つの遺跡とするのが妥当であること等から、これをまとめて小田V遺跡とした。
- 8:秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書**Ⅲ**—新町遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第232集 1993(平成5年)
- 9:秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書**Ⅲ**—茂竹沢遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第233集 1993(平成5年)
- 10: 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書XW—虫内II 遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第234集 1993(平成5年)
- 11:秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書W一越上遺跡一』 秋田県文化財調査報告書第235集 1993(平成5年)

第2章 遺跡の立地と環境

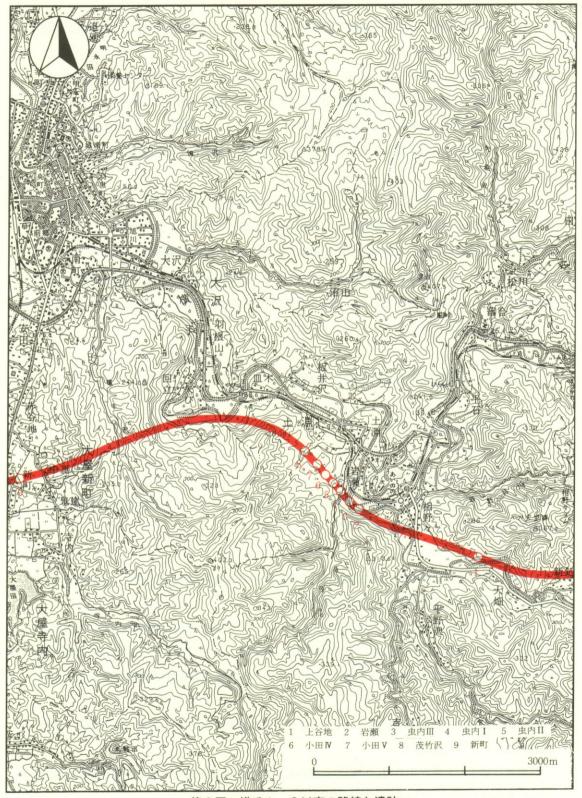
第1節 遺跡の位置と立地

虫内Ⅲ遺跡は、北緯39°16′28″、東経140°36′53″を中心に所在する縄文時代の遺跡で、JR 東日本北上線相野々駅の西方約700mに位置する。

国道13号線と107号線が交差する横手市安田の交差点から、107号線を北上市方向に5.5km進むと、平鹿郡山内村土淵のY字交差点に至る。この交差点を右手(相野々駅方向)に入り直ぐ右折して、JR北上線の踏切を渡ると山内村土淵字虫内の集落がある。Y字交差点から300~500mの虫内集落の南側には、標高200~300mの山地が迫っており、集落南端から山地裾部までが虫内 I 遺跡である。虫内 I 遺跡は、縄文時代後期後葉~晩期前葉の広大な墓域を中心とする遺



第1図 虫内!!!遺跡の位置



第2図 横手I・C以東の路線と遺跡

跡である。虫内Ⅲ遺跡は、虫内Ⅰ遺跡の南東側に当たり、二つの遺跡の間には、山地間を北流して横手川に注ぐ虫内沢がある。

雄物川の支流である横手川は、秋田・岩手両県の県境となっている奥羽山脈の甲山一帯(標高700~1,000m)に源を発して、平鹿郡山内村三又から標高300~700mの山地を縫うように西流し、横手盆地中央部の東端に出る中規模の河川である。虫内III遺跡は、山内村南郷方面から西流して来た横手川が、土淵字虫内付近で流路をほぼ直角に北に変える屈曲部西側の低位段丘上に立地している。

この低位段丘は、南郷II段丘で、約1万年前前後に形成されたと考えられている。本遺跡付近に見られる南郷II段丘は、前述の横手川屈曲部西側に接して分布し、虫内III遺跡から虫内 I・II遺跡方向に連続するが、本遺跡と虫内 I 遺跡との間には、虫内沢が断面 V字形の谷となって流れている。従って本遺跡は、東側が横手川への段崖、南側が羅婆王山北裾に当る急峻な斜面、西側が虫内沢への急崖となっている。遺跡中央部での標高は約106mで、横手川及び虫内沢の現水面との比高差は10mである。

第2節 遺跡周辺の地形と地質

1 地形と地質の概況

(1) はじめに

ここで対象とする地域を第3図の地域とする。本地域は山内村の西端に位置する4km四方の地域である。本地域には33ケ所の遺跡が確認されているが、その中で8遺跡が東北横断自動車道秋田線建設事業に係る発掘調査の対象となっている。

(2) 地形の概況

本地域は雄物川の支流である横手川とその支流黒沢川・武道川の流域に位置し、地形的には、 山地と河岸段丘および氾濫原・谷底平野に区分される。

山地は河川によって区分され、秋田県(1976)によると、西部と南部の金峰山山地、南東部の大日向山山地、東部の大穴峠山地、北部の御岳山山地の4つに分けられる。いずれの山地も標高250m~350mの中起伏山地が大部分を占めている。本地域の最高峰は東端部にある天竺森(標高368m)である。

河岸段丘は横手川と黒沢川に沿って、500m~1kmの幅で分布しているが、武道川沿いでは 発達が乏しい。(詳細は後述)

氾濫原は横手川と黒沢川の現河床沿いに僅かに分布する程度である。また、谷底平野は武道 川沿いと小さな谷沿いにいくつか分布がみられる。



第3図 対象地域

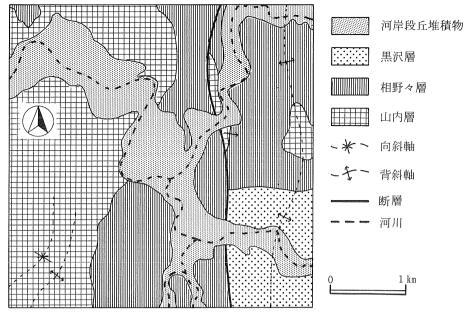
(3) 地質の概況

本地域の地質は、河岸段丘堆積物を除くと、古い順に山内層・相野々層・黒沢層(いずれも新第三紀中新世)に区分される。(第4図)

山内層は淡灰褐色〜褐色の硬質泥岩で、層理が発達しており板状に割れる性質がある。横手 市東方の山地に広く分布し、本地域では相野々よりも西方の山地を形成している地層である。

相野々層は主として黒色泥岩からなり、一部では石灰質の団塊や凝灰質砂岩を含む。また、最下部に灰白質~白色の石英安山岩質凝灰岩の薄い層をはさむ。山内層の上に不整合にのり、西は横手市の中山丘陵から、東は横手川・黒沢川の流域に広く分布する。本地域では相野々よりも東方に分布し、平野沢集落付近では、石英安山岩質凝灰岩がみられる。

黒沢層は主として青灰色~暗灰色の細粒砂岩、砂質シルト岩からなり、相野々層とは整合であり、若干指交関係をなすが、やや斜交して黒沢層が上位となる。横手川・黒沢川の流域に分



第4図 対象地域の地質図

中川ほか(1971)				秋田県(1976)	TOYOSIMA(1984)	本 稿
外	Щ	段	丘	砂礫段丘 I +		
相里	乎々 高	6位段	丘丘	砂礫段丘I	横手沢段丘	横手沢段丘
相	野々	段	丘	砂礫段丘II	岩瀬段丘	岩瀬段丘
長	瀞	段	丘	砂礫段丘III+	板井沢段丘	板井沢段丘
土	淵	段	É.	砂礫段丘III	南郷段丘	南郷(I~III)段丘
季	原	段	£	砂礫段丘Ⅳ+		土淵段丘
回	立	段	丘	砂礫段丘IV		
				礫段丘V		

第1表 河岸段丘の区分の比較

布するが、相野々層よりは分布範囲が狭い。本地域では東南部の横手川沿いにみられる。

河岸段丘堆積物は横手川・黒沢川の河川沿いに発達し、礫・砂及び泥からなり、厚さは数m 程度である。

本地域は断層と褶曲によって複雑な地質構造を示している。本地域の東部には、平野沢断層が南北に縦断しており、さらにその東方には、断層と平行に背斜軸がみられる。また、南部にもいくつかの背斜・向斜構造がみられ、複雑な構造を物語っている。

(4) 河岸段丘について

① これまでの研究

本地域の河岸段丘については、これまでいくつかの研究例がある。(第1表)

中川ほか(1971)では、脊梁山脈とその両側の低地帯における第四紀の地変について考察を進めようと、横手川・黒沢川の河岸段丘と和賀川の河岸段丘の対比を行い、横手川・黒沢川流域では7つに段丘を区分している。

秋田県(1976)では、ほぼ中川ほか(1971)の段丘区分を踏襲しながら、さらに詳細な段丘面区分図を作製し、最も新しい砂礫段丘Vを加えて、全部で8段丘に区分している。

TOYOSHIMA(1984)では、2万年以後の河岸段丘の発達過程を調査するために横手川・黒沢川流域を取り上げ、板井沢段丘をfilltop terrace(砂礫堆積段丘)、南郷段丘は板井沢段丘を侵食したfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)であると考えた。さらには「Cの年代測定資料から、板井沢・南郷両段丘の形成年代を約23,000年前よりも新しく、約12,000年前よりも古いと考えている。

② 段丘の区分と対比

本稿では、これまでの研究の中から、TOYOSHIMA(1984)の段丘の区分を踏襲しながらも、 南郷段丘をさらに I \sim IIIの 3 つに区分し、現河床とほとんど同じ高度の最も低い段丘を「土淵 段丘」と命名した。(第1表)

中川ほか(1971)の外山段丘と回立段丘及び秋田県(1976)の砂礫段丘 V は、調査地域内には分布しないので、本稿では省略した。

a 横手沢段丘

調査地域内では最も高位の段丘で、模式地は横手市の横手沢両岸であるが、本地域では、相野々~落合の黒沢川左岸と横手川の大畑にわずかに分布する。標高は相野々付近では140~160 mであるが、落合では高度を増し、180~200mとなる。かなり開析が進んだ段丘面がみられる。 堆積物については不明である。

b 岩瀬段丘

調査地域中央鶴ケ池付近とその対岸である小田 V 遺跡周辺、及び相野々南西に分布する。標高は120~130mで段丘面の開析度は横手沢段丘よりも小さく、平坦面が残る。安山岩を主体とする最大直径50cmの風化した円礫層が 5 m以上堆積しており、その上に 1~2.5mの角礫混じりの砂質粘土層が発達している。本段丘は中川ほか(1971)によると、下末吉面(約12~13万年前)に対比される。

c 板井沢段丘

下位の南郷段丘の山沿いに断片的に分布し、板井沢東方、その対岸の茂竹沢付近、相野々南方などでみられる。段丘面が山側から河谷側に傾斜し、標高は110~140mに及ぶ。本調査では確認できなかったが、TOYOSHIMA(1984)によると、本段丘はfilltop terrace(砂礫堆積面段



 --- 河川
 南郷 I 段丘

 横手沢段丘
 南郷 II 段丘

 岩瀬段丘
 南郷 II 段丘

 坂井沢段丘
 土淵段丘

第5図 調査地域の段丘区分図

丘)でその構成層は砂やシルトを多く含む亜円礫・亜角礫からなり、層厚は10m以上にも達する。岡田ほか(1972)によると、本段丘に対比される横手川上流の三又付近の段丘堆積物の上部の泥炭から $23,200\pm^{11}$ 388 $yrB.P.という <math>^{14}$ C年代が得られており、本段丘の堆積面は約23,000年以後に形成されたことが明らかになっている。

d 南郷段丘

本地域に最も広く分布する段丘で、横手川・黒沢川に沿って連続的に跡をたどることができる。TOYOSHIMA(1984)では同一の段丘と考えていたが、段丘崖が認められることや標高の違いから、本稿では I ・ II ・ III の 3 段丘に細分した。標高は、岩瀬付近では南郷 I 段丘が107~110m、南郷 II 段丘が104~106m、南郷 II 段丘が101~103mである。

TOYOSHIMA(1984)によると、本段丘はfillstrath terrace(砂礫侵食面段丘)で、板井沢段丘を侵食して形成され、埋積堆積物の上に $2\sim5$ mの薄い円礫層が堆積している。本調査では、埋積堆積物の上に薄い円礫層が堆積している露頭は発見できなかったが、南郷 $I\simIII$ のいずれの段丘にも厚さが 5 m以下の薄い円礫層が堆積していることを確認できた。

TOYOSHIMAは横手川上流で南郷段丘を覆う沖積錐に含まれる木片から12,780±38yrB.P. という ^{II}C年代を得ている。したがって、南郷I段丘は少なくとも約12,000年前には形成されていたことが明らかである。TOYOSHIMAは、板井沢段丘と南郷段丘にみられる河谷の堆積と侵食は、東北地方の山間地域の諸河川流域では数多くみられることを現地調査によって確かめており、このような河岸段丘の形成が最終氷期後半に東北地方で一般的であったと考えている。

e 土淵段丘

本地域で最も低位の沖積段丘で、土淵から板井沢にかけてと、黒沢川の現河川沿いに断片的に分布する。標高は岩瀬付近で98~100mであり、相野々駅北では段丘面が旧河道として残っている。堆積物は現河床とおなじような円礫であるが、厚さは不明である。

2 遺跡の地形と地質

本遺跡は横手川左岸の台地上に位置し、横手川とその支流の虫内沢に挟まれた狭い区域である。標高は105~106mであり、虫内沢を挟んだ虫内 I、虫内II遺跡と同様に南郷II段丘の上に位置する。段丘堆積物は最大長径20cmの亜角礫層で(層厚は最大約1 m)、その上に層厚1.5~2 mの亜円礫をまばらに含むシルト層がのっている。亜角礫層の礫種は基盤の硬質泥岩(山内層)であり、支流性の堆積物であると考えられる。シルト層中の亜円礫は安山岩などの火成岩からなり、本流性の堆積物であると推測される。

南郷II段丘は、前述のように南郷I段丘よりも標高が3~4m低く、豊島(1989)の侵食段丘

形成モデルと¹⁴C年代資料から考察すると、段丘の形成は約1万年前前後と考えられる。

参考文献

秋田県「雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調香 横手」(1976)

秋田県「秋田県総合地質図幅 横手」(1977)

中川久夫ほか「北上線沿線の段丘群」東北大地質古生物研邦報 No71 p47-59(1971)

岡田篤正ほか「奥羽山脈内秋田県平鹿郡山内村三又における堆積段丘の形成年代」地球科学 26 p263-264 (1972)

TOYOSHIMA,M. The Sequence of River Terrace Development in the Last 20,000

Years in the Ou Backborn Range, Northeastern Japan Reprinted

from the Science Reports of the Tohoku University. 7th Series

(Geography) 342(1984)

豊島正幸「過去2万年の下刻過程にみられる10年オーダーの侵食段丘形成」 地形 104 p309-321 (1989)

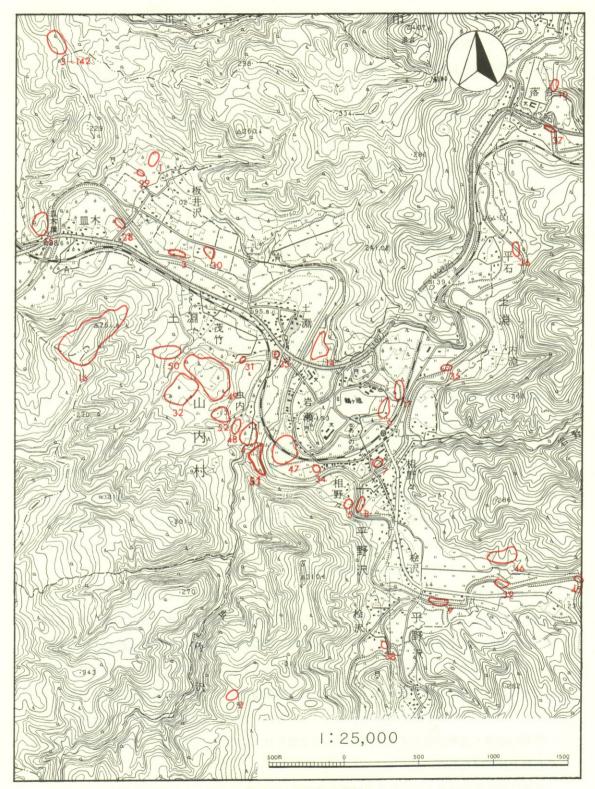
第3節 周辺の遺跡

1987年12月に、秋田県教育委員会が発行した「秋田県遺跡地図(県南版)」に記載されている山内村内の遺跡数は、43遺跡である。その後、今回の秋田自動車道の建設に伴って、新たに9遺跡が確認され、現在の遺跡総数は52である。時代の明確な遺跡では、縄文時代を主とする遺跡が33、城館跡13であり、他に縄文時代と中世〜近世・縄文時代と中世以降の複合遺跡が各1ある。旧石器時代・弥生時代の遺跡は、僅少である。旧石器時代が小田 V 遺跡、弥生時代が越上・小田 V 遺跡で確認されている。時代の特定できない遺跡では、出土遺物として石器片・土器片があげられていることから、その大部分が縄文時代と考えられる。

第6図には、国土地理院発行の1/25,000「横手」・「羽後黒沢」から、土淵・相野々・平野沢地区を中心とした部分を切り取り、現在確認されている遺跡の推定範囲を示した。なお、図中の番号に対応する遺跡名を第1表に示したが、ともに「秋田県遺跡地図(県南版)」中の山内村内での遺跡登録番号を用いた。また、新しく確認した9遺跡については、発見順を考慮して、東側から順に44番以降の番号を付した。以下では山内村の遺跡について、縄文時代の状況を中心に概観する。()内の番号は第6図及び第2表の番号である。

旧石器時代の遺物は、小田 V 遺跡で石刃が 1 点出土している。

縄文時代で、時期を特定できる遺跡は16遺跡である。そのほとんどは秋田自動車道の建設に 伴う発掘調査によって明確になってきたものである。草創期の爪形文土器が岩瀬遺跡(47)で出



第6図 周辺の遺跡

+している。同遺跡ではこの他に、爪形文土器に伴う石匙・両面調整石器などの遺物の他、同 期の集石炉・石器製作跡なども検出されている。岩瀬遺跡からは早期井草式土器期~貝殻文土 器期までの土器・石器の他、草創期と同じような遺構群も検出されている。早期終末〜前期初 頭にかけての土器片は、少量ながら虫内Ⅰ・虫内Ⅲ・小田Ⅵ遺跡で確認されている。前期前半 の遺物は茂竹沢遺跡(50)・虫内Ⅱ遺跡(48)・虫内Ⅲ遺跡(51)・岩瀬遺跡(47)・上谷地遺跡(46) で出土している。土器片の出土は、いずれも少量である。これに対し石篦を中心に石器・剝片 は多く出土している。また岩瀬遺跡では竪穴住居跡・集石遺構も検出されている。前期後半大 木5式期の竪穴住居跡3軒が、貯蔵穴と考えられる土坑などと共に小田 V 遺跡から検出されて いる。中期後半~後期初頭にかけては上谷地遺跡(46)・神成遺跡(9)・道地遺跡(14)・虫内Ⅲ 遺跡(51)・小田Ⅳ遺跡(52)に集落が形成されている。なお、神成遺跡は昭和34年という早い時 期に、大和久震平氏によって発掘調査が行われたことが同年6月9日の「秋田魁新報」に報じ られている。また、道地遺跡も、昭和59年村教育委員会(調査担当者は山田貞吉氏)により発掘 調査が行われている。後期前葉~中葉にかけては、第4図の範囲の東方にある越上遺跡の捨て 場から良好な土器群が出土しており、茂竹沢遺跡では、後期中葉に位置付けられる竪穴住居跡 が2軒検出されている。後期後半以降晩期の前半には、虫内Ⅰ遺跡を中心に虫内Ⅲ遺跡・虫内 II遺跡・小田Ⅳ遺跡を含む範囲の大きな墓域がつくられている。この墓域は主に土壙墓と土器 棺墓から特徴づけられており、土壙墓の範囲はそれぞれの遺跡内でいくつかまとまりを示して いる。また虫内Ⅰ遺跡では広い範囲の捨て場が形成されており、膨大な量の遺物が出土してい る。これらの遺構・遺物を残した人々の集落・住居は、今のところ特定できないが、晩期の遺 跡としては、昭和61年に村教育委員会(調査担当者は山田貞吉氏)によって小規模な発掘調査が 行われた桧沢遺跡(38)の他、赤淵遺跡(3)、三明岡遺跡(5)、相野々遺跡(8)などの遺跡群が 河川沿いに分布している。秋田自動車道に係る各遺跡の詳細については、刊行された、あるい は逐次刊行される予定の発掘調査報告書を参照していただきたい。

以上の縄文時代の遺跡の分布は、村内を流れる横手川・黒沢川・松川・武道川の4河川の河岸段丘上に点在している。今のところ、これら河川の流路に接近した低位段丘上からは、後期後半〜晩期の遺構や遺物が多く見い出され、中期〜後期初頭の集落は上谷地遺跡や小田V遺跡のように高い台地上に立地していることが指摘できる。しかし、そのような中にあって、草創期初め頃から土砂の堆積が始まったと考えられる岩瀬遺跡では、河川の堆積作用が一段落した段階の川辺での生活跡が層位的に残されている。従来、このような低位段丘上に縄文時代の古い時期の遺構・遺物が存在するとはほとんど予想されていなかっただけに、今後十分な注意が払われなければならない。

弥生時代の遺物は越上・小田Ⅴ遺跡で少量出土しているのみで、それ以降の遺跡については、

現在のところ城館跡以外には知られていない。しかし、西方の横手盆地には旧石器時代や弥生時代以降の各時代の遺跡が数多く存在している。山内村の場合も、高速道路建設の事前調査というトレンチを1本入れただけで数多くの発見が相次いだことを考えれば、今後、本村内でも縄文時代の遺跡はもとより、他の時代の遺跡も多く確認されていくものと考えられる。

引用・参考文献(文献の番号は、第1表の文献番号に対応する)

- 1 秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981 (昭和56年)
- 2 高橋則夫 「遺跡、ひとり歩き」『山内村郷土史年報』 山内村郷土史編纂委員会 1983 (昭和58年)
- 3 山田貞吉 「道地遺跡発掘調査報告」『山内村郷土史年報』 山内村郷土史編纂委員会 1984(昭和59年)
- 4 秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南板)』 1987 (昭和62年)
- 5 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第179集 1989(平成元年)
- 6 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第217集 1991(平成3年)
- 7 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第226集 1992 (平成4年)
- 8 内田武志・宮本常一 『菅江真澄全集 第六巻 地誌II』 未来社 1976 (昭和51年)
- 9 秋田県農政部農地整備課 『雄平仙中核都市建設計画地域土地分類基本調査 横手』 1977(昭和52年)
- 10 秋田県教育委員会 『遺跡詳細分布調査報告書』 秋田県文化財調査報告書第239集 1993 (平成5年)
- 11 横手市教育委員会 『秋田県横手市 遺跡詳細分布調査報告書』 横手市文化財調査報告11 1986 (昭和61年)
- 12 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書**Ⅲ**—茂竹沢遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第233集 1933 (平成 5 年)
- 13 秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書₩—虫内II遺跡—』 秋田県文化財調査報告書第234集 1993 (平成5年)

遺跡番号	遺	跡	名	所 在 地	時代など	文献番号
1	板	屋	沢	山内村土淵字板屋沢	縄文	2 • 4
2	谷	地	端	山内村土淵字小貝	縄文	2 • 4
3	赤		淵	山内村土淵字板井沢	縄文(晩)竪穴住居跡	2 • 4
4	虫	内	I	山内村土淵字虫内	縄文(後・晩)	2 • 4 • 5 • 6
5	=	明	圌	山内村平野沢字三明岡	縄文(晩)岩版	4
6	鶴	ケ	池	山内村土淵字鶴ヶ池	縄文	4
7			瀬	山内村土淵字二瀬	縄文	4
8	相	野	々	山内村土淵字相野々	縄文(晩)遮光器土偶	4 • 1 0
9	神		成	山内村土淵字神成	縄文(中・後)	4
10	上		台	山内村大松川字上台	縄文	2 • 4
14	道		地	山内村土淵字道地	縄文(中)組石遺構	3 • 4
15	大	沢	館	山内村大沢字矢櫃	館跡 郭2 空掘	1 • 4
16	Ш	木	館	山内村土淵字皿木上段	館跡 郭3 空掘 段	1 • 4 • 8
17	和	田	城	山内村土淵字鶴ヶ池	館跡 郭2 空掘	1 • 4
28	Ш		木	山内村土淵字君ヶ原	縄文	4
29	板	屋沢	II	山内村土淵字板屋沢	縄文	4
30	板	井	沢	山内村土淵字板井沢	縄文	4
31	小		田	山内村土淵字小田	石器片	4
32	小	田	II	山内村土淵字小田	石器片	4
33	小	田	III	山内村土淵字小田	石器片	4
34	中		島	山内村土淵字中島	土器片・石器片	4
35	菅		生	山内村土淵字菅生	石器片	4
36	平		石	山内村土淵字菅生	石器片	4
37	霜	焼	野	山内村大松川字霜焼野	石器片	2 • 4
38	桧		沢	山内村平野沢字桧沢	縄文(晩)岩版・土偶	4
39	カ		石	山内村筏字力石	石器片	4
45	カ	石	II	山内村大松川字力石	縄文 (中)	1 0
46	上	谷	地	山内村平野沢字上谷地	縄文(前・中)	5 • 1 0
47	岩		瀬	山内村土淵字岩瀬	縄文(草創~晚)	4 • 5 • 7
48	虫	内	II	山内村土淵字虫内	縄文(前~晚)	4 • 5 • 7 • 13
49	小	田	V	山内村土淵字小田	縄文(早~晚)・弥生	1 0
50	茂	竹	沢	山内村土淵字茂竹沢	縄文(前〜晩)・中近世	4 • 5 • 7 • 8 • 12
51	虫	内	III	山内村土淵字虫内	縄文(早~晩)	1 0
52	小	田	IV	山内村土淵字小田	縄文(前〜晩)	1 0
3 -142	上	片	倉	横手市大沢字上片倉	縄文	4 • 1 1

第2表 周辺の遺跡

第3章 調査の概要

第1節 遺跡の概観

1 遺跡の推定範囲と調査区

虫内Ⅲ遺跡全体の規模は、遺物を表面採集できる範囲と地形から、東側を横手川、北〜西側を虫内沢、南側を羅婆王山(らばおうさん、標高310.6m)の北裾に当たる急な斜面で画された、南北約200m×東西約90mの約18,000m²と推定される。このうち今回の調査区は、遺跡北端に舌状に張り出した部分である。

遺跡中央部での標高は $105\sim106.5$ mで、平坦な面が横手川に沿う形で広がるが、この面の南西側にはこれより $3\sim4$ m程高い面がある。平坦面の表土は黒色土であるのに対し、高い面の表面には風化の著しい砂礫が多いことから、高い面はいわゆる崖錐性堆積物で覆われている可能性がある。

今回の調査区である遺跡北端部は、横手川と虫内沢に東西を挟まれて、遺跡中央部から北に鋭く突き出た形となっている。その規模は、長さ約70m、幅10~30mで、北に緩く下降している。なお、現況の地形図では、遺跡中央部側と調査区との間に、北西側から小さな沢が入り込んでいるように等高線が引かれているが、これは、戦後に掘られた幅約3m、深さ約2mの溝が表現されたものである。

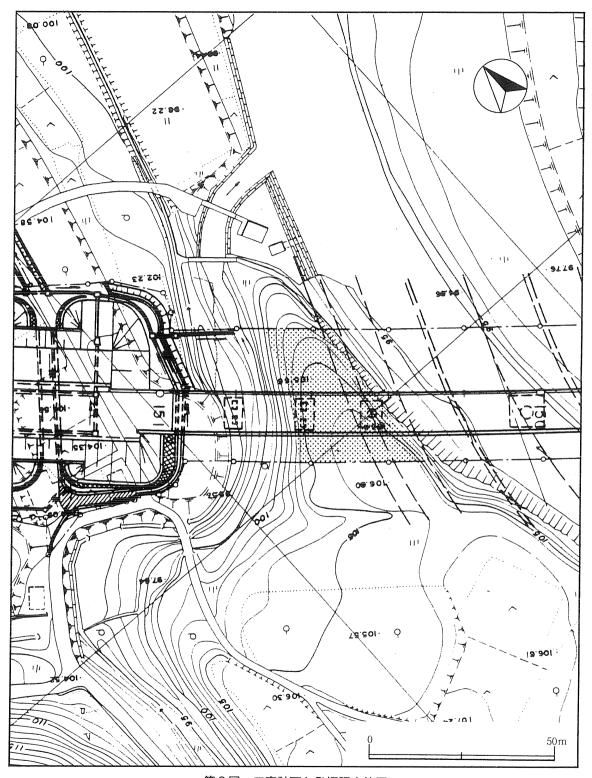
本遺跡の東側60mには横手川を挟んで岩瀬遺跡が、北側20~30mには虫内沢を挟んで虫内 I 遺跡が位置する。

遺跡の現況は、ブドウを主とする畑地及び植栽後約30年を経た杉林などである。調査区は、 杉の植林前にはリンゴの木が植えられたり、野菜用の畑地として利用されていたため、表土から地山にかけては、その時の耕作等によってやや深く削平されていた。このため、検出された 遺構の中には、著しい撹乱を受けていたものがある。

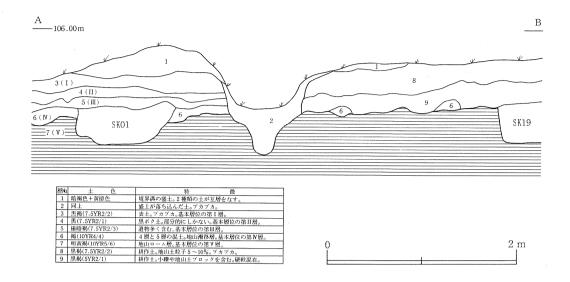
2 遺跡の基本層序

調査区中央やや北側に、南北に長い調査区を分断する溝がある。この溝は、昭和40年代中頃に掘削されたという土地の境界溝で、上面幅0.8m、深さ1mである。この境界溝の北側と南側では基本土層が著しく異なっている。第9図は、この溝を中心にした南北の基本土層図の一部である(土層図作成部分は第10図にA-Bで示している)。溝の北側が木の根による撹乱以外に層位の乱れは少ないのに対し、南側では畑作あるいはサツマイモ貯蔵用の穴(1.2m四方で深

☑査鼯融発≤囲蹿宝靴@極慶Ⅲ内忠 図7譲 ш001 **羟梅調查区** 租確宝靴



第8図 工事計画と発掘調査範囲



第9図 基本土層図

さ約1.5m)等のために著しい撹乱を受け、ほとんどの部分で地山上面までが削平を受けている。 従って、以下の I \sim V 層は、主に境界溝の北側に適用できるものである。

I 層: 黒褐色表土。層厚は $5\sim15$ cmで、腐植した木の葉を含むため、軟らかくブカブカしている。剝片を少量含む場合もあるが、本来的な遺物含包層とは考えられない。

II層: 黒色土。層厚は0~11cmで、存在しないところもある。かたさ・しまり共にやや弱~ 普通である。本層以下から次の第III層にかけて多量の剝片や石器(大部分は縄文時代 前期のものと考えられる)と少量の土器片を含む。

III層:極暗褐色土。層厚は $4\sim15$ cmで、場所によってはII層との層界が不明瞭である。かたさ・しまり共にII層と大きな違いはない。多量の剝片や石器と少量の土器片を含む。

Ⅳ 層: III層から V 層への漸移層と考えられ、両者が斑状に入り乱れており、全体としては褐色を呈する。層厚は 4~20cm。 V 層との層界は波打っており、かたくしまっている部分と、軟らかい部分とがある。また部分的に木炭片と剝片を少量含む。

▼層: 明黄褐色土。地山土で、粘性があり、かたくしまっている。しかし、地山が明黄褐色 粘質土ではなく、明黄褐〜褐色の段丘砂礫層が分布している。

以上のうち、縄文時代晩期の土壙墓は第Ⅳ層上面もしくは、それより上から掘り込まれていることが確認でき、同期の土器棺墓は、III層中で確認できるものもある。従って、縄文晩期の生活面は、II層下部もしくはIII層中に生活面があり、前期の遺物がIII層中に最も濃く分布することから、前期の生活面もIII層中にあったものと推定される。

第2節 調査の方法

調査は、工事用仮橋の架設工事工程等の都合により、前期・後期に分けて実施した。

調査の方法はグリッド法によった。グリッドは、虫内沢をはさんで隣接する虫内 I 遺跡との関連も考慮して、平成 3 年度に打設されていた虫内 I 遺跡のグリッドをそのまま東側に延長する形とした。虫内 I 遺跡では、工事用中心杭STA151+60をグリッド原点(MA50)とし、国家座標第 X 系の座標に合わせて一辺 4 mのグリッドを設定している。座標軸のうち、南北方向に 2 桁の算用数字(・・・・48・49・50・51・・・・)、東西方向にアルファベット 2 文字の組み合わせ(・・・・ LS・LT・MA・MB・・・・MT・NA・NB・・・・)を付し、この組み合わせが各グリッド杭の名称である(例MF53)。各グリッドの呼称は、グリッドの南東隅の杭の名称を用いている。虫内III遺跡の今回の調査区は、西から東にLF~KT、南北が26~37である。

調査区は、表土が比較的浅いこと、杉の根が遺構確認面よりも深く入っていることなどから、掘り下げは全て人力で行った。遺構外出土遺物の取り上げは、原則として各グリッド単位としたが、遺物の多いグリッドについては4mグリッドを4~16分割して取り上げた。各遺物には、遺跡名・グリッド名(分割区名称)・出土層位・出土年月日を記入したラベルを付した。遺構内の出土遺物は、基本的に出土位置・レベルを記録したが、小剝片やチップ等は埋土中一括とした。土壙墓等の埋土については、掘り下げを慎重に行うと共に必要に応じて、水洗を行った。

各遺構は、極力掘り込み面での確認に努めたが、撹乱の著しい部分も多く、土壙墓等は地山面、土器棺墓は土器検出面での検出が大半となった。遺構の精査は、対象遺構によって二分法・四分法等を用い、記録は主に図面と写真によった。図面は、平面図と断面図の他、必要に応じてエレベーション図を作成した。平面図は、グリッド杭を利用した遣り方測量により、土器棺墓は、1/10で作図し、それ以外は、1/20を原則としたが、必要に応じて1/10のものもある。

検出した遺構には、その遺構の形態に応じて、例言に示した略号を付け、それに検出順に通 し番号を付した。精査や整理段階での検討の結果、遺構でないものは欠番に、略号が適切でな かったものは略号を変更した。

写真は、原則として35mmのモノクロ・リバーサル・ネガカラーを1単位として撮影した。 室内における整理は、遺構は実測図をもとに第2原図を作成し、遺物については洗浄・注記 の後、選別し実測図・拓影図を作成、写真撮影を行った。

第3節 調香経過

調査区と虫内 I 遺跡との間には、上幅約20m、下幅 $3 \sim 4 m$ 、高さ約10mの虫内沢がある。 このため、工事用の仮橋ができるまでは、虫内 I 遺跡側から路線外を徒歩で迂回しなければならず、また、ベルトコンベアー等の搬入もできない。このような条件と工事の進渉状況から、発掘調査は前期と後期に分けて実施することとした。前期の調査は調査区北半で、グリッドのおよそ32ライン以北である。

前期の調査は、平成4年6月1日(月)から開始した。同日中に、機材の搬入、ユニットハウスの設置、排土置場の刈払い等を行い、調査区北端部側から表土除去作業を開始した。同日、表土除去作業を始めて間もなく、剝片が出土しはじめた。翌2日には、2基の土壙墓(SKO1・02)が、3日・4日には土器棺墓各1基(SRO3・04)が検出され、遺構・遺物共に多いことが予想された。検出された遺構は、確認状況の写真撮影の後、精査を行い、平面図・断面図を作成した。

粗堀り・掘り下げが進むにつれ縄文時代晩期を主とする遺構の数が増え、6月16日には、土壙墓2基(SK08・10)と土器棺墓が3基(SR12・13・14)、同19日にも土壙墓5基(SK19・20・21・22・23)と土器棺墓2基(SR18・24)が検出された。その後も、1日に2基前後の新たな遺構が登録され続け、7月2日までに47遺構に達した。この間、土壙墓・土器棺墓共に分布に粗密のあることがわかった。土壙墓は、LB32グリッドを中心に、長軸方向を東西に取るものが南北に並び(SK21・22・23・46)、土器棺墓はLA34グリッド周辺にやや集中していた(SR12・13・14・18・16)。また、それら縄文晩期を主とする遺構群の他に、篦状石器を主とする縄文前期の石器が大量に出土した。7月3日までには、工事用の仮橋架設予定部分の調査を終え前期の調査を終了した。

後期の調査は、9月8日(火)に着手した。既に工事用仮橋と、排土を虫内 I 遺跡の調査を終了した部分に運搬するためのベルトコンベアー用仮橋も完成していた。

調査は、調査区中央部から順次南側に進める形で行ったが、調査区南東部に仮置きしていた 排土の除去とベルトコンベアーの設置に時間を要し、実際に表土除去を開始したのは9月17日 であった。同24日までにLB30・LB31グリッドを中心に8基以上の土器棺墓(SR51・52・53・54・ 55・56・57・58)が群集することが分かったが、それらは各々1m前後の距離を置いており、 土器棺墓同志のもしくは土壙墓との重複はない。同28日には、前期調査で検出だけに止まって いたSK21・22の精査も開始し、この後SK68とした土壙墓などが検出された。SK68は、平成4年 度に、中国甘粛省博物館から秋田県埋蔵文化財センターに研修に来ていた王琦氏に、その精査 から平・断面図の作成までをやってもらった土壙墓である。なお、検出当初土器棺墓としてい たSR66は、その後の精査で、縄文中期最末の住居跡の土器埋設炉であることが判明したので、 これをSI66とした。

9月下旬から10月中旬は作業員が減少したため、遺構の実測などに主力を注いだ。10月19日からは、30ラインを南側に越えて再び遺構の検出が相次ぎ、1日に、 $4\sim5$ 基登録されることが続いた。11月に入るとこのペースは1日1基くらいにダウンしたが、検出される土壙墓の中から副葬品と考えられる石鏃($SK95 \cdot 105$ など)や赤色漆塗りの櫛($SK77 \cdot 102$)などの見られる例が多くなった。この傾向の圧巻は、11月12日にSK91から発見された長さ71cmの完形の石剣と翡翠製の勾玉・石製有孔垂飾品である。

そして、同18日のSK129の検出を最後に、同20日までに調査区全面の地山面までの掘り下げと、各遺構の精査・実測・写真撮影を終了し、同日に機材等の撤収を終え、虫内Ⅲ遺跡の全調査を完了した。20日から降り出した雨はやがて霙となり、翌週からは本格的な雪となった。

第1節 検出遺構とその出土遺物

発掘調査では、部分的に粗密はあるものの、ほぼ全面から縄文時代の遺構が検出され、遺物が出土した。検出された遺構の種類と数は、竪穴住居跡 3 軒、土壙墓61基、土器棺墓33基、土坑 3 基、配石遺構 2 基、柱穴様ピット 6 基、その他 3 基の計111遺構である。また、遺構内外から出土した遺物は、土器・石器を主として整理用コンテナで123箱である。

1 竪穴住居跡

調査区南部から3軒の住居跡が検出された。炉に埋設された土器から、縄文時代中期最末のものである。

調査区南半は、戦前・戦後を通じての畑耕作のためにほとんどの部分が地山上部まで削平されている。このため、これらの住居跡は、炉を中心にその周辺に点在する柱穴でもって平面プランを推定したもので、良好な形での床面の広がりや壁を検出したものではない。従って、住居跡は厳密には竪穴ではなかった可能性はあるものの、積極的に平地式とすべき根拠もなく、また、該期の住居跡の例からして浅い掘り込みを持つものと考え、竪穴住居跡とした。

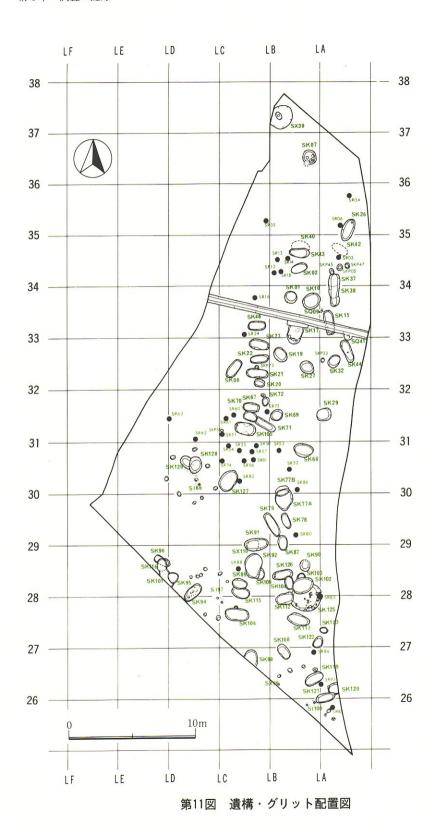
\$166竪穴住居跡(第12図、図版3)

LB30~31グリッドの第Ⅲ~Ⅳ層にかけては、土器棺墓が密集して検出された。この時、この群から若干距離を置く形で、LC30グリッドでも口縁部を失った埋設土器が検出されたので、これをSR66土器棺墓とした。ただし、SR66の周辺には埋設土器本体を含む形で北側に広く焼土粒子の分布が見られ、この点が他の土器棺墓のあり方とは様相を異にしていた。その後、この部分の精査を行ったところ、最初にSR66とした土器本体の北側にも隣接する形で埋設された土器の存在することがわかった。また、ほぼ同時に精査したSN97(S197と変更)とSN100(S1100と変更)でも、焼土の中に2個の埋設土器が隣接してあることがわかり、これらは住居跡の炉とするのが妥当であろうとの結論を得た。埋設土器及び周囲に広がる焼土の周辺を精査したところ、推定される床面のレベルよりも低い地山上面で合計9個の柱穴を検出したので、これをS166竪穴住居跡としたのである。

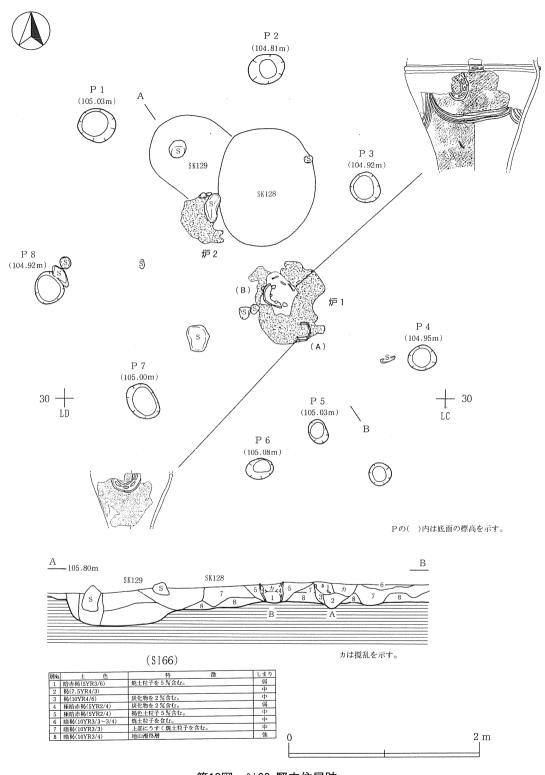
なお、住居内北部で、SK128・129と重複するが、本住居に伴う焼土粒子を検出した時には、この焼土をSK128が切り、SK129については確認できなかった。従って、SK128は本住居跡よりも新しい事は確実であるが、SK129については不明である。



第10図 調査区の地形と検出遺構



— 26 **—**



第12図 \$166 竪穴住居跡

床面は、基本層位の第III層中にあり、焼土粒子の広がりから略平坦で普通のかたさであるが、耕作による撹乱が著しい。炉は 2 ヶ所で、住居のほぼ中軸線上にあり、南東側が土器 2 個の埋設炉(炉1)、北側が地床炉(炉2)である。 2 ヶ所の炉は、その中心で約1.2mほど離れているが、中心部よりも色の若干うすい焼土でつながっている。炉 1 は、底部を故意に欠損させた 2 個の深鉢形土器(A・B)を正立させて埋設したものである。 2 個の埋設土器間に前後差があったか否か、平面・断面観察でも判然としなかったが、SI97やSI100の炉のあり方から、同時に埋設されたものと考えられる。炉 2 の中心には、長さ30cmの河原石があり、上面が焼けているが、20の石が炉に使用されたものか、3129あるいは3128に伴ったものかはわからない。

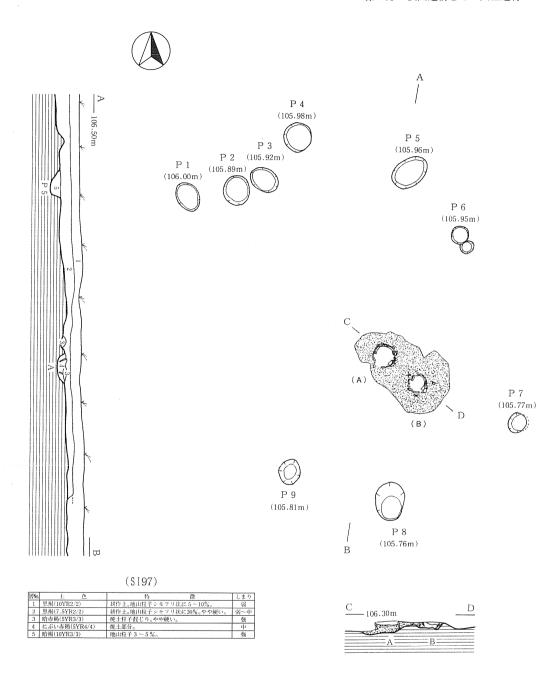
柱穴は合計 9 個検出されたが、深さから $P1 \sim P808$ 本が主柱穴と考えられる。これら 8 本の主柱穴は、P1 と P5 がほぼ中軸線上にあり、これに直交する形で P2 と P8、 P3 と P4 と P6 が対応する。柱穴は、推定される床面レベルよりも下の地山面で検出したため、個々の柱穴底面レベルを図のピット番号の下に記してある(以下、 $S197 \cdot 100$ も同様である)。これら柱穴の深さは炉埋設土器の上面から、 $60 \sim 80$ cm程である。

第15図1・2が炉1に埋設された土器である。1が埋設土器B、2が同Aである。1は、直立もしくはわずかに外反する口縁部から胴部上端で膨らみ、中位にかけてすぼまり、胴下部からほぼ垂直に底部に至る深鉢形土器である。口縁部と胴下半以下は打ち欠かれている。口縁部は無文だが、ほとんど残存しておらず、口縁の形状も含めて詳細は不明である。口縁部と胴部の境には列点文の施された比較的太い隆帯がめぐる。胴全面にはRL縄文が縦位回転施文され、その後に3条1単位の弧線が器周4単位に施されている。各弧線部の中央には、先端が巻く「J」字状文が1個ずつ、隆帯から垂下する形で付されている。胴部上端は二次火熱のためボロボロで、外面胴下部に煤状炭化物が付着している。2は、1とほぼ同様の器形と考えられるが、胴中部しか残っていない。文様構成も、1にあった弧線文がないだけで、他は同じと思われる。胴部には、細いRL縄文が縦位回転施文されている。列点文の施された「J」字文は、2単位以上あることは確実である。以上のことから、本住居跡は、縄文時代中期最末のものと考えられる。

なお、埋設土器Aとして取り上げた土器片の中に、従述するSI100の炉の埋設土器Aに接合するものがあり、反対にSI100の埋設土器A部分と同住居跡の柱穴(P5)から出土した破片がSI66埋設土器Aに接合している。

\$197竪穴住居跡(第13図、図版3・4)

調査区南辺中央部にある住居跡である。平成4年4月に実施した範囲確認調査のトレンチで、本住居跡の炉の焼土西端部が検出された。その後の精査で、土器埋設炉を持つ住居跡であることが確認されたが、床面まで耕作による削平を受けていることがわかり、柱穴の配列などで規





第13図 \$197 竪穴住居跡

模などが推定されるものである。従って、床面のほとんどと壁などは失われている。

炉に埋設された2個の埋設土器を通るラインを長軸(南東-北西)とした場合、これと柱穴配列から長径4.5m以上、短径3.5m以上の楕円形プランを呈する規模と考えられる。

炉は、住居跡推定プランの中央やや南東側に偏している。底部及び口縁部を打ち欠いた 2 個の深鉢形土器を正立させて埋設した土器埋設炉である。 2 つの土器(北西側を A、南東側を B とする)は、約0.2mほど離れており、周囲には被熱によって赤く硬化した焼土が、長さ1.1m ×幅0.5~0.7mの不正楕円形の範囲に厚さ 1~20cmで分布している。埋設された土器は、焼土部分を含めて木の根や耕作による撹乱を受けており、良好に残っている部分でAが高さ20cm、B が13cmである。

床面と壁は削平されてほとんど残存していないが、炉の北側地山面がややかたくしまっており、床面が削平されたとしても、それほど大規模ではなく、現地山上面からそれほど高くないレベルに床面があったことが予想される。

柱穴は、炉を中心として合計9個検出されたが、このうちどれが主柱穴であるかはわからない。これらの柱穴の底面は、残存する炉の埋設土器の上面から25~40cmほどの深さである。

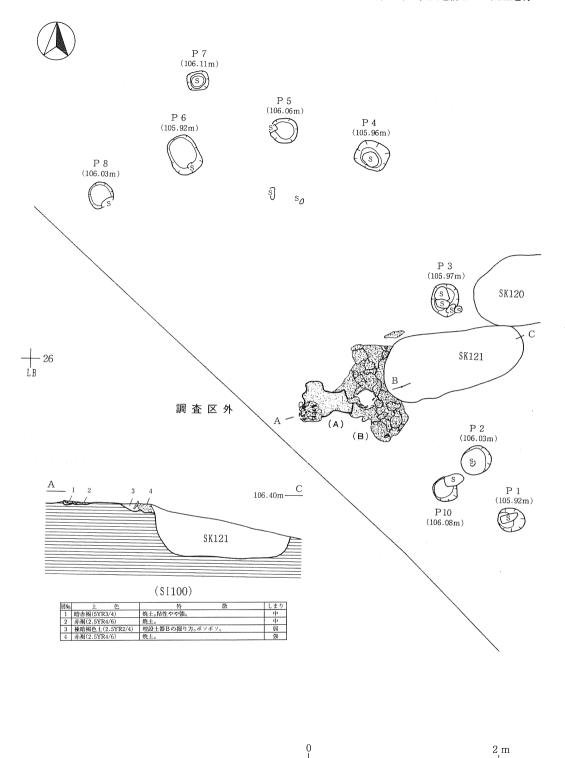
第15図3・4が炉に埋設されていた土器で、3がA、4がBである。両者共に胴上部と底部が打ち欠かれた深鉢形土器である。3がRL縄文、4がLR縄文の縦位回転施文である。3の外面と4の内面の一部に煤状炭化物が付着している。

炉に埋設された2個の土器は、胎土・焼成・地文の施文方向などから縄文時代中期後葉のものと考えられる。従って本住居跡は該期のものであり、さらに\$166と\$1100と同様な形態・炉のあり方を示していることから、中期最末に属するものと考えられる。

\$1100竪穴住居跡(第14図、図版4)

調査区南東端部LA25グリッドの第IV層~V層上面を精査中に、焼土の広がりとその中に、2つの埋設された土器のあることがわかり、これを土器埋設炉と考えSI100とした。焼土内や埋設された土器の相当部分が耕作による撹乱を受けている。また、焼土の東側が晩期の土壙墓SK121によって切られている。

本住居跡も、検出・精査時に平面プランが全く不明であり、炉周囲の柱穴と考えられる小ピットの配列と地形から、規模等が推定できるものである。炉周囲から合計 9 個のピットを検出できたが、この5 ちP 1 \sim P 6 \cdot P 8 0 7 個を結んだラインが、本住居跡のおおよその平面プランに近いと思われる。これによると、本住居跡は、南東一北西方向に長軸があり、長径5.0 m以上、短径3.5 m以上の楕円形を呈するものと考えられる。なお、本住居跡の長軸方向は、同期の住居跡である5 166 \cdot 97 の長軸方向が2 個の炉埋設土器を結ぶラインにほぼ一致するのに対し、これがほぼ 90° 異なっている。



第14図 SI100 竪穴住居跡

炉は、土器埋設炉で、南東側に偏している。炉に埋設された土器は別個体の深鉢形土器で、 Aは胴下部から底部の、Bは胴中部が用いられている。埋設土器は、A・B共に耕作や木の根 により撹乱されており、Bがわずかに埋められた時の状況を留めていたが、Aは、底部が横転 していた。埋設土器の周囲には焼土が東西・南北共に約1mの範囲で広がり、東端部はSK121 に切られている。床面全体の状況は不明であるが、炉周辺は、ほぼ平坦でしまっていた。

. 柱穴は、 $P1\sim P6\cdot P8$ の7本が主柱穴と考えられる。これらは、直径25~40cmの略円形で、現存する炉の焼土面を床面と想定した場合の深さも25~40cmである。また、これら柱穴には、径6~20cmの円礫が $1\sim3$ 個入っている。柱の根固めか、柱を抜き取った後に投げ込まれたか明確ではないが、後者の可能性が強い。

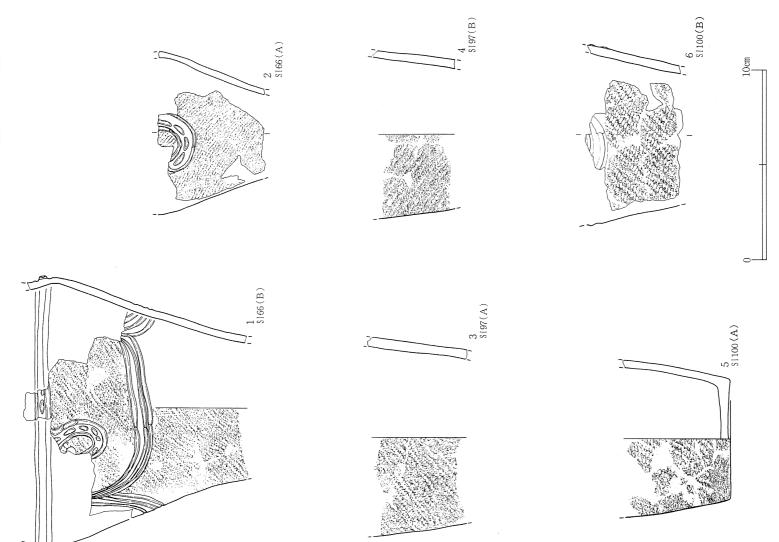
第15図5が埋設土器A、6が同Bである。5は深鉢形土器の胴下部~底部で、上半は残存しない。一部だけ高さ約11cmまで復原できたが、全体としてはかなり細かく割れており、\$166A部分の破片が接合している。RL縄文が縦位回転施文されている。6はやはり深鉢形土器の胴中部部分で、その上下が打ち欠かれている。残存する部分の上端に隆線と沈線の組み合わせによる文様の一部が見えている。地文は、太いRL縄文の縦位回転施文である。

2 土壙墓

土壙墓を含めた広義の土坑は64基検出されている。64基の土坑のうち、人骨は遺存していないものの、坑の形態や副葬品と考えられる遺物が出土したりベンガラの散布があるなどして、明らかに墓壙とすることのできる土坑が相当数存在する。これに対し、坑の形態や埋土の状況などから、墓壙とする根拠に極めて乏しいものも少数存在する。ここでは前者を、人の遺体(ヒトと限定はできないかもしれないが)を埋葬した施設としての土壙墓、後者を、土壙墓である可能性が低い土坑として扱った。土壙墓が61基、土坑が3基検出されている。

61基の土壙墓の平面形は、大きく楕円形・円形に分けられ、楕円形には通常のもの、ずんぐりしたもの、隅が丸い長方形に近いもの、細長いものがある。時期的には、共存している土器棺墓や壙内からの出土遺物、西側に存在する虫内 I 遺跡との関連などから、縄文時代晩期前葉のものが主体を占め、1 基だけ縄文時代前期のものが混在している。

土壙墓は、調査区北端部・南西端部にわずかに存在しない部分があるものの、ほぼ全面に分布する。また分布には疎密があり、数基~十基以上が1つの群をなしているようにも見える。しかし、ここでは検出された順に個々の土壙墓の説明を行う。なお、土壙墓内から出土した石器と土器は、特にことわりのある場合を除いては、底面を除く埋土に混在して出土したものであり、意識的に埋置したものではないと考えられる。中でも、定形的な石器や剝片・チップは、土壙墓の掘り込み面もしくはその下部に存在した縄文時代前期のものと考えられるのが大半で



第15図 8166・97・100 竪穴住居跡 炉埋設土器

	T	#	見模(cr	n)	T	I	Ι	## FVI	±£¢⊘t	T	·	T	н	土遺	Afm	
遺構番号	グリット		短軸		長軸方向	平面形	所属群	挿 図番号	挿図 P	図版番号	ベンガラ	副葬遺物	土器片		170 割片数	備考
SKO1	LA33	98	90	39	N45° W	円	A	16図		5.			5	2	63	
SKO2	LA34	132	72	46	N76° E	楕円	A	16図	36	5			9		242	
SK08	LB32	148	82	40	N37°E	楕円(隅丸)	В	16図	36	6			なし	1	64	
SK10	LA33	146	114	38	N53°E	楕円(ズ)	A	17図	39	7			約35	7	724	立石
SK15	KT33	190	82	42	N7° W	楕円(隅丸)	Α	17図	39	7				3	270	
SK17	LA32•33	143	115	35	N7.5°E	楕円	Α	17図	39	8			5	2	176	
SK19	LA32	128	89	40	N45° W	楕円(ズ)	В	18図	41	8	有	小玉	1		34	
SK20	LB32	84	62	12	N74° W	楕円(ズ)	В	18図	41	9			1			
SK21	LB32	172	68	20	N86° W	楕円(長)	В	18図	41	9 • 10	有	小玉		1	6	
SK22	LB32	146	66	32	N86° W	楕円	В	18図	41	9 • 10	有		1		15	
SK23	LB32	164	77	38	N76° W	楕円	В	19図	43	9 • 10			2		18	
SK26	KT34•35	182	90	50	N23° E	楕円	A	19図	43	11		壺	4	2	95	ļ
SK27	LA32	118	92	16	N63° W	楕円(ズ)	A	19図	43	11			0		ļ	
SK29	KT · LA31	115	92	12	N82°E	精円(ズ)	(B)	19図	-	12				<u> </u>	14	
SK32	KT32	103	84	22	N40°E	楕円(ズ)	A	20図	47	12			1	<u> </u>	94	
SK37	KT33 • 34	98	94	28	NT COD	円	A	20図	47	12				1	85	
SK38	KT33	120以上	84	30	N1.5°E	楕円	A	20図	47	12		.1. ~~	_	2	27	
SK40	LA34		-				A	20図	47	13	(+a)	小玉	2	-	11	
SK42	KT34	100	75		NIO 4º TT7	łź:m	A	00.55	47	10	(有?)	(櫛?)	-	!	0.	
SK43 SK44	LA34	160	75		N84° W	楕円	A	20図	47	13				1	34	
5K44 SK46	KT32 LB33	184	73	14 22	N24° W N90° W	楕円(長)	A	21図	49	14			<u> </u>	0	35	
SK67	LB33	141	67 66	25	N83° W	楕円(隅長) 楕円(隅長)	В	21図	49	14			1	1	176	
SK68	LB31 LA30	158	100		N82° W	情门(隣長) 楕円	B B	21図	49 51	15 16			2	6	176 178	-
SK69	LA31	106	85		N83°E	楕円(ズ)	В	22図	51	16	有	石鏃		1	17	
SK70	LB31	116	68	42	N70.5° W	精円	В	21図	49	17	- 19	1月90次	2	1	61	
SK71	LA · LB31	180	56		N60° W	楕円(長)	В	21図	49	17				1	5	
SK72	LB31	64	53		N5°E	精円(ズ)	В	22図	51	17					-	
SK77A	LA29 • 30	168	125	25	N7°W	楕円(ズ)	C	21図	51	17.18		櫛		1	94	
SK77B	LA29 • 30	120	73		N75°E	楕円	C	22図	51	17•18		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·		-	- 51	
SK78	LA29	122	59		N22°W	楕円	Č	23図	55	18					7	
SK79	LA · LB29	198	71		N29° W	楕円(長)	С	23図	55	18						
SK87	LA28 • 29	114	77		N29° W	楕円	С	23図	55	19			2	0	12	
SK89	LB28	117	72	16	N79° W	楕円	С	23図	55	19.20		壺・皿	2	2	16	
SK90	LA28	83		14		円	С	24図	57	.21					12	
SK91	LB28 • 29	191	100	38	N86°E	楕円	С	24図	57	21	有	石剣・勾玉・垂飾品・小玉	1		15	
SK92	LB28	187	138	47	N6°E	楕円(ズ)	С	24図	57	22	有	石鏃		1	131	
SK94	LC28 • 29	174	84	24	N43°E	楕円	Е	25図	61	22		石鏃・石錐	16	2	45	
SK95	LC28		84	15		円	Е	25図	61	23			1		4	
SK96	LD28	140	58		N70° W	楕円(長)	Е	25図	61	23					4	
SK98	LB26	150以上	106		N2°E	楕円	D	25図	61	24			1	2	47	
SK101	LC · LD28				N30°W	楕円		25図	61	23					1	
SK102	LA28	168	119		N73°E	楕円(ズ)	С	26図	65	24•25			12	3	150	
SK103	LA28		72	12	0	不明	C	26図	65	24	,				5	
SK104	LA28	102	59		N4°W	楕円	_	26図	65	24	有	勾玉・櫛・掻器			3	
SK105	LB31	170	97		N77° W	楕円 (788 日)		26図	65	26		石鏃		1	14	
SK106	LB27	187	94			楕円(隅長)	~~~~	27図	69	26•27			6	0	36	
SK108	LA26 • 27	129	72		N36° W	楕円		27図	69	27	有		1	1	16	
SK109	LB28	80	70	22	NIO1° D	不明		24図	57	22				_	12	
SK112	LA28 • 29	147	86		N81°E	楕円 -		27図	69	27			2	0	18	
SK113 SK115	LA27 LB27 • 28	181 148	88 86		N74° W N75° W	楕円 楕円		27図	69 55	28.20				3	32	
SK116	LD27 • 28 LD28	140	00	11	AA CINT	<u>有</u> 門		23図	55 61	28 • 29					32	
SK119	KT • LA26	158	82		N62°E	楕円		28図	73	23			(16)	2	64	
SK120		100以上	75		N84°E	楕円		28図	73	29			-		9	
	KT • LA25 • 26		67		N76°E	精円 楕円		28図	73	30		~~~~~~~~	36	0	64	
SK121	LA27	104	01	JU	1110 E	不明		28図	73	30	有		36 3	1	0	
SK123	KT27	63	49	18	N78.5° W	不明			73	30	H H		1	1	0	
SK125	LA27 • 28	250	215		N85°E	楕円(ズ)			75	31	有	石鏃	5		90	
SK126	LA28	167	71		N80°E	楕円(長)			75	31	rd	1-1 N/K	J	6	-	立石
SK127	LB30	176	138		N34°E	楕円(ズ)		31図	75	31			2	1	43	-14-7-1
-11441	0000	1,0	100	10		IB14(27)	ب ا	OTKN	, 0	O.L			-	1	-10	

第3表 土壙墓一覧

ある。

SK01土壙墓(第16図、図版5)

北部中央LA33グリッドにある。範囲確認調査トレンチ(以下、範確トレンチという)に西半分がかかっており、トレンチ精査時に検出した。東側約0.8mには、SK10土壙墓がある。

平面形は、長軸98cm、短軸90cmの略円形で、深さ39cmである。この深さは、掘り込み面から 底面までのもので、本土壙墓が南北基本土層図作成ライン上にあるために判明したものである。 これによると、本土壙墓は、少なくとも基本層位第III層かもしくはそれ以下から掘り込まれて おり、掘り込み面よりも上に土をマウンド状に盛り上げた形跡は見られない。

底面中央部は、ほぼ平坦であるが、北部が若干高く、これに続く部分の壁がわずかにオーバーハングしている。埋土の上~中部には、地山土粒子あるいは小ブロックが $10\sim40\%$ 混在し、人為的に埋めもどされたことが明らかである。埋土中からは、前期(第34図12)・晩期(第34図13)の土器片の他、削器(第36図1)や凹石(第42図51)などが出土した。

\$K02土壙墓(第16図、図版5)

北部中央LA34グリッドにある。SK01と同様、範確トレンチで検出した。北側0.2mにはSK43 土壙墓、西側0.3~0.7mにはSR18土器棺墓など4基の土器棺墓群がある。

平面形は、長軸132cm、短軸72cmの楕円形で、掘り込み面からの深さは46cmである。長軸方向はN76°Eである。土層断面の観察では、基本層位の第III層上部から掘り込まれているようであるが、木の根による撹乱のため明瞭ではない。

底面はほぼ平坦でかたくしまっており、壁もほぼ垂直である。埋土は全般にかたくしまっており、中位~下位にかけて地山土粒子やブロックが多く混在している。埋土中には、小さな剝片と少量の土器片が散在している。土器片は全て晩期深鉢形土器の破片である(第34図14~16)。

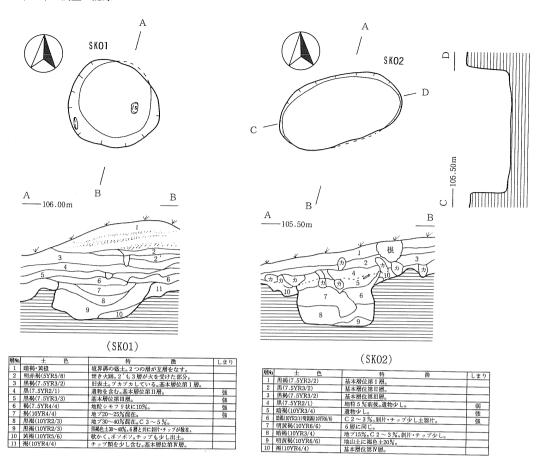
\$K08土壙墓(第16図、図版 6)

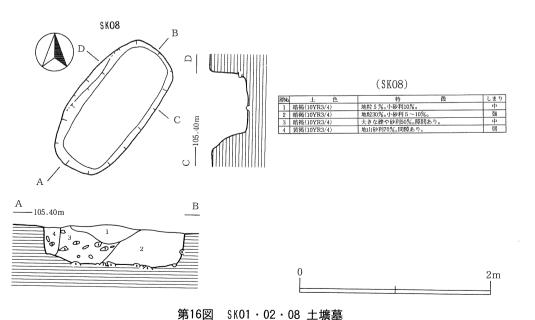
中央部西側LB32グリッドにある。地山上面で検出した。本土壙墓の東側には、長軸方向が略 東西方向であるSK21・22・23土壙墓などが密接して並んでおり、本土壙墓は、これらの西側に1 基だけ独立するような形で存在している。

平面形は、長軸148cm、短軸82cmの隅丸長方形に近い楕円形で、深さ40cmである。長軸方向はN37°Eである。

本土壙墓周辺の地山土は、上に明黄褐色の粘質土が厚さ10cmであり、その下が明褐色の砂礫層となっている。このため埋土中には、この砂礫が埋めもどされており、特に第3層は長径10cm大の礫や小砂利が50%を占めている。

砂礫層を掘り込んでいるために、壁面や底面には大小の礫が露出している。しかし、壁はほぼ垂直、底面も南西側がわずかに上がっているものの平坦である。底面からは遺物が出土せず、





埋土中から削器の破損品など40点以上の剝片が出土しただけである。

SK10土壙墓(第17図、巻頭図版 4 、図版 6 · 7)

北部中央LA33グリッドにある。第III層精査中に立石の頭部が検出され、第IV層上面でこの立石を中心に地山黄褐色土等が分布するところから平面プランを確認した。西側0.5mにはSK01土壙墓、南西側にはSQ09配石遺構が隣接している。

平面形は、長軸146cm、短軸114cmのずんぐりした楕円形で、長軸方向はN53°Eである。深さは38cmである。壙上部のほぼ中央には、長さ35cm、幅30cm、厚さ18cmの河原石が、幅が壙長軸に直交するように垂直に立てられている。立石の周囲には、地山土由来と考えられる黄褐色土や褐色土などが、長さ120cm、幅80cm、厚さ20cmで見られる。さらに、立石を包む埋土1・2は、3層を掘り込んだピット状を呈している。

埋土は、大きく地山土が混在した黄褐色土系の層と、基本層位の第II・III層を主とした暗褐色土系の層とに分かれる。すなわち、壁際〜埋土下部(8~10層)は暗褐色〜黒褐色土で、埋土中央〜上部は黄褐色〜褐色土である。このことは、壙を掘り込む時に、最初に掘ったであろう暗褐〜黒褐色の土と次に掘り上げた地山土を分けて置き、遺体埋葬後には、最初に掘り上げた暗褐〜黒褐色土を埋めもどし、次に地山土を埋めもどしたことを示している。そして最後には、壙中央部にピットを掘り、これに上述の大きな河原石を立てたものと推定される。この河原石が、埋めもどした土よりも上に顔を出していたか否かは明らかではないが、河原石の検出レベルと本土壙墓のプラン確認状況からするならば、出ていたとしてもそれは、ほんの僅か頂部を覗かせる程度であったと考えられる。各埋土中には、第II・III層中にあったと考えられる大小の剝片や土器の小破片が多く含まれている。

底面・壁ともに凹凸は少なく、滑らかである。

明瞭な形での副葬遺物はないが、埋土中から35点以上の土器細片と篦状石器(第36図 $2 \sim 4$)・ 搔器(同 5)・削器・凹石(第42図52)などが出土している。土器は前期らしい細片が1点の他、 全て晩期(第34図17)である。

SK15土壙墓(第17図、図版7)

北部中央やや東側のKT33グリッドにある。調査区北部には、調査区を南北に2分するような形で、土地の境界溝がある。この境界溝の精査中に本土壙墓の断面を検出した。北西側0.8mにSK10土壙墓があり、その中間にSQ09配石遺構がある。

ほぼ中央部を上面幅約80cmの境界溝によって切られているが、平面形は長軸190cm、短軸82cmの隅丸長方形に近い楕円形で、長軸方向はN7°Wである。深さは42cmである。

底面は一部に地山礫が露出しているものの、ほぼ平坦でしまっており、壁は西壁がわずかに 傾斜している。埋土中には地山土の他、円礫が混在しており、剝片やチップも多く混在してい る。

土器はなく、篦状石器(第36図6)・削器(第37図7)・凹石(第42図53)などが出土した。

\$K17土壙墓(第17図、図版 8)

中央北部LA32・33グリッドにある。土地の境界溝の南側壁面で断面を確認した。この時の断面観察では、埋土が東側と西側で大きく異なっているために2基の土壙墓の切り合いとした。しかし、その後の検討の結果、1基の土壙墓とするには矛盾する点もあるものの、2基とする根拠が希薄なため1基の土壙墓とした。南西側0.8mに5K19土壙墓がある。

北部を土地境界構で切られているために全体の規模は不明であるが、平面形は楕円形である。 残存する長軸は143cm、短軸115cm、深さ35cmで、長軸は境界構の断面に残っていた底面からすれば、約180cmと推定される。長軸方向は、N7.5°Eである。

底面は、北側で地山砂礫層に達しているため礫が露出しているものの、平坦でよくしまっており、壁も南壁が緩やかな他は急な傾斜でしっかりしている。南側に約10個の大小の河原石が、長軸方向に直交する形で直線的に並んでいる。これらは整った形の配列ではないものの、2個の河原石が重なっている部分もあることから、意識的に並べたものと考えられる。この河原石列と後述する埋土の状況からすれば、本土壙墓の場合、若干東壁側に寄った形で長方形の木棺状の施設を想定することもできよう。なお、確認面の南部に20cm×12cm×8 cmの河原石があるが、この石を立てた形跡はない。

埋土は、1層と8層が地山土が多く混じり強くしまった土で、直径20~30cmの略円形に分布する土である。また、 $4 \cdot 5$ 層がしまりの強くない埋土なのに対し、 $6 \cdot 7$ 層は、地山土混じりでかたくしまっており、 $6 \cdot 7$ 層は木棺状施設の裏込めのような形で埋めもどされた土層である可能性がある。

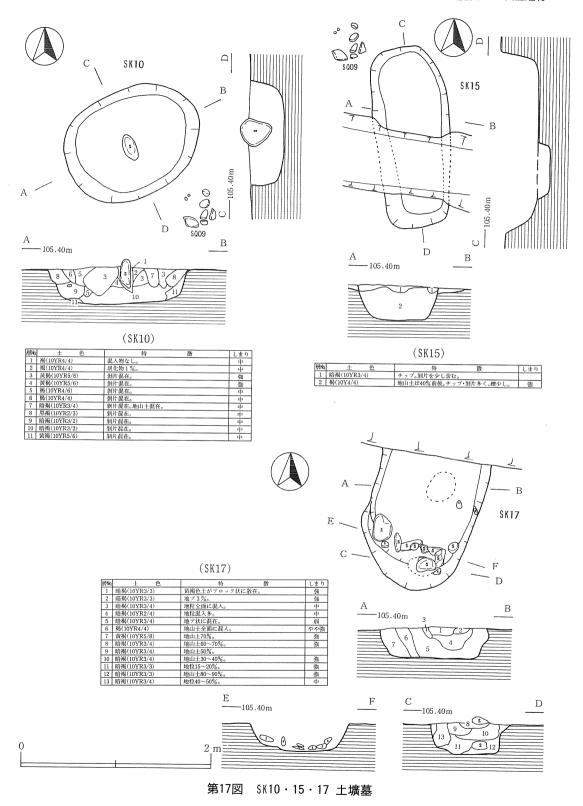
副葬遺物的な遺物はないが、確認面で第42図54の有孔石製品が出土している。埋土中からは、 前期の土器細片 5 点と、削器(第37図8・9)などが出土している。

SK19土壙墓(第18図、図版8)

中央部LA32グリッドにある。調査区のほぼ中央部を南北に通る範確トレンチに沿って、南北基本土層図を作成中に北西端部を検出した。この部分では、地山砂礫層面まで耕作が及んでおり、従ってプランの確認もこの面である。本土壙墓の西側0.3mには南北に連なるSK21・22・23などの土壙墓群がある。

平面形は、長軸128cm、短軸89cmのずんぐりした楕円形で、深さ40cmである。長軸方向はN45°Wである。底面及び壁面には、地山砂礫が露出しており小さな凹凸も見られるが、底面・壁面共に概ね平面で滑らかである。

確認面から約30cmの深さから壙底にかけて、ベンガラが厚く濃く散布している。ベンガラは、



約100cm×55cmの長方形の範囲に分布しており、北東壁際には見えない。また、壙底面中央部 に、径数cm~15cmの円形を呈してベンガラの特に濃い部分が数ヶ所ある。

埋土は、4層がベンガラの見られる層である。埋土の1・2・4層中には地山砂利が混在するものの軟らかいのに対し、3・5層はしまり中〜強で、特に5層は地山土及び砂礫が80%以上を占めてかたくしまっている。このことと、5層がベンガラを含まないこと、ベンガラの分布範囲を合わせて考えれば、壙内に木棺状の埋葬施設があった可能性もある。

壙底面の北東隅から、第30図10に示した小玉が1点出土しており、さらにこの部分の埋土の水洗いで同図11の扁平な小玉が検出されている。このことから、ほぼ同一の場所に2点の玉があったと推定され、出土位置から、被葬者の頭部の飾りに付いていた玉とも考えられる。また、埋土中からは第34図18の前期の土器片1点と、風化の著しい篦状石器などが出土している。

\$K20土壙墓(第18図、図版9)

中央部LB32グリッド南部にある。範確トレンチ精査中にSK21・22・23などの土壙墓群と共に 検出した。プラン確認面は地山砂礫層上面である。北側でSK21土壙墓に接している。

平面形は、長軸84cm、短軸62cmの小規模でずんぐりした楕円形で、長軸方向はN74°Eである。確認面からの深さは12cmと浅い。

砂礫層を掘り込んでいることから、底面などには地山礫が露出しており、凹凸が著しい。底面中央南側が極く浅く窪んでいる。また浅いために壁は緩い傾斜となり、断面形は中華鍋状を呈する。埋土は、隣接するSK21土壙墓などに比べて黒味が強い。埋土中からは、晩期鉢形土器の小破片(第34図19)などが出土している。

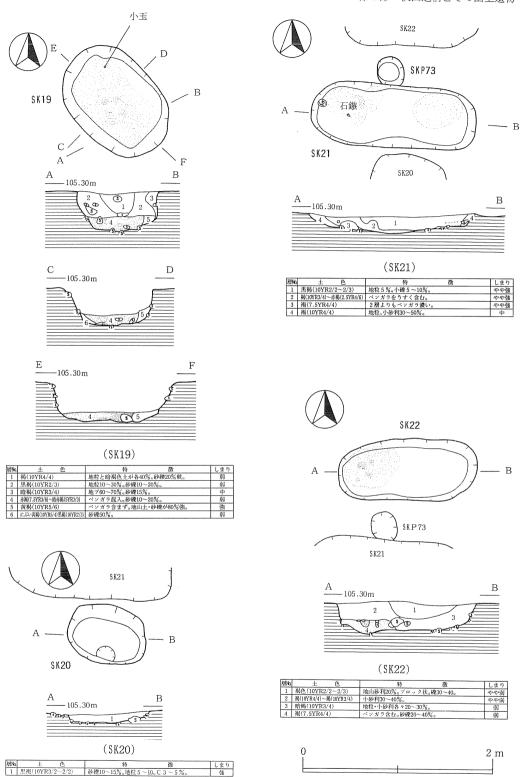
SK21土壙墓(第18図、図版9・10)

中央部LB32グリッドにある。SK20・22土壙墓等と同じく地山砂礫層上面で確認した。南側でSK20に隣接し、北側0.4mにSK22土壙墓があり、北側でSKP73柱穴様ピットとわずかに重複するが、平面観察では、本土壙墓が新しく見えた。

平面形は、長軸172cm、短軸68cmの細長い楕円形で、長軸方向はN86°Wである。確認面からの深さは20cmと浅い。

確認面から約5 cm下から壙底にかけて、部分的にベンガラが薄く認められた。ベンガラの散布域は北壁寄りの東西両端部で、西側のベンガラが東側よりもわずかに濃く厚い。また、西壁に接して、壙中軸線よりも若干北側に、径10cmの円礫が1個あった。壙底面や壁には地山砂礫が露出しており、細かい凹凸が多く、底面も中央部が極く緩く窪んでいる。

埋土は、4層が地山砂礫を30~50%含んでいるものの、他は砂礫層を掘り込んでいる割には 少ない。これは、埋土上部に砂礫が多くあったとしても、それらが耕作によって既に削平され た結果と考えられ、本土壙墓は本来もっと深かったものと思われる。



第18図 SK19・20・21・22 土壙墓、SKP73 柱穴様ピット

西壁から35cm東側、底面から8cm上の位置から第37図10の石鏃が出土した。石鏃の先端は南東方向を差し、若干上向きであった。この石鏃は、わずかに火熱を受けた形跡があり、また先端と一方の側縁下部を欠損している。本土壙墓に副葬されたものか否か不明であるがここでは副葬遺物として扱っておく。また、下部の埋土の水洗いで、2点の翡翠製の小玉(第30図12・13)が見つかったが、出土地点は不明である。

SK22土壙墓(第18図、図版9・10)

中央部LB32グリッド東部にある。 $SK21 \cdot 23$ 土壙墓等と同時に、地山砂礫層上面で検出した。 南側に $SK21 \cdot 北側に<math>SK23$ があり、両者とは各々約0.4mしか離れていない。

平面形は、長軸146cm、短軸66cmの楕円形で、深さ32cm、長軸方向はN86°Wである。

壙中央部から西側の、確認面下16cmから底面にかけてベンガラが認められた。ベンガラは東西 $60\text{cm} \times$ 南北45cmの範囲に分布し、やや北西側に偏している。 $2 \sim 3$ ヶ所に特にベンガラの濃い部分もある。

底面及び壁面には、地山砂礫の露出が著しいものの、壁はほぼ垂直で、底面も西側でベンガラの浸み込みがあって、一部窪んでいるように見えるものの概ね平坦でしっかりしている。

埋土は、全体に軟らかくてしまりも弱く、上部ほど砂礫を多く含む。 4 層中にベンガラが混 入している。埋土中からは、晩期の土器小破片 1 点などが出土している。

SK23土壙墓(第19図、図版9・10)

中央LB32グリッド北東部にある。耕作土除去後の第 V 層地山上面で確認した。南側0.4mにはSK22、北側0.6mにはSK46土壙墓、北西側0.5mにはSR24土器棺墓がある。

平面形は、長軸164cm、短軸77cmの楕円形で、長軸方向はN76°W、確認面からの深さは38cmである。壁は、北辺がほぼ直線状であるが、南辺の一部がわずかに内側に入り込んでいる。

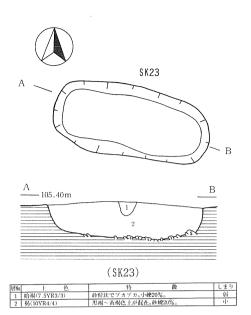
本土壙墓の確認面である地山黄褐色粘質土層は、この部分では厚さ5cmほどしかなく、その下は砂礫層である。このため、壁・底面共に砂礫の露出があり、特に底面東側が著しい。しかし、全体としては底面は概ね平坦で、壁面もほぼ垂直で滑らかである。

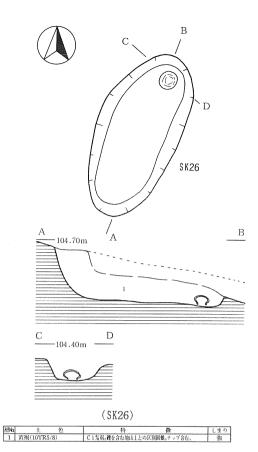
埋土は、ほぼ一層で、黄褐色土・砂礫・褐色土が混在している。上部中央にピット状の軟らかい部分が認められたが、河原石等が抜けた跡にも見えなかった。

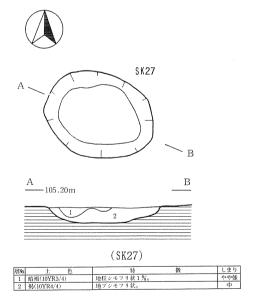
副葬遺物はなく、埋土中から晩期の土器小破片2点などが出土している。

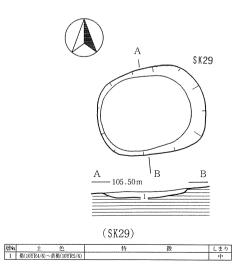
SK26土壙墓(第19図、図版11)

北東部KT34・35グリッドにある。横手川に面したこの部分の表土〜第Ⅳ層は非常にうすく、 現地表面から10~15cm掘り下げただけで地山面に達する。この部分の地山面の精査中に、プランは全く不明であるが、わずかに炭化物があり他の地山より心持ち汚れている箇所が存在したので、土坑の可能性があるということで、遺構番号を付した。縦横にサブトレンチを入れなが









第19図 \$K23·26·27·29 土壙墓

2 m

ら掘り下げたところ、北端から完形の壺形土器が伏せられた状態で出土し、プランも壙底部ではおおよそ把握できた。西側に隣接する形でSRO6土器棺墓がある。

特に壙上部で埋めもどされた土と地山土との区別が判然としない部分もあるが、平面形は、 長軸182cm、短軸90cmの楕円形である。確認面からの深さは50cm、長軸方向はN23°Eである。 底面は細かな砂礫が露出しているが概ね平坦で、壁もほぼ垂直である。

埋土は単層で、わずかにシミ状の汚れがあること、木炭片を1%弱含むことを除けば、地山 黄褐色土との判別が困難なほどである。全体にかたくしまっている。

底面北端部から、第32図7の無文壺形土器が口縁部を底面に接して伏せられた状態で出土した。埋置された土器である。口頸部がわずかに外反し、算盤珠に近い胴部から丸底になる器形で、口径8cm、器高11.4cm、胴最大径15.8cmである。外面の口頸部上下端と、内面に平行沈線をもつ以外は無文である。底部は一部欠損しているか穿孔されたものか否か判然としない。埋土中からは、石鏃(第37図11)・削器(第37図12)などが出土している。

\$K27土壙墓(第19図、図版11)

中央部LA32グリッドにある。第 \mathbb{N} 層上面で遺構の存在を知り、第 \mathbb{N} 層地山上面でプランを確認した。東側1.2 \mathbb{N} 2 \mathbb{N} 2 \mathbb{N} 300 に同じような形態の \mathbb{N} 3 \mathbb

平面形は、長軸118cm、短軸92cmの円形に近いずんぐりした楕円形で、確認面からの深さ16cmと浅い。長軸方向はN63°Wである。

壙底面は砂礫層まで達しておらず、底面はほぼ平坦ではあるが、しまりは良くない。壁は緩く、断面形は中華鍋様を呈する。埋土は、1層がやや強くしまっており、2層中には、地山土がブロック状に50%含まれている。埋土中から遺物は出土しなかった。

SK29土壙墓(第19図、図版12)

中央東部 $KT31 \cdot LA31$ グリッドにかけてある。前期調査で東側を、後期調査で西側を検出した。この付近の $I \sim III$ 層までは撹乱を受けており、確認面は第IV 層上面である。他の土壙墓と異なり近接する土壙墓等がない。北北西約2.8mに形態の似たSK27土壙墓がある。

平面形は、長軸115cm、短軸92cmのずんぐりした楕円形で、長軸方向はN82°Eである。確認面からの深さは12cmと極めて浅い。底面・壁面・埋土共にSK27土壙墓と非常によく似ている。埋土中からは剝片・チップが十数点出土したのみである。

\$K32土壙墓(第20図、図版12)

中央東部KT32グリッドにある。第V層上面を精査中に確認した。西側0.3mにSKP33柱穴様ピット、東側0.5mにSK44土坑がある。

平面形は長軸103cm、短軸84cmの小さくずんぐりした楕円形で、長軸方向はN40°E、深さ22 cmである。

底面は同じような形態の土壙墓であるSK27・29よりはしまっているものの、緩く波打っており、壁面が緩い傾斜である。埋土の1層中には、地山土粒子の混入がほとんどなく、2層は地山土に近い色調である。埋土に混在する形で剝片・チップが100点近く出土しているが、定形的な石器はない。

\$K37土壙墓(第20図、図版12)

北部中央北側のKT33・34グリッドにある。この部分の第V層上面精査中に、南北に長い褐色土の分布が見られ、 $2\sim3$ 基の土坑の重複のように見えたが、平面プランを確定するには至らなかった。このため、これを半截し、2基の土壙墓と1基の柱穴様ピットの存在を知ったものである。SK37がSK38を切っており新しい。本土壙墓の北側1.1mにはSRO3土器棺墓、南西側1mにはSK10土壙墓がある。

平面形は、直径0.9~1.0mの不整円形で、深さ28cmである。

壁は、地山土との層界が漸移的で不明瞭である。底面は北半で凹凸がある。埋土中には、地山土粒子・ブロックが20%前後混在し、剝片・チップを含んでいる。遺物は、土器がなく、削器(第44図64)などが少量出土している。なお、土層断面観察ではSK38と区別できるものの、底面はSK38の底面と同じ高さで、東西の壁面も連続するところから、本土壙墓とSK38で1基の土壙墓と見ることができるかもしれない。

SK38土壙墓(第20図、図版12)

北部中央東側KT33グリッドにある。検出の状況についてはSK37土壙墓の項のとおりである。 北側でSK37に切られ、南側は判然としない浅い土坑様部分を切っている。西側0.8mにはSK10 土壙墓があり、東側は約2.5mの傾斜を経て、横手川への崖面となっている。

北側をSK37土壙墓によって切られているため、長軸の規模が不明であるが、重複の状況からすれば120cm以上はあったものと考えられる。短軸は84cm、深さ30cmで、長軸方向はN1.5° E である。

壁は、やはりSK37土壙墓と同様しっかりと捉えることができなかった。底面は南側で若干上がっているものの、ほぼ平坦である。埋土は、上部に地山土粒子・ブロックが30%前後混在し、人為的に埋めもどされたことが明らかである。埋土中から土器は出土せず、削器(第44図65・66)などが出土している。

SK40土壙墓(第20図、図版13)

北部LA34グリッドにある。南北基本土層図作成時に、この部分に柱穴様ピットが存在するように見えたので、サブトレンチを入れたところ、第30図1~9の小玉が集中して出土したため、これを土壙墓として遺構番号を付した。しかし、その後の精査でも平面プランだけでなく、断面での範囲も正確に捉えることのできなかったものである。断面及びその後の精査で、小玉が

出土した地点の南側に新たな土壙墓のあることがわかったので、これをSK43とした。SK43土壙墓が本土壙墓より新しい。

従って、規模形態等は不明である。小玉が東部から 8点(第30図 $1 \sim 8$) まとまって、西部から 1点(第30図 9) 出土しているので、これを内側に取り込むようなラインを想定すると第20図のような形となる。しかし、東部の小玉の 1点だけが後から掘られたSK43によって掘り上げられ、SK43の埋土中にまぎれて西部から出土したと考えれば、SK43の東側部分と重なる長軸方向を南北にする小型の土壙墓が想定される。

SK43土壙墓の土層断面と同時に観察したが、地山土を含むかたくしまった土と、木の根による撹乱部分が多く、北壁を確定することはできなかった。 $1\sim3$ 層は、地山土と変わらないくらいにかたくしまっているのに対し、最上部から小玉がまとまって出土した 8 層は軟らかくブカブカしている。

SK42土壙墓

北部KT34グリッドにある。KT34グリッドほぼ中央にあるSR03土器棺墓の精査のため、埋設土器本体を南北に裁ち割るような形で北側にサブトレンチを入れたところ、トレンチ内北側に地山土のシミ状の汚れが検出された。この面を北側に広げ地山面で精査したが、土坑様のプランは確認できず、径20cm前後の範囲で痕跡程度のベンガラが見え、これに隣接して触れれば細片となる赤色漆塗りの皮膜状の物体が存在しただけである。従って、土壙墓が存在したと考えられるが、その形態・規模等は全く不明で、櫛と推定される皮膜状の赤色漆塗りの物体も不明で、取り上げることができなかったものである。

\$K43土壙墓(第20図、図版13)

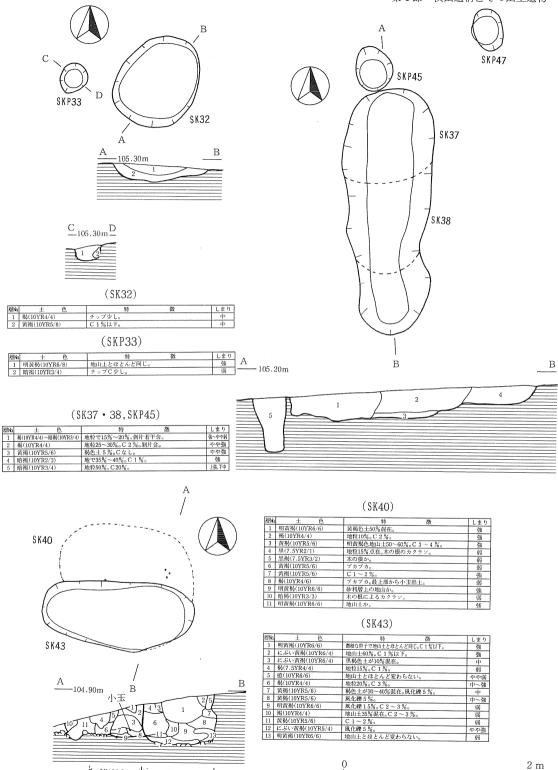
北部LA34グリッドにある。検出に至る経過は、SK40土壙墓の項で述べた通りである。SK40を切り、南西側0.2~1.7mには、SR12~14・18 の土器棺墓群がある。

本土壙墓も、埋土と地山土との区別が困難で、特に西側で明瞭にできなかった部分もある。 平面形は長軸160cm、短軸75cmの楕円形で、長軸方向はN84°W、深さ53cmである。南辺の一部 がわずかに張り出すような形である。

底面は、地山砂礫層を10cm弱掘り込んでおり、砂礫が露出しているものの、ほぼ平坦である。壁はほぼ垂直であるが、南辺の一部ではオーバーハングしている。埋土は、 $1 \cdot 2 \cdot 7 \sim 9$ 層が地山土とほとんど変わらない色調で、特に $1 \cdot 2$ 層はかたくしまっている。埋土中からは、篦状石器の破片などが出土したのみである。

\$K44土壙墓(第21図、図版14)

北部南東端KT32グリッドにある。この部分の第Ⅳ層~第Ⅴ層地山上面で精査中に、暗褐色土の分布はあるが、平面的なプランを確定することがどうしてもできずにいたのが本土塘墓であ



第20図 \$K32・37・38・40・43 土壙墓、\$KP33・45・47 柱穴様ピット

K- SK40(?) -*

SK43

7

る。図示した平面プランよりも若干南東側に延びる可能性もあるが、浅く、木の根による撹乱 も多かったことから、このように捉えた。東側は1m弱で横手川への崖面、北側でSQ41配石遺 構に隣接している。

平面形は、長軸184cm、短軸73cmの不整楕円形で、長軸方向はN24°Wで、深さ14cmである。 浅いため北側を除く壁面がしっかりせず、底面も中央から南側で礫が露出していて良好ではない。埋土は人為的に埋めもどされたものと考えられるが、全体のプランが他の土壙墓に比較して整っていないこと、底面もしっかりしていないことなどから土壙墓か否か疑問な点もあるが、ここでは一応土壙墓として扱った。埋土中からはチップが少量出土した。

\$K46土壙墓(第21図、図版14)

中央北部LB33グリッド南東部にある。第V層地山上面の精査では検出できなかったが、さらにこの面を数cm下げて精査した結果、褐色土の広がりを認めたものである。褐色土の平面的な広がりからは、小さな楕円形の土壙墓と考えられたが、半截の結果、地山土とほとんど差のない埋土がさらに東側にあることがわかり全体のプランを捉えることができた。本土壙墓は、長軸方向が略東西で南北に連なる土壙墓群の最も北側に位置し、南西側0.4mにはSR24土器棺墓がある。

平面形は、長軸141cm、短軸67cmの隅丸長方形に近い楕円形で、長軸方向はN90°W、確認面からの深さは22cmである。

底面と壁面には地山砂礫がわずかに露出しているが、底面は平坦で、壁もほぼ垂直に滑らかに立ち上がっている。埋土は、2層の特に上部に地山土が多くありこの部分がかたくしまっている。4層は地山砂利そのものであるが、軟らかく、埋めもどされたものであろう。埋土中からは剝片1点と、拳大の円礫が1点出土したのみである。

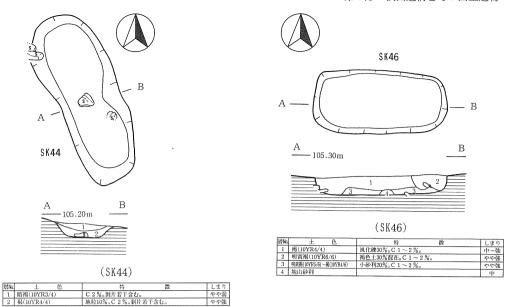
SK67土壙墓(第21図、図版15)

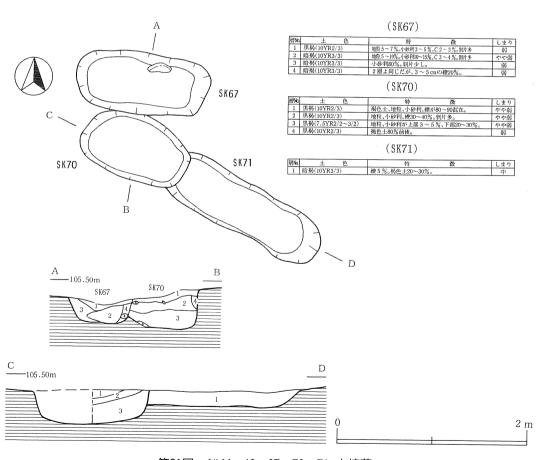
中央部LB31グリッド北部にある。本土壙墓の南西側にあるSR60・61等の土器棺墓の調査終了後、第V層地山砂礫層上面でSK70土壙墓等と共に検出した。南側でSK70と切り合っており、本土壙墓が新しい。

平面形は長軸148cm、短軸66cmのややくずれた隅丸長方形の楕円形で、長軸方向はN83°W、深さは25cmである。

底面・壁に地山砂礫が露出しているものの、底面は概ね平坦である。南辺がSK70土壙墓とわずかに重複していて、その部分の壁の形は若干くずれているものの、他はしっかりしている。

確認面での埋土の色調などでは、SK70が本土壙墓を切っているように観察されたが、断面では逆であることがわかった。埋土は、基本層位の第II・III層に由来すると考えられる暗褐〜黒褐色土系の土を主体とし、3層ではこれに地山砂利が80%前後混在している。1・2層中に多





第21図 \$K44 · 46 · 67 · 70 · 71 土壙墓

くの剝片・チップが混在している。

埋土中から第37図14の篦状石器などが出土している。この篦状石器は、打面が大きく残っており、左側縁も剝片剝離の際の剝離面が除去されないままである。

SK68土壙墓(第22図、巻頭図版 4 、図版16)

中央東部LA30グリッドにある。この部分の第V層上面を精査中に、黒褐色土中に地山土に近い黄褐色土が楕円形に分布するところから本土壙墓を確認した。他の土壙墓からは比較的離れており、北西側のSK71とは2m、南西側のSK77Bとは2.4mの間隔がある。また、東側の横手川にいたる段丘崖までは約3mである。

平面形は、長軸158cm、短軸100cmの楕円形で、長軸方向はN82°Wである。深さは確認面から62cmと、虫内III遺跡の今次の調査で検出した土壙墓では最も深い。

本土壙墓は、地山粘質土層(この部分での厚さ20~40cm)を抜いて、その下の粘質土混じりの砂礫層をも約30cmほど掘り込んでいる。このため、底面には、多くはないものの砂礫が露出している。底面は西~中央部にかけては平坦なものの、東側では緩く上昇している。壁は底面から丸味を持って立ち上がり垂直もしくはわずかにオーバーハングし、壙上部近くで若干外に広がっている。

埋土は、大きく上下2つに分かれる。上部は $1\sim4$ 層で、地山土を主体としてかたくしまっている部分が多い。これに対して下部は基本層位の第II・III層由来と考えられる黒褐色土を主体とし、12層を除いては、かたくしまったものはない。12層はかたくしまっており、底面を滑らかにするために埋めもどした土かもしれない。

埋土中からは、晩期の土器片(第34図22・23)の他、篦状石器(第37図15、第38図16・17)・削器(第38図18・19)・抉入石器(第38図20)・凹石(第42図55)などが出土している。

\$K69土壙墓(第22図、図版16)

中央LA31グリッド西部にある。第V層地山砂礫層上面で検出した。西側0.2mにはSR75土器 棺墓があり、さらに $SK67 \cdot 70 \cdot 71$ などの土壙墓群がある。

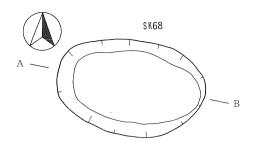
平面形は長軸106cm、短軸85cmのずんぐりした楕円形で長軸方向はN83°E、深さは15cmである。

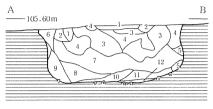
底面中央部に、うすくベンガラの散布が認められ、南壁寄りに径15cm前後の円礫が1点あった。ベンガラの層厚は3cm前後で、円礫は底面から数cm浮いている。

底面及び壁面には地山砂礫が露出しており、底面には細かな凹凸がある。 壙断面形は浅い中 華鍋状を呈する。埋土は黒褐色土を主体とするが、地山由来の砂礫が多く混在している。 3 層 中にベンガラが認められる。

底面の南東壁下から第38図21の石鏃が1点出土している。出土時の石鏃の向きについては不

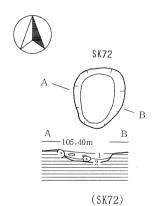
第1節 検出遺構とその出土遺物



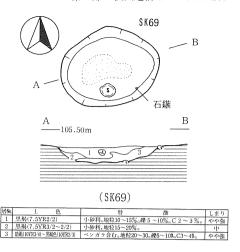


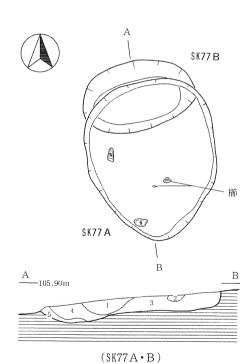
(SK68)

層Ma	土 色	特 微	しまり
1	楊(10YR4/4~4/6)	资褐色上30~40%。C 20%、磙 5 %。	施
2	暗祸(10YR3/4)	地粒プ20~50。С 2 %。	r‡1
3	明黄樹(10YR6/4)	黑褐色上30%混在。	描
4	黒褐(10YR2/3)	地粒20~25%、C 2~3%。	やや弱
5	明黄樹(10YR6/6)	易色 ± 20%。	弱
6	畸祸(10YR3/4)	地拉5%。C3%。	や大つ時時
7	黒褐(10YR2/3)	地粒シモフリ状 5~10%。C 3~4%。	やや弱
8	黒楊(10YR2/3)	暗褐色土20~25%。C 3~4%。	中
9	黑褐(10YR2/3)・飛(10YR4/4)	黒裾と裾が互摺をなす。地位5~10%。	99
10	黑褐(10YR2/3)	地粒含まず。C 2 ~ 3 %。	やや強
11	暗褐(10YR3/3)	地粒1~2%,C2%。	ф
12	器(10YR4/4~4/6)	黄褐色土10%。	動



層Na	土 色	特 微	しまり
1	黒褐(10YR2/3)	小砂利、礫40%。C 3 ~ 5 %。	やや弱
2	祝(10YR4/4)	小砂利、礫1層と同じ。	中









第22図 SK68·69·72·77A·77B 土壙墓

明である。先端がわずかに欠損している。

\$K70土壙墓(第21図、図版15·17)

中央LB31グリッドの中央部にある。SK67土壙墓と同時に第 \mathbb{N} 層中で検出した。 $SK67 \cdot 71$ と重複し、SK67に切られ、SK71を切っている。従って3基の土壙墓 $SK67 \cdot 70 \cdot 71$ は、古い方から順に $SK71 \rightarrow SK70 \rightarrow SK67$ となる。

北部の一部をSK67に切られているものの、底面は全面残存している。平面形は長軸116cm、 短軸68cmの楕円形で、長軸方向はN70.5°W、深さ42cmである。

底面や壁面には、地山砂礫が露出しているものの、全体に滑らかな面をなす。底面は中央部が極く緩く窪み、壁はほぼ垂直である。埋土は黒褐色を主体とし、1・2層に地山土由来の砂利等が多く混在している。

埋土中からは、前期(第34図24)と晩期(第34図25)の土器片などが出土している。

SK71土壙墓(第21図、図版15・17)

中央部LA31・LB31グリッドにある細長い土壙墓である。SK67・70土壙墓等と同時に検出した。 SK70に西側を切られている。

西端部をSK70に切られているために、残存する長軸は152cmであるが、全体の形状やSK70との重複部分の壁の状況から、もともとの長軸は約180cmであったと推定される。従って平面形は、長軸180cm、短軸56cmの細長い楕円形で、深さは18cmである。

底面と壁面には、地山砂礫が露出しているものの、全体に滑らかで、底面は平坦、南北壁はほぼ垂直である。埋土は、1層で砂礫をあまり含まない。埋土中からは、剝片・チップが5点出土したのみである。

SK72土壙墓(第22図、図版17)

中央LB31グリッドの北東部にある。本土壙墓の南側0.3~0.9mにあるSK67・69・70・71土壙墓等と同時に検出した。

平面形は、長軸64cm、短軸53cmの円形に近い楕円形で、長軸方向はN5°E、深さ10cmと浅い。底面や壁面には、大きめの砂礫が露出しており、凹凸が著しい。

埋土中には、砂礫を40%程度含んでいる。遺物は出土していない。

SK77A土壙墓(第22図、図版17·18)

南部北側LA29・30グリッドにある。本土壙墓周辺は畑の耕作による撹乱が著しく、基本層位第 \mathbb{N} 層まで及んでいる。このため、本土壙墓は第 \mathbb{N} 層下部~第 \mathbb{N} 層上面で確認した。また、本土壙墓は、検出時には1基の土壙墓と認識したが、半截したところ、北部に1段下がる底面が存在するところから2基の土壙墓が重複していることが判明したので、新しい方(南側)を \mathbb{N} A、古い方(北側)を \mathbb{N} を \mathbb{N} とした。北東側 \mathbb{N} 3.3mには著しい撹乱を受けた土器棺墓 \mathbb{N} 8.6が、南

側0.2mにはSK78土壙墓がある。

平面形は、長軸168cm、短軸125cmのずんぐりした楕円形で、北辺が緩い弧を描くのに対し、南辺が鈍く尖る。長軸方向はN7°W、確認面からの深さは25cmである。

本土壙墓の掘り込みは砂礫層まで達していないために、底面・壁共に滑らかである。また、 本土壙墓のあるあたりは極く緩く南から北側に下降しているが、底面はほぼ水平である。

底面近くを精査中に、壙中央やや南寄りのところから赤色漆塗り櫛が頭部を北にして検出された。結歯式の竪櫛で、10本以上あったと思われる歯の部分は既に失われて、漆の皮膜だけが残ったものである。第32図①がそれで、非常に脆弱なため、出土した状態の写真から図を作成したものである。また、この櫛の西側10cmのところからもこの櫛の断片が出土した。

埋土は、1層が2層に比べて黄色味の強い土で、本土壙墓検出時には、これが壙中央部を覆 うような状態で分布していた。

埋土中からは、櫛の他数点の円礫と石錐(第38図22)などが出土した。櫛の残存しているのは、頭部と考えられ、頭部両側と頭端の大部分が欠損している。全長41mm、残存する最大幅58mm、最大厚7mmである。表面は4条の平行沈線様に窪みがあり、上から2・3条目が途中で結合して、その中央部が円形に窪んでいる。歯は幅約4mm、厚さ3mm程度で、10本以上あったと推定される。一部表面が剝落した部分に頭部内での歯の痕跡が見えている。頭部内における歯は先端に行くほどうすくなり、先端部周囲を微細な漆の皮膜状の物体で包んでいる。

SK77B土壙墓(第22図、図版17·18)

SK77Aの北部で重複する土壙墓で、現場調査時には平面プラン等を確定することができなかったものである。

推定平面プランは、長軸120cm、短軸73cmの楕円形で、長軸方向はN75°E、確認面からの深さは27cmである。底面と壁共に滑らかで、壁が緩く立ち上がる。

\$K78土壙墓(第23図、図版18)

南部北側LA29グリッドにある。第N層下部で確認した。東辺の一部を現代の野菜貯蔵穴に切られているが、全体のプラン等に影響はない。北側0.2mにSK77A、西側0.3mにSK79土壙墓がある。

平面形は、長軸122cm、短軸59cmの整った楕円形で、長軸方向はN22°W、深さ20cmである。 底面は地山砂礫層をわずかに掘り込んだ面にあるため、小さな砂礫が露出して若干の凹凸があるものの概ね平坦で、壁面は滑らかである。畑の耕作が埋土上部にまで及んでいる。埋土中からは凹石1点(第42図56)の他、剝片・チップが5点出土したのみである。

SK79土壙墓(第23図、図版18)

南部北側LA29とLB29グリッドにある。畑の耕作土を除去した第Ⅳ層面で確認したが、畝の深

い部分は確認面でも残っていた。南東側で\$K87土壙墓に隣接し、南西側0.6mには石剣などが副葬されていた\$K91土壙墓がある。

平面形は長軸198cm、短軸71cmの細長い楕円形で、長軸方向はN29°W、深さ22cmである。

非常に浅いため、底面は砂礫層まで達しておらず、壁と共に滑らかである。また、耕作による撹乱のため底面中央北寄りの部分が掘り込まれているが、底面は平坦である。

埋土中からは、20点弱の剝片・チップが出土しただけである。

\$K87土壙墓(第23図、図版19)

南部北側LA28・29グリッドにある。第Ⅳ層面で一部著しい撹乱を受けた状態で検出された。 北側でSK79に隣接し、西側0.8mには石剣などが副葬されていたSK91土塩墓がある。

平面形は長軸114cm、短軸77cmの楕円形で、長軸方向はN29°W、深さ26cmである。

掘り込みが砂礫層に達していないため、底面は平坦で、壁はやや角度を持って立ち上がっている。底面近く南壁に接して $19\text{cm} \times 7\text{ cm} \times 4\text{ cm}$ の円礫が置かれた状態で検出された。頭位側に置かれた石であろうか。

埋土は、褐色土系の土が多く、各々に地山土が粒子や小さなブロック状になって混在している。埋土中からは、第38図23の掻器などが出土している。

SK89土壙墓(第23図、図版19・20・26)

南部中央LB28グリッドにある。本土壙墓の周辺も畑の耕作による撹乱が著しく、基本層位のII・III層は残存していない。本土壙墓の確認面も第IV層〜第V層地山土上面である。南側でSK 115土壙墓の北壁をわずかに切っており、北側0.6mにはSR88土器棺墓がある。

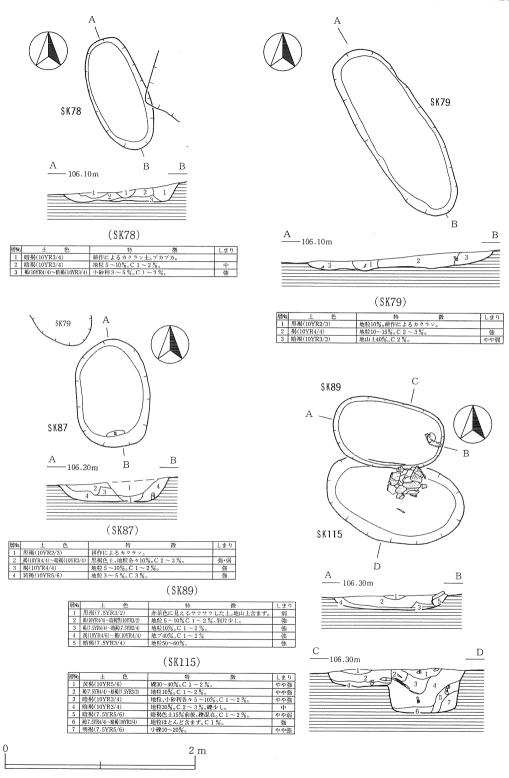
平面形は長軸117cm、短軸72cmの楕円形で、長軸方向はN79°W、深さ16cmである。

本土壙墓確認面を精査していたところ、東壁近くに角柱状の礫がのぞき、その西側に赤色顔色塗り小型壺形土器が口縁部を南西方向にした横倒しの状態にあり、さらに角柱状礫の下には小型皿形土器が側倒立の状態で存在することが判明した。これら2個の土器は完形品であったと考えられること、2個の土器と角柱状礫の位置は壙長軸線上の東端であることから、これらは意識的に埋置されたものと考えられる。なお、これら3点の遺物の出土状態は、埋置されたときの状態を保ったままのものとは考えられない。3点の遺物は、東端部に埋置されたに違いないが、遺体が腐朽して埋土が落ちた時、もしくはその後の木の根の撹乱あるいはその両者の作用で検出時のような状態になったものと考えられる。

底面や壁面は、浅い土壙墓の割にはしっかりしており平坦で滑らかである。

埋土のうち、1層はSK106等でも見られた壙中央部に見られる茶色の発色が強い褐色土である。なお、壙中央部から東側は、木の根による撹乱を著しく受けている。

埋置された小型壺形土器(第32図8)は、上下から押された球のような胴部に強く外反する口



第23図 5 1 7 9 ・ 87 ・ 89 ・ 115 土壙墓

頸部が付く土器である。口径10.1cm、器高6.1cm、底径2.8cmであるが、耕作によって口唇部の半分を欠損している。口径と胴部最大径がほぼ等しい。比較的幅の広い口唇部が外側を向いており、口唇上と内面に1条、外面口唇部直下に2条の沈線が巡っている。また、頸部下端には羊歯状文風の沈刻、胴部上端に2条の沈線が巡り、底面にはえぐられた感じの円文がある。内外面ともにていねいに研磨された精製土器で、外面全面と内面の胴部中位まで赤色の顔料が塗布されている。丸底で浅い皿形土器(第32図9)は、口縁部に2条の沈線がめぐり、その下に2単位の雲形文が描かれ、口唇部にはB突起状の装飾帯を持つ。口径10cm、器高2.3cmである。口縁部に焼成後に穿孔された小孔が1つあるが、反対側にもあったか否かその部分が破損しているため不明である。なお、壺形土器と皿形土器は口径がほぼ等しい。出土状態からは考え難いが、皿形土器が壺形土器の蓋として合わさる形で埋置されたものかもしれない。焼成良好で胎土には海綿状骨針を多量に含む。角柱状礫(第43図58)には、手ずれ等によると思われる磨耗がわずかに認められるものの、摩痕や敲打痕はない。

埋土中からこの他に、第43図57の半円状扁平打製石器が出土している。

SK90土壙墓(第24図、図版21)

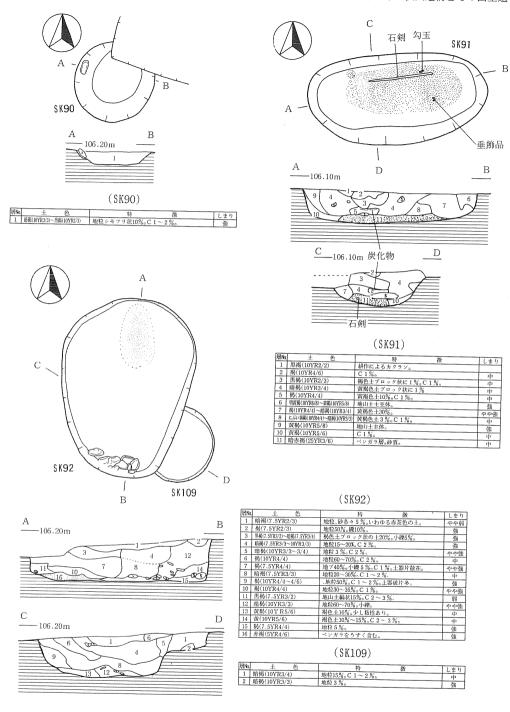
南部東側LA28グリッドにある。第N層面で検出し、北東部を現代の貯蔵穴によって切られている。南側 $0.2\sim0.5$ mに $SK103 \cdot 102$ 土壙墓などがある。

平面形は、直径82~84cmの円形で、深さは14cmである。

底面は平坦で、壁は緩く立ち上がっている。長さ幅共に15cm前後の扁平な河原石が西壁に沿 5形で検出されたが、故意に置かれたものか否か不明である。埋土中からは拳大の河原石が 2 個と剝片・チップが12点出土した。

SK91土壙墓(第24図、巻頭図版5・7、図版21)

南部中央LB28・29グリッドにある。本土壙墓や本土壙墓の南側0.2mにあるSK92土壙墓を含むLB28・29~LC29グリッドにかけては、畑耕作による撹乱が今次調査区内で最も著しく、本土壙墓やSK92部分では幅0.5~0.7mの帯状の耕作痕が生々しく残っていた。このような中で本土壙墓を第Ⅳ層下部精査中に検出した。検出時には、長軸方向を東西に取る幅のやや狭い楕円形の暗褐色土部分と、この楕円形暗褐色土の西部から少し南側に張り出す形の暗褐色土が見えたところから、これを2つの土坑の切り合いと判断したが、平面観察では両者の切り合い関係は判然としなかった。また、判然としなかった理由の1つに撹乱部分が介在していたこともあって、撹乱土を除去したがそれでも判断はつかなかった。このため、とりあえずSK91の遺構番号のみを付し、土層断面を縦横に設定して観察することで、サブトレンチを設けながら壙北半と西半の掘り下げを開始した。確認面から二十数m掘り下げた段階で東側と中央やや西寄りでベンガラが、中央や北西寄りでうすい炭化物層とその下から大きくて扁平な河原石が検出された。





第24図 \$K90・91・92・109 土壙墓

さらにこのベンガラの散布範囲と厚さ、河原石の厚さを知るためにサブトレンチ部分を掘り下 げたところ、サブトレンチの北部で石剣の一部(鋒側)が壙長軸方向に平行する形で顔をのぞか せた。

また、半截している東西両端では暗褐色土を掘り下げてもしっかりした壁が検出されないため、数度にわたって暗褐色土周辺の精査を行った。その結果、暗褐色土の外側に本来の地山土よりもわずかに黒ずんだ地山土様の土(断面図の6・9層)が緩い弧を描いて存在することがわかった。そして、この明黄褐〜黄褐色土のラインは、SK91と西部で重複すると観察された暗褐色土の南端のラインに撃がることも判明した。以上のようなことから、SK91は予想したよりも規模の大きな楕円形の土壙墓であることがわかったが、大きく扁平な河原石とその上の炭化物層の存在理由については未解決であった。その後、断面図を作成しながら未掘部分の掘り下げを併行したところ、扁平な河原石の東側に4個、西側に1個の大きな礫が全体としては石囲炉状に配されていることが明らかになったため、これをSK91土壙墓とは別の遺構としてSX110とした。しかし、このSX110全体のプランは、SK91のプラン内に完全に収まること、SX110が、開け放されている時間がごく短いかその時を置かずに埋めもどされていることから、SX110は、SK91と強く関連を持つ遺構であろうと判断した。

SK91は、北壁の上部を耕作によって削られているものの、平面形は、長軸191cm、短軸100cm の楕円形で、長軸方向はN86°E、確認面からの深さは38cmである。

底面東側には地山砂礫層がわずかにのぞいているものの、底面は平坦でよくしまっており、 壁面も滑らかである。断面形は、長軸方向が水平であるのに対し、短軸方向が中央部が緩く窪 む状態である。

壙確認面から約25cm下~底面にかけては、鮮やかな赤褐色のベンガラが色濃く散布している。このベンガラの散布している範囲は、底面東壁から15cm、西壁から30cm、南壁から15cm離れた内側、東西120cm、南北50cmの楕円形を呈している。そして、壙中央部北側には、北壁から十数cm距離を置いて北壁に平行する形で全長71.1cmの石剣が埋置されている。石剣は、完形品で柄頭を東、鋒を西にし、底面から3cm前後高い位置で水平を保っており、柄部の北側には勾玉が同じレベルで埋置されている。全長3.6cmの勾玉も石剣に平行する形で小孔のある頭部を東に向けている。また、石剣の柄頭先から真南25cmのところでC字状の石製有孔垂飾品が出土した。このC字状垂飾品も水平を保ち、開口部を西に、2個の小孔のある側を東にしており、底面からは1cm強の高さにある。なお、底面近くベンガラを含む埋土を水洗いしたが、そのうちの西側の埋土中に小玉1点が入っていた。しかし、この小玉の詳細な位置と出土状況は不明である。

埋土のうち、 $2\sim5$ 層は後述するSX110に関連するものであるが、本土壙墓本来の埋土と大

きな変化は認められない。 $6\sim11$ 層の埋土は大きく2つに分けられる。 1つは $6\cdot9$ 層で、明 黄褐~黄褐色の地山粘質土を主体としてかたくしまっている部分が多い。他の1つは $7\cdot8$ 層で、褐~褐色土を主体とし比較的軟らかい。 $6\cdot9$ 層は、土壙墓内に木棺状の埋葬施設を想定した場合の裏込土とすることができる。

石剣(第31図)は粘板岩製で、全長71.1cm、最大幅2.8cm、最大厚2.6cm、重さ807gである。幅や厚さに比べて非常に長く、身が直線的であることが特徴である。柄頭と柄部は分離せず、柄頭先端に向かって緩やかにすぼまる。柄頭の先端には小さな面を持つ。柄部の断面形は円に近い楕円である。柄部と刃部との間には、両端に各1条の沈線をめぐらした幅1.5~2.0cmの刃関部がある。刃関部の研磨は不十分で、細かい敲打痕が残っているが、身全体に装飾性のないこの石剣に、逆の意味で美しさを与えている。刃部はほぼ中央部まで直線で、中央部から形ばかりの鋒に向かって滑らかに細る。両刃であるが、刃関から約8cmまでは刃になっておらず、それから鋒に向かうに連れて明瞭な刃となって行く。しかし全体に鈍い刃であることには変わりがない。身全体は、先述した刃関部を除いて全面がていねいに研磨され、"寸分の狂いもなく"の表現が合うような作りであるが、柄部に敲打痕がわずかと、数ヶ所に研磨前の剝離痕が小さく残っている。

勾玉(第30図15)は、最大長36mm、頭部(小孔のある側を頭部もしくは基部、反対側を先端部と呼ぶ。次の石製有孔垂飾品も同じ)側での最大幅16mm、最大厚11mmで、重さ12.4gの翡翠製である。先端側が屈曲して、全体が緩やかに曲がる「L」字状を呈する。頭部中央やや屈曲側に直径3.5~5.5mmの小孔がある。小孔は一方からの穿孔で、穿孔後、工具の突き出た側の孔口を少し調整している。全体形が「L字状」ではあるが、屈曲側の小孔部分がわずかに膨らんでおり、小孔を中心に浅い小溝がある。小溝は屈曲側に3条、小孔の後方に2~3条、頭部に1条ある。小孔のある面は、研磨によって小孔を中心に平坦な面となっている。

石製有孔垂飾品(第30図16)は、最大長42mm、最大幅15mm、最大厚10mmで、重さ10.7gである。全体形が「C」字状で、頭部に直径4mmの小孔が2孔ある。本垂飾品は文様が表出された面と、ほとんど文様のない面があり、明らかに表裏がある。左側が表面、右側面をはさんで右側が裏面である。表面には、上部の小孔から先端に至る幅広で深い溝がある。頭部の表面から側面にかけては半円状もしくはU字状の鋭く浅い小溝が3ヶ所にあり、その中に各々1個づつの盲孔が配されている。盲孔の中心には、管錐による穿孔の際に見られる、いわゆる「ヘソ」が残っている。また、頭端にも1条の小溝と1個の盲孔がある。計4個の盲孔は深さ3mm前後で、その位置と深さから推測すると、貫通させようとしたものではなく、装飾的な文様として配されたものと考えられる。

小玉(第30図14)は翡翠製で、平面形が楕円形を呈し扁平である。全長13mm、最大幅7mm、最

大厚4.5mm、重量0.5gである。

以上の他に、埋土中からは第39図24の石錐1点などが出土している。

\$K92土壙墓(第24図、図版22)

南部中央LB28グリッドにある。前述したSK91土壙墓と同時に第IV層下部で検出した。壙南部でSK109土壙墓と重複しており、本土壙墓が新しい。北側0.2mにはSK91、西側0.4mにはSR88土器棺墓がある。

平面形は、長軸187cm、短軸138cmの卵形に近いずんぐりした楕円形で、長軸方向はN6°E、深さ47cmである。なお、確認面での埋土の状況は、中央部にSK89土壙墓などにも見られた褐色土があり、その周囲(特に東側)には地山土を主体とする黄褐色土が分布していた。

底面は、北西側に地山砂礫層が若干顔をのぞかせているために、わずかに緩やかな凹凸が見られるものの概ね平坦である。壁面はほぼ垂直に立ち上がっているが、南壁中位以下には砂礫層が露出している。

底面の中軸線上北部には、薄い色でしか残っていないがベンガラの散布がある。この範囲は、 南北70cm、東西35cmの楕円形を呈する範囲で、厚さは $5\sim8$ cmである。

埋土は、東西方向では通常の堆積状況を示しているが、南北方向では3・7層と4・8層との間に明らかな土色の違いが見られた。この部分は木の根による大きな撹乱もあったが、その原因はわからなかった。また、埋土下部の南側には、拳大前後の礫が多数散在しており、特に南壁際に集中していた。同様な例は後述するSK106土壙墓の東壁際にも見られたが、両者共に特に整然と積み重ねた様子はない。

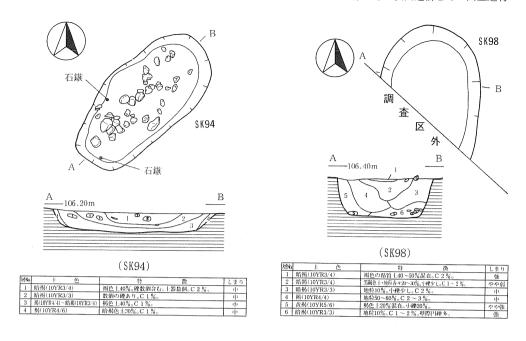
埋土中、特に南北中軸線よりも西側から晩期の粗製深鉢形土器の破片(第34図27)が散在する形で多数出土した。ほとんどが1個の深鉢形土器の破片と考えられ、接合してみたが全体の形を図示できるほどの破片数でもないことがわかった。しかし、本遺跡内では、1基の土壙墓埋土中から散在する形でこれだけの土器片が出土する例はないので、あるいは本土壙墓が、ここに存在した土器棺墓を掘り上げ、その破片が埋土中に散乱した可能性もある。この他、埋土中から、中期後葉の深鉢形土器底部(第34図26)や晩期の土器片(第34図28)の他、第39図25の石鏃などが出土している。

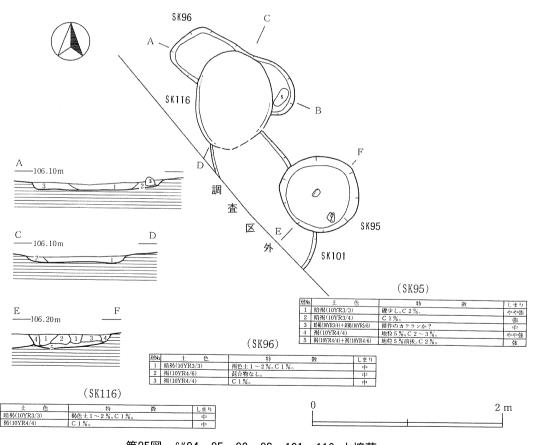
\$K94土壙墓(第25図、図版22)

南部西側のLC28・29グリッドにあり、第V層面で検出した。北西側1.1mにはSK95土壙墓がある。

平面形は、長軸174cm、短軸84cmの楕円形で、長軸方向はN43°E、深さは24cmである。平面 プランのうち、東辺はほぼ直線的なのに対し、西辺中央が外側に膨らんでいる。

底面は地山粘質土であるため平坦で、壁面と共に滑らかである。





第25図 5K94・95・96・98・101・116 土壙墓

埋土中には、確認面ではほとんど見られなかった直径 $5\sim15$ cmの円礫が多数散在している。これらの円礫の大部分は底面から $5\sim20$ cmの高さにあり、故意に配置したような状況は全くなかった。埋土と共に投げ込んだものと考えられる。埋土は暗褐色土を主体とし、地山土はほとんど混在していない。

壙底面の南壁直下から第39図26の石鏃、西壁際から第39図27の石錐が出土している。また、 円礫群中に散在する形で、晩期深鉢形土器同一個体の破片が16点出土している(第34図29)。

SK95土壙墓(第25図、図版23)

南部西側LC28グリッドにある。前述のSK94土壙墓から本土壙墓やSK96にかけては、地山面までほぼ水平に削平されていた部分である。そのような状況下にあって、本土壙墓を含めたSK96・101・116の4基の土壙墓が重複し、しかも各々が極めて浅くしか残存していなかった。このため、各土壙墓の正確なプラン及び切り合い関係は推定の要素が多く入る結果となった。しかし、そのような中で、本土壙墓は確認面で、暗褐色土が円形に明瞭に見えたものである。SK101土壙墓を切っている。

平面形は、直径約85cmの円形をなすと考えられ、深さは15cmである。底面及び壁面は、木の根の痕が著しく、地山土との層界がはっきりしない部分もある。埋土中には、地山土を若干しか含んでいない。埋土中から土器片1点と剝片が4点出土している。

\$K96土壙墓(第25図、図版23)

南部西側LD28グリッドにある。平面観察では南側のSK116土壙墓を切っているように見えたが、土層断面観察の結果では、本土壙墓がSK116に切られていると判断される。

平面形は長軸140cm、短軸58cmの楕円形と考えられ、この場合の長軸方向はN 70° Wである。深さは12cmと浅い。

浅くしか残存していないが、底面には砂礫層が露出しているため、底面は明瞭で概ね平坦である。壁面は底面からの立ち上がり部分が、はっきりしているものの、その上部は推定の要素が多い。壙中軸線上の東端から、20cm×8cm×8cmのやや長大な河原石が中軸線に直交する形で検出された。河原石は、底面にほぼ接しているところから、この位置に埋置されたと考えられる。

図示した土層断面図の中央にはSK116の埋土があるが、本土壙墓の埋土との層界は決して明瞭なものではない。埋土中からは、剝片・チップが4点出土したのみである。

\$K98土壙墓(第25図、図版24)

南部中央南端LB26グリッドにある。この部分の地山面精査中、帯状になった暗褐色土の西側に地山を主体とする汚れた土の分布が見られた。通常見られる風倒木痕に似た点もあったが、暗褐色土が弧状になっていないところから、半截した結果、土壙墓と判明したものである。壙

南半は路線外にあるため全体の規模は不明である。

平面形は、長軸の長さが不明であるが、150cm以上で、短軸106cmの楕円形を呈すると考えられ、この場合の長軸方向はN2°Eである。深さは44cmである。

掘り込み途中から砂礫層が存在するため、底面には砂礫が露出しているものの、かたくしまって平坦な面となっている。壁面下部にも砂礫が露出しているが、ほぼ垂直に立ち上がっている。 埋土下部の東西両壁際には、地山砂礫層がそのまま埋めもどされたと思われるような箇所も 存在する。2・3層を除けば砂礫の混在が著しい。埋土中からは、前期の土器片(第34図30)・

\$K101土壙墓(第25図、図版23)

第39図29の石器などが出土している。

南部西側LC・LD28グリッドにある。検出状況はSK95・96土壙墓と同じである。南東部でSK95、北西部でSK116と重複する。SK95よりも古く、SK116との前後関係は不明である。 上述のとおり、SK95・116と重複し、さらに南西部が調査区外にあるため、長軸方向がN30°W前後の楕円形の土壙墓であることは間違いないが、正確な規模は不明である。確認面からの深さは14cmである。

埋土はSK116とほとんど違いがなく、底面のレベルも同じである。埋土中から剝片が1点出土したのみである。

\$K102土壙墓(第26図、図版24・25)

南部東側LA28グリッドにある。本土壙墓を中心にして、第IV層上面を比較的広い範囲で精査したところ、本土壙墓の南側には黒褐色土が直径2~2.5mの範囲で円形に分布しており、この面で縄文時代前期の土器小破片が散見された。そしてこの黒褐色土(SK125)の北~西側には、楕円形を呈する褐~暗褐色土が、黒褐色土を切る形で分布していた。本土壙墓はそのような褐~暗褐色土部分のうちの1つで、最も規模の大きいものであった。さらに上面を精査したところ、第26図SK102土壙墓の上段に示したような形で色の異なる土が同芯円状に分布しており、中央部には立石のあることも確認された。北側でSK103・北西側でSK104・南側でSK125土壙墓をそれぞれ切っている。

平面形は長軸168cm、短軸119cmのややずんぐりした楕円形で、長軸方向はN73 $^{\circ}$ E、立石頂部からの深さは47cmである。

中軸線中央やや東寄りには立石がある。立石は2個東西に並んでおり、中央寄りの立石の頂部が東側の立石頂部よりも10cm高い。2個の立石は長さがそれぞれ33cm、23cmと細長い河原石であるが、整った形の円柱状のものではない。長い立石の頂部から20~30cm下位の周辺には数個の河原石がある。これらの河原石は特に組まれた状況にはないものの、平面的には立石下部に重なるものもあることから、土壙墓の埋めもどし若しくは立石の埋設の際に意識的にそこに

埋置されたものと考えられる。

底面及び壁面は非常に滑らかで、底面は平坦である。壁面の立ち上がりはほぼ垂直で、壙口部近くでわずかに外傾する状況はSK68土壙墓に似ている。底面精査時に、南部に赤褐色土の分布が認められたが、これは、SK125が縄文時代前期の竪穴住居跡であり、その炉の焼土が見えたものと考えていた。しかし、SK125の精査の結果、この赤褐色土はSK125底面に散布するベンガラと判明した。

埋土の状況は、確認面中央部にややかたくしまった地山土主体の層が分布していたSK10やSK 68土壙墓に似ている。すなわち、1層は褐色土であるが、2層中には、地山土が多く混在していて、両者共にかたくしまっている。そして3・4層は黒褐〜暗褐色系の埋土で、軟らかい。

埋土中からは、前期の土器片(第34図31)の他、石鏃(第39図28)・削器(第39図30)・角柱状礫 (第43図59)が出土している。

\$K103土壙墓(第26図、図版24)

南部東側LA28グリッドにある。SK102土壙墓によって大部分が切られており、北側一部しか 残存していない。従って、短軸(もしくは直径)が72cm、確認面からの深さ12cmであること以外、 全体の規模・形状は不明である。埋土は、1層でしまりのやや弱い暗褐色土を呈する。

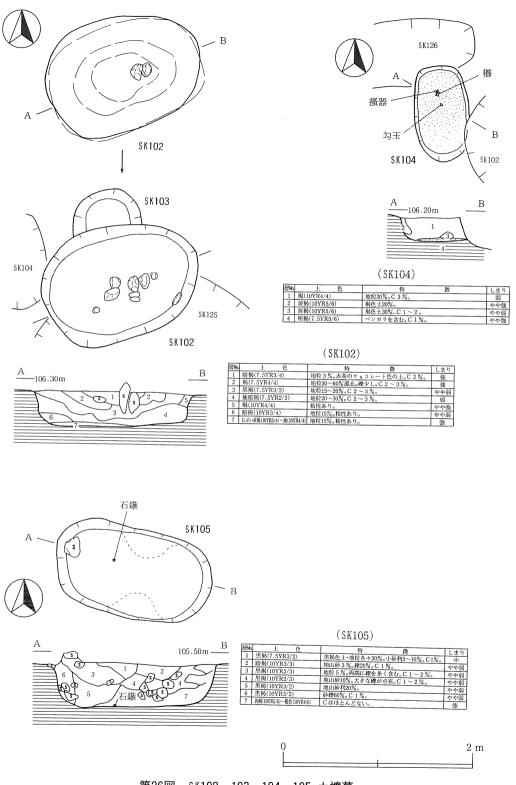
SK104土壙墓(第26図、巻頭図版 6 、図版24)

南部東側LA28グリッドにある。本土壙墓の検出状況は、SK102土壙墓に記した通りであるが、この時点では、SK102の西側から北西方向に細長く延びる暗褐色土の範囲が本土壙墓の平面プランと考えていた。そこで、暗褐色土の長軸に沿う形で半截を開始したが、精査の結果、略南北方向に長軸線を持つやや小型の土壙墓と判明したものである。なお、本土壙墓は、北部でSK126土壙墓の一部を切っているが、SK126の埋土が地山土とほとんど違いがなかったため、本土壙墓確認時には、このことに気が付かなかった。本土壙墓南東部をSK102に切られている。

平面形は、長軸102cm、短軸59cmの整った楕円形で、長軸方向はN4°W、深さ26cmである。 底面及び壁面共に滑らかで、底面は平坦、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。

底面にはベンガラの散布が認められるが、擴南半の半截時には、南側のベンガラの色がうすかったこともあり気付かなかった。これに気付いたのは断面の土層注記の際である。ベンガラは底部北側には、比較的良好に残っていたことから、擴底面ほぼ全面に散布していた可能性が強いものの、やはり北側が色濃くあったものと考えられる。ベンガラの存在を知った後、残る北半の精査は十分配慮の上行った。その結果、擴中央やや北寄りの底面近くから勾玉、勾玉の北側7㎝から櫛、櫛の北から掻器が出土した。勾玉は、小孔側が南を、先端側が櫛の方向を向いていた。また、櫛は赤色漆塗りの竪櫛で、頭部が南を向きほぼ水平の状態であった。掻器は櫛の歯の西側にあり、刃部を南にしていた。

第1節 検出遺構とその出土遺物



第26図 SK102・103・104・105 土壙墓

埋土は、ベンガラの浸み込んだ4層を除けば、ほぼ1層のような状況である。

櫛(第32図②)は、赤色漆塗りの結歯式竪櫛である。歯は腐朽して残存せず、頭部の一部も欠損している。残っている頭部の長さは50mmである。頭部の形状は、角状突起や透かし風の部分があるなど複雑であるが、頭端部を上にして見ると、全体が人体の上半身に非常によく似ている。すなわち、上端の大きな突起が頭、その下が胸から両肩(手)、腹部を経て左右に大きく広がる腰である。頭の前後には瘤状の突起が2個、両肩に瘤状の小突起があり、手に相当する部分は二又に分かれた角状の突起がやや後方に反っている。腋の下から胸にかけては透かし風に抉れており、大きく広がる腰部へと続く。腰部端には瘤状の突起があり、この突起ともう一方の端にあると考えられる突起は隆帯で繋っている。突起の外には二又に分かれた角状の突起が付されている。歯は直径5mm前後の棒状と考えられ、全部で5~6本と推定されるが、腐朽が著しく詳しくはわからない。

勾玉(第30図17)は、翡翠製で長さ26.5mm、幅12mm、最大厚6.5mmである。全体の形状は、楕円形に近いが、わずかに屈曲している。搔器(第39図31)は、いわゆる母指状スクレイパーである。

SK105土壙墓(第26図、図版26)

中央部LB31グリッドにある。本土壙墓周辺に群集するSR51~58・60・61などの土器棺墓の精 香終了後、第V層地山砂礫層上面で検出した。北側0.2mにはSK70土壙墓がある。

平面形は、長軸170cm、短軸97cmの楕円形で、長軸方向はN77°W、深さ48cmである。

地山砂礫層を掘り込んでいるため、底面及び壁面共に大きめの砂礫の露出が多いものの、壁 はほぼ垂直で、底面も概ね平坦である。

埋土中には掘り上げた砂礫層をそのまま埋めもどしたような部分もある。特に断面図の4・6・7層がこれに当たり、擴中央部の南北壁際(平面図の点線部分)にも、地山砂礫層との区別が困難な状況で砂礫が存在した。礫は長径が15~20cmにも達するものもあるが、それらは河原石とは異なり、少し風化した亜角礫に近いものであった。また、西部には、擴プラン確認面よりも上に大きな亜角礫があり、何らかの意味を有するようにも考えられたが、埋土中の礫と同様に埋土に混在したものであると判断される。

壙底面中央部西寄りから、第39図32に示した石鏃が1点だけ出土した。黒曜石製のていねい に作られた石鏃である。先端が西壁側を向いていたというが、確実ではない。しかし、石鏃そ のものの形態及び石材・出土位置から考え、副葬遺物であったと考えられる。その他埋土中か らは、磨製石斧の刃部破片(第39図33)などが出土している。

SK106土壙墓(第27図、図版26・27)

南部中央南側LB27グリッドにある。LB27~LB28グリッドにかけて、第Ⅳ層下部~第Ⅴ層上面

の精査で、SK89・115等と共に検出した。検出時には、黒褐色土が東西に長い楕円形に分布しており、拳大の河原石も散見された。北側0.7mにSK115土壙墓がある。

平面形は長軸187cm、短軸94cmの隅丸長方形に近い楕円形で、長軸方向はN85°W、深さ47cmである。

底面近くで砂礫層を掘り込んでいるため、底面には砂礫が露出しているものの、平坦である。 壁はほぼ垂直に立ち上がる。東部〜北東部の壁際に、底面から壙中位の高さまで大小の円礫が 密集しており、この状況は少ないながらも北西部にも見られた。しかし、これらの礫は石を組 んで積み上げたという状況にはなく、間に入っている暗褐色土もかたくしめられた様子はない。 壁際の埋土の一形態と考えられる。また、南壁中央底面に地山の堀り残し、もしくは地山土を そのまま置いたような部分がある。同様な例はSK105にも見られた。

埋土中には、最下層の7層を除いて拳大前後の円礫が多く混在している。7層中には地山土等はほとんど含まない褐色土だけの層である。埋土上部を中心に6点の土器片が出土している。その中には、晩期の深鉢形土器破片の他に、中期末葉の土器細片も含んでいる。この中期末葉の土器片(第34図32)は、本土壙墓の北西側0.6~1mに土器埋設炉のある中期末葉の竪穴住居跡S197に由来するものと考えられる。また、晩期深鉢形土器のうち2点が、SK115土壙墓内出土深鉢形土器(第33図10)の破片であることがわかった。その他、埋土中から剝片・チップが36点出土している。

SK108土壙墓(第27図、図版27)

南部南側LA26・27グリッドにまたがっている。この部分の第Ⅳ層面での精査中、不整楕円形状に褐色土の分布が見られ、数個の小礫も散在していたことから、本土壙墓を検出した。しかし、この時点では明瞭なプランは不明で、半截して規模・形態を確認した。西側1.6mにSK98、北東側1.7mにSK113土壙墓がある。

平面形は長軸129cm、短軸72cmの楕円形で、長軸方向はN36°W、深さ17cmである。

壙長軸線の北西側確認面で狭い範囲ながらベンガラの散布が認められた。色調が非常にらす く痕跡程度であった。ベンガラの東側には、長さ18cmの角柱状礫が横たわっていた。

底面及び壁面は滑らかで底面は概ね平坦であるが、壁面は北西壁が緩やかな傾斜となっている。埋土中からは、土器片1点の他、茎にアスファルトが付着した石鏃(第39図34)が出土している。土器片は、本土壙墓の南側にある\$I100竪穴住居跡の土器埋設炉のうちの埋設土器Aに接合した。

SK109土壙墓(第24図、図版22)

南部中央LB28グリッドにある。SK92土壙墓と同時に検出した。

SK92土壙墓に西側を切られ、全体の規模・形状は不明である。深さは22cmである。

底面は東側でわずかに傾斜するものの、平坦でよくしまっており、壁もほぼ垂直に立ち上がる。埋土中からは磨製石斧の刃部破片(第39図35)の他、剝片・チップが少々出土した。

\$K112土壙墓(第27図、図版27)

南部やや東側のLA28・29グリッドにある。検出状況はSK102土壙墓の項の通りである。東側でSK125土壙墓を切っており、北東側0.3mにSK102、北側0.3mにSK104土壙墓がある。 平面形は、長軸147cm、短軸86cmの楕円形で、長軸方向はN81°E、深さは32cmである。

底面及び壁面は非常に滑らかで、底面は平坦である。ただ、壁のうち、南東部が若干外に膨らんでおり、この部分の壁面が他所に比べてやや緩い傾斜となっている。

確認面から埋土上部の壙中央部に数個の円礫が散在していたが、特別な配列等は見られなかった。埋土は全般に褐色系で、2・5層に地山土粒子を多く含んでいる。埋土中からは剝片・チップが少々出土している。

SK113土壙墓(第27図、図版28)

南部東側LA27グリッドにある。SK125土壙墓の南側の第Ⅳ層~V層上面での精査では、明瞭に土壙墓だと色別できるような暗褐色土はほとんど見られなかった。このような中にあって、本土壙墓は、断面図2層の暗褐色土がわずかに認められ、その東側にシミ状の汚れが見えたので、これを半截して、最終的な規模・形状を確認したものである。

平面形は長軸181cm、短軸88cmの楕円形で、長軸方向はN74°W、深さは30cmである。

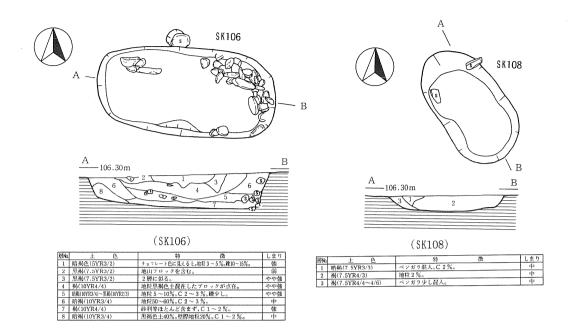
擴下部及び壁際には、地山土との区別が難しい部分があり、精査に時間を要したが、底面や壁は滑らかで、底面は平坦である。確認面から、第43図60の半円状扁平打製石器、6層上部から篦状石器(第40図36)・削器(第40図37)などが出土した。

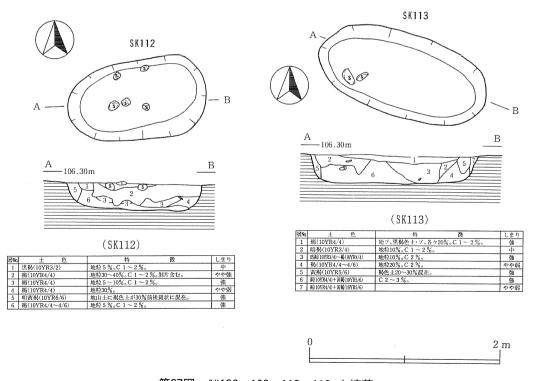
\$K115土壙墓(第23図、図版19・20・26・28・29)

南部南側LB27・28グリッドにある。第V層上面での精査中、SK89土壙墓の南側に接して、中央部に砂礫と黄褐色土のある楕円形プランが検出されたものである。本土壙墓北壁がわずかに SK89に切られ、南側0.7mにはSK106土壙墓がある。

平面形は、長軸148cm、短軸86cmの整った楕円形で、長軸方向はN75°W、深さ45cmである。本土壙墓は、深さの中位あたりから砂礫層を掘り込んでいるため、底面や壁面には砂礫が露出している。このため、底面の一部でわずかに凹凸が見られるものの、概ね平坦で、壁もほぼ垂直に立ち上がり良好である。

本土壙墓検出時に、SK89土壙墓と重複する部分に深鉢形土器の胴部断面が検出された。精査したところ、晩期の深鉢形土器(第33図10)が底部側を東に向けて斜めに押し潰されたような状態で出土した。しかし、土器底部のあった部分はかなり撹乱を受けたような状況にあり、底部の一部が約20cm南側の壙確認面につき刺さるような形で出土した。また、土器内部には、押し





第27図 5K106・108・112・113 土壙墓

潰された土器とは別の深鉢形土器(第33図11)の大きな破片が数枚、あたかも土器棺墓中に見られる別個体片による蓋のような状態で出土し、土器内面にはベンガラが付着していた。そして、土器10本体には、本土壙墓の南側にあるSK106土壙墓の確認面埋土中から出土した土器片が接合することも判明した。なお、この深鉢形土器の周囲には、明瞭な形での掘り方は見えなかった。このような状態で検出された深鉢形土器について、本来どのような形で本土壙墓と関わっていたものか、あるいは本土壙墓とは全く関係なく存在した遺構なのかについては、わからない。ここでは、可能性のあることとして、以下の2つのことを考えておきたい。①この深鉢形土器は土器棺墓で、SK115掘り込み前にSK115のプラン内にあったが、SK115構築と共にそっくり掘り上げられ、SK115に再び埋置された。②深鉢形土器は、土器棺墓的な目的を持って、検出された状況でSK115内に埋置された。

埋土中には、砂礫を含むものが多く、特に1・5層で目立っている。なお、5・7層は地山土が多く混在する層である。これは底部近くの南壁中央部にあるもので、SK106・105土壙墓などの例と似ている。埋土中からは、剝片・チップが30点余出土している。

\$K116土壙墓(第25図、図版23)

南部西側LD28グリッドにある。検出状況についてはSK96土壙墓の項のとおりである。北側でSK96を、南側でSK101土壙墓を切っている。

北側と南側で2つの土壙墓を切っていると見られるものの、確認面から壙底面まで浅く(11 cm)、平面形が長軸約100cm、短軸約80cmの円形に近い楕円形と推定されるが、正確な規模・形態は不明である。埋土中から遺物は出土していない。

\$K119土壙墓(第28図、図版29)

南部南側KT・LA26グリッドにまたがってある。この部分の第IV層上面精査中に細長い暗褐色 土の分布が認められたため、これを横断する形で截ち割り、全体の規模・形態を確認したもの である。

平面形は、長軸158cm、短軸82cmの整った楕円形で、長軸方向はN62°E、深さ28cmである。 壙底面が砂礫層上面に当たるため、わずかに砂礫がのぞいているものの、底面は平坦で、壁面もほぼ垂直である。埋土は、中央部~西側が暗褐色土であるのに対し、東側は褐~黄褐色で、 遺構検出時に見えていたのが西側の第1層である。埋土中からは前期前葉(第34図34)・中期後 ~末葉(第34図35・第35図36)の他、後期前葉と考えられる土器(第35図37)や、石錐(第40図38)・ 篦状石器(第40図39)などが出土している。

\$K120土壙墓(第28図、図版29)

南部南東端KT26グリッドにある。LA25グリッド北東隅部にあるSI100竪穴住居跡の土器埋設 炉の北東側部分が鍋底状に大きく窪んでいるところから、精査したところ第IV層中で本土壙墓 を検出したものである。南西側がわずかにSK121土壙墓に切られており、西側0.5mにはSR93土 器棺墓がある。

東側は段丘崖で調査不能のため、長軸の規模が不明である。長軸100cm以上、短軸75cmの楕円形を呈すると考えられ、この場合の長軸方向はN84°Eで、深さは20cmである。なお、未調査である本土壙墓の東側は、約30cmで崖面となる。このことから、横手川に面した崖面は、本土壙墓があった頃よりも西側に迫って来ていることになる。

底面には砂礫の露出が見られ、わずかではあるが西側から東側に傾斜している。壁面はほぼ 垂直に立ち上がる。埋土中からは抉入石器(第40図40)などが出土している。

\$K121土壙墓(第28図、図版30)

南部南東端KT25・26、LA25・26の4グリッドにまたがってある。本土壙墓西側に隣接するSI 100竪穴住居跡の土器埋設炉周辺の精査で検出した。当初、本土壙墓の確認面東部に広がる暗褐〜褐色土(土層断面図の2・3層)の範囲を土壙墓のプランと見ていたが、これに接して西側にある明黄褐色土の外側にも暗褐色土が巡ること、西側から広がってきたSI100の炉の焼土がその部分で急に途切れることから、最終的なプランを確認した。西端部でSI100の炉に伴う焼土を、北東隅部でSK120土壙墓を切り、南側0.4mにSR85土器棺墓がある。

平面形は長軸152cm、短軸67cmの楕円形で、長軸方向はN76°E、深さは56cmと、今次調査区内ではSK68土壙墓に次いで2番目に深い。

底面に砂礫が露出しているものの平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。埋土中からは中期末 ~後期後葉(第35図38~41)の土器の他、凹石(第43図61)などが出土している。

\$K122土壙墓(第28図、図版30)

南部南東側のLA27グリッド南東隅にある。この部分の第Ⅳ層面精査中から、若干の土の汚れ 状の部分は認めていたが、プランが不明であった。第Ⅴ層上面でベンガラが極くわずかに散布 していたことから確認したものである。南側0.2mにSR84土器棺墓がある。

ベンガラを含むシミ状部分を掘り下げたが、極く浅く、従って平面プランも確実なものではない。長軸方向で100cm以上はあったと考えられるが、他については不明である。

埋土中から中期後葉(第35図42)と、SK119出土土器(第35図37)と同一個体と考えられる土器 片や石錐(第40図41)などが出土している。

SK123土壙墓(第28図、図版30)

南部南東側KT27グリッドにある。ベンガラの分布はないもののSK122土壙墓と同様、第V層面での地山土のシミ状の汚れで確認した。しかし、SK122と同様、極めて浅く、西壁はほぼ図示した通りと思われるが、東側については確信を得ることができなかった。

埋土中から遺物は出土してない。

\$K125土壙墓(第29図、巻頭図版 6 、図版31)

南部東側LA27・28グリッドにある。西側と北側をSK112・SK102土壙墓に、東側の一部をSR83 土器棺墓によって切られている。

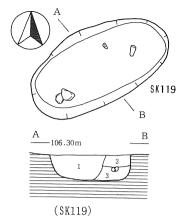
この部分の第 V 層面を精査し遺構検出に努めていたところ、SK102土壙墓の南側には、今次調査区内の他所では見られなかったような、他の混入土のほとんどない漆黒に近い黒色土(土層断面図の第 1 層)が直径 2 m前後で分布しており、前期の土器片が数点散在していた。そして、この黒色土部分を 2 基の土壙墓SK102とSK112が切っていることも明瞭であった。この時点でこの黒色土下には、晩期と考えられるSK102などよりは明らかに時期の古い遺構一具体的には、前期頃の小さな竪穴住居跡などーが存在するものと予想していた。この予想は、SK102の完掘底面に赤褐色土が見えた時や、本遺構の半截を進めていて同様の土が現れたときにも、それを竪穴住居跡の炉の焼土と見ることで変わらなかった。しかし、面的な精査に入った段階で、この焼土とする赤褐色土には、通常焼土面に見られる堅くブロック状になった部分が存在しないこと、赤褐色土中に混在している礫にもこの色が付着していることなどから、これは焼土ではなく、非常に色濃く、厚く、広く残ったベンガラであることに気付き、この遺構が土壙墓であるとの結論に達した。

しかし、黒色土をベンガラが検出される面まで掘り下げても、黒色土中には、地山土粒子等の混入土は皆無に近く、この黒色土が他の晩期と考えられる土壙墓のように人為的に埋めもどされた土とするには疑問が多かった。また、黒色土の外周には、ほとんど地山土と変わらない明黄褐色土があって正確な壁面の検出を困難にしたが、この明黄褐色土中には、本土壙墓の壁面レベルではほとんど存在しない大きな礫が混在していることなどから、大礫を含む砂礫土を壁際に埋めもどしていることも明らかとなった。

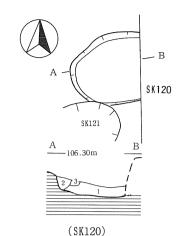
本土壙墓の平面形は、西・北・東部の一部をSK114・102、SR83によって切られているため正確な数値ではないが、長軸250cm、短軸215cmの円形に近い楕円形で、この場合の長軸方向はN85° E 前後である。深さは42cmである。

擴底面には、南北約180cm、東西約120cmの範囲でベンガラが散布しており、広い範囲のベンガラの散布には、色の濃い部分とうすい部分とがある。濃い部分は長径80~95cm、短径45~50 cmの楕円形を呈しており、これが南北に3列連なっている(北側からA・B・Cとする)。Aは長軸95cm×短軸50cm、Bは長軸95cm×短軸47cm、Cが長軸82cm×短軸45cmで、BとCは接している。各々の長軸方向は、AがN64°W、BがN65°W、CがN86°Wである。また、底面から、長径が10~25cmで厚さ3~4 cmの扁平な円礫が、部分的にではあるが、礫の上下面が揃ってあたかも敷かれたような状態で検出された。これらの円礫の上・下面はほぼ水平で、ベンガラ層の中にあった(図示した底面の礫のうち、S1とS2は扁平ではなく、径10cm前後の丸い石で、

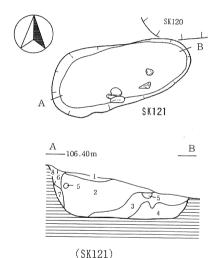
第1節 検出遺構とその出土遺物



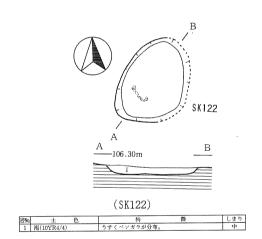
層No	土 色	特 微	しまり
1	暗褐(10YR3/4~4/4)	地粒 8 %。小礫 3 %混在。C 8 %。	かや強
2	揚(10YR4/4)	地粒7~10%。C 2%。	中
3	黄褐(10YR5/6)	地粒15%。	142

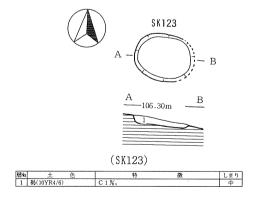


層Ma	土 色	特	微	しまり
1	黄褐(10YR5/6)	C20%		中
2	祸(10YR4/4)	黄褐色土粒子10%。C 3%。		4
3	税(10YR4/6)	カクラン。		



(UNIDI)			
ΜNα	土 色	特 徵	しまり
1	明黃楊(10YR6/8)	暗褐色土粒子 3%。C 1%。	中
2	赔祸(10YR3/3~3/4)	褐色土ブ5%。C 5%。	中
3	楊(10YR4/4)	地粒 3 %。C 2 %。	中
4	揚(10YR4/6)		
5	極暗赤褐(5YR2/3)	S1100の焼土が混入。	17
6	明黄褐(10YR6/8)+暗褐(10YR3/3)		中
7	暗褐(10YR3/3)	褐色~明黄褐色上10彩混入。	やや弱
8	極暗赤褐(5YR2/3)	\$1100の焼土が多く配入。	







第28図 \$K119 · 120 · 121 · 122 · 123 土壙墓

壙底面からは10cmほど浮いており、ここで述べている扁平な円礫群ではない)。この円礫群とベンガラとの関係は、検出時には3ヶ所のベンガラの濃い部分A・B・Cを区画する施設的なものとも考えられたが、全体の配列からすれば、そうとも言えない。現在のところ不明であるが、少なくともベンガラのあり方と強い関係を持つ一連のものと考えられる。

擴底面から土器は出土していないが、ベンガラの濃い部分Bの図で示した位置から2個の石 鏃が出土した。両者共に水平を保ち、出土面は扁平な円礫群の下面レベルとほぼ同じである。 石鏃1(第40図43)は先端側をほぼ東にし、石鏃2(第40図44)はそれを南西側に向けていた。ま た、ベンガラ中から、二次加熱を受けて黒色化し、基部側を欠損する石鏃が1点(第40図42)出 土している。

壙底面は一部に細かい砂礫層の露出が見られるものの、平坦でかたくしまっている。壁は、 ほぼ垂直に立ち上がる部分と斜めの部分とがあるがしっかりしている。

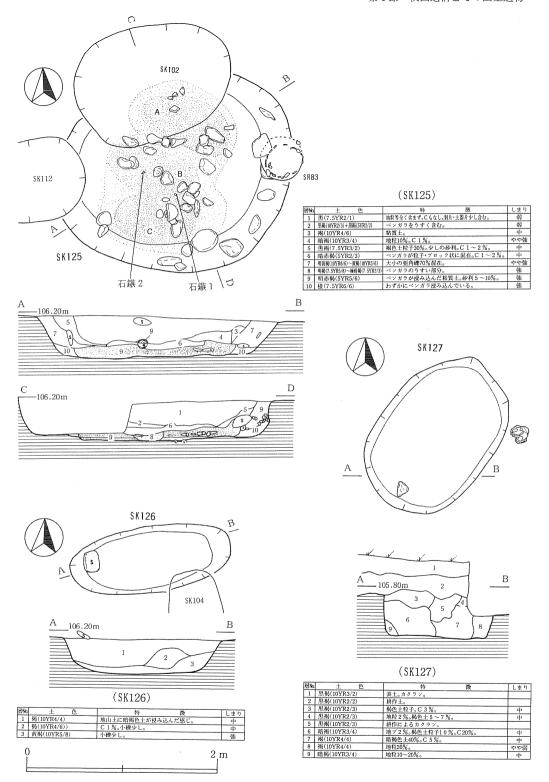
埋土は大きく3つに分かれる。1つは壙確認面から底面までの中央部にある黒色土(1層)で、軟らかく他の混入土のほとんどない土である。2・6層もこの土にベンガラが浸み込んだものである。2つめは壁際に厚く見られる層で、地山粘質土中に大小の円礫・亜角礫を含む砂利が70%前後の割合で混じり、かたくしまっている(7・10層)。壙掘方壁際に裏込土として入れられた層であろう。3つめは底面のベンガラを含む粘質土層である。ややかたくしまっており、この層の上部ほどベンガラが濃く、実際の壙底面のレベルを決定できなかった(底面は、扁平な円礫群の下面か、それより1㎝前後下と考えられる)。そして残りの層は、2つめの層群が崩れたりするなどして、1層などと混在したものである。

壙底面からは前述した石鏃以外に遺物は出土しなかった。壙確認面からは前期前葉(第35図 44)の土器片などが出土し、埋土中からは石匙(第40図45)・搔器(第41図46)・篦状石器(第41図 47)・削器(第41図48)などが出土している。なお、本土壙墓は、形態、埋土、底面から出土した石鏃の形態などから、前期の土壙墓であると考えられる。

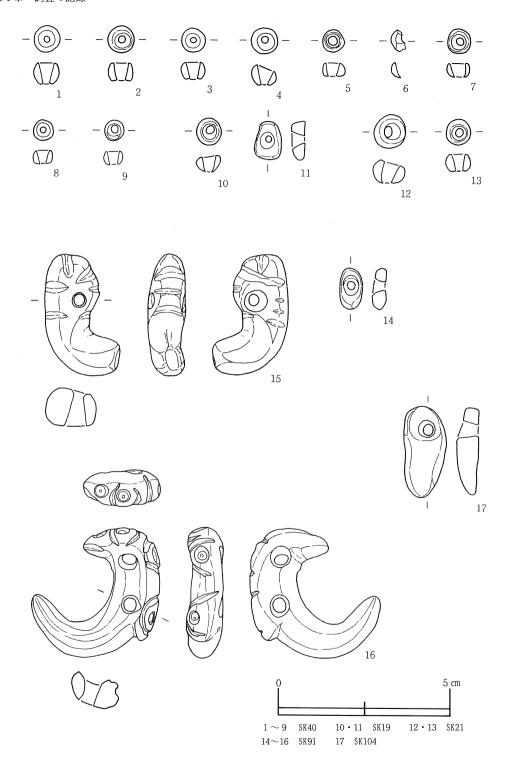
\$K126土壙墓(第29図、図版31)

南部中央LA28グリッド西部にある。この部分の第IV層面精査中に、斜めにつき刺さるような形で埋まっている扁平な砂岩の存在は認識しており、その周囲を幾度か精査して土坑の有無とそのプランを把握しようとしたが土色の違いは分からなかった。その後、砂岩の東側でSK104土壙墓を精査したところ、SK104の北端部で、SK104よりも古い遺構のあることがわかり、ここと砂岩を結ぶ部分を精査したが、やはり平面プランは捉えられなかった。このため、サブトレンチを入れ、土層断面の観察をして、ようやく全体の形状を捉えたものである。本土壙墓の西側0.6mにSK109、南西側0.4mにSK102土壙墓がある。

平面形は長軸167cm、短軸71cmの細長い楕円形で、長軸方向はN80°E、深さ44cmである。塘

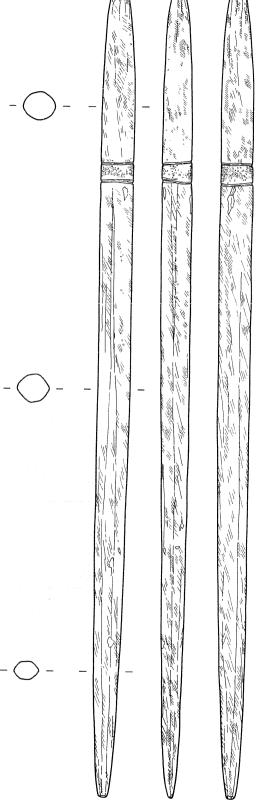


第29図 \$K125 · 126 · 127 土壙墓

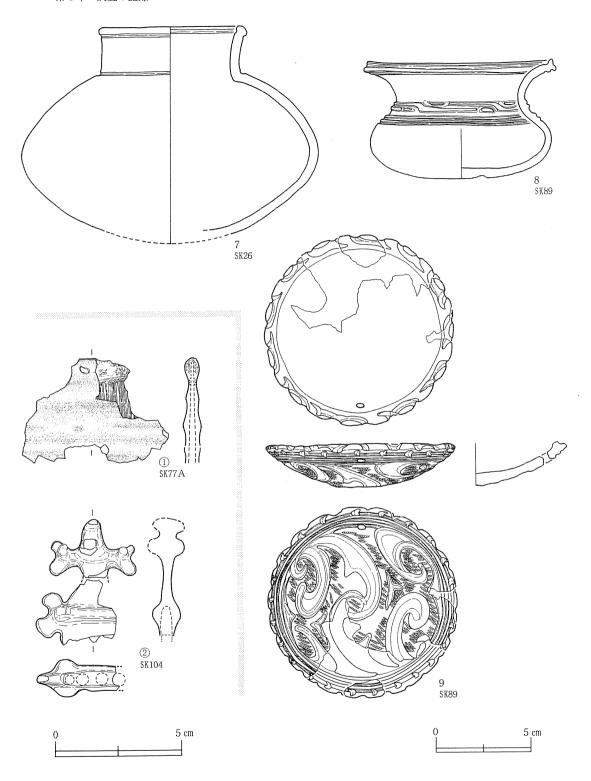


第30図 土壙墓出土小玉・勾玉・石製有孔垂飾品

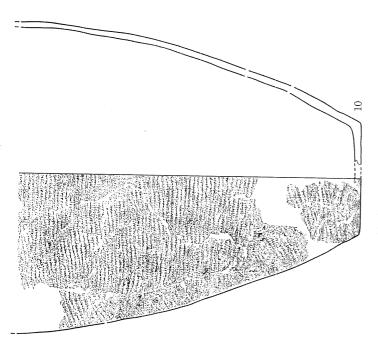
10cm

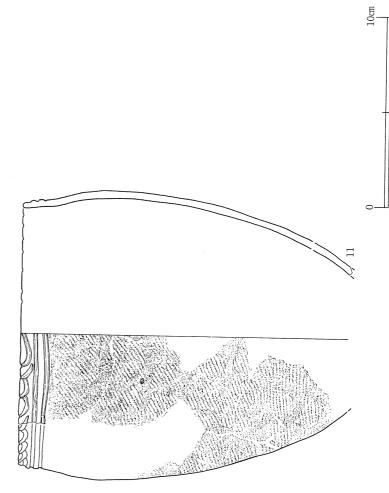


第31図 SK91 土壙墓出土石剣



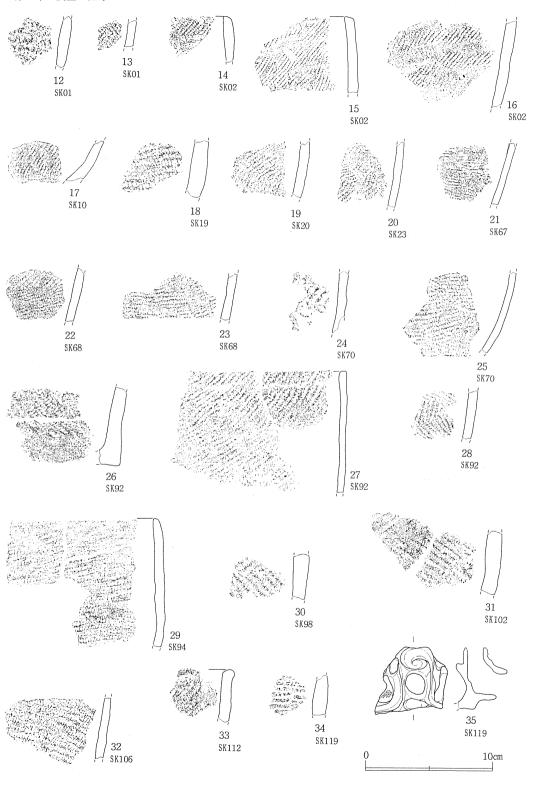
第32図 SK26·89 土壙墓出土土器、SK77A·104 土壙墓出土赤色漆塗り櫛



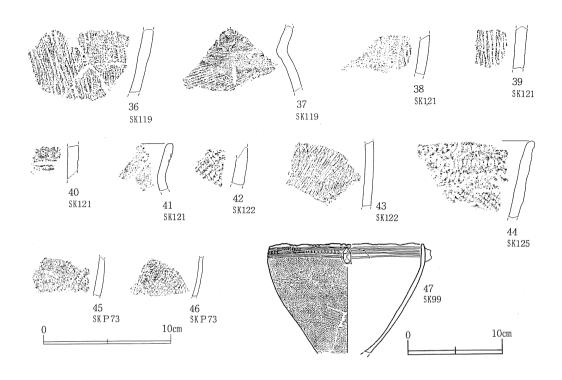


SK115 土壙墓出土土器

第33図



第34図 土壙墓出土土器(1)



第35図 土壙墓出土土器(2) SKP·SX 出土土器

確認面西壁寄りに、扁平な砂岩が斜めに埋まっている。砂岩の大きさは、22cm×15cm×4 cmで、埋まっている位置と状況から本土壙墓西端部に埋置したものと考えられる。

壙底面東側には、わずかに小砂礫の露出があるものの、底面は平坦である。壁は、南・北ではほぼ垂直に立ち上がるものの、東西ではやや傾斜が大きい。

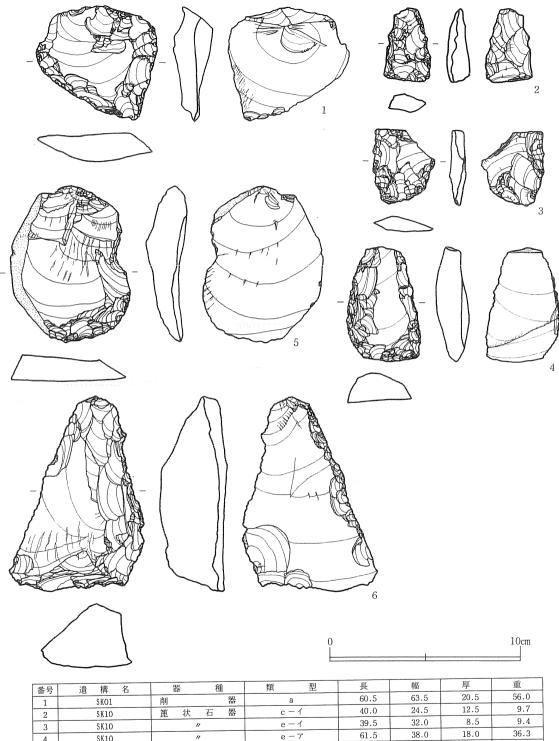
埋土は、地山土との差があまりはっきりしない褐色土で、これが、本土壙墓の検出を遅らせた。埋土中から角柱状礫(第43図62)などが出土しているが、遺物は少ない。

\$K127土壙墓(第29図、図版31)

中央南部LB30グリッドにある。本グリッド中にある $SR82 \cdot 74 \cdot 56$ 等の土器棺墓の調査終了後、第V層上面で確認した。東部でSR82とほぼ接しており、北側0.7m以上北には $SR54 \cdot 55 \cdot 56$ などの土器棺墓群がある。

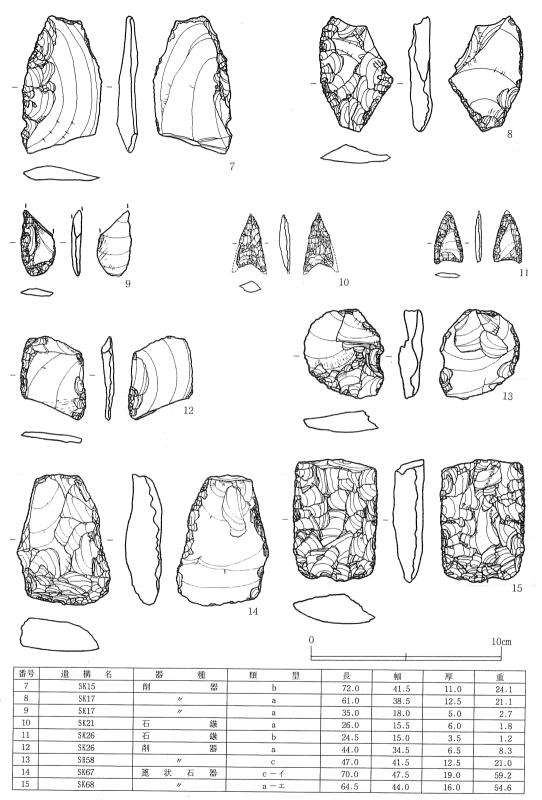
平面形は長軸176cm、短軸138cmの幅の広い楕円形で、長軸方向はN34°Eである。確認面からの深さは24cmであるが、たまたま本土壙墓南側を通る東西基本土層図によれば、上部が撹乱されていて掘り込み面は不明であるものの、少なくとも深さ40cmはあったことがわかる。

底面には、粘質土に混じってわずかに礫の露出があるものの平坦で、壁はほぼ垂直である。

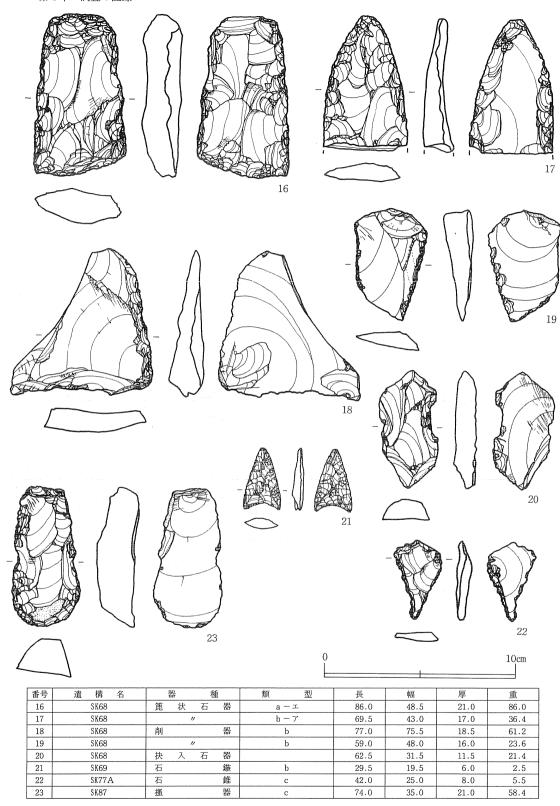


4 SK10 64.0 21.5 77.0 81.5 器 搔 5 SK10 35.5 195.1 71.0 103.0 쁆 d - ア SK15 状 石 6

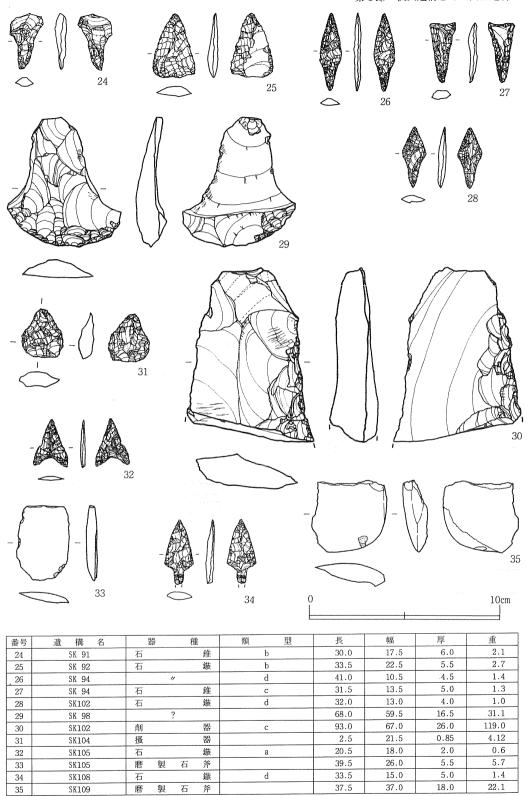
遺構内出土石器(1) 第36図 SK01 · 10 · 15



第37図 遺構内出土石器(2) SK15·17·21·26·67·68 SR58



第38図 遺構内出土石器(3) SK68·69·77A·87



第39図 遺構内出土石器(4) SK91・92・94・98・102・104・105・108・109

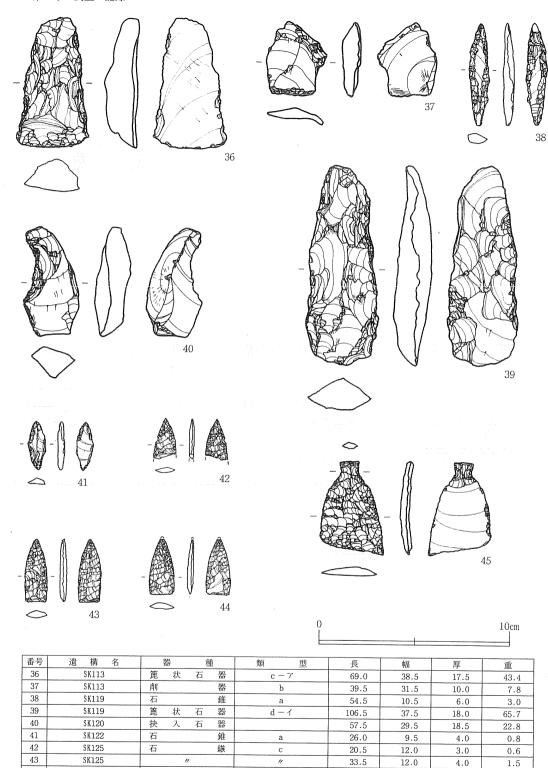
44

45

SK125

SK125

石



第40図 遺構内出土石器(5) SK113·119·120·122·125

"

匙

33.5

49.5

12.0

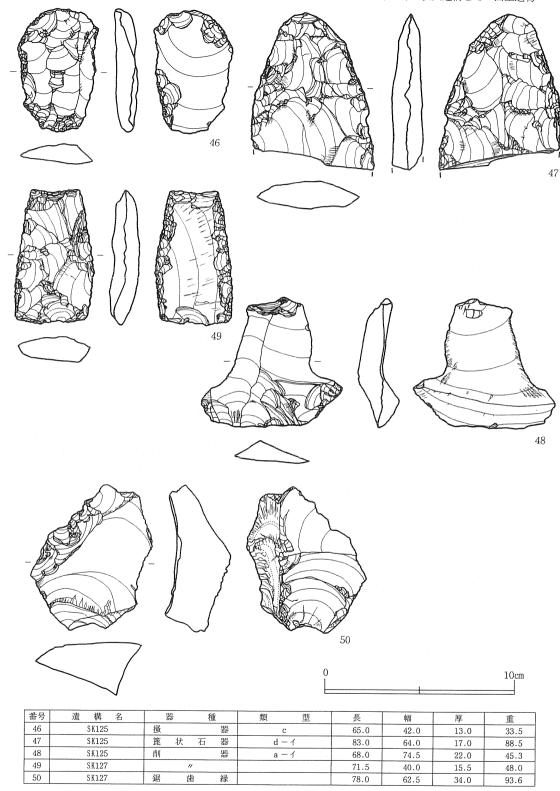
33.0

4.5

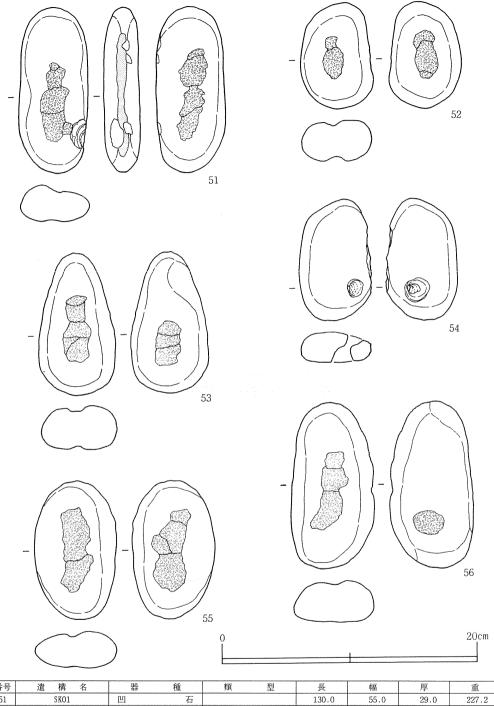
1.1

7.4

第1節 検出遺構とその出土遺物

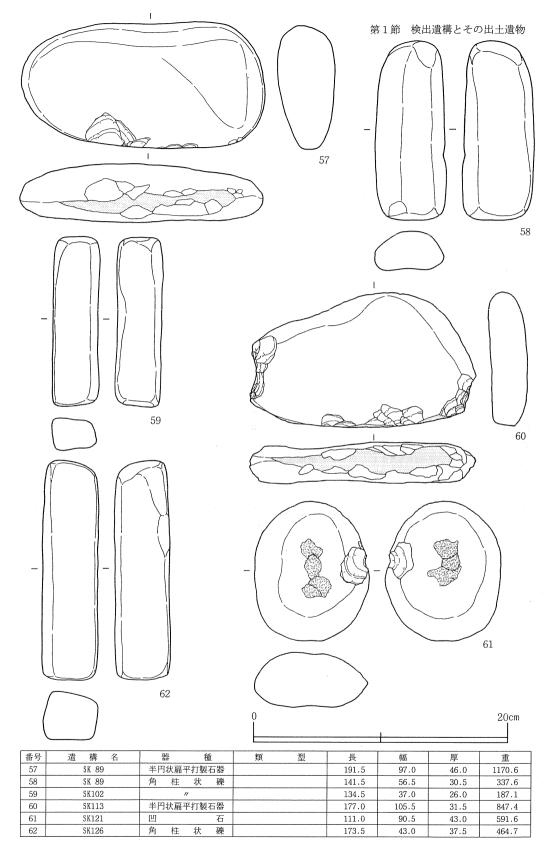


第41図 遺構内出土石器(6) SK125·127

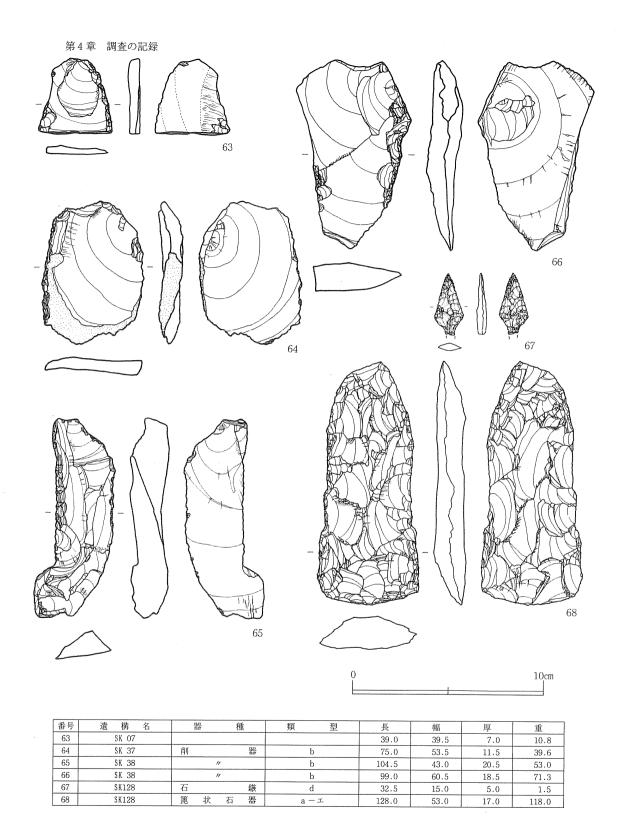


番号	遺構名	器種	類 型	長	幅	厚	重
51	SKO1	凹 石		130.0	55.0	29.0	227.2
52	SK10	, "		84.0	58.0	32.0	176.9
53	SK15	"		112.0	61.0	34.0	275.7
54	SK17	有 孔 石 製 品		96.0	56.0	24.0	129.6
55	SK68	凹 石		109.5	65.0	29.5	203.8
56	SK78	"		132.5	66.0	33.5	401.1

第42図 遺構内出土石器(7) \$K01 · 10 · 15 · 17 · 68 · 78

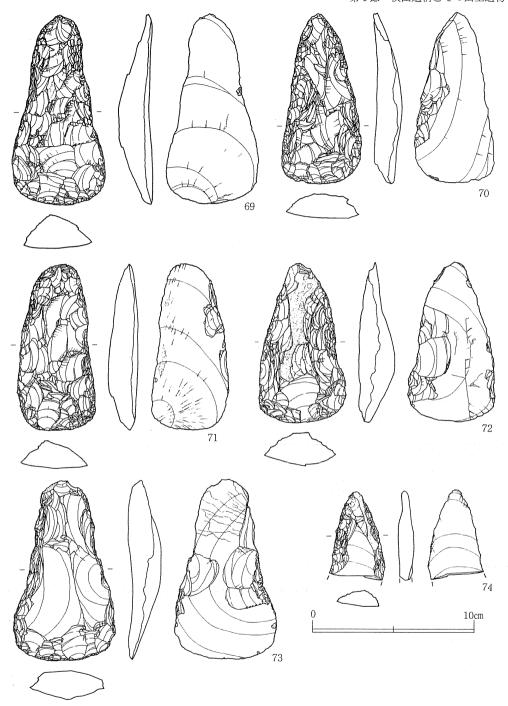


第43図 遺構内出土石器(8) SK89·102·113·121·126



第44図 遺構内出土石器(9) SK07·37·38·128

第1節 検出遺構とその出土遺物



番号	遺構名	器種	類 型	長	幅	厚	重
69	SX39	篦 状 石 器	d - ア	111.8	57.5	21.5	106.1
70	S X 3 9	"	b - ア	106.0	48.5	17.0	76.4
71	SX39	"	d − ア	103.5	48.0	19.0	88.6
72	SX39	"	b - ア	99.0	54.0	22.0	94.1
73	SX39	"	d − ア	111.2	63.5	20.5	100.4
74	SX39	"	b - ア				

第45図 遺構内出土石器(10) \$X39

土層断面図のうち、3~9層が本土壙墓の埋土である。各層に地山土粒子が数%~20%混在 しているが、中央上部での地山土の集中は見られない。

埋土中からは鋸歯縁石器(第41図50)などが出土している。

3 土器棺墓

縄文時代の生活面から小規模な土坑様の穴(掘り方)を掘り、その中に深鉢形土器を埋設した遺構が33基検出された。土器は埋設状況の詳細が不明な1~2基を除いて、正位の状態で埋設されており、斜位や逆位のものはない。このような遺構の大部分は、掘り方と1個の埋設された土器だけからなるものであるが、正立する土器に別個体の深鉢形土器を逆さに蓋にしたものや、大きく扁平な河原石を上にのせたもの、別個体の土器の大破片が土器内に数枚入っているもの、埋土中にベンガラの分散があるものなどがある。埋設された土器は例外なく、内外面に煤状炭化物が付着し、胴下部に強い二次加熱を受けているものであり、日常生活で煮沸用として用いられていたと考えられている口径30~35cm、器高30~45cmの粗製深鉢形土器である。

このような遺構は、本遺跡に隣接する虫内 I・II、小田 IV 遺跡や秋田県内はもとより、疎密の差はあれ、東北地方縄文時代後期後半〜晩期に広く見られ、岩手県内の例などでは、土器内から新生児骨なども検出されている。本遺跡や前記 3 遺跡では土器内から人骨は検出されていないものの、これらの遺構が土壙墓等と共に墓域を形成しているものと考えられる。そして、この遺構の土器が、主にヒトの遺体を埋納する施設(=棺)と考えられるところから、この遺構の各称を土器棺墓とする。

33基の土器棺墓は、調査区内のほぼ全域に分布し、その中の半数以上が2ヶ所に集中する。 集中する箇所は、中央部LB30グリッドを中心とする部分(7m×11mの範囲に17基)と、北部LA 34グリッド(2m×2mの範囲に4基)である。これらの土器棺墓の土器は、文様帯を持たない 粗製深鉢形土器を用いている例が大半であるため、詳細な時期の特定は難しいが、文様帯を持 つ例や土壙墓内から出土している土器などからすれば、縄文時代晩期前葉に属するものと考え られる。

北部東北KT34グリッド中央にある。表土除去後まもなくの第Ⅳ層上面で検出した。口縁部は 耕作によって既に失われたと考えられ、それ以下も木の根によって破壊を受けている。

径約35cmの円形掘り方に深鉢形土器を正位に埋設している。検出時の土器の直径は30cm、深さ22cmで、わずかに北東側に傾いている。棺内埋土は、1層と2層ではかたさ及びしまりが明らかに異なっており、1層は土器棺埋設後、ある程度の時間を経てから落ち込んだか流入したものと考えられる。

遺構番号	所在グリッド	検出時	土器棺規	模(cm)	類型	所属	话回来只	挿図ページ	図版番号	土岩	器 棺 規 模(cm)
退件併ち	別任クリット	上部径	下部径	高さ	類望	群	押凶番万	押囚ハーン	凶似街万	口径	器高	底 径
SRO3	KT34	30	10	22	a-1	A	46 • 54	95 · 118	図版32•49		(27.6)	10.1
SRO4	KT35	27	10	27	c-2	A	46 • 54	95 · 118	図版32•49	28.2	32.7	11.7
\$R06	KT35	25	12	22	a-1	A	46 • 54	95 · 118	図版33			8.6
SR12	LA34	32	11	48	b-2	А	46 • 55	95 • 119	巻頭8・図版33・49	35.2	42.6	10.4
SR13	LA34		8	33	a-1	A	47 • 54	99 • 118	図版34・49		(25.6)	10.7
SR14	LA34	33	9	27	a-1	A	47 • 54	99 • 118	図版34・49		(26.8)	10.3
SR16	LB33	32	12	31	a-1	А	47 · 56	99 • 120	巻頭9・図版35・49	30.3	32.1	10.0
SR18	LA34	33	9	37	a-1	A	46 • 56	95 · 120	巻頭8・図版33・50	31×28.5	42.9	8.5
SR24	LB33	30	7	20	a-1	В	47 • 56	99 • 120	図版35•50		(33)	10.4
SR35	LB35	30	7	43	С	Α	48 • 57	103 • 121	図版36•50	32.8×36	43.9	10.2
SR51	LB31	31	7	44	b-1	В	48 · 57	103 • 121	巻頭9・図版37・50	28.1	43.5	9.6
SR52	LA30	40	7	41	d-2	В	48 • 58	103 · 122	巻頭9・図版37・50	35.0	44.3	10.6
SR53	LA30					В	48 • 58	103 • 122	図版38•51	34.0	39.4	9.0
SR54	LB30	35	8	40	b-1	В	49 • 59	105 · 123	巻頭10・図版38・51	31.2	46.2	9.0
SR55	LB30	34	24	34	c-2	В	49 • 60	105 · 124	図版38•51	35.0	43.0	10.8
SR56	LB30		5	23	a-2	В	49 · 60	105 · 124	巻頭10・図版51		(25.0)	9.0
SR57	LB30	30	11	47	a-1	В	50 • 61	107 · 125	図版39•51	33.7×27.3	45.2	10.5
SR58	LB30	42	12	29	c-2	В	50 • 60	107 · 124	図版39•52		(34.0)	11.2
SR60	LB31		8			В	50 · 61	107 · 125	図版40・52		(20.0)	11.5
SR61	LB31	45	9	21		В	50 • 61	107 • 125	図版40•52		(25.4)	10.5
SR62	LC31	32	17	25		В	50 • 62	107 · 126	図版41•52		(31.6)	10.6
SR63	LC · LD31	21	9	11	a-1	В	51 · 62	111 • 126	図版41•52		(18.0)	8.1
SR74	LB30	27	11	23	b-3	В	51 · 62	111 • 126	巻頭10・図版41・52		(38.8)	10.6
SR75	LB31					В	51 • 62	111 • 126	図版42•52		(15.6)	10.5
SR80	LA29					С	51 · 63	111 • 127	図版42•52		(12.2)	10.5
SR81	LB30	19	9	13		В	51 • 63	111 • 127	図版42•52		(22.0)	9.3
SR82	LB30	17	10			В	52 • 63	115 • 127	図版43•52			10.5
SR83	LA28	38	15	31	c-1	С	52 · 63	115 • 127	図版43•52		(推定36~37)	8.7
SR84	LA26	33	11	17	a-1	D	52 • 64	115 • 128	図版44•53		(25.2)	12.4
SR85	KT25	35	7	25	a-1	D	52 • 64	115 • 128	図版44・53	30.5	(36.6)	11.3
SR86	LA30					С	53 • 63	117 • 127	図版45•53			9.0
SR88	LB28	24	11	13	a-1	С	53 • 64	117 • 128	図版45•53		(16.6)	10.1
SR93	KT·LA26		3			D	53 • 64	117 · 128	図版45•53			7.8

第4表 土器棺墓一覧

土器棺(第54図48)は、調査時には、図示した如く底部から上端まで連続している部分もあったが、全体に焼成不良な上、特に胴部下半が脆く、細片となっており、うまく復原できなかった。底径10.1cmで、胴部はやや内弯気味に立ち上がる。胴部には開端結節のLR縄文が施され、煤状炭化物が外面胴中央部には全面、内面胴下半部には帯状に付着している。

北部KT35グリッド北部の第Ⅳ層上面で検出した。土器の口縁部のうち半周ほどは耕作によって失われたと考えられ、器体も木の細根によりヒビ割れが多い。

平・断面図観察によっても全体の掘り方を捉えることができず、南側のみが断面でわかる程度である。南壁がほぼ垂直に掘られた、土器よりもさほど大きくない掘り方に、深鉢形土器を正位に埋設している。底部近くが南壁に接し、土器全体は北に傾いているが、底部の傾きは地形の傾きにほぼ沿っている。

埋土中には、大きいもので長さ数cmの砂礫が混在しているが、これは地山砂礫層を掘り上げ 土器棺上部の覆土としたものが流入した結果と考えられる。しかし、4層中には、地山砂礫が 混在しておらず、2・3層は土器埋設後に人為的に棺内に埋めもどされた土とは考えられない。

土器棺(第54図49)は、口径28.2cm、器高32.7cm、底径11.7cmで、直立する口縁部から胴下部に向かって緩やかにすぼまり、底部がわずかに直立気味となる。全面にLR縄文が施され、煤状炭化物が外面口縁部から胴中央部には全面、内面胴下半部には帯状に付着している。焼成は比較的良好である。

\$R06土器棺墓(第46図、図版33)

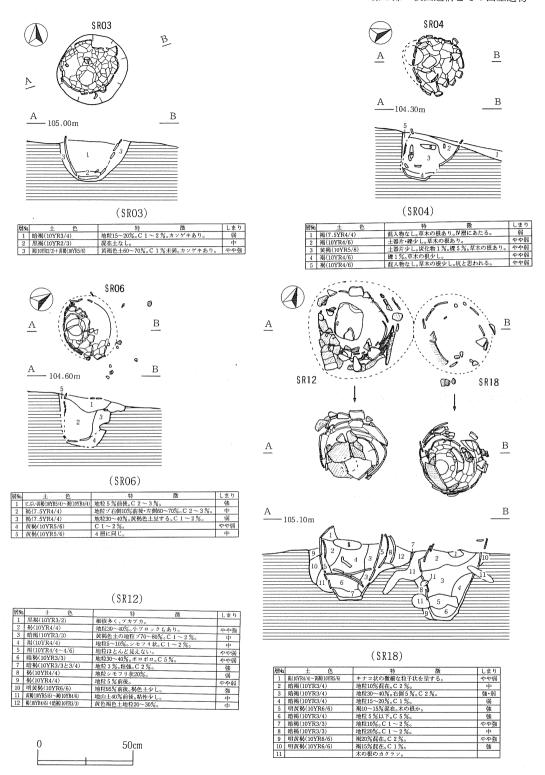
北部KT35グリッド南部の第Ⅳ層上面で検出された。東側でSK26土壙墓と隣接している。口縁部は耕作などで既に失われており、胴部上半の破片も細片となって周囲に散乱していた。また、検出面での土器の平面形は、東西が長く北側半周には残存しておらず、北側半分は底部近くまで検出されなかった。

掘り方を検出面では捉えることができず、断面によってわかった。これによると、上部で直径約30cm、下部で15cm、確認面からの深さ25cmの掘り方で、これに深鉢形土器をほぼ正位に南壁に沿わせる形で埋設している。土器底部は掘り方底面よりも1~4cm高い位置にある。土器内埋土は、上部がかたくしまっているものの、中~下部は地山土を多く含む割にはかたくない。

土器棺(第54図50)は、25cm以上の高さと考えられるが、もともとの焼成が悪い上、部分的に 残存しておらず、うまく復原できなかった。底径は8.6cmである。全面にLR縄文が施され、 煤状炭化物が外面にほぼ全面、内面胴下半~中位にかけて帯状に付着している。

SR12土器棺墓(第46図、巻頭図版 8 、図版33)

北部西側LA34グリッドの第Ⅲ層下部で、SR14・16・18土器棺墓とほぼ一緒に検出した。東側



第46図 \$R03 · 04 · 06 · 12 · 18 土器棺墓

0.2mにSR18が併立するように存在している。周辺には杉や雑木が多くあり、その根が随所に 残っており、本土器棺墓も木の根を除去しつつ検出したものである。

土器棺埋設のための掘り方は、特に下部では、地山土がそのまま埋めもどされたと考えられ、 検出面及びその下部でも平面的に捉えることができなかった。図示した点線は、断面及び埋設 された土器の検出状況から推定したものである。推定される掘り方は、直径50~55cmの円形で 中央で急に小さくなり(直径35cm前後)、下部に向かってすぼまるものであろう。掘り方底部は 断面観察でも明らかにできなかった。土器棺は、掘り方東壁に沿わせ正位に埋設している。

本土器棺の外周と内面から、土器棺本体とは別個体の土器片が多数検出され、それらの土器片を接合した結果、ほぼ完形1個体の深鉢形土器となった。この深鉢形土器は底部全部とその周囲わずかを欠くだけのもので、比較的大きな破片になるよう打ち割られている。外周には深鉢形土器分割によって縦方向に長く割られた破片を横位にして、器外面を外向きにして土器棺に二重に沿わせている。このような部分は、土器棺全周のうち東側を主とする5分の3周に及ぶ。内面では、上部にある破片は土器棺内面と内面どうしを合わせるような形で、下部の土器片は、器外面を上にして(一部内面を上にするものもある)側面観がブリッジ状になっている。また、内面上部ほぼ中央には、19cm×15cm×4 cmの扁平な河原石が水平を保って出土した。

棺内埋土は、内面下部にあるブリッジ状土器片の上下で異なり、各々はさらに2つに分かれる。上方は埋土全体のしまりが中〜強で、2・3層中には地山土が多く混在し、4層には少ない。下方は6層がしまりがやや弱なのに対し、7層は粘性があってしまり強である。また、6層中には地山土粒子がシモフリ状に30~40%含まれるのに対し、7層にはほとんど含まれていない。このような状況は、土器棺内の上・下方での埋土の入り方に時間差があったことを示しているものと考えられる。つまり、土器棺埋設直後は、土器棺内部には遺体の他に7層だけがあり、遺体の腐朽に伴い、土器棺上部に蓋状に置いた土器片とその上の覆土(扁平礫を含む)が徐々に下方に下がり、土器片が下部途中にブリッジ状にかかり、ブリッジ状土器片と7層との間の空白部に、ブリッジ上部の土が隙間から入り込んだものであろう。なお、土器棺と外周に立てられた土器片の間の埋土も、しまりのないポロポロした土である。この部分も埋設直後には空白であったと考えられる。

土器棺に用いられた土器(第55図54)は、口縁部がわずかに内弯気味に直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部は平底である。大きさは口径35.2cm、器高42.6cm、底径10.4cmである。口縁部上端から胴下部までLR縄文が横位回転施文されているが、胴上部の一部から胴下部では不定方向である。また、煤状炭化物が外面上端から胴中位まで全面と、内底面から2.5cm上から上方に幅10cmの帯状に付着している。焼成は良好で、胎土中には海綿状骨針を含んでいる。土器棺外周と内面から出土して1個体に接合した土器(第55図55)は、口縁部が弱く外傾

し、胴上部から胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部を欠損している。口径32cm、器高45.6cmで、底径は約10cmと考えられる。平口縁に低いB突起が器周4個付されると考えられる。口縁部は無文で、胴部には開端部結節のLR縄文が施されている。また、くびれ部分の無文部と縄文部との境には細く浅い沈線が1条、形ばかりに引かれている。内外面には煤状炭化物が付着し、胎土中には海綿状骨針を多量に含む。

\$R13土器棺墓(第47図、図版34)

北部LA34グリッド第Ⅲ層下面で一部を検出し、第Ⅳ層上面で全体を確認した。本土器棺墓の上には、腐朽の進んだ杉の切り株があり、これが土器棺東側を覆っていた。このため、土器棺上部と東側が著しく撹乱を受けていた。南側0.7mにSR12、北側2.7mにSR35土器棺墓がある。

掘り方は、撹乱や木の根などで平面形を捉えることはできなかったが、断面観察から、直径 45cm前後の円形で、底面に向かってすぼまるものと考えられる。土器棺は、掘り方中央に正位に埋設されており、土器底部が掘り方底面にほぼ接っしている。なお、図に示したスクリントーン部分は、前述の杉の根の部分である。この根は、土器棺の東部内側に入り込んだ後肥厚し、土器棺の一部を本体から切り離す形でその部分の土器を東側に 5~6 cmほど寄せている。木の根などによる撹乱の現場証拠の1例である。棺内埋土は、上部に地山土粒子を10%前後含むやや軟らかい土があるのに対し、最下部には地山土粒子をわずかにしか含まないかたくしまった土が入っている。掘り方埋土は、地山土と大差のない土で、地山土との層界は明瞭でない。

検出時の土器棺高は33cmほどであるが、木の根の撹乱等により、うまく接合せず、高さ25.6 cmまでしか復原できなかった。また、土器棺(第54図51)は検出時にも北西側に少し広がる形であったが、復原後もそのようにいびつになった。この土器本来がこのような形であったのかもしれない。土器棺は、口縁部が直立かわずかに内弯し、胴下部に向かってすぼむ器形と考えられる。底径10.7cmで平底である。胴部全面にはLR縄文が施され、煤状炭化物が胴外面中位以上は全面と内面下部に付着している。

\$R14土器棺墓(第47図、図版34)

北部LA34グリッド第Ⅳ層上面で検出した。上部は既に失われていた。西側0.5mにSR13土器 棺墓、北西側0.2mにSR42土壙墓がある。

掘り方は、掘り方と思われる部分が木の根の撹乱や埋土が地山と大差のないもので判然とせず、上面で捉えることはできなかった。土器棺は、断面観察によれば、直径40cm前後の円形掘り方内に正位に埋設されたと考えられる。底部は掘り方底面に接している。棺内埋土は、2層が地山土粒子・ブロックを多く含むのに対し、底面直上の4層はそれがわずかで、色調も異なっている。

土器棺(第54図52)は、口縁部が直立し、胴下部に向って緩やかにすぼまり、底部でわずかに

直立する器形と考えられる。底径10.3cmである。胴部にはLR縄文が全面に施され、外面胴部下半、内面底面を除くほぼ全面に煤状炭化物が付着している。なお、棺内埋土上部から第54図53の土器片が出土している。口唇部に小さなB突起、口縁部に3条の沈線、胴部にLR縄文が施された深鉢形土器口縁部である。

\$R16土器棺墓(第47図、巻頭図版 9 、図版35)

・北部西側LB33グリッドの第Ⅳ層上面で検出された。ほんの一部木の根の撹乱によって口縁部が失われているものの、完全な形で検出された例である。南側1.6mにSR46土壙墓、北東側2.2mにSR12土器棺墓がある。

土器棺は、一部が北東側に張り出す直径40~45cmの円形の堀り方の南壁に沿う形で、正位に埋設されている。掘り方は、中位から砂礫層を掘り込んでいる。棺内埋土は、上部に小砂利が少量混在するのに対し、下部では全く含まずかたくしまっている。掘り方埋土はそれほどかたくしまってはいない。

土器棺(第56図56)は、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまり、底部がわずかに直立する。口径30.3cm、器高32.1cm、底径10.0cmで、無文である。外面胴部下半~底部にかけては縦位の、外面胴中部以上と内面は横位のケズリ痕が見えている。また、底部の直立部は横位のユビナデ痕が残っている。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面と、内面上半には片側、内面下部には10~12cm幅の帯状に付着している。胴上部に1対の補修孔がある。

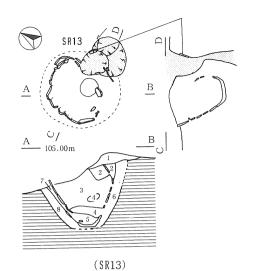
\$R18土器棺墓(第46図、巻頭図版8、図版33)

北部LA34グリッドの第V層上面で検出した。西側0.2mにあるSR12土器棺墓の平面形を知るため周囲を精査していたところ、SR12の土器棺上端よりも約5 cm下のレベルで本土器棺墓の上端が見つかった。東側0.7mにはSK02土壙墓がある。

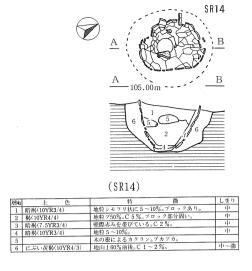
掘り方は上面では捉えることができなかった。断面観察によれば、土器棺は直径約40cmの円形掘り方の東壁に沿う形で正位に埋設されている。土器棺はわずかに東側に傾いているがほぼ垂直である。また、土器棺の南~西側口縁部が内側に倒れるように若干傾いている。棺内埋土は、上部1・2層が地山土の混在が少なく、中部の3・4・5層では地山土が多く、かたくしまっている部分と軟らかい部分があり、最下部は地山土がわずかしか混在せず、木炭がやや多く、かたくしまっている。掘り方内は木の根による撹乱が著しいが、下部ほどかたくしまっている。

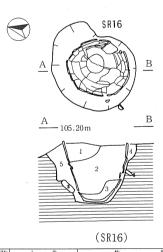
土器棺(第56図57)は、口縁部が心もち内弯し、膨らみの少ない胴上部からわずかずつすぼみながら胴下部に至り、底部が若干直立気味となる。口径は、長い部分で31cm、短い部分で28.5 cmとややいびつである。器高42.9cm、底径8.5cmで、器高の割に口径が小さい砲弾形を呈する。底部下端を除く全面にLR縄文が横位回転施文されるが、特に中位以下では不定方向の部分も

第1節 検出遺構とその出土遺物

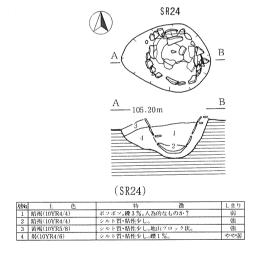


MNo	上 色	特 微	しまり
1	黒楊(7.5YR2/2)	第Ⅲ層が根の周辺で変色したもの?	強
2	暗祸(7.5YR3/4)	地粒シモフリ状に5~10%含む。C1%未満。	やや強
3	楊(10YR4/4)	地粒シモフリ状に10%含む。	99
4	明黄楊(10YR6/6)	木の根のカクラン。	やや強
5	枞(10YR4/4)	地粒3~5%。C 3%。	強
6	资務(10YR5/6)	褐色 ±20~30%。C 2~3%。	やや強
7	粉(7.5YR)	地粒20%前後。C 2 %。	цh
8	W#M(10VD5/6)	場6 1-30~40% 占7c	わめ曲





MNa	土 色	特 遊	しまり
1	粉(10YR4/4)	地粒20~30%。C 3 %。	強
2	楊(10YR4/4)+黄褐(10YR5/6)	地山土80~90%。カンゲキあり。C 2 %前後。	やや強
3	にぶい黄褐(10YR5/4)	地粒に褐色土5~10%混入。C1~2%。	強
4	黄陽(10YR5/6)+黑楊(10YR2/3)	黄褐色土40%。C 1~2%。	142
5	掲(10YR4/4)+黄褐(10YR5/6)	地粒60%前後。カンゲキ少し。C 1~2%。	中





第47図 SR13·14·16·24 土器棺墓

ある。底部下端には横位のケズリ痕が残っている。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面と、 内面口縁部には半周、内面下部には幅10~13cmの帯状に付着している。焼成はやや不良で、胎 土には海綿状骨針を多く含んでいる。

\$R24土器棺墓(第47図、図版35)

中央北部LB33グリッド南側、第V層上面で検出した。この周辺は、畑の耕作による撹乱が第V層にまで及んでいる。本土器棺墓も全体のプラン確認面からは深さ20cmしか残存していなかったが、確認よりも数cm高い耕作土中で、同一個体のものと思われる破片が直径約1mの範囲に散乱していた。これらの土器片のドット図を作成し、さらに掘り下げ、上端が割れた土器棺墓を検出した。確認面は砂礫層上面である。

確認面での掘り方は、東西約45cm、南北約35cmの楕円形で、掘り方の中央東寄りに土器棺を正位に埋設している。棺内埋土の大半は、地山土粒子・ブロックが20~30%ほど混在する暗褐色土でしまりは弱いが、最下部は地山土が微細な粒子で混在するものの、かたくしまった暗褐色土である。

検出時の土器棺の高さは20cmであったが、周辺に散乱していた破片を接合したところ、33cm の高さまで復原できた。底径は10.4cmである。土器棺(第56図58)は胴中部以下が緩やかにすぼまり底部に至るもので、底部は心もち直立する。外面にはLR縄文が施され、外面胴中部以上には全面と、内面下部には幅約8cmの帯状に煤状炭化物が付着している。

\$R35土器棺墓(第48図、図版36)

北部北西側LB35グリット、第Ⅲ層下部~Ⅳ層上面で検出した。ごく緩く北西側に下降する傾斜面途中で、土器棺口縁部が斜面の傾斜に沿う形で現れ、土器棺内と縁辺には砂礫が集中していたものである。南西側2.7mには、SR13土器棺墓と、SK42土壙墓がある。

掘り方は、地山砂礫層を掘り込んでおり、上面径が75~80cmの不整円形、深さ43cmである。この土坑様の掘り方底部には平坦面がほとんどなく、断面形は深いボール状を呈する。土器棺は掘り方中央部に、やや斜めに埋設されている。土器棺の傾く方向は、斜面の傾斜に沿う形で、斜面上方側の棺身がやや内側に傾いている。棺内埋土は、上部1層中に多量の砂礫が混在しており、同じ層が土器棺の西側を除く全周に及んでいる。そしてこの砂礫層は土層断面図よりも上部では、土器棺口縁部を覆っていた。2・3層中にも砂礫が5~15%混在するが、3層下端のみには含まれていない。掘り方内埋土中にも小さな砂礫が含まれているが、1層中のような大きなものはなく、またその量も3~5%程度である。

土器棺(第57図59)は、口縁部が直立かわずかに内反し、胴下半部に向かって緩やかにすぼまり、底部が明瞭に屈曲して外に張り出す。口径は32.8cm×36cmとややいびつで器高43.9cm、底径10.2cmである。全面にRL縄文が施されるが、胴上部では横位回転、下部では縦位回転が多

く、中部では両者が混在している。口唇部は幅6mm前後で水平に面取りされており、底部外面と内面にユビナデ痕が残る。外面の底部を除く全面と内面の一部に煤状炭化物が付着している。また、二次加熱のためか全体が明黄褐色~橙色を呈し、脆くなっている。

中央部LB31グリッド南西隅の第III層中で検出した。本土器棺墓を含めた周辺は、畑の耕作による撹乱が著しい。その中で本土器棺墓はピット状の撹乱が少ししか及んでおらず、口縁部が一部残存したままで検出されたものである。北側に接してSKP59柱穴様ピットがあり、本土器棺墓を中心に半径4m以内にSR54などの土器棺墓が10基以上集中している。

掘り方は、平面形が上面径55cm以上、底面径30cmの略楕円形で、深さ50cmの柱穴状を呈する。 土器棺は掘り方中央に正位に埋設されている。底部は掘り方底面から4 cm浮いている。棺内埋土は、 $1\sim3$ 層まで同じような色調を呈するが、3 層は地山土粒子の混在がほとんどなく、ややかたくしまっており、 $1\cdot2$ 層とは異なっている。3 層上部から第57図 $61\sim63$ に示した3 枚の大型土器片が棺東側に上部がもたれかかるような形で検出され、その下から長さ10cm、幅4 cmの細長い礫が横位になって1 点出土した。3 枚の土器片は同一個体のものである。出土状況から、上方から徐々に移動したものと考えられる。また、掘り方北部の底面近くから、土器棺の口縁部が3 点の破片となって出土した。3 点は土器棺に接合する。棺埋設時に誤って破損してしまい、それが掘り方下部に落ちたものであろうか。

土器棺(第57図60)は、口縁部がわずかに外反もしくは直立し、膨らみの弱い胴上部から下部に向かって非常に緩やかにすぼまる。口径28.1cm、器高43.5cm、底径9.6cmで、口径の割に器高がある。口唇部には小突起が連続して、小波状口縁となっている。口縁部には上から、上部に截痕列を伴う1条の沈線があり、その下に上下を沈線で画した羊歯状文が巡っている。胴部には(一部下部まで)、付加条のLR縄文と、単節のLR縄文を不規則に横位〜縦位回転施文している。煤状炭化物が、外面には胴下部を除く全面と、内面下部には幅8~15cmの帯状に付着している。棺内から出土した3枚の土器は、口縁部が直立し胴下部に向かって緩やかにすぼまる深鉢形土器の口縁部と胴部の破片であるが、接合しない。

中央東部LA30グリッドの第III層相当面で検出した。南側では口縁部が整った形で検出されたが、北側口縁部は耕作によって既に失われていた。土器棺西部では3個の円礫が口縁部にかぶさっていた。写真撮影のため確認面をわずかに掘り下げて精査したところ、棺内中央から倒立していると考えられる土器底部が検出され、また、土器棺の口縁部が若干西側に傾いていることがわかった。北東側1mにSK68土壙墓、北西側1.3mにSR53土器棺墓がある。

掘り方は北側が判然としないが、径40~50cmの略円形で、ほぼ中央に土器棺が正位に埋設さ

れている。土器棺底部は掘り方底面に接し、胴部の東側がほぼ直立しているのに対し、西側が 外方に傾いている。土器棺の中央には、土器棺よりは1回り小さな蓋と考えられる深鉢形土器 がわずかに南に傾いて倒立している。土器棺の実際の口径が35cmなのに、検出面の東西径が38 cmと広がっている。

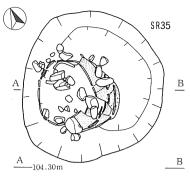
棺内埋土は、1・2・5・12層がほぼ本来の埋土で、蓋である倒立した深鉢形土器内部の埋土は、蓋が割れた後に上部から流入した土であると考えられる。12層の最下部には地山土粒子が混在せず、この部分だけかたくしまっている。掘り方埋土は、かたくしまっているものが多い。

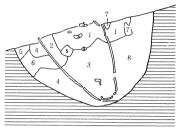
土器棺(第58図64)は、口縁部がわずかに内弯し、胴上部が少し膨らんで、胴下部に向かって緩やかにすぼまり、底部が直立気味となる。口径35.0cm、器高44.3cm、底径10.6cmで、ほんのわずか上げ底である。胴部全面にLR縄文が施されている。底部外面は磨滅のため調整痕がわからないが、内面上半は斜位のケズリ痕が明瞭である。煤状炭化物が、外面胴中部以上には全面、内面底部には幅5~6cmの帯状に付着している。焼成は良好で、胎土には海綿状骨針が多く含まれている。蓋として用いられた深鉢形土器(第58図65)は、口縁部がこころもち外反し、直立気味の胴上部~中部を経て、胴下部がやや急にすぼまり外傾する底部に至る。平底ではあるが、底面外縁の内側がリング状にわずかに窪んでいる。口径27.6cm、器高29.8cm、底径8.8cmである。底部を除く外面には、LR縄文とRL縄文が不定方向に施文されている。底部外面の調整痕は不明であるが、内面は全面に横位~斜位のケズリ痕が明瞭である。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面に厚く、内面下部には幅5~8cmの帯状に付着している。

SR53土器棺墓(第48図、図版38)

中央LA30グリッド北西側の第III層面精査中で検出した。しかし、この部分の畑の耕作による 撹乱は一部で第 V 層地山面まで達しており、本土器棺墓も、底部も埋設時の状態を保っている かどうか危ぶまれるほどであった。破片が周囲に散乱しており、その中に口縁部の一部があっ て接合した。掘り方などは全く不明である。底部は少し東側に傾いているものの、正位に埋設 された状態を保っているものと考えられる。西側1.5mに SR58土器棺墓、東側 1 mに SK68土壙 墓がある。

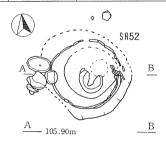
土器棺(第58図66)は、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部は底面外縁内側がリング状に窪む上げ底である。口縁部が少ししか残存していないため正確さにかけるが、口径34.0cm、器高39.4cm、底径9.0cmである。下端を除く胴部には開端部結節のLR縄文が横位回転施文されており、綾絡文が明瞭である。外面の縄文のうすいところには、縦位のケズリ痕、口縁部内面にはユビナデ痕が残っている。焼成は良好で、胎土には、海綿状骨針を多く含んでいる。

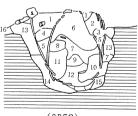




(SR35)

層No	土 色	特 数	しまり
1	祝(10YR4/6)	砂礫40~50%混在。C 1 %。	中
2	暗枞(10YR3/4)	砂礫5%混在。	中
3	褐(10YR4/4)	砂礫15%混在。	99
4	資料(10YR5/6)~料(10YR4/6)	砂礫20%混在。	中
5	暗枞(10YR3/3)	砂礫なし。基本層位のIII層か。	中
6	楊(10YR4/4)~楊(10YR4/6)	躁3%混在。	中
7	暗褐(10YR3/4)	木の根のカクラン。	
8	にぶい黄帯(10YR5/4)~構(10YR4/4)	小砂礫3~5%。C1%。	中

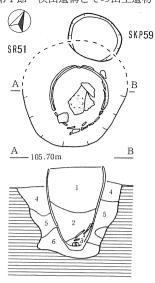




(SR52)

MIN	.Jt. E.	77 DX	しまり
1	黑褐(10YR3/2)	地粒シモフリ状20%。C 2 %。	やや弱
2	無褐(7.5YR2/2)	地粒シモフリ状 5 %。	99
3	明黄樹(10YR6/6)	黒褐色土10%配在。粘性あり。木の根によるカクラン。	強
4	明黄褐(10YR6/6)	木の根によるカクラン。	99
5	黒褐(7.5YR2/2)	地粒ほとんど含まず。	1 1
6	黑褐(7.5YR2/2~10YR2/3)	地粒シモフリ状20~30%。C 1~2%。	やや弱
7	祸(10YR4/4~4/6)	木の根によるカクラン。	弱
8	黒楊(10YR2/3)	木の根によるカクラン。	やや強
9	黑褐(10YR2/3)	木の根によるカクラン。	世や強
10	明黄褐(10Y6/6)	木の根によるカクラン。	やや強
11	黑褐(10YR2/3)	地粒50%。土器片少し。C 2~3%。	やや弱
12	暗棋(10YR3/3)~黒褐(10YR2/3)	地粒シモフリ状10~20%。下部地位なし。	やや強
13	黒褐(10YR3/2)	地粒30~40%。カンゲキあり。	強
14	楊(10YR4/4)	黒褐色土20%混在。粘性あり。C 2~3%。	強
15	陽(10YR4/4)	褐色土ブロック状30%。斑状混在。粘性少し。	強
16	黑褐(10YR2/3)	基本層位第Ⅲ層。	

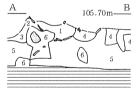
第1節 検出遺構とその出土遺物



(SR51)

層Na	±	<u>e</u>	特 微	しまり
	県褐(10YR2/		地粒シモフリ状20%。C 2 ~ 3 %。礫 2 ~ 3 %。	rta /
	県樹(10YR2/		地粒5~10%。C1~2%。礫5%。	rþ
	!祸(5YR2/4		地粒 5 %。カンゲキあり。	おやみ
	.褐(7.5YR3		地粒 5 %。C 2 %。	弱
	(7.5YR4/4		地粒,砂礫20%~30%。	th
6 期	·祸(7.5YR3	/4)	檗10%。	強





(SR53)

MiNa	土 色	特 微	しまり
T	暗褐(10YR3/3)	地粒10%。小砂利3%。棺内理土か。	強
2	里根(10YR2/3)~暗根(10YR3/3)	C 2~3%。	ф
3	暗視(10YR3/3)	基本層位の第Ⅲ層。	ф
4	黒褐(10Y R2/3)	地粒 5 %。畑の耕作によるカクラン。	
5	祝(10YR4/4)	基本層位の第Ⅳ層。	強
6	黒楊(10YR2/2)	木の根によるカクラン。	



第48図 SR35・51・52・53 土器棺墓、SKP59 柱穴様ピット

\$R54土器棺墓(第49図、巻頭図版10、図版38)

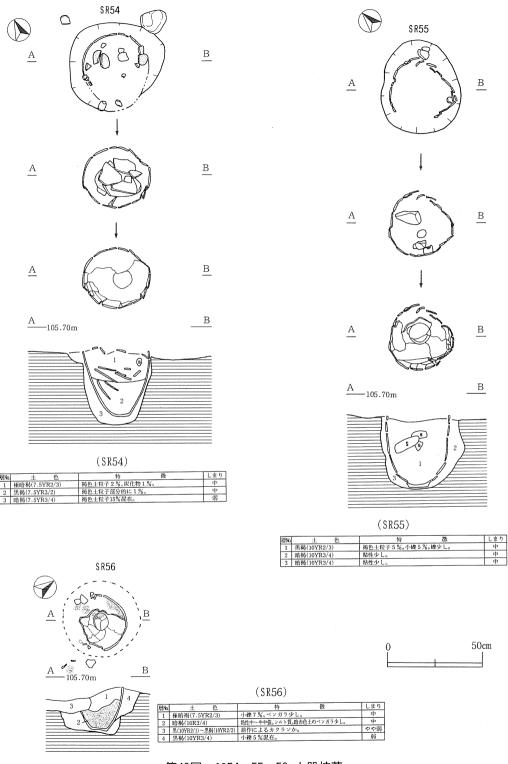
中央部LB30グリッド北西隅第Ⅲ層下部~第Ⅳ層面で検出した。周辺の精査で同一面からSR55・56・57・58・74土器棺墓を検出している。畑の耕作によって口縁部の大部分と南側上部が失われていた。

掘り方は、上面の直径が45~50cmの略円形で、そのほぼ中央に土器棺を正位に埋設している。 土器棺底部は、3 cmほど浮いているが、これは、この分だけ掘り方を埋めもどした後に埋設し たもののようである。検出面の土器棺内側と、棺内の中位から大小の土器片が多く検出された。 検出面の土器片は、土器棺の上部破片で、耕作によって散乱したものの一部と考えられるが、 棺内中位の土器は、土器棺本体とは異なる別個体の破片である。この別個体の破片は大きいも のでは、一辺が15cmにも達する。土器内面を上向きにしている破片が多く、数枚が重なってい る部分もある。棺内埋土は、1層よりも2層が緻密で混入物も少ない。掘り方埋土は軟らかい。 土器棺(第59図67)は、短い口縁部がわずかに外反し、胴上端が膨らみ、胴下部に向かって緩 やかにすぼまる。口径31.2cm、器高46.2cm、底径9.0cmである。口唇部は小突起が連続して小 波状口縁となっている。わずかしか残っていない口縁部には、上から截痕列を伴う1条の沈線 があり、その下に上下を沈線で画した羊歯状文がめぐっている。この文様構成は、SR51土器棺 とほぼ同じであるが、羊歯状文の描き方と、その下の沈線が本土器棺では2条であるところが 異なっている。胴部には、SR51と同様、付加条のLR縄文が横位回転施文(中部以下の一部で 不定方向)されている。底部外面には横位のケズリ痕が明瞭である。煤状炭化物が、外面胴上 部~中部にかけて付着しているが、内面には見られない。焼成は良好で、他の土器棺に用いら れた深鉢形土器に比べ、残存状態が比較的良い。棺内中位を中心に検出された土器は、1個体 の深鉢形土器の底部を除いたおよそ半周分と見られる(第59図68)。全体は接合しないものの、 口径約31.6cmで、40cm前後の高さのある土器と考えられる。口唇部には刻みがあって小波状口 縁をなす。短い口縁部が外反し、あまり膨らまない胴上部から、胴下部に向かって緩やかにす ぼまる器形である。口縁部は無文で(縄文部上端を磨り消している)、胴部にはLR縄文が施さ れている。煤状炭化物が外面胴部と内面下部に付着している。また胴上部には補修孔がある。

\$R55土器棺墓(第49図、図版38)

中央LB30グリッド北部第III層下部〜第IV層面で、SR54土器棺墓等と一緒に検出した。やはり 耕作によって上部が著しい撹乱を受け、口縁部は残存しなかった。西側0.6mにSR57土器棺墓 がある。

掘り方平面形は、40cm×50cmの不整な円形で、掘り方中央部に土器棺が正位に埋設されている。土器棺内からは、中位から長さ14cm、幅7cmの河原石とこれより小さな礫が数個ややかたまって出土した以外は遺物は出土していない。棺内埋土は黒褐色土の単層である。



第49図 SR54·55·56 土器棺墓

土器棺(第60図69)は、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩くすぼまる。底部外面が若干いびつであるが、部分的に短く直立する。口縁部上端を欠くが、口径約35cm、器高約43cm、底径10.8cmである。胴部にはLR縄文が横位回転施文されるが、一部不定方向となっている。外面中部以上と内面下部に煤状炭化物が付着している。内面の煤状炭化物は、幅約10cmの帯状に厚く付着している。

\$R56土器棺墓(第49図、巻頭図版10)

中央LB30グリッド中央部の第III層中で検出したが、畑の耕作による撹乱を著しく受けており (南側ほど著しい)、土器棺の上部は既に失われていた。\$R54・55・57土器棺墓と同時に検出され、その面で精査していたところ、本土器棺内と、約15cm離れた箇所で暗赤褐色のベンガラの散布が見られた。本遺跡の土器棺墓としては、唯一棺内からベンガラが検出された例である。北側0.5mには\$R55土器棺墓、南西側0.8mには\$K127土壙墓がある。

掘り方は、わずかに地山土に達しているだけなため、明瞭でない。断面観察では、直径約40 cmの円形と考えられる掘り方内に土器棺を正位に埋設したものである。棺内埋土は1・2層共に組成に違いないが、2層中にはベンガラが顕著に散布しているため、色調が異なっている。

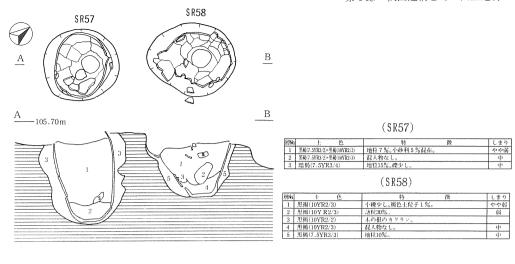
土器棺(第60図70)は胴中部以下しか残存しない。口縁部が直立すると考えられ、胴下部に向かって緩くすぼまる。底部は若干直立気味となり、底面は上げ底になっている。底径9.0cmである。胴部にはLR縄文が底部を除いて施されている。煤状炭化物が胴中部(以上)には厚く、内面下部には痕跡程度に付着している。胎土内には海綿状骨針を含んでいる。

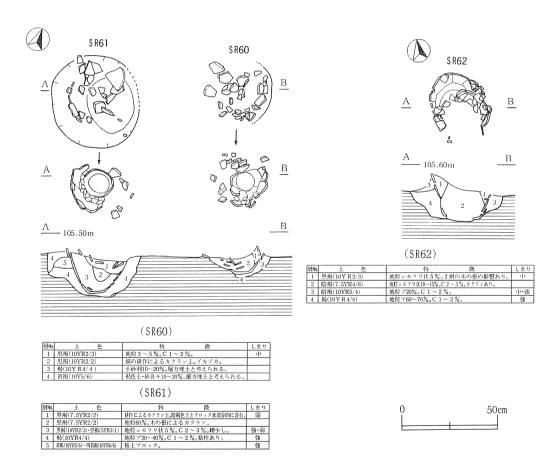
\$R**57**土器棺墓(第50図、図版39)

中央LB30グリッド北東部の第III層面で検出した。これまで説明して来た\$R54~56土器棺墓等と同じ面の精査中に口縁部を検出したもので、口縁部はほとんど欠損していなかった。北東側わずか0.2mに\$R58土器棺墓がある。

掘り方は、平面の直径約40cmの円柱状を呈し、確認面からの深さが45cmと深い。土器棺は正位に埋設され、掘り方底面に接しており、少し南西側に傾いている。確認面の棺内と棺内埋土下部から拳大の礫が数個と、棺の南側内面にへばり付く形で、土器棺本体と異なる土器片が1点検出された。棺内埋土は、1層が地山土粒子や小砂利を5~7%含むのに対し、2層には混入物がなくしまりも良い。掘り方埋土は、地山砂利層を掘り込んでいる割には、地山土の混在が少ない。

土器棺(第61図72)は、口縁部が直立し、胴上部から下部に向かって緩やかにすぼむが、下部から底部へのすぼまりかたが急である。底部は短く直立し、わずかに上げ底となっている。口径は長径33.7cm、短径27.3cmと上面観が楕円形で、器高45.2cm、底径10.5cmである。胴部には付加条のLR縄文が施されている。底部外面には横位のナデ痕、内面上半には横位のケズリ痕





第50図 SR57·58·60·61·62 土器棺墓

が残っている。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅6~10cmの帯状に付着している。胎土中には海綿状骨針を多く含んでいる。棺の南側内面にあった土器片(第61図73)は、LR縄文が縦位回転施文された中期後葉のものである。埋土に混入したものであろう。

\$R58土器棺墓(第50図、図版39)

中央LB30グリッド北東隅の第III層面で検出した。検出面は、SR57などと同じである。畑の耕作によって上半が既に失われており、その一部が周囲に散乱していた。SR57土器棺墓とは0.2 mしか離れておらず、北側0.6mにはSK105土壙墓がある。

掘り方は、径が37~45cmの不整円形で地山砂礫層を10~15cm掘り込んでいる。土器棺は掘り 方底面に接して正位に埋設されている。棺内埋土は、1・2層共に褐色土や地山土粒子が混在 するのに対し、4層には混入物がなくしまりも良い。

土器棺(第60図71)は口縁部が直立し、胴下部に向かって緩くすぼまる器形と考えられる。底面はわずかに上げ底となっている。底径は11.2cmである。胴部には開端部結節のあるLR縄文が施されている。底部外面には横方向の、胴部には縦方向の、底部には同心円状のケズリ痕が残っている。煤状炭化物が外面には全面、内面下半には幅10~19cmの帯状に付着しており、内面に特に厚く付着している。胎土には海綿状骨針が少量含まれている。

\$R60土器棺墓(第50図、図版40)

中央LB31グリッド西部の第IV層面でSR61土器棺墓と同時に検出した。この周辺は、第IV層面まで畑の耕作により撹乱されており、一部は地山をも掘り込んでいる。本土器棺墓は第IV層面の柱穴状に続くような撹乱部分の中に土器片が散乱していたことから確認したものである。このため土器棺は胴下半を残すのみであった。西側0.4mにSR61土器棺墓、東側0.6mにSK70土壙墓がある。

掘り方は西側一部しか残存せず、土器棺は、底部と東側下半が埋設時の状態を保っていた。 土器棺は掘り方底面にほぼ接して正位に埋設されている。棺内埋土は残存せず、掘り方埋土中 には地山砂礫が10~20%混在している。

土器棺(第61図74)は、胴下部〜底部が残存するのみで、口縁部が直立(もしくは、穏やかに内弯)し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形と考えられ、底部が短く直立する。底径11.5cmで、底は明瞭な上げ底である。胴部には、RL縄文が横位回転施文(一部不定方向)され、縦方向のケズリ痕が残っている。煤状炭化物が外面には全面と、内面には幅17cm前後の帯状に付着している。胎土には少量の海綿状骨針を含む。

SR61土器棺墓(第50図、図版40)

中央LB31グリッドの西端部第IV層面で検出した。検出状況は、SR60と全く同じである。耕作による撹乱は、棺内下部にまで及んでおり、土器棺は底部と下半を残すのみであった。南側

0.8mにSR51土器棺墓、南東側0.6mにSK105土壙墓がある。

第Ⅳ層面での掘り方平面形は直径50cmの円形で、この中に土器棺が正位に埋設されている。 棺内埋土は、最下部に地山土粒子をほとんど含まない緻密な黒褐色土があり、しまり良好である。掘り方埋土中には、地山土や小砂利を30~60%含み、かたくしまっている。

土器棺(第61図75・76)は、一部口縁部まで出土しているものの、土器本体の磨滅が著しいこと、撹乱によって散逸したものが多く、うまく接合しない。76が口縁部である。器形は口縁部が穏やかに内弯し、膨らみの少ない胴上部から胴下部に向かって緩やかにすぼまるものと考えられる。底径は10.5cmである。胴部には付加条のあるLR縄文が施されている。煤状炭化物が胴中部以上全面と、内面下部に帯状に付着している。また、棺内底面から第61図77の口縁部破片などが出土している。

\$R62土器棺墓(第50図、図版41)

中央西部LC31グリッド南端の第Ⅳ層面で検出した。畑の耕作によって既に上半が失われ、また、南側には太い木の根が入り込んだ跡があり、全体に大きく撹乱を受けていた。この木の根の枝は、さらに東側に土器棺を突き破って外に出ており、その部分の土器片を23cmほど棺外に移動させていた。北西側2.2mにSR63、東側1.8mにSR51土器棺がある。

掘り方は、木の根の撹乱によって判然としないが、棺底面は地山砂礫層中の礫の上に重なる 形で、正位に埋設されている。棺内埋土も大部分撹乱を受けたものであった。

土器棺(第62図78)は、検出時には約25cmの高さであったが、周囲に散乱していた破片を接合した結果、最大31.6cmまで復原できた。口縁部が直立もしくは穏やかに内弯し、胴下部に向かって緩くすぼまる。底部外面は、横位のケズリによってわずかに面取りされている。底径10.6cm。胴部には付加条のLR縄文が施されている。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅6cm前後の帯状に付着している。外面の煤条炭化物の下端は、上方から垂れたように筋状になっている。

\$R**63**土器棺墓(第51図、図版41)

中央西端部LC・LD31グリッドのLDライン上、第Ⅳ層下部で検出した。この地点は、段丘平担面の西端肩部にあたり、本土器棺の西側は、虫内沢への急斜面となる。上半は畑の耕作によって既に失われ、破片も見られなかった。中央部の土器棺墓としては最も西側に位置する。南東側2.2mにSR62土器棺墓がある。

残存部では、明瞭な掘り方を捉えることができなかった。掘り方の下部が土器棺の大きさと 変わりのないものであった可能性が強い。土器棺は正位に埋設されており、若干東側に傾いて いる。棺内埋土は、黒褐色の単層であった。

土器棺(第62図79)は、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形で、わずかに上げ底になって

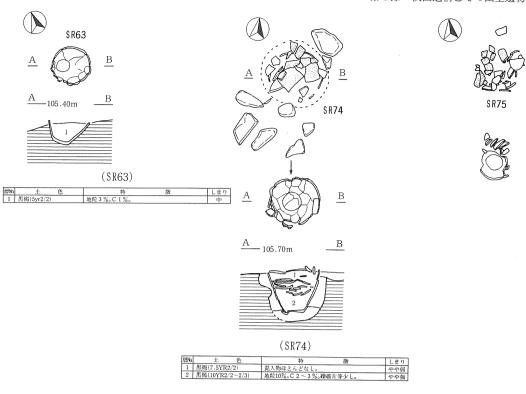
いる。底径8.1cmである。胴部にはLR縄文が施されている。煤状炭化物が、外面胴部下半近くまでは全面、内面下部には帯状に付着している。内面の煤状炭化物は一方が幅6cmなのに対し、その反対側は幅11cmと一方に偏在している。

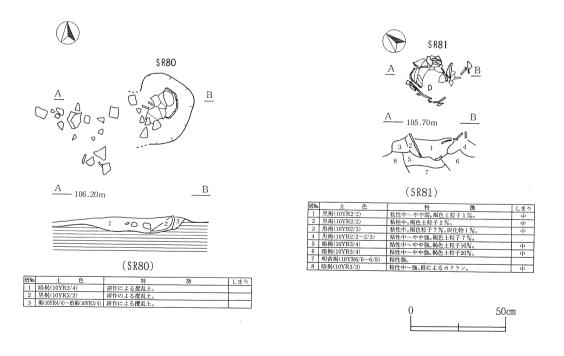
中央LB30グリッド西部の第III層面で検出した。第III層下部から第IV層面の精査中、長径が8~15cmの河原石7~8個がややまとまって出土し、それらの河原石に囲まれるような形で土器片のまとまりが見えた。さらに精査すると、土器片の中に、土器棺の上端が弧を描くような形で顔をのぞかせた。確認面での土器片のまとまりは、西側のものが立っていて、中央~東側が器外面を上にしてほぼ平らの状態にあった。土器片の中には、埋設されている土器棺上端を覆っているものもあった。また、棺内中位からも多数の土器片が幾重にも重なって検出された。北側~東側3m以内には $SR51 \cdot 54 \sim 58 \pm 38$ 指などがあり、南東側0.7mに $SK127 \pm 48$ がある。

掘り方は、直径35cm前後の円形で、土器棺はその中央部に直立の状態で埋設されている。土器棺底部は掘り方底面から4cmほど浮いている。棺内埋土は上部がしまり・かたさ共にやや弱いのに対し、下部がかたくしまっている。

ところで、本土器棺確認面と棺中位から数枚にも重なって検出された土器片は、SR12やSR54などに見られた如く、土器棺本体とは異なる土器を分割して蓋状にしたものと考えていた。しかし、接合作業の結果、これらの土器片は全て土器棺本体の胴中部よりも上の破片で、それ以下の土器棺本体ときれいに接合した。確認面及び棺中位の土器片は、他の土器棺の例から、より上方に蓋状にあったものが落ち込むように下がったものと思われる。以上のことから、本土器棺の場合、土器棺埋設時に、土器を胴中部で上下に切断し、下方を土器棺に、上部をその蓋に用いたのである。従って、埋設された土器棺としての高さは、20~23cmであったと考えられる。なお、土器切断部分(第62図80の胴中~下部の横位の線)には、器周10ヶ所以上に内外面から土器を敲いた痕跡(図中▲マーク部分)が残っている。その部分は他の部分よりも細かく割れていて、敲いた点の周りの器面の剝落が真新しく見えている。また切断面の側面観は、直線的でほぼ水平な部分は比較的少なく、ジグザグな部分が多い。切断された位置は、最高位で底面から22cm、最低位で12cmである。また、小破片も接合しているところから、切断はこの場所で行われたと考えられる。

接合後の土器棺(第62図80)は、口縁部を欠くものの、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形である。底部はわずかに上げ底で、外面には、ナデによって窪んだ部分と、ケズリによって面取りされた部分とがある。残存高38.8cm、底径10.6cmである。胴部にはLR縄文が横位回転施文(一部不定方向)されている。煤状炭化物が胴中部以上には全面、内面下部には幅7cm前後の帯状に付着している。





第51図 SR63·74·75·80·81 土器棺墓

\$R75土器棺墓(第51図、図版42)

中央LB31グリッド東端部第III層相当面~IV層中で検出した。この部分は畑の耕作による撹乱が著しく、耕作土を除去しながら精査していたところ、土器片の集中があり、この部分のうちの一部が立っていることから土器棺墓と確認した。下部しか残存していない。周囲をSK67・69・70・71・72土壙墓に囲まれた位置にある。

掘り方は地山面に接する部分までしか達しておらず、その規模は不明である。正位に埋設されている。胴下部以下しか残存せず、周囲にその上部の破片がわずかだけ散乱していた。棺内まで撹乱を受けていた。

土器棺(第62図81)は、胴下部に向かって緩やかにすぼまり、下端が直立気味である。底部は上げ底風である。底径10.5cm。胴部にはLR縄文が施されているようであるが磨滅が著しく明瞭ではない。外面下部は火ばね状の器面剝落が著しい。底部外面には、同芯円状のケズリ痕が見えている。内面下部には、煤状炭化物が幅4cm前後の帯状に付着している。

\$R80土器棺墓(第51図、図版42)

南部北側LA29グリッド第V層上面で検出した。この部分も耕作による撹乱が著しく、第V層上面で90cm×50cmの耕作痕部分に土器片の集中があり、底部が残存する1個の深鉢形土器と認められたため、これを埋設された時の状態をほとんど留めない土器棺墓と考えた。北側0.6mにSK78、西側0.6mにSK87土壙墓がある。

掘り方は不明である。土器は、底部から胴下部が一部接合した状態で検出された。接合する破片の多い方を下に、西側に真横に転んだ形である。このような状態で埋設され、上部側が撹乱された可能性も完全には否定できないが、土器棺の下にまで耕作土が及んでいるところから、正位に埋設されていた土器棺が耕作によって横転したものと考えられる。

土器棺(第63図82)は、部分的には口縁部まであるが、うまく接合しない。口縁部(同図83)が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形と考えられる。下端がわずかに直立気味で、底部はかすかに上げ底となる。底径10.5cm。胴部にはLR縄文が施されている。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅10cm前後の帯状に付着している。

\$R81 土器棺墓(第51図、図版42)

中央部LB30グリッド第III層相当面で検出した。周辺にある他の土器棺墓SR56・57等と同一面で、半周ほど弧を描く土器があり本土器棺と確認したが、棺内外の撹乱が著しい。北側0.4mにSR57、西側0.5mにSR56土器棺墓がある。

掘り方は不明である。土器棺は正位に埋設されたものであるが、胴下部が西側〜南側だけで 埋設時の状態を保っているものの、その他と底部は散乱していた。特に底部は木の根によるも のか本来あるべき位置よりも下方で破片となって検出された。 土器棺(第63図84)は、口縁部が直立もしくは穏やかに内弯するものと考えられ、胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部は上げ底で、ケズリ痕が残っている。このケズリ痕は内面胴下部~底面にも明瞭に認められる。底径9.3cm。煤状炭化物が外面胴中部には厚く付着しているものの、内面には痕跡程度である。胎土中に海綿状骨針が含まれている。

\$R82土器棺墓(第52図、図版43)

中央南部LB30グリッド第IV層面で検出した。この周辺も畑の耕作による撹乱が著しく、本土器棺墓は、土器棺底部付近が柱穴状の耕作痕中で確認された。土器棺底部の一部までが撹乱によって動いており、周囲にも破片が数点散在していた。底部北側に接するように縄文時代前期のものと考えられる篦状石器があるが、本土器棺墓に直接係わるものではないと思われる。西側に隣接してSK127土壙墓があり、北側1.3mにはSR52土器棺墓がある。

掘り方は不明である。土器棺は正位に埋設されている。棺内から、土器棺の破片ではあるが、 残存部とは接合しない破片が検出されたが、撹乱によってこの位置にあるものか、埋設時から あったものかわからなかった。

土器棺(第63図85)は、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形と考えられる。平底で、底径10.5cmである。胴部にはLR縄文が施されているが、胴下部では、縄文施文後の横位のケズリ痕によって不明瞭である。このケズリ痕は底部の内外面にも明瞭に残っている。胴外面には煤状炭化物が付着しているが、残存している破片では内面には付着していない。焼成良好で胎土には海綿状骨針を多く含んでいる。なお、第63図86は本土器棺内底部から出土した口縁部破片である。胎土・焼成からは本土器棺のものと思われるが、厚さが相当に異なり、LR縄文も下半部のものと同一か否かわからない。口縁部が両側から面取りされて口唇部が尖る形である。

\$R83土器棺墓(第52図、図版43)

南部東側LA28グリッドのグリッド杭直下の第V層面で検出した。上部は少しだけ撹乱を受けたと考えられるが、確認面では直径約35cmの円形に土器が見え、その中に大きな河原石がのぞいていた。周囲及び棺内には数点の土器片が散在していた。本土器棺墓の東側には遺構はなく、東側1.3mで横手川の崖面になる。本土器棺墓は、SK125土壙墓の東側を掘り込んでおり、これより新しい。北西側0.7mにSK102土壙墓、南側4mにSR85土器棺墓がある。

掘り方は、確認面での直径が40cm強の円形で、土器棺はこの中心に正位に埋設されている。 土器棺底部は掘り方底面に接しており、胴部は少し東側に開いている。なお、底部は扁平な河 原石に乗る形となっているが、この河原石はSK125土壙墓の壁際埋土中に埋められたもので、 本土器棺には直接係わりないものである。棺内埋土は、1層が他の土が混在しない単色土であ る。底面付近の埋土は、木の根の撹乱のため詳細不明である。

土器棺(第63図87)は、口縁部付近が耕作による撹乱でほとんど残存していないが、口縁部が穏やかに内弯し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部はわずかに上げ底になり、底径8.7cmである。胴部にはLR縄文が施されているが、縄文のない部分には、縦方向のケズリ痕がうすく見えている。推定器高36~37cmで高さがある割には器厚がうすく、特に胴上部で粘土紐接合部の凹凸が顕著である。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅9~12cmに帯状に付着している。

南部南西側LA26グリッド第Ⅳ層面で検出した。第Ⅳ層面相当の耕作土を掘り下げ中、細片となった土器片が集中して散乱している箇所があり、その下から土器棺を検出したものである。 北側0.2mにSK122、西側1.6mにSK108土壙墓が、南側2.1mにSR93土器棺墓がある。

掘り方は、直径40cm前後の略円形で、土器棺は正位に埋設されている。掘り方底面は平坦ではないが、土器棺がほぼ底面に接しており、北東側がやや外方に倒れている。棺内埋土は、1・2層共に地山土粒子が混在しないものの、2層がややかたくしまっている。掘り方埋土はかたくしまっている。

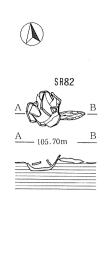
土器棺(第64図91)は、胴上部以上が全く残存しないため、全体の器形は不明である。胴中部以下がやや大きく外傾して直線的に底部に至り、底部外側が短く直立している。底径12.4cmと他の土器棺よりも大きく、わずかに上げ底である。胴部にはLR縄文が横位回転施文されているが、下部で不定方向の部分がある。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅9~17cmの帯状に厚く付着している。

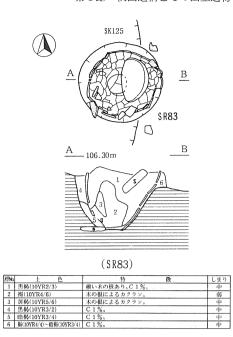
\$R85土器棺墓(第52図、図版44)

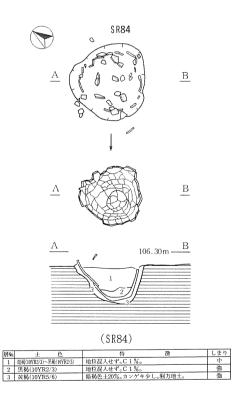
南部南東端KT25グリッド第Ⅳ層で検出した。調査区内で、最も南に位置する遺構である。耕作によって上部が失われたと考えられ土器棺が、直径27~28cmの整った円形で存在した。北西側0.3mにSK121土壙墓があり、本土器棺の東側はあと0.7mで横手川への崖面となる。

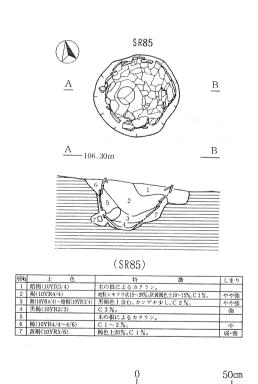
掘り方は比較的明瞭である。直径40~45cmの円形で、土器棺はこの掘り方いっぱいに正位に埋設されている。土器棺の東側が外方に倒れるように傾いているが、底部~西側はほぼ直立している。なお、口縁部の一部が、棺内上部に落ちていた。棺内埋土は、上部が地山土粒子を含む褐色土、中~下部が褐色土であるのに対し、最下部は厚さ2cm強ながら黒褐色土でかたくしまっている。

土器棺(第64図92)は、口縁部が外傾し、胴上部で膨らみ、胴下部に向かって緩やかにすぼまるが、胴下部から底部へのすぼまり方が急である。上げ底で底部外側が短く直立気味となっている。口径30.5cm、底径11.3cmであるものの、器高は35.2~38.1cmと大きく違っており、口縁が斜めになっている。器高に比べて口径が大きく、ずんぐりした感じである。また、埋設時だ









第52図 SR82·83·84·85 土器棺墓

けでなく、土器そのものが一方に傾いている。口唇部には少し間隔のある刻みがあり、小波状口縁をなす。器厚がうすく、器面には粘土紐接合時の凹凸が現れている。口縁部から胴部下半にかけてLR縄文が横位回転施文されているが、不定方向の部分もある。煤状炭化物が外面胴中部以上には全面、内面下部には幅7cm前後の帯状に付着している。胎土中に海綿状骨針を含んでいる。

\$R86土器棺墓(第53図、図版45)

南部北側LA29グリッド第V層面で検出した。畑の耕作が第V層 $\sim V$ 層上面まで達する部分に、底部を含む深鉢形土器が散乱した状態で検出されたため、これを土器棺とした。従って掘り方等は全く不明であるが、底部はわずかに南西側に傾いているものの、ほぼ埋設時の状態を保っているものと思われる。西側0.3mにSK77A土壙墓があり、北側1.3mにはSR52土器棺墓がある。

土器棺(第63図88・89)は、口縁部から底部までの破片はあるが、部分的で、うまく接合しない。直立もしくはわずかに外傾する口縁部から、胴下部に向かって緩くすぼまる器形と考えられる。底部径9.0cmで、わずかに上げ底、外側が短く直立気味となる。口縁部には羊歯状文が沈線で描かれ、胴部LR縄文とを3条の平行沈線で画している。羊歯状文は上部に沿う沈線が口唇上のB突起間に開いている。全体にうすく、焼成良好で、内外面には煤状炭化物が付着している。なお、本土器棺の破片が散乱していた中に、他の深鉢形土器の胴部の破片が若干混在していた。第63図90がその口縁部である。穏やかに内弯する口縁部で、LR縄文が施されている。

\$R88土器棺墓(第53図、図版45)

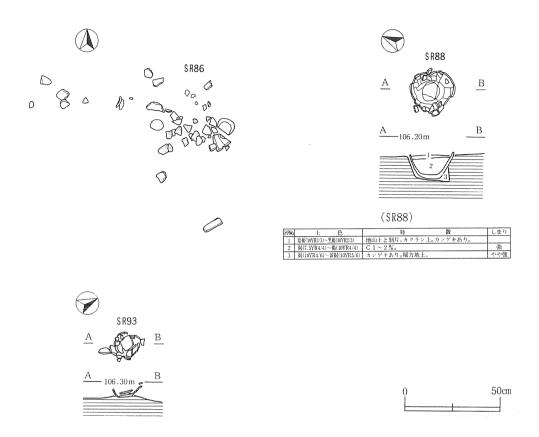
南部中央LB28グリッド第V層面で検出した。この部分の耕作による撹乱は地山面まで達しており、本土器棺墓は胴中部以下を残すだけの状態で、破片の散乱もほとんど見られなかった。 東側0.4mにSK92、北東側1.5mにSK91、南側0.5mにSK89土壙墓がある。調査区南部の土器棺墓としては、最も西側にある。

掘り方は土器棺の大きさとほとんど変わりなく、土器棺は正位に埋設されている。棺内埋土は、褐〜暗褐の粘質土で、他には例を見ないくらいにかたくしまっている。

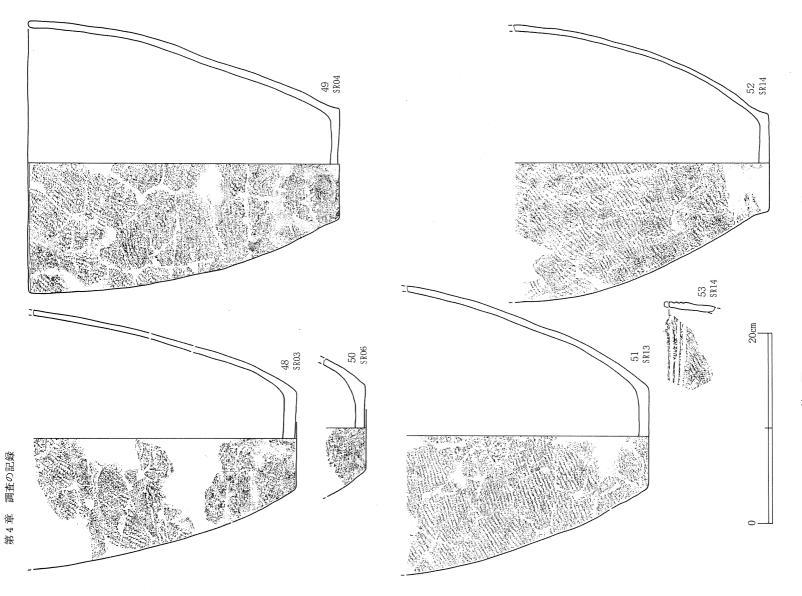
土器棺(第64図93)は、胴上部が残存しないが、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩くすぼまる器形と考えられる。底部は平底で、底径10.1cmである。胴部にはLR縄文が施されているが器表面の磨滅が著しい。内面下部には幅5~8cmの帯状に煤状炭化物が付着している。胎土中には多量の海綿状骨針が含まれている。

\$R**93土器棺墓**(第53図、図版45)

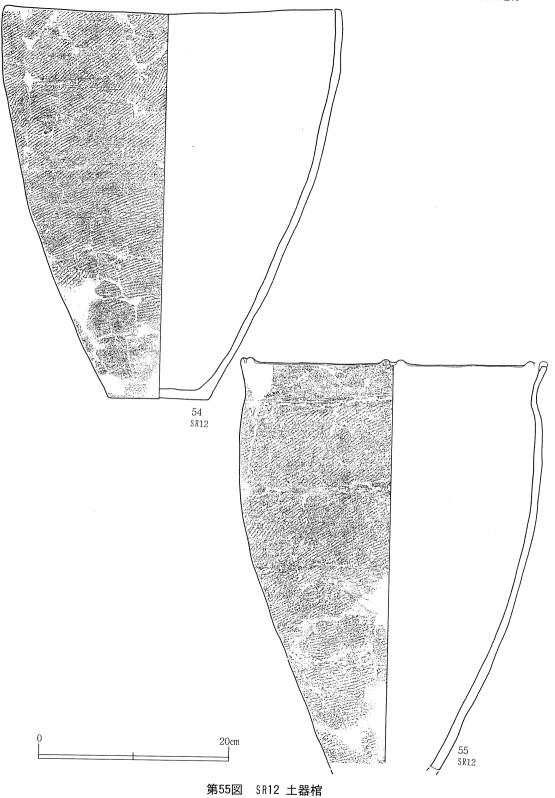
南部南側KT・LA26グリッドにまたがり第IV層中で検出した。底部はわずかしか残存しておらず、掘り方等の詳細は不明であるが、正位に埋設されたものと考えられる。北側0.1mにSK119、



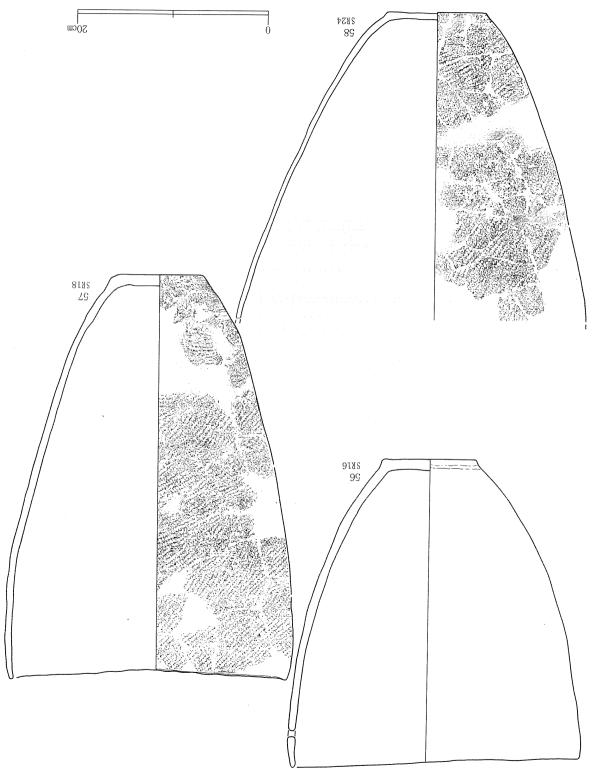
第53図 \$R86·88·93 土器棺墓



第54図 SRO3·04·06·13·14 土器棺

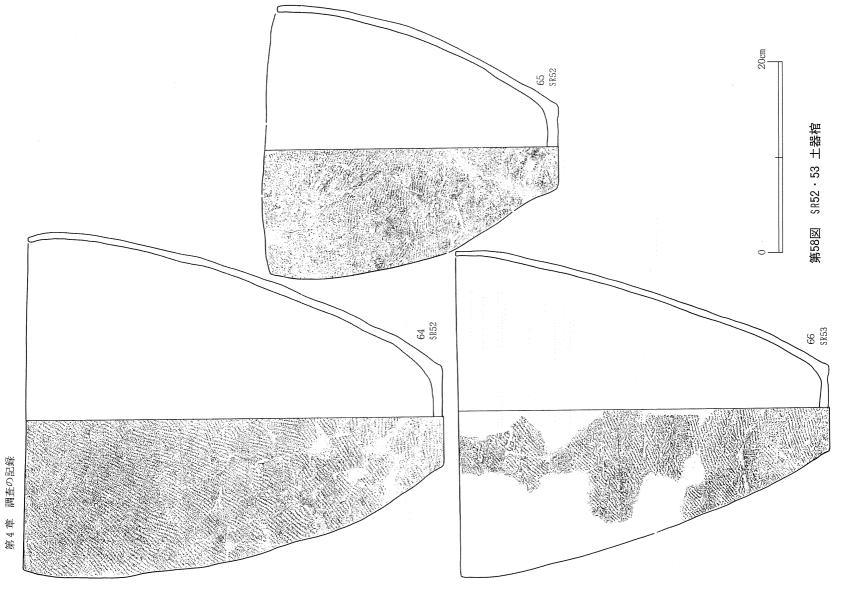


\$20図 \$110 · 18 · 24 工器焊

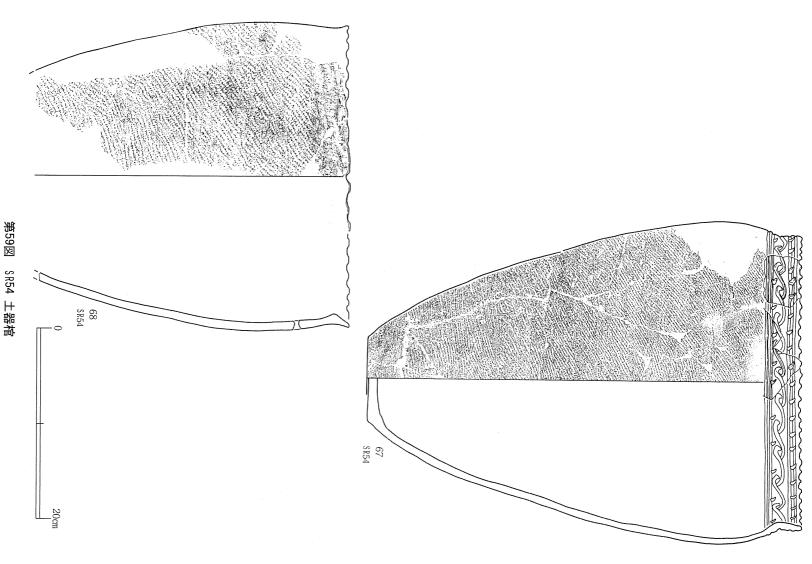




第57図 SR35·51 土器棺

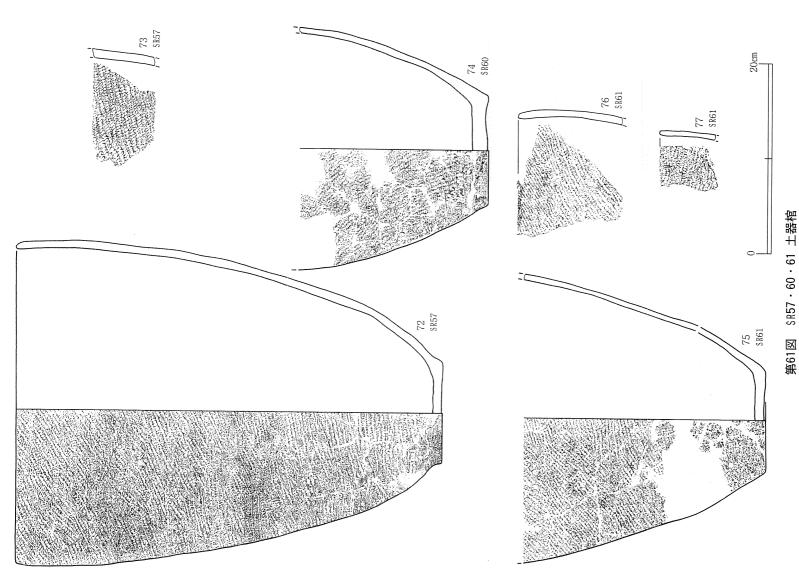


122



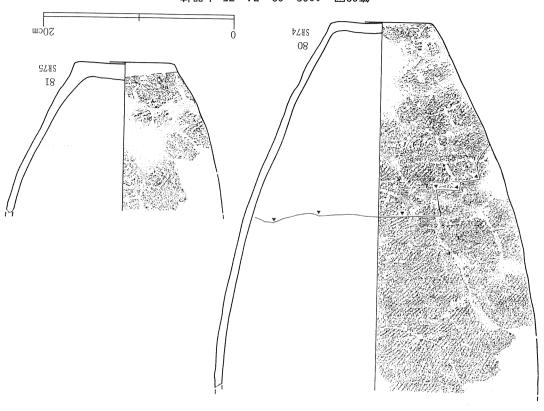
第1節 検出遺構とその出土遺4

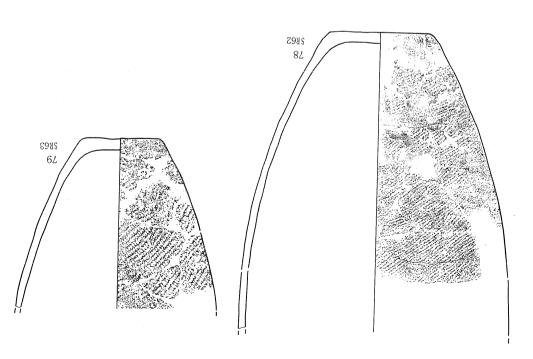
-124---

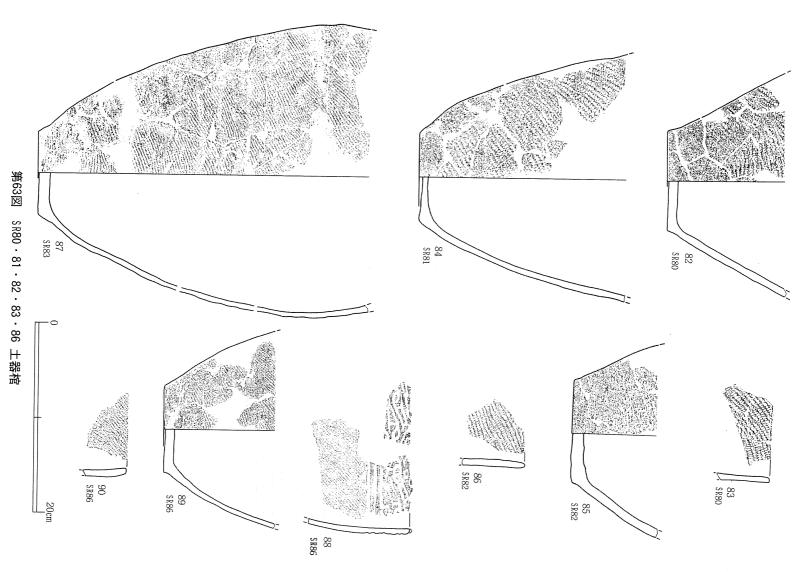


-125

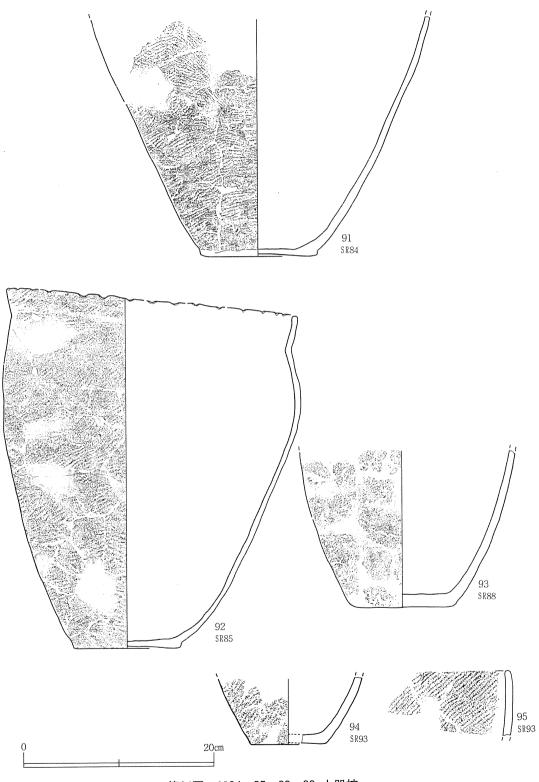
財器士 3℃・47・53・288 図S9第







第1節 検出遺構とその出土遺物



第64図 \$R84·85·88·93 土器棺

南側0.5mにSK121十壙墓がある。

土器棺内の底面から $1 \sim 2$ cm 浮く形で、本土器棺の口縁部破片が内面側を上にして横位に検出された。胴上~中部の小破片も数点あるものの、それ以外の土器はなく、撹乱によって、たまたまこのような状態で口縁部が残ったとは考えにくい。故意に割られた口縁部の破片(第64図95)が蓋状に用いられ、中に落ち込んだ可能性がある。

土器棺(第64図94)は、口縁部が直立し、胴下部に向かって緩くすぼまる器形と思われる。底径7.8cmで、平底であろう。胴部にはLR縄文が施されている。少なくとも外面胴上部と内面下部には煤状炭化物が付着している。

4 土坑

検出された64基の土坑のうち、土壙墓の可能性もあるものの、埋土の状況等が他の土壙墓と は異なっているために、土坑としたものである。3基検出されている。

\$K07土坑(第65図、図版46)

北部北端LA36グリッドにある。この周辺は、今次調査区中央部から北に向かって緩やかに下降する斜面が、グリッドの36ラインあたりからやや急に傾斜し、本土坑あたりから再び緩やかになる。第Ⅲ層には、大小の河原石が比較的多く散在しており、第Ⅲ層を掘り下げ第Ⅳ層面で遺構の検出に努めていたところ、暗褐色土がぼんやりと円形に見えたところから遺構番号を付したものである。南東3.9mには\$R04土器棺墓、北西2.2mに\$X39がある。

平面形は直径 $1.1\sim1.2$ mの略円形で、深さ約30cmである。南側で50cm前後の柱穴状の掘り込みに切られているが、この柱穴状のものについては、詳細がわからない。

壁面及び底面は凹凸があり、特に底面は全体に北側に傾斜している。杭中央部中位に直径30 cm~長径20cmの河原石が5個ある。平面形は一方が開く「コ」の字形であるが、特に組まれたという状況でもない。埋土中には地山土小ブロックが約20%混在するが、木の根による撹乱部分も多い。

SK128土坑(第65図、図版46)

中央南西部LC30グリッドにある。本土坑南側にある中期末葉の竪穴住居跡S166の炉に関わる焼土面の広がりの精査を、第III層下部〜第V層上面で行った際に、この焼土と重なる形で黒褐色土の広がりのあることは認識していた。しかし、この時には、この黒褐色土が畑耕作による撹乱の可能性があることもあって、この部分に掘り込みがあるとはわからなかった。結局本土坑のプラン等を確認したのは、S166の土器埋設炉を通る土層観察用のサブトレンチの精査によってであり、確認面は、地山上面である。従って本土坑とS166の前後関係が問題となるが、S166の2ヶ所の炉のうち、北側の炉の良好な焼土の広がりのうち、東側部分を本土坑の上部の埋土

である黒褐色土が切っていると判断されることから、本土坑が\$166よりも新しい。また、本土坑は西側で\$K129土坑を切っている。本土坑の北側1.1mに\$R62、東側1.4mに\$R74土器棺墓がある。

確認面での平面形は、長軸124cm、短軸101cmの円形に近い楕円形で、長軸方向はN10°E、深さは62cmである。坑底面及び壁面には、地山粘質土に混在する礫が露出しており、若干の凹凸があるものの、概ね滑らかで、かたくしまっている。

坑内の中央西部に長さ約30cm(S1)と40cm(S2)の2つの円礫が、S1は立って、S2は横倒しとなって検出された。2つの礫共に坑底面からは20cmほど浮いた状態であった。土層断面で見る通り、2つの礫を含む部分は、上方から掘り込まれた柱穴様にも見えるが、この点については明らかにできなかった。なお、2つの礫共に被熱しているが、坑内に焚火の痕跡はない。

本土坑の埋土は、これまで述べて来た土壙墓の中には、SK125土壙墓の埋土を除くと例のないものである。これだけの深さがありながら、全体に黒〜暗褐色で、埋土中に地山砂礫はあるものの、壁際の一部を除いて地山土粒子が混在していない。このことがどのような原因によるものか不明であるが、他の土坑とは異なる性格の遺構であった可能性もある。

埋土中からは、晩期の深鉢形土器の破片の他、埋土上部南東壁際から第44図68の篦状石器、第6層中位から石鏃(第44図67)が出土しており、他に剝片・チップが30点出土している。

\$K129土坑(第65図)

中央南西部LC30グリッドにある。SK128土坑と共にSI66竪穴住居跡の精査中に検出した。 SI66との前後関係は明確ではないが、SI66の炉Bの中心部にある被熱で赤く焼けた大礫と焼土 が、本土坑南端部を覆っていたことにより、本土坑が古いと考えられる。東側でSK128に切られ、北側1.1mにSR62土器棺墓がある。

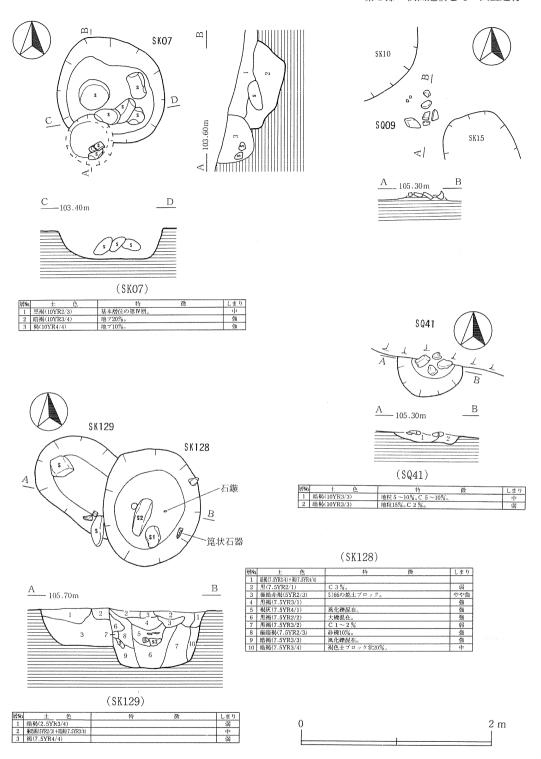
平面形は、長軸方向が $N51^{\circ}$ Wの楕円形であると考えられるが、長軸は不明(100cm以上)で、短軸は81cm、深さ36cmである。

坑底面に粘質土中の礫がわずかに露出しているものの、底面は概ね平坦で、壁は若干傾斜を もって立ち上がる。

坑北西部に、一辺15cm、長さ27cmの角柱状の角礫が柱穴様の掘り込みの中に立っているが、 これが本土坑に伴うものか、別の遺構なのか明らかにできなかった。埋土は、しまりのない褐 色土を主体とする。埋土中からは剝片が1点出土したのみである。

5 配石遺構

虫内Ⅲ遺跡の今次調査区内のうち、遺構が多く分布する35ライン以南では、縄文人が遺跡内に持ち込んだと考えられる河原石が比較的少ない。このような中で、2ヶ所だけ、河原石数個



第65図 SK07·128·129 土坑、SQ09·41 配石遺構

を集めた部分が存在したので、これを配石遺構とした。

\$Q09配石遺構(第65図、図版 6)

北部やや南側のKT33~LA33グリッドにかけてある小規模な配石遺構である。第III層下部~第
IV層上面にかけて検出された。この面はSK10土壙墓確認面とほぼ同じである。SK10とSK15土壙墓の間に挟まれるような形で存在する。

長径約30cmの扁平な礫が4つに割れたのと、拳大の円礫2個が、35cm×40cmの範囲内に集まっている。円礫の中には被熱によって割れたものもあるが、本配石遺構内に火を焚いた痕跡はなく、炭化物もない。また、これらの礫を埋置するための坑もなかったので、検出された面に礫が集められたものと考えられる。

\$Q**41配石遺構**(第65図、図版46)

北部南東側KT32・33グリッドにかけてある。土地の境界溝内の精査中に拳大前後の河原石が数個集まっているのは承知していたが、太めの木の根が入り込んでおり撹乱を受けているため、遺構としては捉えていなかった。しかし溝の南側第III層下部を精査したところ、明瞭に4個の礫が集まっていたのでこれをSQ41としたものである。北半を土地境界溝に切られている。南側でSK44土壙墓と隣接し、西側0.8mにSK15土壙墓がある。

取り上げてしまった礫を含め、合計9個の河原石からなる。9個の河原石が特に組まれたというのではなく、一部重なり合いながら集まっているという状態であった。9個の礫のほとんどは、被熱によって一部赤変している。礫のある部分の土には中小の木炭片は混在するものの、焼土はない。また、これらの礫は、直径約70cmの浅い(深さ10cm)掘り込みの上部にあり、掘り込み下部の埋土中にも木炭片が5~10%含まれている。以上のことから本配石遺構は、浅い土坑様の掘り込みの中に木炭を含む土と被熱した礫を投げ込んだものか、もしくは、土坑様の掘り込みの中に、礫を集めて火を焚いた遺構と考えられる。埋土中からは剝片類が少量出土している。

6 柱穴様ピット

平面形が、直径30~40cmの略円形で、深さ15~60cmの規模の柱穴様ピットが6基検出されている。これらは建物などに伴ら柱穴とは異なり、各々単独で存在したものと考えられる。なお、全て柱痕跡はない。

SKP05柱穴様ピット(第66図)

北部東側KT34グリッドにある。第IV層上面で検出した。検出時には、長径1m弱の土坑かと考えられたが、半截の結果、直径28cm、深さ44cmの柱穴様ピットと判明した。北側0.4mにSR 03土器棺墓、南西側0.4mにSK37土壙墓がある。なお、本柱穴様ピットとSKP45・47の3基が約

0.3m間隔で直線上に並ぶ感があるが、検出面や埋土の違いなどから、これら3基で1つの遺構として機能したとは考えられない。

SKP33柱穴様ピット(第20図)

中央北東側KT32グリッドにある。第V層面で検出した。直径30cm、深さ15cmと極めて小規模である。東側0.3mにはSK32、西側0.7mにはSK27土壙墓がある。

SKP45柱穴様ピット(第20図、図版12)

北部東側KT34グリッドにある。第V層面でSK37土壙墓の北側に隣接する形で検出した。平面 形は40cm×50cmで、深さ60cmである。柱穴様ピットの中では最も深くしっかりしている。

SKP47柱穴様ピット(第20図、図版12)

北部東側KT34グリッドにある。第 V 層面でSK37土壙墓やSKP45と共に検出した。平面形は30 cm×40cmで、深さ30cmである。

SKP59柱穴様ピット(第48図)

中央LB31グリッド地山中で検出した。本柱穴様ピットの南側に隣接するSR51土器棺墓を半截するため、北側にサブトレンチを入れ、掘り下げたところ検出されたものである。直径約50cmで、SR51土器棺の上端からの深さは43cmである。地山砂礫層中に掘られており、しっかりしている。

SKP73柱穴様ピット(第18図)

中央北部LB32グリッドの第V層上面で検出した。 $SK21 \cdot 22$ 土壙墓などと一緒に検出したもので、南側上部をSK21に切られているが、底面は全部残存している。直径約50cm、深さ28cmでしっかりしている。

7 性格不明遺構

土坑様あるいは石囲炉様や略完形土器の単独出土など、これまで述べて来たどの遺構にも属せず、性格の不明な遺構が3基あり、これらを性格不明遺構とした。

\$X39(第66図、図版47)

北部北西端LA37グリッドにある。この部分は馬背状に北に延びた舌状台地の北部西端にあたり、本遺構の西側は虫内沢への急斜面となっている。この部分の第V層上面で、直径約1.8mの略円形に暗褐〜黒褐色土が分布しており、この範囲内の東部から5点の篦状石器がまとまって出土したため、これをSX39とした。

平面形は、直径180cmの円形で、断面図が漏斗状を呈している。中央やや北西寄りに径30~40cmのピット状の深い部分があり、ここで深さ124cmである。埋土は、上部が第III層に相当すると考えられる黒褐色土で、その下は地山土がブロックになって点在する暗褐色土である。

篦状石器は、遺構確認面では1点が裏面を上に、1点が裏面を斜めにした2点であったが、その直下にも3点存在することが明らかになった。篦状石器同志はほぼ接するものもあれば、2~3㎝の間を置くものもある。5点共(第43図69~73)に完形品で、うち3点(69~71)が同一母岩からの素材を利用している。また、5点共に使用による刃部の欠損がなく、製作された後使用されることなく埋置された可能性がある。5点の篦状石器は、直径20㎝弱、深さ約10㎝の中にかたまっており、小さなピット内に埋置された可能性が強いとみて精査したが、ピット様のものは見えなかった。埋土中からはこの他に篦状石器の破損品(74)などが出土している。なお、本遺構に溜った雨水を排水するため、西側に溝を切ったところ、その断面の黒褐色土中に地山砂礫土の堆積が見られた。このことからすれば、あるいは本遺構は、立木が虫内沢側に倒れ、根に抱え込まれていた地山土のほとんどが沢側に落ち、通常の風倒木痕のような残り方をしていないものを我々が遺構と見誤っている可能性もある。この場合に、\$X39とした遺構は、平面形が1.8mの円形で断面形が漏斗状のものではなく、5点の篦状石器が埋置された部分をさすことになる。また、風倒木痕とした場合には、埋土中から晩期の土器片が出土しているので、それ以降のものであると考えられる。

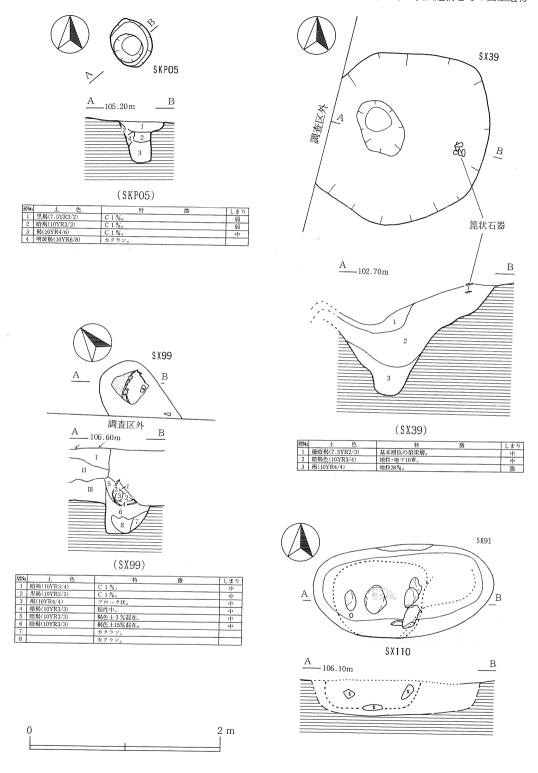
\$X99(第66図、図版48)

南部南端LA26グリッドにある。第III~IV層中で検出した。縄文時代晩期のほぼ完形の鉢形土器が口縁部を南東側に向け斜めに出土したものである。この部分の第III層上半は耕作によって既に失われており、土器はIII層下部からIV層中にある。このことから埋設されたものと考え精査したが、明瞭な掘り方は検出できなかった。また、土器内の埋土も周囲の土と大差のないものであった。本遺構の北西側・北側・東側約2mにそれぞれSK98・108・119土壙墓がある。

鉢形土器(第35図47)は、口縁部がわずかに内弯し、膨らみの少ない胴上部から、胴下部に向かって滑らかにすぼまる。底部は、接合部分からそっくり欠けている。口径16.6cmで、器高12.3cm、底径4.7cmと推定される。口唇部には極めて低い台状の突起部があり、波状口縁となっている。突起部と突起部との間の低い部分には微細な縦位の刻列がある。口縁部文様帯は4条の平行沈線で構成され、上から1条目と2条目の間、2条目と3条目の間に縦位の刻列がある。1箇所に高さ6mmで側面観がB字状の突起が付されている。胴部には細かいLR縄文が横位回転施文されており、胴中部に2~3条の綾絡文が施されている。内外面に煤状炭化物が付着しており、胎土中には海綿状骨針が含まれている。

\$X110(第66図、図版48)

南部中央LB28・29グリッドにまたがってある。合計 6 個の河原石と木炭層などからなる遺構であるが、SK91土壙墓と重複しており、検出状況や精査の経過等については、SK91の項を参照されたい。



第66図 SKP05 柱穴様ピット、SX39・99・110 性格不明遺構

6個の河原石は、長径18~30cmの大きなものが5個、12cmの小さなもの1個である。平面的には、東側に長径18~25cmの河原石3個を一部重ねたりするなどして南北55cmの長さに石の列を作り、南端の石の下から小さな河原石を西に向けている。東の石列から50cm西側には、長径20cmの砂岩とその破片を南北に長く(30cm)配し、中央下部に長径30cmの扁平な河原石を置いている。中央の河原石の上2~3cmには厚さ3cmの炭化物層がある。6個の河原石のうち、東側中央の1個と西側のものは被熱により一部赤変しているが、配石の中に焼土層は形成されていない。なお、これらの河原石は東西90cm×南北約80cmの掘り方内に配されたものと考えられるが、SK91土壙墓中央~西側にかけての平面プラン内に完全に納っており、埋めもどされている。このことからこの遺構は、SK91土壙墓の平面プランを完全に把握している者(達)が、SK91に遺体を埋葬した後、それほどの時間を経ずして、一部を(遺体を傷めない程度まで)掘って、SK91の被葬者に直接もしくは間接的に係る何らかの行為をここで行い、行為終了後再び埋めもどしたものと考えられる。

第2節 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文時代の土器と石器のみで、同時代の土製品や石器製品は皆無である。また、縄文時代以外の遺物も出土していない。遺物は調査区内全域から出土しているが、調査区南半は、縄文時代の主な遺物包含層と見られる基本層位第Ⅲ層の大部分が近・現代の畑の耕作によって撹乱を受けているため、北半にくらべて量的に少ない。

1 七器

遺構外から出土した土器量は、石器に比べて格段に少ない。時期的には前期・中期・後期・ 晩期のものであるが、全体的に少なく、特に中期・後期は僅少である。以下、各時期毎に述べ る。なお、拓影図の右下の番号下のアルファベット・数字は、出土グリッドを示す。

縄文時代前期の土器(第68図100~117)

前期の土器は調査区内で偏在することなく、ほぼ全域に散在する。復原可能なものや全体の 器形を推定し得るものはなく、小破片〜細片である。また、量的にも少なく、遺構内の埋土中 から出土したものを含めても、60片余である。器形は全て深鉢形土器と考えられる。

第68図100は、口縁部が屈曲し外反する深鉢形土器の口縁部である。口縁部の外面は無文であるが、内面には、外面胴部と同一原体のLR縄文が施されている。外面のくびれ部分から口縁部は、胴部への縄文施文後にナデている。101は小型の土器で、直立する口縁部で口唇部が尖っている。口縁部には、縄文原体の押圧文もしくは沈線が3段以上横位に付されているが、

煤状炭化物が付着していて判然としない。焼成良好で、胎土には繊維をわずかに含む。102・103は同一個体である。縦走する縄文地に、太い縄の押圧文が2段施されている。胎土中には繊維と海綿状骨針が含まれている。104・105は0段多条の縄を原体とする斜行縄文である。106~111は、口縁部に綾絡文を横位に数条施し、胴部に斜行縄文を施文したものである。胎土には繊維をわずかに含み、厚い。110の内面には煤状炭化物が厚く付着している。112は波状口縁で、網目状燃糸文が施文されている。内面には煤状炭化物が2mmもの厚さで付着している。113は胴部に、結束しない羽状縄文が施文されている。同一個体の破片がSK98・102土壙墓内からも出土している(第34図30・31)。外面には煤状炭化物が厚く付着している。114・115は胴部の破片である。116は口縁部が外反し、胴部がやや丸くなる小型の土器である。浅くうすくしか施文されていない斜行縄文地に半截竹管による平行沈線で文様の描かれるものである。胎土が柔らかい時点で半截竹管で施文したためか、竹管文が鋭い刃物で傷つけたような感じになっている。117は地文が細かい縦位の撚糸文か、その上に綾絡文が縦位に施文されている。

以上の土器群は、前期でもいくつかの時期に分かれていると考えられるが、資料が断片的であり、不明な点が多い。その中で、 $106\sim112$ は、SK125土壙墓埋土上部から出土した口縁部にループ文が 3 段施され、その下に羽状縄文が施文された土器(第35図44)をも合わせれば、大木 1 式の諸特徴に合致する点が多い。また、 $100\sim105$ の土器群は大木 1 式に含まれるかわずかに先行し、 $116\cdot117$ は前期後葉のものと考えられる。

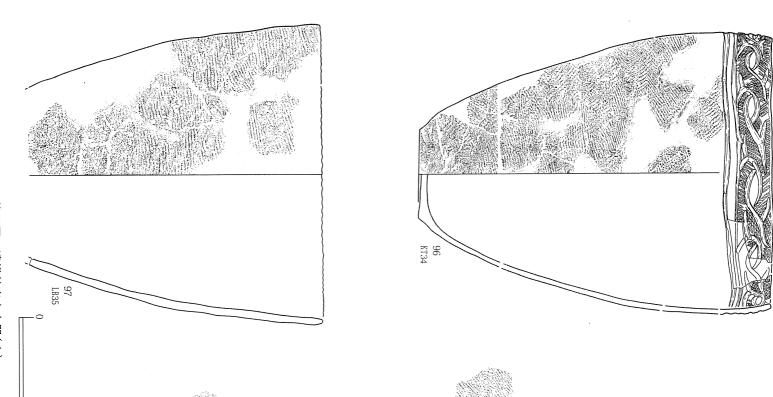
② 縄文時代中期後葉から後期前葉の土器(第68図118~125)

3 軒検出されている竪穴住居跡がいずれも中期末葉の時期と考えられ、それらが31ライン以南にあることから、この期の土器の出土もほぼこのライン以南に限定される。土壙墓の埋土中から出土したものを含めても約30片の出土である。

118は、RL縄文の縦位回転の地文に雑な平行線で楕円形文などを施文している。119は、胴下部の破片で、無文地を沈線で区画し、中を縦位の条線で充填している。120も胴下部で、縦位の条線を施している。121・122は、胴部に撚糸文が施されており、122は網目状である。123は大きく外反する波状口縁の深鉢形土器である。波頂部からは低い隆帯が弧を描いて口縁部に平行する隆帯に繋がる。隆帯上には連鎖状の刺突文が施されており、2つの隆帯の接合部には円形の刺突文が付されている。また波頂部の下には円形の小孔が1個ある。124・125はこの時期のものと考えられる底部破片である。底面に、124は木葉文、125は網代痕が付いている。

③ 縄文時代後期後葉の土器(第69図126~128)

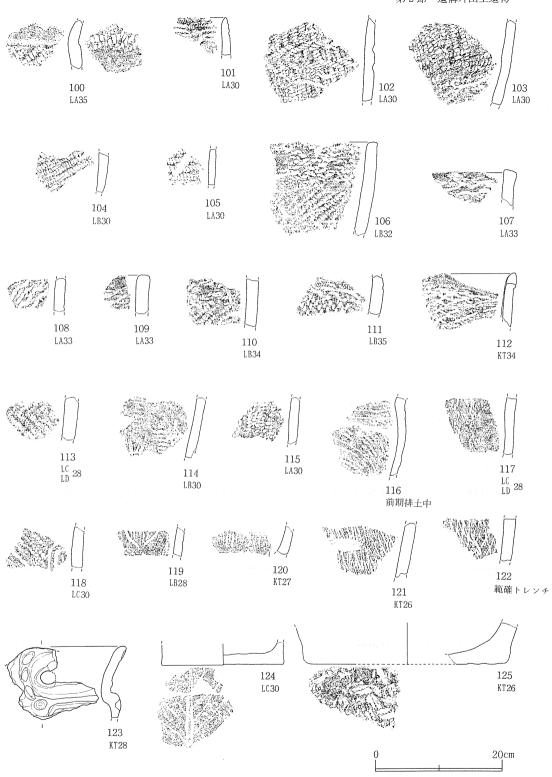
この期の土器は、調査区北部のKT34グリッドから出土した同一個体の3片だけである。126・127は口縁部で、127には王冠状の突起がつく。平行沈線で入組文が描かれており、入組文の中は縦位の細かい刻列で充塡されている。



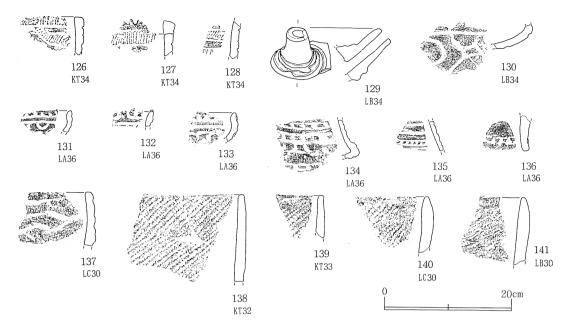
98 LB35

第67図 遺構外出土土器(1)

, 99 Tr32



第68図 遺構外出土土器(2)



第69図 遺構外出土土器(3)

④ 縄文時代晩期の土器(第69図129~141)

この期の土器は、調査区内全域に散在している。粗製深鉢形土器が多い。精製土器は少なく、破片だけで、完全な形に復原できるものはない。

第69図129は注口土器の注口部で、130がその胴下部である。よく研磨された器面に三又文と思われる文様が施文されている。131~135も注口土器の破片で、131~133が口縁部、134と135が胴部の破片である。136は台付鉢の台部である。

遺構外から出土した土器で、全体の形を復原できたものは、この期の深鉢形土器 2点(第67図96・97)だけである。96は、KT33・34グリッドを中心に、第III層上面に散在して出土した。口縁部がわずかに内弯し、ふくらみのほとんどない胴上部から胴下部に向かって緩やかにすぼむ。底部は上げ底で外面が若干直立気味となる。口径28.4cm、器高37cm、底径9.3cmである。平口縁で、口縁部には、LR縄文とRL縄文の2種類の地文上に三又状の入組文が施文され、横位に展開している。胴部の縄文とは2条の平行沈線で文様帯を画している。胴部の縄文も口縁部と同じ2種類の原体である。煤状炭化物が外面には胴中部以上、内面下部には幅約8cmの帯状に付着している。底部外面には、ていねいなケズリ痕が残り、内面も調整痕は明瞭でないものの器面が整えられている。焼成も良く、全体的に本遺跡出土の深鉢形土器の中では、最も良く作られている。97と98・99(98・99は同一個体)はLB35グリッド第III層中から出土したもの

で、今次調査区内では唯一まとまって出土したものである。97は口縁部が直立し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる。底部を欠いている。口唇部には、刻みが密接して付されており小波状口縁となっている。98・99は同一個体で、口縁部が外反し、胴下部に向かってすぼまるが、胴下部でやや急にすぼまる可能性もある。口唇部に刻みがあり、小波状口縁となっている。口縁部は無文で、胴部には97と共に縄文が施文されている。97・98は、胎土中に海綿状骨針を含み、内外面に煤状炭化物が付着している。137~141は深鉢形土器の口縁部である。いずれも口縁部が直立もしくはわずかに内弯し、胴下部に向かって緩やかにすぼまる器形と考えられる。137は口縁部が無文で、沈線による三又状の入組文が施文されている。138~141は口縁部からLR縄文が施文されており、140・141の口縁端部は尖り気味である。

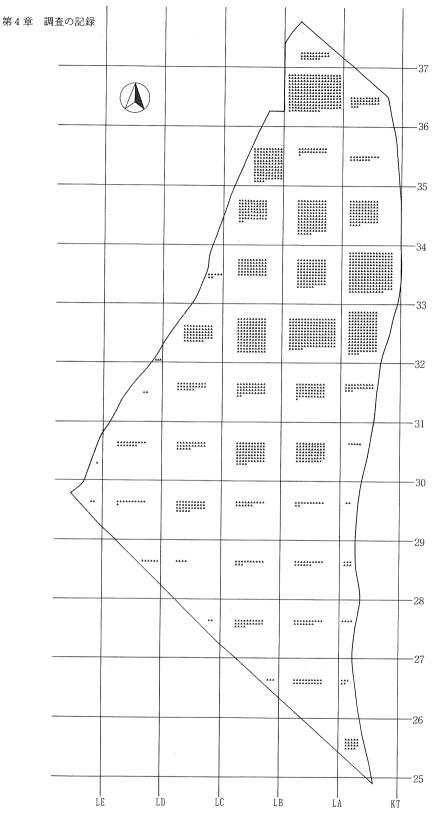
以上の晩期土器群も晩期前葉に属するもので、中葉に入るものはない。

2 石器

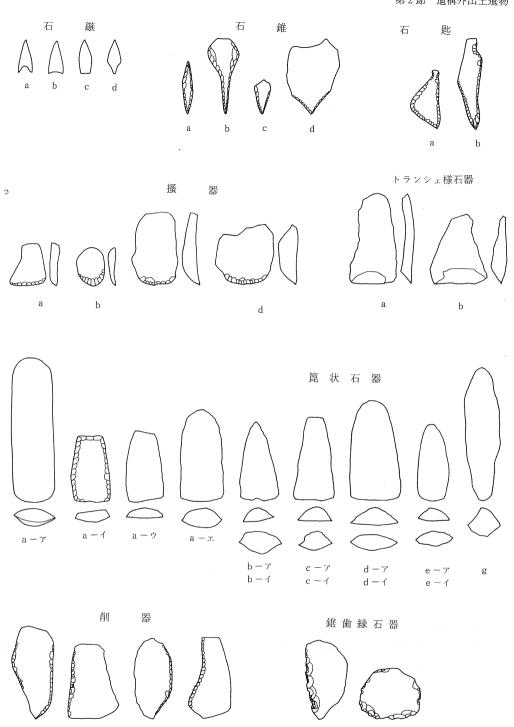
出土した石器は遺構内外合わせて500点を越える。出土した石器は、剝片石器、磨製石器、 礫石器に3大別できるが、磨製石器は磨製石斧の刃部破片が2点出土しているのみであり、礫 石器も18点である。従って、剝片石器が全出土石器の90%以上を占めていることになる。

剝片石器には、石鏃、石錐、石槍、石匙、搔器、トランシェ様石器、篦状石器、削器、鋸歯縁石器の9器種、礫石器には、半円状扁平打製石器、凹石、磨石、角柱状礫、両刃礫器の5器種、磨製石器は先述したように磨製石斧のみである。

調査区内での石器の疎密は、土器と同様、畑の耕作による撹乱を受けていない調査区北部が多い傾向にはあるが、それほどの違いはない。また、剝片石器を除いた大〜小型の剝片やチップのグリッド毎の出土点数を示したのが第70図である。これでわかるように、やはり調査区中央から北側で多いことが分かる。しかし、土壙墓内の埋土中から出土した点数を見てみると(第3表)、必ずしも北部の土壙墓埋土中に多いわけではない。このことは、南側の土壙墓を構築する時には北部と同等に剝片等が散在していたことを示すものであり、南側では、耕作による撹乱によって、包含層が消失した状態に近いことを物語っている。また、一定の器種が一定部分に集中する傾向は、多くは認められないが、トランシェ様石器と石匙はこの傾向にある。トランシェ様石器は、LBラインよりも東側で33ラインよりも北側、つまり調査区全体から言えば北東部に限定されていることになる。また逆に石匙は、34ライン以南に限られ、それ以北からは出土していない。剝片石器の石材は、SK105土壙墓内から出土した石鏃(第39図32)が1点だけ黒曜石で他はすべて頁岩である。また、剝片類を含めた出土石器中には被熱によって色が変化したり火ばねを起しているものもある。なお、破片石器の一部ではあるが、大部分が欠損しており、器種の特定できないものが、前述した500点余以外に約90点ある。



第70図 剝片類・グリッド別出土数量分布図 ▲マークは剝片類10点を表わす。



第71図 出土石器分類模式図

これら石器群の所属時期については、共伴する土器の絶対量が少なく、また遺構群の主体を 占める晩期にあっても、遺構が石器製作及びその使用にはほとんど係りないと考えられる土壙 墓、土器棺墓であり、また該期の捨場も存在しない。一般的には、篦状石器が非常に多く、こ れにトランシェ様石器などが加わるところから、前期もしくはそれ以前のものが主体を占める ように看取されるが、個々の石器の時期を特定する決め手は少数例を除いてない。

. 約25,000点、約280kg出土した剝片類は、石核や大型の剝片を含むものの、そのほとんどは 剝片剝離の際に生じた小剝片や大型の石器製作の際に生じた剝片・チップである。以下、各器 種毎に述べるが、第71図に各器種の分類模式図を示した。

① 石鏃

小型、扁平で左右対称、横断面形がうすい凸レンズ状を呈し、尖頭部を持つ。遺構外からは 10点出土しており、基部の形態によって4類に分けられる。

- a: (第72図75・76): 基端中央が大きく凹み、基端両側が外に張り出すように尖るものである。 2点出土している。
- b:(第72図77~80):基端中央がわずかにしか凹まないものである。5点出土している。
- c:(第72図81):基端が平らで、両側縁が平行するか基部側に向かってわずかにすぼむものである。SK125土壙墓の底面から出土した3点の石鏃(第40図42 \sim 44)もこの類である。1点出土している。
- d:(第72図82):基端中央に茎を持つものである。2点出土している。 原則として、矢の先端に番えて用いたと考えられる石器である。

② 石錐

断面形が菱形・三角形・凸レンズ状の尖頭部を持つ。つまみ部の有無、錐部の形状によって 4類に分けられる。

- a: (第72図83): 器中央部がわずかに膨らみ、両側に錐部を持つような棒状のものである。 2 点出土している。
- b:(第72図84~86):長い棒状の錐部を持ち、基部側が大きく広がり「つまみ部」となっているもの。つまみ部は、ほぼ全面でいねいに二次加工されているものと(84・85)、あまり調整されていないもの(86)とがある。5点出土している。
- c: (第72図87~89): 二等辺三角形状の小型剝片の、尖る側に錐部を作出したもの。基部側が つまみ部と考えられるが、錐部との境が不明瞭である。4点出土している。
- d: (第72図90・第73図91): 中~大型の剝片の一端に小さな錐部を作出したもの。錐部がねじれるもの(90)がある。2点出土している。

石製の錐(ドリル)と考えられている石器である。

③ 石槍

全体の形状と二次加工のあり方で2類に分けられる。各1点ずつ出土している。

- a:(第73図92):表裏全面にていねいな二次加工を施し、両端が尖るものである。
- b:縦長細身の剝片の両側縁に、表裏いずれかの面から二次加工を施し、全体に槍先状に仕上 げたものである。

鋭く尖る先頭部を持つ石器である。槍の先端に番えた槍と考えられる。

4 石匙

基端の両側縁からえぐりを入れて作出したつまみ部を持ち、片面からの加撃によって刃部を 作っている。刃部の形状によって2類に分けられる。 a 類が8点、b 類が5点出土している。

- a: (第73図93~95): つまみ部の中軸線にほぼ平行する刃部を持つものである。つまみの中軸線に対し、先端の辺が斜行するものが多い。
- b:(第73図96・97):器幅が小さく細身で先端が鋭く尖るものである。 用途の多いナイフ等としての機能を有すると考えられている石器である。

(5) 搔器

剝片の一端もしくは一辺に片面調整による急斜度の刃部を作出している。器全体の大きさや 刃部の形状によって4類に分けられる。 a・b類が各々3点、c・d類が各々4点出土している。

- a: (第73図98~100): 小型厚手の剝片の一端に刃部を作出したものである。
- b:(第74図101):器厚がらすく、刃部の角度も比較的小さな斜度のものである。
- c:(第74図102・103):大形で縦長の剝片を素材にし、その一端に急斜度の刃部を作出したものである。
- d: (第74図104・105): 大形で長さと幅がほぼ等しい分厚い剝片の、 $1\sim 2$ 辺もしくは一端に 急斜度の刃部を作出したものである。

主に皮なめし等に用いたと考えられている石器である。

⑥ トランシェ様石器

先端部の第一次剝離面を刃部としていることに最大の特徴があり、刃部を挟む二側辺に二次加工を施したものである。大形で分厚い横長剝片を素材とするようである。器全体の形状によって2類に分けられる。

- a: (第74図106~第75図111):全体の形状が二等辺三角形もしくは揆形に近いものである。 109の刃部表面側は節理面である。
- b: (第75図112・113): 器長に対する刃部幅が大きく、aに比べて寸づまりの感じがするものである。分厚い。

用途は篦状石器に似ていると考えられるが、詳細が不明な石器である。

⑦ 箆状石器

細長く、両側辺が整えられて平面形が短冊形・二等辺三角形・揆形などのいわゆる"へラ"状を呈する。先端部に刃部があり、刃部が片刃のものを主体とする。全体の形状によって7類に分けられ、さらに各々が断面形などによって細別される。本遺跡出土石器中では圧倒的に多い器種である。

- a:両側辺が平行する短冊形のものである。調整の部位や断面形状などによって4細別される。 アが14点、イが2点、ウが8点、エが11点出土している。
 - ア: (第75図114~第76図118): 断面形状が凸レンズ状を呈し、刃部が丸のみ状になるものである。比較的大型のものが多く、小型のものはない。
 - イ: (第77図119・120): 裏面の両側縁と基端に、組織的で急斜度な調整が施されるもの。SK 127土壙墓埋土中出土のもの(第41図49)が典型例である。
 - ウ: (第77図121~123): 裏面への調整がほとんどないか、平坦剝離によっているため、裏面が平坦で、断面形が板かまぼこ形のものである。
 - エ: (第77図124~第78図130): 断面形が凸レンズ状であるが、刃部が丸のみ状にはならず直 刃かそれに近いものである。 a 類の中ではほとんどなかった小型のもの(129・130)が含 まれる。
- b:基端が尖るか丸身を持って尖るため、平面形状が二等辺三角形もしくはそれに近い形のものである。断面の形状によって2細別される。アが11点、イが26点出土している。
 - ア: (第78図131~第79図139): 裏面への調整がほとんどないか、平坦剝離によっているもので、断面形が板かまぼこ状のものである。
 - イ:(第80図140~149):断面形が凸レンズ状を呈するものである。ア類にはほとんど見られなかった全長約5 cm以下の小型のもの(144~149)も多い。
- c:基端に明瞭な辺を持つため、平面形が揆形を呈するものである。断面の形状によって2細別される。アが13点、イが38点出土している。
 - ア:(第81図150~155):断面形が板かまぼこ状のものである。
 - イ:(第82図156〜第83図169):断面形が凸レンズ状のものである。167〜169は全長が 6 cm未満の小型のものである。
- d:基端が丸味を持つものである。断面の形状によって2細別される。アが2点、イが30点出 土している。
 - ア: (第84図170・171): 断面形が板かまぼこ状のものである。
 - イ:(第84図172~第85図183): 断面形が凸レンズ状のものである。179~183は全長 6 cm以下の小型のものである。

 ${f e}: {f c}$ 類と ${f d}$ 類の中間的なもので、どちらとも言えないようなものを一括した。断面形によって 2 細別される。アが10点、イが15点出土している。

ア:(第86図184~187):断面形が板かばぼこ状のものである。

イ:(第86図188~第87図193):断面形が凸レンズ状のものである。

 $f: d \sim e$ 類に含まれると考えられるが欠損するなどして分類不能なものである。断面形によって 2 細別される。アが 9 点、イが18点出土している。

ア:(第87図194~196):断面形が板かまぼこ状のものである。

イ:(第88図197~201):断面形が凸レンズ状のものである。

g:器中央部に最大幅と最大厚があり、両端に向かってすぼむ棒状を呈するものである。第88 図202の1点だけの出土である。

木材加工用の斧、あるいは土掘り具などの用途が考えられるが、未だ詳細が不明な石器である。

8) 削器

大小の剝片の $1\sim2$ 側縁に二次加工によって刃部を作出した石器である。刃部二次加工は片面からの加撃によって行われるものが圧倒的に多く、また、刃部以外からの刃潰し的な加工や、器全体形を整えるための加工も少ない。刃部の平面形状などによって4 類に分けられる。a が 11 点、b が 7 点、c が 16 点、d が 4 点出土している。

a:(第89図203~209 $):2 \sim 3$ 辺に刃部が作出されており、つまみ部のない石匙に似ている。

b:(第90図210~212): 刃部が直線的なものである。

c: (第90図213~第91図220): 刃部が弧状に膨らむものである。

d: (第91図221・222): 刃部が弧状にくぼむものである。

主にものを切るための石器と考えられる。

⑨ 鋸歯縁石器

分厚い剝片の側辺にやや間隔をおいて二次加工を施して、鋸歯状の刃部を作出した石器である。刃部の形状により2類に分けられる。 a が 4 点、 b が 2 点出土している。

a: (第92図223~225):直線的な刃部が1~2側辺に作出されるものである。

b:(第92図226):断面形が凸レンズ状の、分厚い残核などの縁辺に刃部を作出したものである。 ものを引き切ったりする用途を持つ石器と考えられる。

⑩ 両刃礫器(第92図227)

分銅形の河原石の一端に両面から粗い刃を作出して、チョッピング・トゥール状に仕上げた 石器で、1点だけ出土している。

① 凹石(第93図228~230)

拳大~その倍の河原石の中央部が敲打によって凹んでいる石器である。表裏面共に $2 \sim 3$ ヶ所凹むものが多い。石材は安山岩が多い。11点出土している。主に竪果類の殻割り等の用途を持つと言われるが、詳細は不明な石器である。

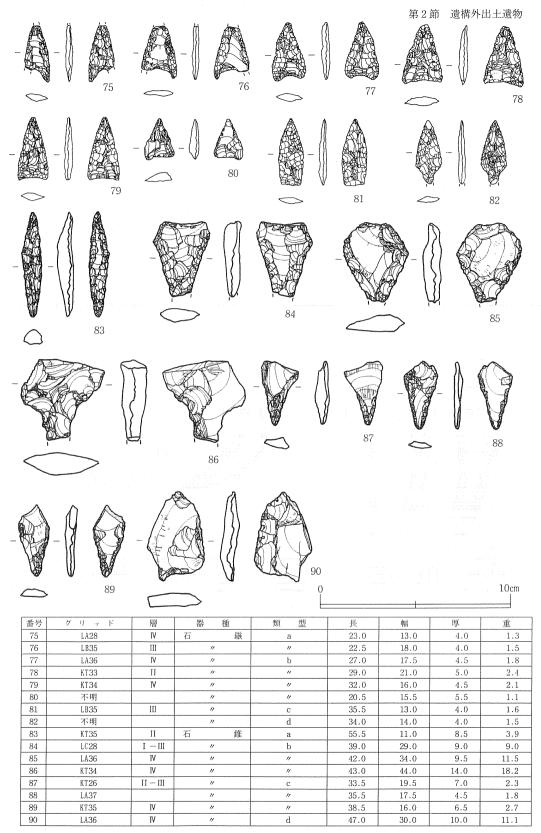
(12) 磨石(第93図231)

ものを磨く、もしくは面を滑らかにする等に用いられた石器と考えられる。円形で扁平な河原石の両面中央部がすられてツルツルしている。1点だけ出土している。

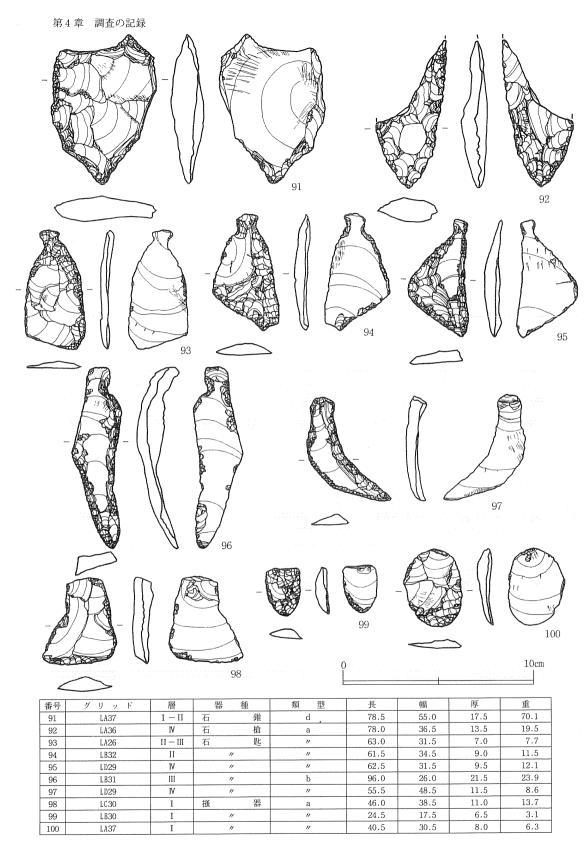
13 角柱状礫(第93図232~234)

敲く、擦る等の痕跡に乏しく、石器としての認定が困難なものが多いが、手ズレ様の痕跡がかすかに見えるものもあり、ここでは一応何らかの目的に供せられた石器として扱った。石英安山岩等の石材で、出土状態は散在することが多かった。7点出土している。

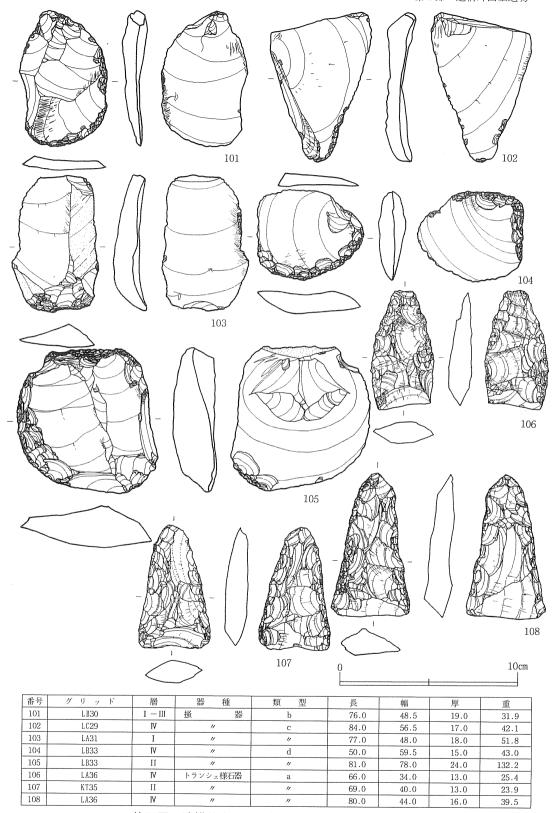
用途は全く不明の石器であるが、縄文時代の遺跡には比較的多く見られるものである。



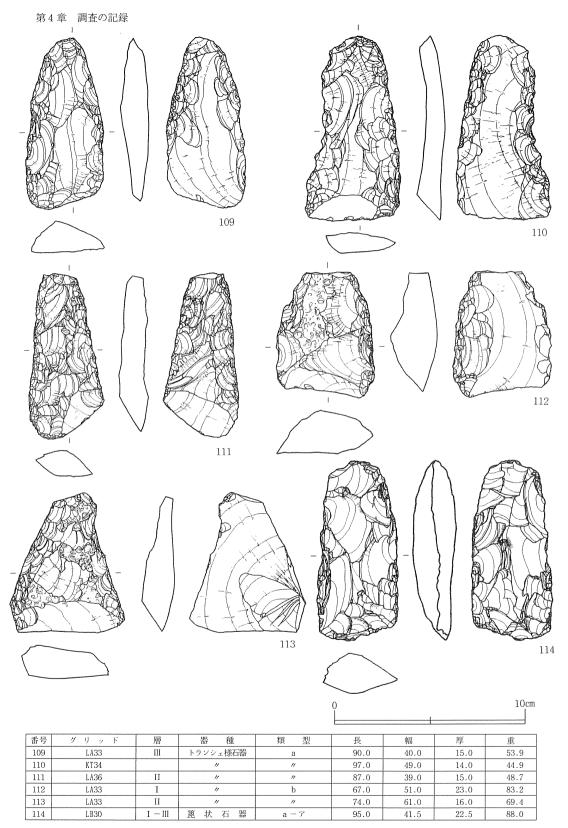
第72図 遺構外出土石器(1) 石鏃·石錐



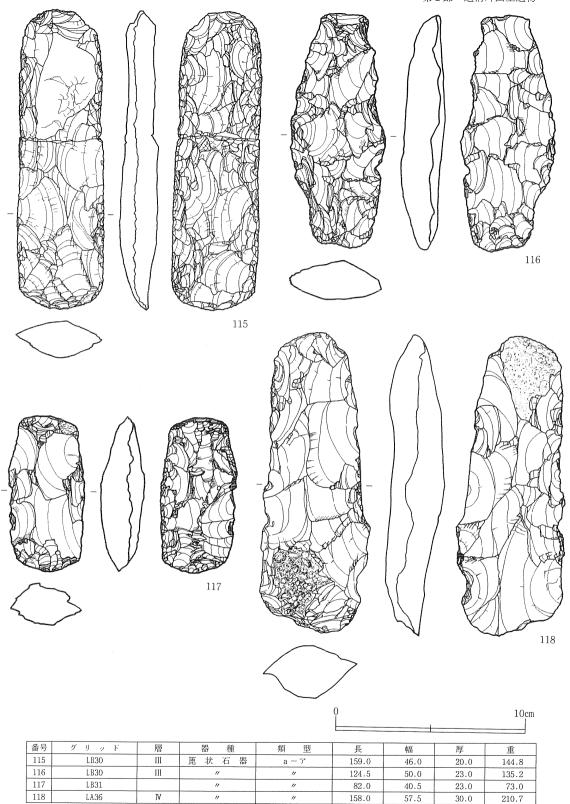
第73図 遺構外出土石器(2) 石錐・石槍・石匙・掻器



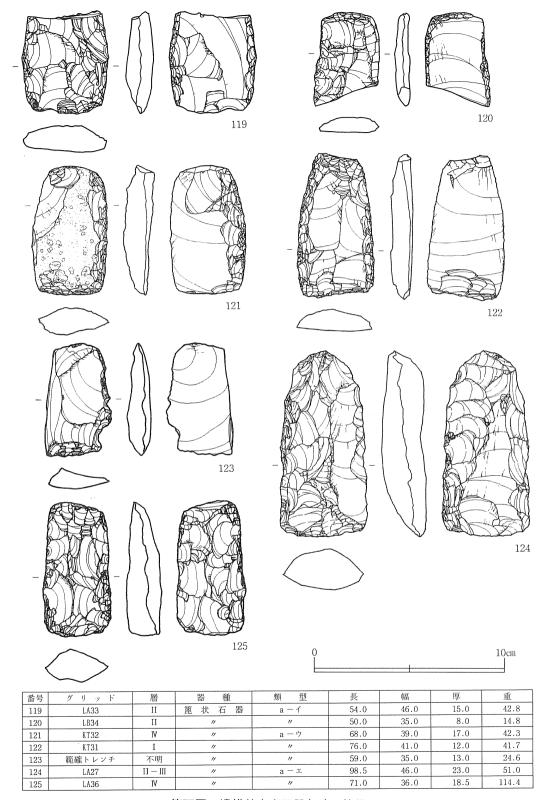
第74図 遺構外出土石器(3) 掻器・トランシェ様石器



第75図 遺構外出土石器(4) トランシェ様石器・箆状石器

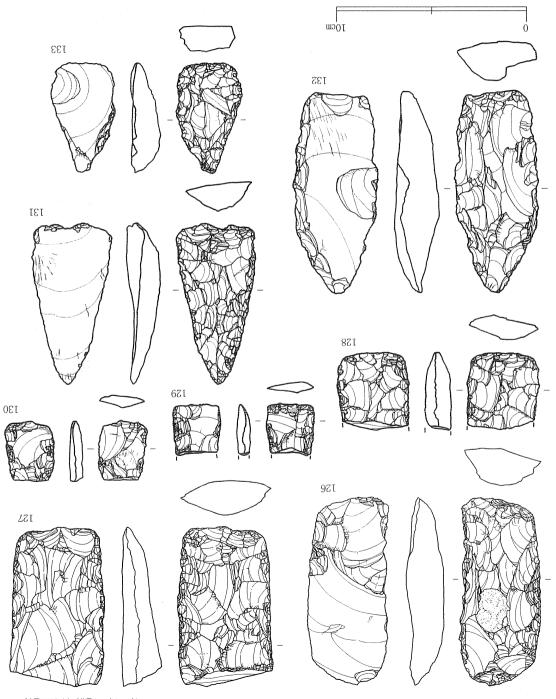


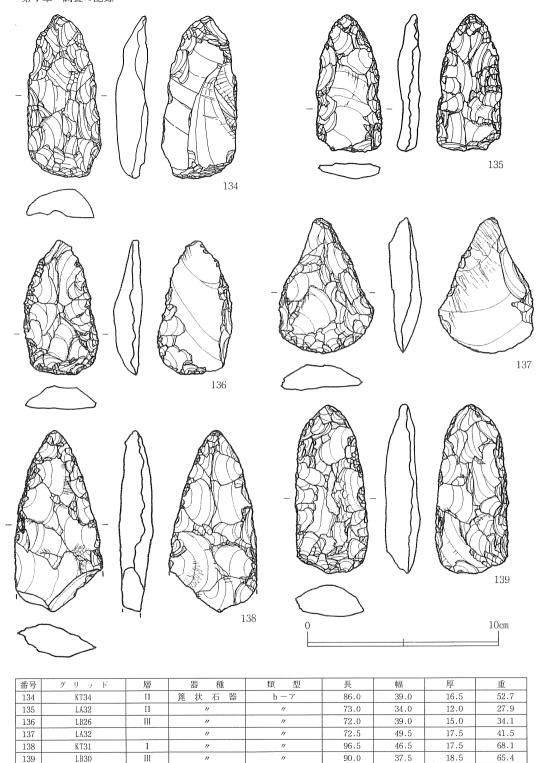
第76図 遺構外出土石器(5) 箆状石器



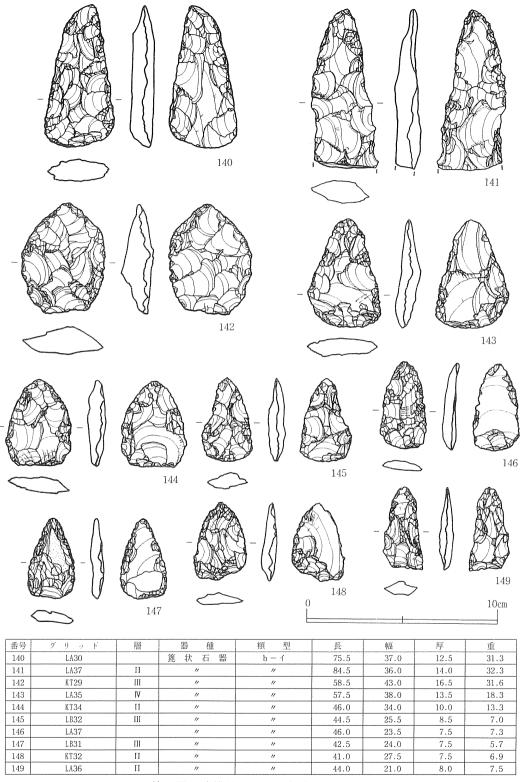
第77図 遺構外出土石器(6) 箆状石器

8.32	0.81	3.4.5	6.86	"	"	III	FV30	133
1.66	0.4s	g.£₽	0.701	"	"		LB35	132
I.9ħ	0.81	G.IA	3.38	∠ – q	"	II	キベイイ郵頭	ISI
7.3	B.7	S. SS.	0.18	"	"	Λĺ	FY36	130
₽.ĉ	G.7	0.82	0.72	"	"	Λl	9871	129
£.22	0.4I	3.78	0.14	"	"	III	FC30	128
1.68	0.12	0.64	0.88	"	"	"	KT33	127
7.78	0.02	42.0	0.66	T — B	器 环 狀 顫	土塾	KT33	126
事	卣	即	골	歴 顔	事 器	퇸	4 6 6 4	음果

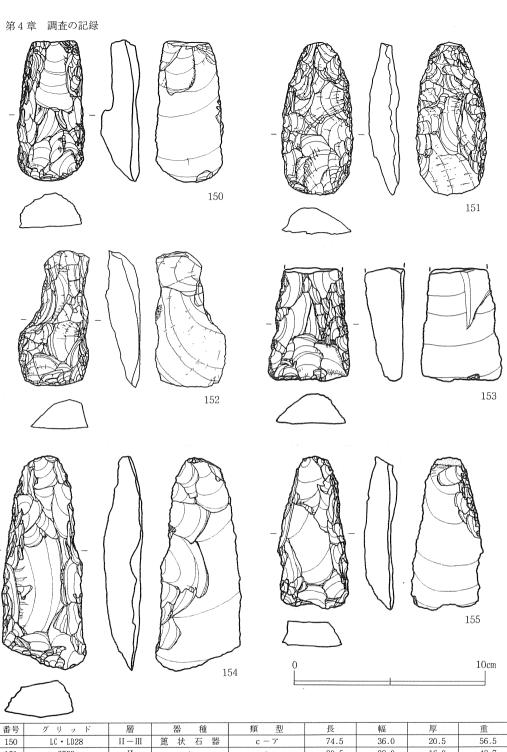




第79図 遺構外出土石器(8) 箆状石器

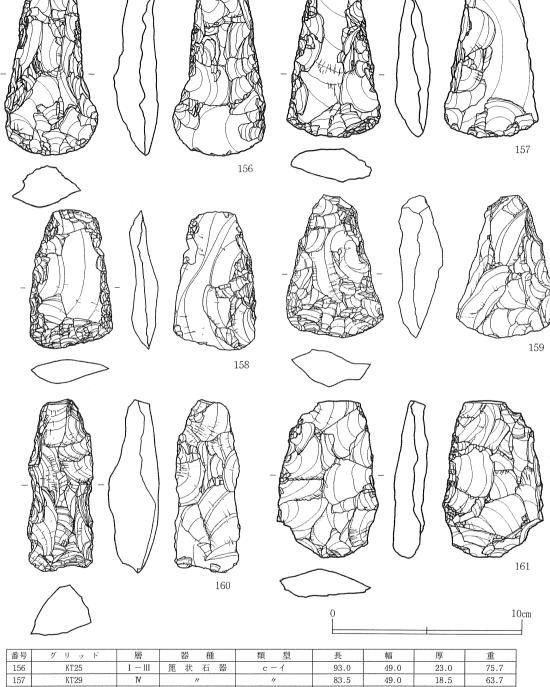


第80図 遺構外出土石器(9) 箆状石器



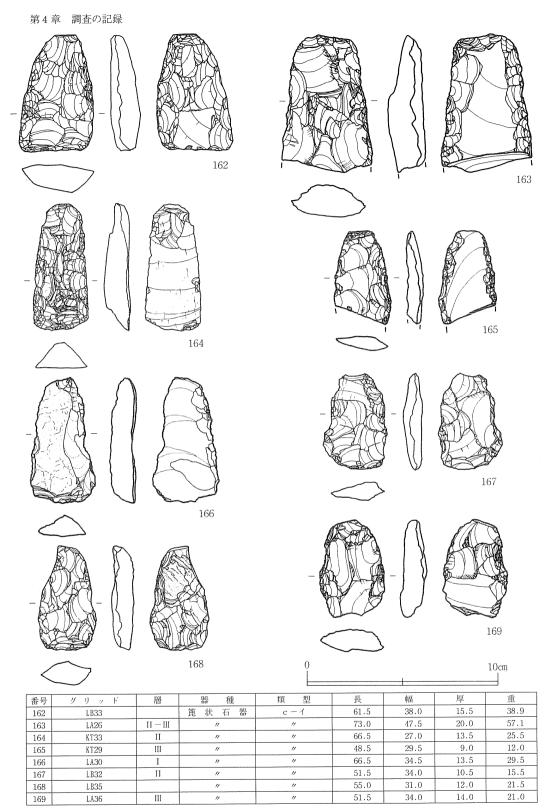
番号	グリッド	層	器種	類型	長	幅	厚	重
150	LC · LD28	II — III	篦 状 石 器	c - ア	74.5	36.0	20.5	56.5
151	KT33	II	"	"	80.5	38.0	16.0	43.7
152	LB35	III	"	"	72.0	37.0	18.5	40.8
153	LA29	III	"	"	59.5	43.0	21.5	38.1
154	LC31	III	"	"	113.5	45.0	21.0	98.7
155	LA30	I	"	"	81.0	37.0	16.5	53.0

第81図 遺構外出土石器(10) 箆状石器

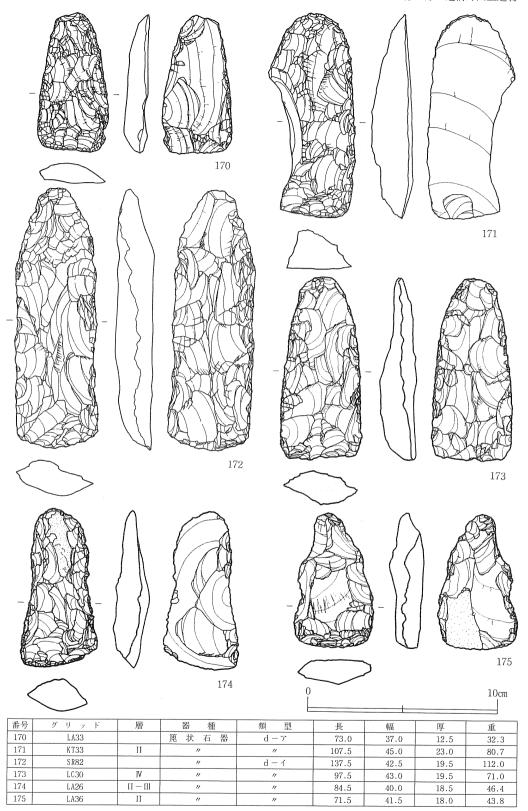


番号	グリッド	層	器 種	類 型	長	幅	厚	重
156	KT25	I – III	篦状石器	c – 1	93.0	49.0	23.0	75.7
157	KT29	ĮV.	"	"	83.5	49.0	18.5	63.7
158	LA32	ΙV	"	"	73.0	44.0	15.0	38.3
159	KT34	īV	"	"	75.0	51.5	23.5	64.5
160	LB32	II	"	"	92.0	35.0	26.0	65.3
161	LC31	III	"	"	83.0	53.0	18.0	71.2

第82図 遺構外出土石器(11) 箆状石器



第83図 遺構外出土石器(12) 箆状石器



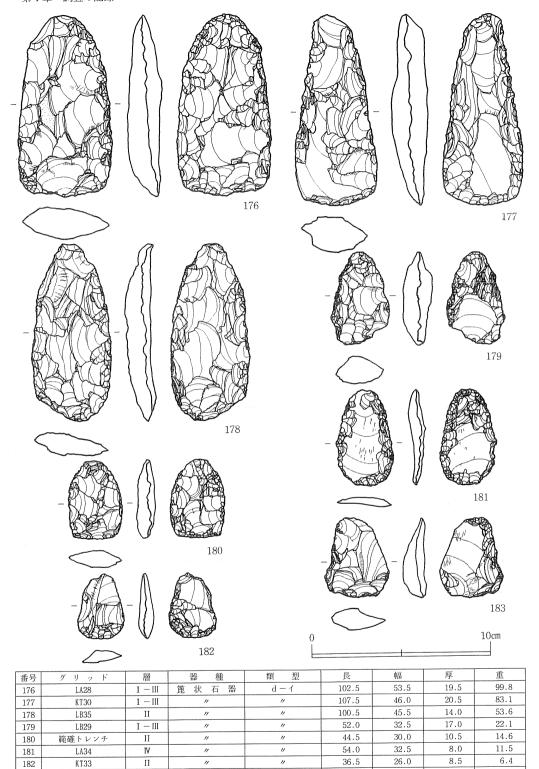
第84図 遺構外出土石器(13) 箆状石器

182

183

LA37

I - III



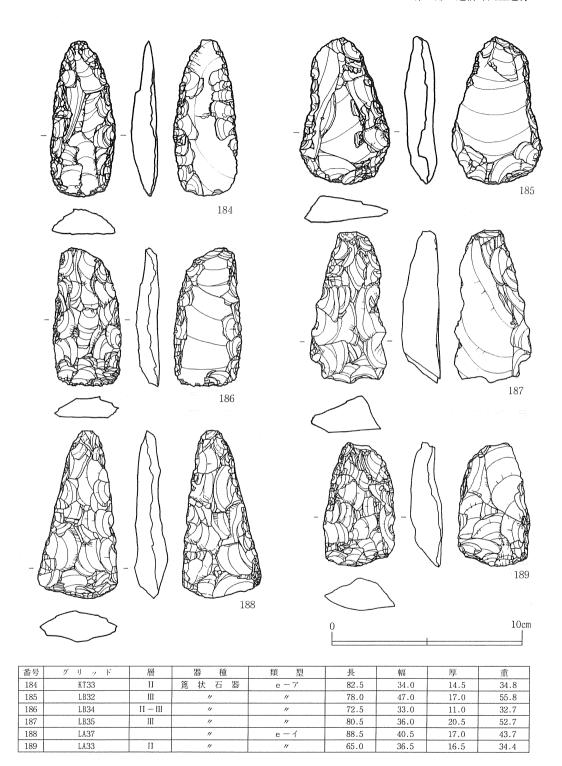
遺構外出土石器(14) 箆状石器 第85図

45.0

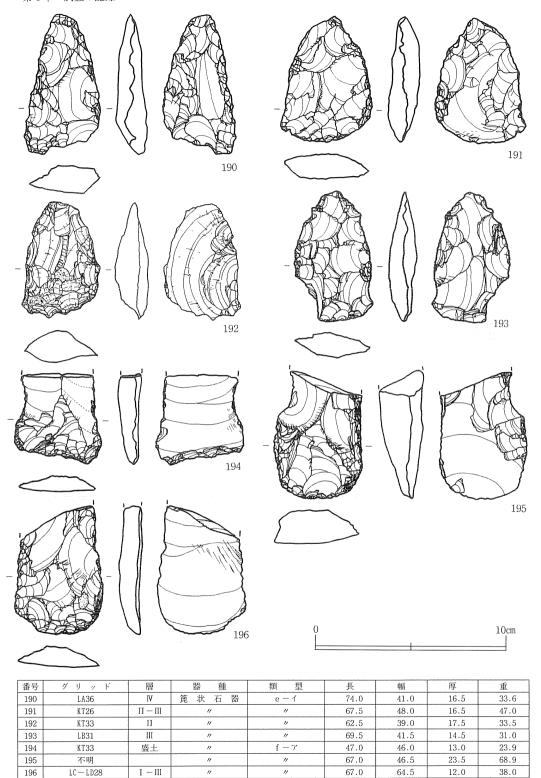
35.0

13.0

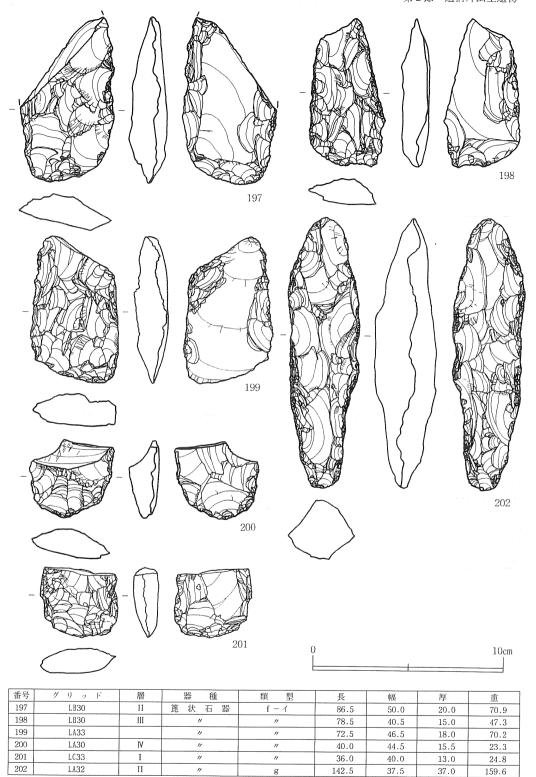
16.0



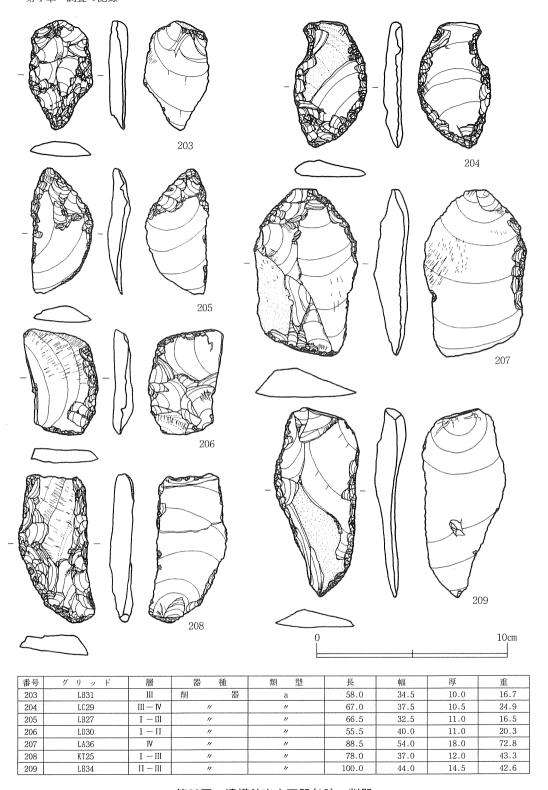
第86図 遺構外出土石器(15) 箆状石器



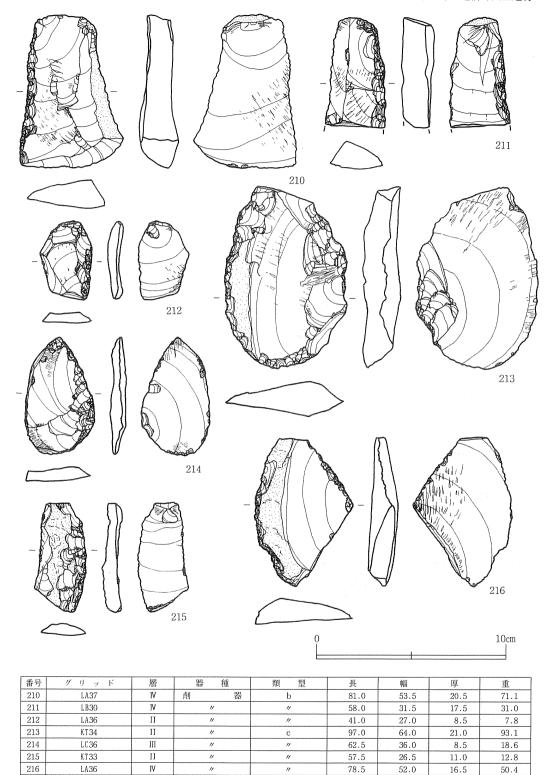
第87図 遺構外出土石器(16) 箆状石器



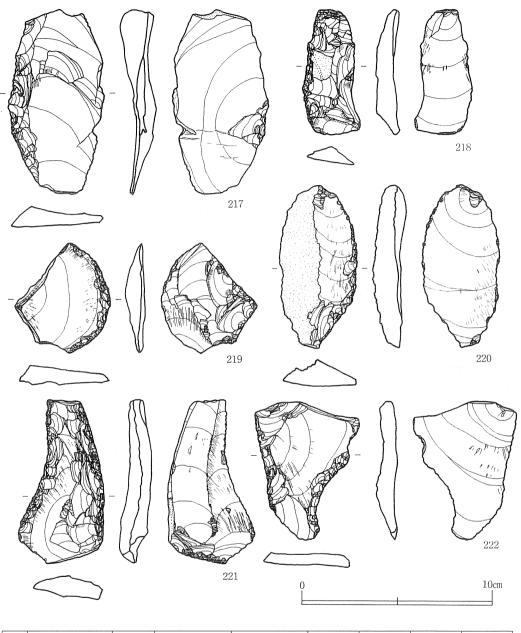
第88図 遺構外出土石器(17) 箆状石器



第89図 遺構外出土石器(18) 削器

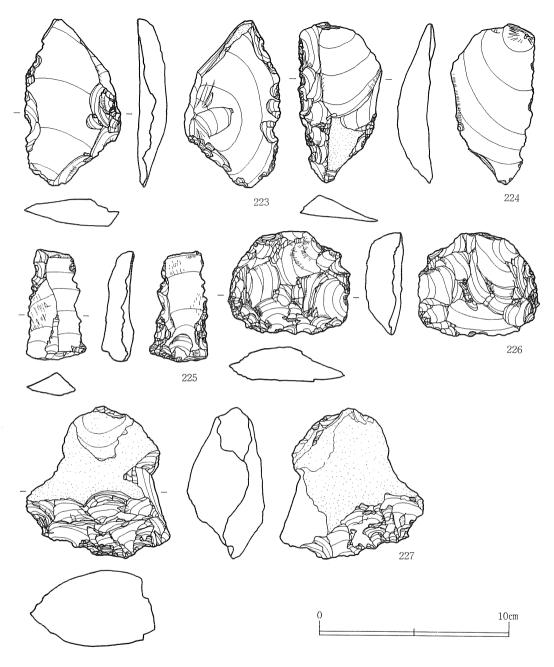


第90図 遺構外出土石器(19) 削器



番号	グリッド	層	器種	類 型	長	幅	厚	重
217	LB34	II	削器	С	97.0	51.0	19.0	52.9
218	LA31	I	"	"	66.0	30.5	18.0	16.9
219	LA30	III	"	"	58.0	50.0	10.5	21.1
220	LA36	īV	"	"	86.0	40.5	12.5	50.7
221	KT33	II	"	d	87.0	45.5	17.0	43.9
222	KT36	II — IV	"	"	73.0	54.0	11.0	25.9

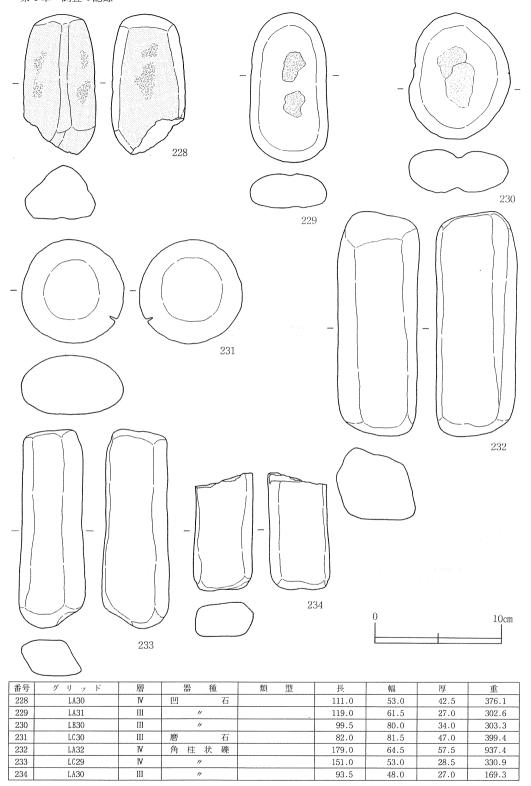
第91図 遺構外出土石器(20) 削器



番号	グリッド	層	器種	類 型	長	幅	厚	重
223	LB31	I	鋸歯縁石器	a	89.5	50.0	17.0	52.9
224	LA26	11 — 111	"	"	85.0	43.0	19.0	40.8
225	KT29	III	"	"	59.5	31.0	17.5	22.5
226	LA37	II	"	ь	54.5	64.0	19.0	69.1
227	LC31	III ·	両 刃 礫 器		80.5	76.0	40.5	206.2

第92図 遺構外出土石器(21) 鋸歯縁石器・両刃礫器

第4章 調査の記録



第93図 遺構外出土石器(22) 凹石·磨石·角柱状礫

第5章 まとめ

発掘調査の結果、縄文時代晩期を主とする111遺構が検出され、同前期と晩期を主とする遺物がコンテナで123箱出土した。遺構の内訳は、縄文時代中期末葉の竪穴住居跡3軒の他、晩期前葉の土壙墓60基(他に1基が前期)・土器棺墓33基・土坑3基・配石遺構2基・柱穴様ピット6基・性格不明遺構2基(他に1基は前期)である。

検出遺構の主体は、縄文時代晩期前葉の土壙墓と土器棺墓等で、これらで該期の埋葬区が形成されている。以下には、土壙墓、土器棺墓、埋葬区についてまとめてみたい。

第1節 土壙墓

1 土壙墓の形態

(1) 平面形

60基の土壙墓のうち、その平面形が明らかなのは54基である。これらの土壙墓の平面形は、 基本的には楕円形と円形とに分かれる。楕円形はさらに細部の点で4つに分けられ、全体としては5つの平面形になる。

精 円 形 : 長軸と短軸に差があり、向かい合う辺が緩く弧を描くもの。長軸と短軸の 比(以下長短比という)が1.5~2.2:1の範囲である。27基と最も多い。

楕円形(ズ) :楕円形ではあるが、長軸と短軸に大きな差がなく、ずんぐりした形のもの。

長短比が1.2~1.4:1の範囲である。12基あり、大型で深いものもある。 楕円形(隅丸):向かい合う辺が各々平行で四隅が弧を描くもの。また短辺がわずかに弧を

描くものも、この類とした。長短比が1.5~2.2:1の範囲で、大型のものに多い。5基ある。

第5章 まとめ

楕円形(長) : 楕円形だが、短軸に対する長軸の比が非常に大きいもの。長短比が2.4~

3.2:1の範囲である。6基あり、長大だが浅いものが多い。

円 形 :長軸と短軸にほとんど差がなく、平面形が円形であるもの。長短比が1.1:

1以下。隅丸方形も、この類とした。4基あり、浅いものが多い。

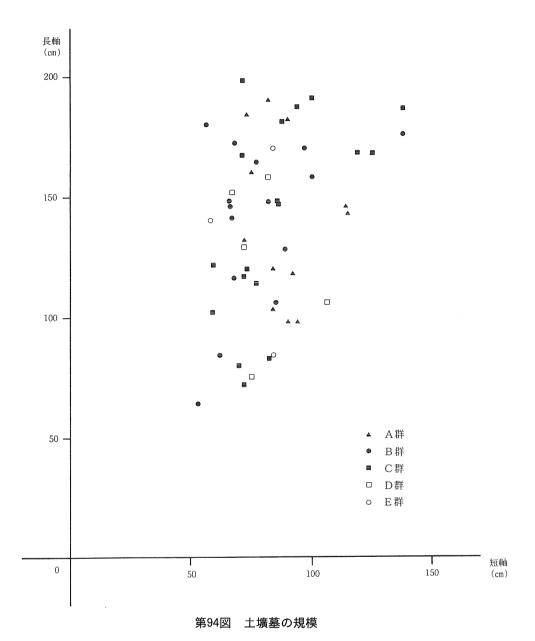
(2) 規模

検出面での各土壙墓の規模は、第94図に示した通りである。この中で、長軸が最も大きいのがSK79の198cm、最も小さいのがSK72の64cm、短軸が最も大きいのが、SK92・127の138cmである。深さは、最深がSK68の62cm、最浅がSK122の10cmである。また、5つの平面形の平均値は、楕円形:長軸123cm×短軸82cm、深さ34cm、楕円形(ズ):長軸130cm×短軸99cm、深さ15cm、楕円形(隅丸):長軸163cm×短軸78cm、深さ35cm、楕円形(長):長軸174cm×短軸66cm、深さ22cm、円形:長軸91cm×短軸88cm、深さ23cm、である。

(3) 埋土

壙内の埋土中には、多寡の差はあれ、地山粘質土粒子(ブロック)あるいは地山砂礫土が混在しており、掘削後は時間を置かず埋めもどされている。壙内の埋土は、掘られた場所、(残存している)深さによって各々が微妙に異なっているが、類型化すれば第95図のようになる。(第95図は土壙横断面を表す)

- a類:壙掘り込み面にあったと考えられる基本層位第Ⅲ層を主とする褐色〜暗褐色土で、 地山土がシモフリ状に10%以下混在する。全般的にしまり、かたさ共に中〜弱であ る。最も多くの土壙墓に見られる。しかし浅い土壙墓である場合が多いので、耕作 によって上部が削平されている可能性もあり、c・d類であった可能性もある。
- b類:地山土がそれほど顕著ではないが、第Ⅲ層土と地山土とが、地山土が30~50%で混じり合い、褐色を呈する土層となるものである。比較的かたくしまっているものが多い。
- c 類:埋土下部は褐〜暗褐色土であるが、上部に、地山土が50%を占めるような黄褐色土がレンズ状にあるものである。この部分はかたくしまっている。
- d類:本遺跡中では多くはないが、最も目につく類である。壙上部中央に地山土が80%以上を占めるかたくしまった土があり、その周囲と下部に暗褐色土があるものである。このため、検出面での平面形は、地山土が楕円形にあり暗褐色土がそれを取り巻くドーナツ状を呈している。本遺跡で土壙上部中央に立石のあるSK10・102は、いずれもこの類である。深い土壙墓に見られる。
- e 類:検出面での土色の分布が d 類とはちょうど逆になるもので、中央部に暗褐色土、その周囲に地山土との判別が困難な程の明黄褐~黄褐色土がかたくしまった状態で分

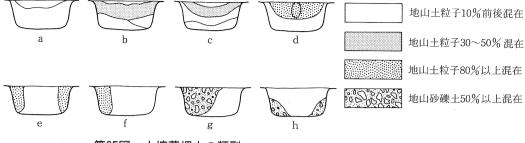


布する。次のf類と共に木棺状の施設の存在を推定させるあり方である。

f 類:e 類と同様であるが、地山土もしくは砂礫土が一方の壁際にのみある類である。

g類:土壙中央部で左右の埋土が違うもので、暗褐色土中に砂礫が50%以上混在している 場合が多い。

h類:土壙中央部以下で、両側の壁の中央から壙中央部に地山砂礫土と変わらないような 砂礫土が分布する類である。従って、この層を残したまま土壙全体を上から見ると、



第95図 土壙墓埋土の類型

中央部が両側からくびれた形に見える。

以上の埋土の類型と平面形との有機的なつながりは見い出せないが、 $d \sim h$ 類は、大きくて深い土壙にほぼ限られる。また、 $d \cdot h$ 類には、ベンガラの散布が認められない。

(4) 壁·底面

壁及び底面に地山砂礫が露出している土壙墓が相当数あるものの、そのために、壁・底面の状態が損なわれることはほとんどなく、壁は滑らかで、底面も概ね平坦である。ただし、底面は長軸方向のどちらか側に緩く上昇するものと、一方もしくは中央がその部分だけわずかに窪むものがある。長軸方向が東西の土壙墓では、東上がりがSK10・68・91・103、西上がりがSK23・106で、SK21では中央が、SK22では西側が窪む。長軸方向が南北の土壙墓では、南上がりがSK08・26・77・79で、北上がりのものはない。このような底面の緩い傾斜等は、埋葬頭位との関わりがある可能性もある。

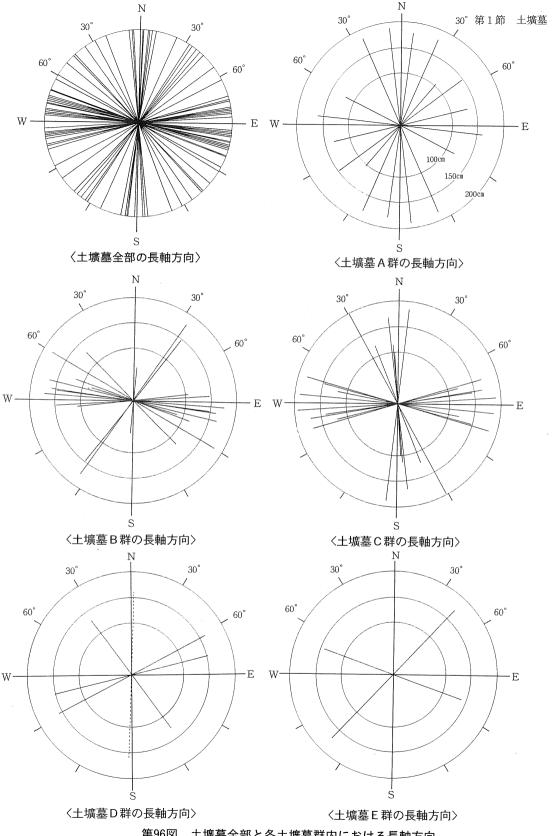
2 長軸方向

第96図上段左が、平面形が円形のものと長軸方向が不明な土壙墓を除いた51基の長軸方向である。これによると、東西軸を中心にする土壙墓が最も多く、次いで南北、両者の中間の順であり、全体としてはかなりのバラつきを感じる。しかし、後述する個々の土壙墓群においては、各土壙墓群内ではかなりまとまりのある結果になっている。

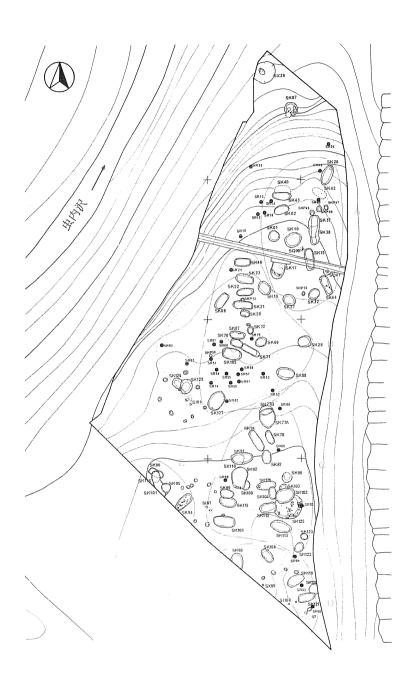
3 ベンガラの散布及び副葬遺物

土壙墓埋土中央〜底面にかけてベンガラの散布が見られる例は、 $SK19 \cdot 21 \cdot 22 \cdot 69 \cdot 91 \cdot 92 \cdot 104 \cdot 108 \cdot 122$ の 9 基で、これに痕跡程度であったSK42を入れると10基となる。60基中10基の 17%である。各土壙墓内におけるベンガラの散布位置は、SK40が不明、SK19が北西側が濃いがほぼ全面、SK22が東西両側にあり西側が濃い、SK21が西側、SK69が中央からやや西側、SK91はほぼ全面、SK92が北側、SK108が北西側、SK122は全面だが西側がやや濃い、となっている。

擴内から出土した遺物は、土器・石器・石剣・勾玉・小玉・赤色漆塗り櫛・石製有孔垂飾品である。土器細片は約半数から、剝片・チップ類はほぼ全土壙墓から出土している。これは、



第96図 土壙墓全部と各土壙墓群内における長軸方向



第97図 土壙墓群・土器棺墓群・墓群

土壙墓群平面形	A 群	B 群	C 群	D 群	E 群	<u>ā</u> +
楕 円 形	02,17,26,38,43	22,23,68,70,105	77B,78,87,89 91,104,112,113 115	98、108、119 120、121	94、101、116	27基
楕円形(ズ)	10,27,32	19,20,(29),69 72,127	77A、92、102			12基
楕円形(隅丸)	15	08,46,67	106			5 基
楕円形(長)	44	21,71	79、126		96	6 基
円 形	01、37		90		95	4 基
不 明	40、42		103,122,123,109			6 基
**************************************	14基	16基	20基	5 基	5 基	60基

第5表 土壙墓群A~E群を構成する土壙墓とその平面形の一覧表

調査区のほぼ全域に、主に縄文時代前期の石器と剝片類が多量に散布していたことによるもので、それらの大部分は土壙墓検出面や底面を除く埋土中に混在する形であった。また、SK105の底面から出土した黒曜石製の石鏃や、SK104の底面から赤色漆塗り櫛と一緒に出土した搔器などの2・3の例を除いた石器も同様である。従ってここでいう副葬遺物に関しては、装着品か副葬品かの判断も含めて非常に難しい。ここでは一応、装着品としていた可能性も含めて、勾玉・小玉・石剣・石製有孔垂飾品・櫛・底面から出土した石器及び、副葬される例が多くある石鏃までを副葬遺物として扱うこととする。

副葬遺物が出土しているのは、SK19が小玉 2 点、SK21が小玉 2 点と石鏃 1 点、SK26が小型壺形土器 1 個と石鏃 1 点、SK40が小玉 9 点、SK42が赤色漆塗り櫛と推定されるもの 1 点、SK69が石鏃 1 点、SK77 A が赤色漆塗り櫛 1 点、SK89が小型壺形土器と皿形土器 A 1 個、SK91が石剣・勾玉・小玉・石製有孔垂飾品 A 1 点、SK92が石鏃 1 点、SK94が石鏃と石錐 A 1 点、SK102が石鏃 1 点、SK104が赤色漆塗り櫛・勾玉・掻器 A 1 点、SK105が石鏃 1 点、SK108が石鏃 1 点の、計15基である。各遺物の出土状況は、各遺構の項で説明しているが、出土位置についてここでまとめると以下のようになる。東側がSK89・91、東北側がSK26、北側がSK92・104、北西側がSK19、西側がSK21、南側がSK77 A・94、中央がSK105で、SK69・102・108は不明である。また、SK40・42は、土壙墓そのものの規模が不明なため、その位置を特定できない。なお、これらの副葬遺物の出土した土壙墓では、ベンガラの散布されているものが多い。ベンガラが散布されていて副葬遺物もあるものは、SK19・21・(42)・69・91・92・104・108の8基で、ベンガラが散布されている場合の副葬遺物出土率は80%である。

4 土壙墓群

南北31~45m、東西7~20mの、細長く北に張り出したような地形の調査区内から、合計60

基の晩期の土壙墓が検出された。60基の土壙墓は、調査区内北端部を除く全域に分布しているが、その分布には疎密があり、平面的にいくつかのまとまり(群)として捉えることが可能である。このまとまりは合計5つ(A~E群)であり、第97図の実線がA~Eの5群のまとまりである。A~E群は、南北に細長い調査区の北から南に連なるようにA~D群があり、調査区南部の台地がやや広がるあたりC群の西側にE群がある。A~D群は各々独立した存在のようにも見えるが、厳密には、例えばA群とB群、C群とD群の境界設定については、確たる根拠に乏しい。以下各群の特徴について述べる。なお、各群を構成する土壙墓とその平面形は、第5表の通りである。

〈A群〉

調査区北部やや東側にあり、14基の土壙墓からなる。群の広がりは南北約13m、東西約7mの楕円形を呈する。土壙墓はSK37・38、40と43が重複する他は、各々が0.4~1.1mの間隔をおいて全体に分散している。平面形では、楕円形の占める率が若干低い他はほぼ全体の構成比に近い。また、各土壙墓の長軸方向と長軸の長さを表したのが第96図上段右である。これによると、長軸方向が特に集中せず分散する傾向にあり、これをB・C群と比べると南北方向の割合が高く、東西方向の占める割合が少ないと言える。しかし、本群中の西側には長軸方向を略東西にする一群、東側には略南北にする一群が存在しているようにも見える。ベンガラの散布しているのはSK42の1基で、副葬品が出土しているのはSK19・40・42の3基である。なお、土壙上部中央に立石のあるSK10が本群の中心部に位置している。

〈B群〉

調査区中央部にあり16基の土壙墓からなる。群の広がりは南北約14m、東西約9mで、南北を高さ、東西を底辺とする頂点が丸い三角形を呈する。群中央部にあるSK67・70・71の3基がわずかずつ重複する他には切り合いがない。平面形では、円形がなく、楕円形の割合が低く、代わりに楕円形(ズ)と楕円形(隅丸)の割合が高い。特に楕円形(ズ)は、全体の半数が本群中に存在している。

本群中の各土壙墓の長軸方向と長軸の長さを表したのが、第96図中段左である。これによると、16基中13基が東西方向を中心に長軸方向があり、その他の3基がこれにほぼ45°に交わる形になっている。また、略東西方向に長軸を持つ土壙墓のうち、8基(北からSK46・23・22・21・20・67・70・105)はほぼ南北に一直線状に並ぶ。長軸方向をほぼ同じくし、しかもそれが一直線状に並ぶことから、本群には強い埋葬規制のあったことが覗われる。また、それらから外れるSK08・127・68・29・19の5基は、本群の外縁を画し、南北に並ぶ土壙墓群を囲む形で分布している。このことも何らかの大きな規制の表象であろうか。これら5基のうちSK29を除いた4基は、比較的に平面形も大きく、深い土壙墓である。

ベンガラの散布が見られたのはSK19・21・22・69の 4 基で、副葬遺物が出土しているのはSK 19・21・69・105の 4 基である。B 群におけるベンガラが散布されている土壙墓の割合は25% で、副葬遺物の出土率もこれに同じである。

〈C群〉

調査区南部東側にあり、20基の土壙墓からなる。群の広がりは南北約12.5m、東西約9 mで、その平面形はB群と同様頂点の丸い三角形を呈する。土壙墓群中では、SK77Aと77B、92と109、102と103・104、104と126が各々切り合っている。土壙墓20基のうち、この切り合い等によって平面形が不明なのがSK103・109・122・123の4基である。他の16基の平面形の比率は、遺跡全体の土壙墓の平面形の比率とほぼ同じである。

平面形が不明な4基と円形の1基を除いた15基の長軸の方向と長さは、第96図中段右の通りである。9基が略東西方向に、6基がこれとほぼ直交する南北方向に長軸方向がある。これをB群と比較すると、B群では東西方向の土壙墓が81%なのに対し、C群では60%である。全体の配列は、土壙墓個々の長軸方向とは関係なしに南西一北東方向に並ぶ一群と、その東側にかたまるような一群、それに南部隅に若干離れる一群が存在するようにも見える。しかしこれを長軸方向から見ると、北部に南北方向を中心とする一群があり、南部に東西方向を中心とする一群があるようにも見える。

ベンガラが散布しているのはSK91・92・104・122の4基、埋葬遺物が出土しているのはSK77A・89・91・92・102・104の6基である。土壙墓数に対するベンガラが散布されている割合は20%、同じく埋葬遺物は33%である。これをB群と比較すると、ベンガラの散布率が若干下回り、逆に埋葬遺物の出土率が若干高い。しかし、埋葬遺物については、その内容においてB群とは質的に相当な差がある。B群の埋葬遺物は小玉と石鏃に限られているのに対し、本群ではこれに石剣・勾玉・石製有孔垂飾製品・赤色漆塗り櫛・土器・掻器が加わっている。

〈D群〉

調査区南東部にあり、5基以上の土壙墓からなると考えられる。群の広がりは直径約10mの半円状を呈し、南側半分は調査区外である。東端のSK120と121がわずかに重複し、その他は0.8~2.0mの間隔を置いている。5基の平面形は楕円形だけで他の平面形はなく、東側に3基が集中し西側に2基が分布する。長軸方向は、東側3基が略東西方向であるのに対し、西側の2基がそれにほぼ直交する南北方向である。ベンガラの散布があるのはSK108の1基のみで、副葬遺物のあるのもSK108の1基だけである。

〈E群〉

調査区南部中央にあり、5基以上からなると考えられる。群の広がりは弦の径約7mの弓形を呈し、南側半分以上は調査区外である。5基のうち1基は南東側に独立するが、他の4基は

北西側で重複している。SK95と101、96と116、101と116が切り合っている。平面形は 3 基が楕円形、他の 2 基が楕円(長)と円形で、全体的に極く浅いものが多い。長軸方向が判明しているのは 2 基だけで、略東西方向と、北東-南東方向である。ベンガラの散布があるものはなく、副葬品を出土したものがSK94の 1 基である。

第2節 土器棺墓

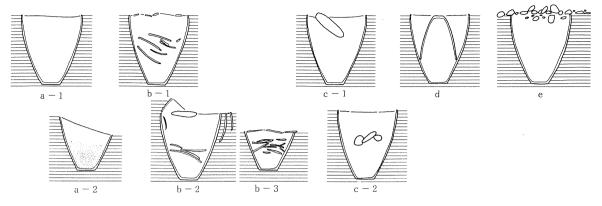
調査区内から、33基の土器棺墓が検出された。土器棺墓は、粗製深鉢形土器を、土器よりわずかに大きい穴(掘り方)を掘り、その中に正位に埋設したものである。ここでは、主に新生児・死産児等の埋葬施設と考えている遺構である。埋設された粗製深鉢形土器は、器全体、特に胴部下半が被熱によって脆なくなっているものが多いこと、煤状炭化物が外面では胴中部以上、内面では下部に帯状に付着しているものがほとんどであることから、日常生活に用いられていた煮沸用の深鉢形土器が転用されたものと考えられる。用いられた深鉢形土器は、口径30~35cm、器高30~45cm、底径8~11cmのものが主体を占める。以下33基の土器棺墓について、その形態等についてまとめてみたい。なお、33基の土器棺墓中で、明らかに土器棺底部が穿孔された例はない。

1 土器棺墓の類型

33基の土器棺墓のうち、31基は正位に埋設されていたことが明らかであるが、2基は横倒しの状態で検出された。しかしこの2基は畑の耕作による撹乱を著しく受けたものであり、本来の姿としては、正位に埋設されていたものと考えられる。各土器棺墓の検出面及び棺内には、褐色土等を主とする土だけが存在するものの他、河原石や土器片が数枚重なって存在するもの等がある。このような在り方を類型化すれば、 $a\sim e$ 類の5類に分けることができ、 $a\sim c$ 類はさらに $1\sim 3$ 細分される。なお、SR53・60・61・62・75・80・81・82・86・93の10基は、棺底部近くまで撹乱を受けており、類型化不可能であり除外した。従って、23基が類型化の対象である。

第98図が、主に上部構造によって類型化した模式図である。

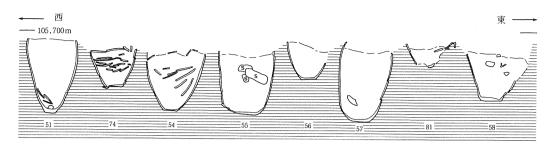
- a-1 類:河原石や土器片が上部や棺内にないもので、最も多い。しかし、上部を耕作によって削平されたものが多く、中には c 類もしくは e 類であった可能性のあるものを含んでいる。 $SR03 \cdot 06 \cdot 13 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 18 \cdot 24 \cdot 57 \cdot 63 \cdot 84 \cdot 85 \cdot 88 \circ 12 基がこれに当たる。$
- a-2類:埋土中位以下にベンガラが散布されているものである。\$R52の1基だけである。
- b-1類:土器棺本体とは異なる粗製深鉢形土器を故意に分割し、その破片数枚~十数枚を棺

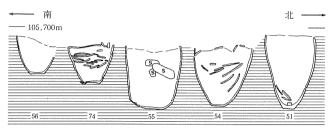


第98図 土器棺墓の類型

上面もしくは棺内上部(遺体の上)に蓋状に並べるものである。土器片は棺内中部~下部で検出されることが多いが、これは遺体の腐朽に伴って、上を覆っていた土器片や埋土が棺内に落下もしくは流入したためと考えられる。\$R51・54の2基がこれである。

- b-2 類: b-1 類のように土器片を蓋状に並べる以外に、その上に扁平な河原石をのせ、さらに土器片で土器棺周囲を 5 分の 3 周ほど二重に囲むものである。 SR12の 1 基がこれである。
- b-3類:b-1・2類の蓋等に用いられた土器片が、土器棺本体とは別の深鉢形土器を分割したものであったのに対し、本類は土器棺に用いようとする土器本体を胴中位で割って、下半を土器棺に、上半を蓋とするものである。なお、土器棺側と蓋側の破片は分割部分の小さな破片もきれいに接合するところから、土器の分割は、完形土器を埋設した直後か、直前と考えられる。SR74の1基がこれである。
- c-1 類:土器棺上部に大きくて扁平な河原石を横たえて蓋とするものである。SR83の1 基が これに当たり、b-2 類SR12の河原石もこれと同様のものである。
- c-2 類: c-1 類程は大きくない河原石数個を土器棺上部に置くものである。 SR04・55・58 の 3 基がこれである。
 - d 類:土器棺とは別の、土器棺よりも一回り小さな深鉢形土器を倒立させて蓋とするものである。\$R52の1基がこれであるが、蓋である深鉢形土器を棺内深く入れたものか、もっと上部にあったものが落下したものかは不明である。
 - e 類:土器棺上面及び棺内上部に、地山土由来と考えられる砂礫が分布しているものである。\$R35の1基がこれである。
 - 以上前に述べた中で、土器棺に明らかに蓋があったとすることのできるのは、 $b-1 \cdot 2$ ・





第99図 土器棺墓の大きさと埋設レベル模式図

3類、d類である。c類も、扁平な河原石やあまり大きくない礫を、立石もしくは集石と考えるよりも、蓋として用いられたものとする方が、b・d類のあり方からより妥当性があると考えられる。そして、蓋の存在を明確には証明できないa・c類についても、棺内の底面直上の埋土を除いた埋土は、後から棺内に流入もしくは落下したと見られるものが多い。このことと、土器棺内には遺体が埋納されていたことを前提にすれば、棺上面には腐朽して残在しない木製の蓋や植物性の編み物等の蓋があったと推定される。また、c類の石の蓋の場合も、石の径が土器棺上面の径よりも小さいことから、木製もしくは植物性の編み物等と一緒に用いられていたか、それらの蓋の上に置かれていたものと考えられる。

2 土器棺墓の大きさ

ところで、各土器棺墓検出の際に、埋設されている土器棺の中位以上もしくは上部を欠く土器棺墓については、本来は土器棺として用いられた深鉢形土器が完形のまま埋設されていたものが、撹乱によって失われたものと考えていた。しかしSR74のあり方によって、一個の深鉢形土器を上下に分割し、下方のみを土器棺として用いる例のあることが判明した。このことは、土器棺の中に埋納する遺体が小さい場合には、それに見合う大きさに土器棺の大きさを調整したことを示している。また、第99図は、土器棺墓が0.3~1.2m前後の間隔で埋設されていたLB30グリッド北部周辺の土器棺墓を、一定レベルのもとに、模式的に東西、南北方向に並べてみたものである。この部分は、ほぼ平坦な面をなしており、地形による高低差はほとんど考慮しなくてもよい。これによると、土器棺が口縁部まで残存していて、完形のまま埋設されたのは

SR51・57の2基で、SR54・55もほぼ同様と見てよい。SR74はほぼこの状態が埋設当時の姿・レベルと考えられる。従って、この部分における、晩期当時の生活面は、SR51~57口縁を結んだラインもしくはそれより若干上部と想定される。とすれば、土器棺墓の上部が地上に突き出ていたか、それをマウンド状に高く覆うことがなかったと仮定した場合、少なくとも土器棺の土器胴部中位~上部以上を欠いているSR56や81は、土器棺埋設時から、ほぼこの大きさであったと考えることができる。埋納しようとする遺体によって土器棺の大きさ(特に深さ)を変えるが、それは、遺体の大きさに合った完形の土器を用いるのではなく、日常主に煮沸に用いていたと考えられる、どれでもほぼ同じ程度の大きさの粗製深鉢形土器を分割して土器棺にしていたことになる。

3 土器棺墓群

33基の土器棺墓は、調査区ほぼ全域に分布するが、土器棺墓どうしが1m内外の間隔しか置かずに群在する部分が二か所あり、それ以外のものは散在している。群在する二か所は、北部中央やや西側のLA34グリッドにあるSR12~14・18の4基と、中央部のLB30・31グリッドにあるSR51・54~58等の18基である。この土器棺墓群は、明らかに群としてのまとまりを持っている。これに対し、散在する土器棺墓を見てみると、例えばSR86・80・88・83の4基は土壙墓C群の、SR84・93・85は土壙墓E群の範囲内に存在していることがわかる。同様に北部SR04・06・03・35・16は土壙墓A群に、中央部SR24・63は土壙墓B群の範囲に近いと言える。土壙墓E群には、これまでのところ土器棺墓が存在していない。従って、33基の土器棺墓群をA~Dの4群(第97図の点線で示した範囲)に分けることができ、それらは、各々土壙墓群A~D群の範囲と重なるか、半分以上で重復する。各々の土器棺墓群の構成は以下の通りである。(なお、各遺構番号の後のカッコ内は、類型を示し、カッコのないものはa-1類もしくは不明のものである)。

A群: $SR03 \cdot 04(C-2 \ \pm) \cdot 06 \cdot 12(b-2 \ \pm) \cdot 13 \cdot 14 \cdot 16 \cdot 18 \cdot 35(e \ \pm)$ の 9 基からなる。 B群: $SR24 \cdot 51(b-1 \ \pm) \cdot 52(d \ \pm) \cdot 53 \cdot 54(b-1 \ \pm) \cdot 55(c-2 \ \pm) \cdot 56(c-2 \ \pm) \cdot 57 \cdot 58(c-2 \ \pm) \cdot 60 \cdot 61 \cdot 62 \cdot 63 \cdot 74(b-3 \ \pm) \cdot 75 \cdot 81 \cdot 82 \circ 17 \ \pm$ からなる。

C群: $SR80 \cdot 83(c-1 類) \cdot 86 \cdot 8804$ 基からなる。

D群: SR84・85・93の3基からなる。

第3節 虫内Ⅲ遺跡の埋葬区と墓群

虫内Ⅲ遺跡の調査区600m²の中から、縄文時代晩期前葉の土壙墓60基と土器棺墓33基が検出され、調査区ほぼ全域が埋葬施設としての土壙墓と土器棺墓で構成されている事が分かった。

そして、土壙墓は $A\sim E$ の5群、土器棺墓は $A\sim D$ の4群にまとまることも判明した。さらに、土壙墓 $A\sim D$ 群と土器棺墓 $A\sim D$ 群は、各々の範囲が全く重なるか半分以上重復することから、密接な関係があったものと考えられる。このことからここでは、土壙墓A群と土器棺墓A群を合わせたまとまりを墓群Aとし、同様に墓群B、墓群C、墓群Dと表現したい。土壙墓E群は、後述するように、未調査区に土器棺墓群の存在が推定されるところから、そのまとまりをを墓群Eとする。

墓群A~Eは以下のように構成される。

墓群A:土壙墓14基と土器棺墓9基の合計23基からなり、その範囲は、調査区北部の南北15m×東西10mである。

墓群B:土壙墓16基と土器棺墓17基の合計33基からなり、その範囲は、調査区中央部の南北× 東西各14mである。

墓群C:土壙墓20基と土器棺墓4基の合計24基からなり、その範囲は南北12.5m×東西9mである。

基群D:土壙墓5基以上と土器棺墓3基以上の合計8基以上からなり、南側に延びると考えられるが、南半は未調査区である。調査区内では直径10mの半円状の範囲である。

基群E: 土壙墓5基以上と土器棺墓からなり、南側に延びると考えられるが、南側大部分は未 調査区である。調査区内では弦の径が7mの弓形の範囲である。

墓群とは、各墓群を形成した、あるいはその範囲を自分達の墓場として、墓を造り守って来た最小単位集団(以下、単位集団と呼ぶ)の墓所を指し、その単位集団をここでは一応、一つの家族に相当するものとしておきたい。そしてここでは、墓群A~E全体は、各墓群を形成した単位集団がいくつか集まった現在の集落に相当するムラの埋葬区であったと考えておきたい。しかし、各土壙墓群の項でも触れて来たように、A~E群の土壙墓群は、特に長軸方向と、群内におけるまとまり方から、各々がさらに2つに分けられる可能性もある。このことが果たして各墓群がより小さな二つの群に分かれるのか、あるいは小林達雄氏が言うように、集団内における二者の対立と合一性によるものかは、不明であるが、各埋葬区の広がりとその範囲を見ていると、後者の見方がより妥当性を持つように思われる。

これらの5つの墓群の時期は、およそ晩期前葉と考えられるが、個々の土壙墓の時期の明確でないものが多く、また、土器棺墓に使用された土器も粗製深鉢形土器であるところから、細かい型式認定の困難なものが多い。出土している土器の中で、最も新しそうなのは、SK89土壙墓出土の小型の壺形・皿形土器や、SX99性格不明遺構の鉢形土器であり、これらは山内清男博士の土器編年大綱で言うところの大洞BC式の範疇で据え得るもので、 C_1 式までには下がらない。また、確実なものとして最も古そうなのは、KT34グリッドを中心に出土した深鉢形土器

(第67図96)などで、これらは同じく大洞B式の枠の中に収まるものと考えられる。また、土器 棺墓に使用された土器の多くは、口縁部が直立もしくはわずかに内弯し、胴下部に向かって緩くすぼまる器形で、底部が若干上げ底もしくは上げ底気味で、底部外周がケズリやナデなどの調整によって直立気味となるものを主体とする。それらに、胴上部以下が上記のような器形で、口縁部が無文で弱く外反し、小波状口縁となるものがある。この時期の粗製深鉢形土器に対しての編年的研究は遅れており、個々の土器棺の型式を認定することは難しいが、上記のような粗製深鉢形土器は後期最末〜晩期前葉にかけてのもので、少なくともCi式以降のものは含ん(註4)でいないようである。なお、口縁部に文様帯をもつ深鉢形土器としては、SR51・54・86の土器棺が大洞BC式期、SK115出土のものが大洞B式期と考えられる。以上のことから、墓群A〜Dは、晩期前葉大洞B式〜BC式期にほぼ並行して形成され、これに墓群Eも含めた調査区全域が、概ね晩期前葉の埋葬区であったと考えられる。

ここで、未調査区の多い墓群D・Eを除いたA・B・C3つの墓群内における、土壙墓群と 土器棺墓群の位置関係を見ると、墓群A・Bでは、土器棺墓が南西〜南側に各々隣接して集中 する。墓群Cではこの傾向は顕現されていないものの、墓群の西側が大きく遺構のない部分に なっている。このような状況は、同じ墓群の中でも、土壙墓が造られる場所と土器棺墓が設け られる場所が異なっていたことを示しており、土壙墓と土器棺墓の重複例が皆無であることが、 このことを強く支持しているように思われる。そして、墓群Cの西側は、墓群Cの土器棺墓埋 設予定場所であったとする見方は穿ちすぎであろうか。同様に考えれば、墓群D・Eの土器棺 墓が調査区内に少ない理由が、両墓群の西もしくは南側に存在するであろうとの想定で説明で きるように思われる。

さて、調査区内の五つの墓群の構成とその内容はこれまで見て来た通りである。ここでは、 墓群A・B・Cから出土した副葬遺物及びベンガラの被散布率や、土壙墓の長軸方向の比較を 通して、墓群A・B・Cを形成した単位集団の横顔を垣間見てみたい。

副葬遺物は3群とも土壙墓からだけ出土しており、その詳しい内容は本章第1節(3)に示した通りである。副葬遺物の出土率は、墓群Aが14%、墓群Bが25%、墓群Cが33%である。出土率の上では、高い順に墓群C→B→Aとなる。さらに、副葬遺物の内容を見てみると、墓群A・Bでは緑色凝灰岩製の小玉と石鏃が主で、わずかに、墓群Aに赤色漆塗り櫛の可能性のあるものと壺1個、墓群B中に翡翠の小玉2点が含まれている程度である。これに対し、墓群Cでは、A・B墓群にはなかった完形の石剣、翡翠製の勾玉と小玉、石製有孔垂飾品、赤色漆塗り櫛と壺形・皿形土器、掻器がある。副葬品の出土率もさることながら、その内容において、墓群Cが墓群A・Bを凌駕していることは明らかである。特にSK91の副葬遺物は、1基だけで、全長71.1cmの石剣・翡翠製の勾玉と小玉・手の込んだ作りの石製有孔垂飾品であり、同じ墓群

C中にありながら群を抜いている。そして、これに次ぐのがSK104の赤色漆塗り櫛・翡翠製勾玉・搔器であり、両土壙墓共にベンガラが散布されている。このことは、SK91や104の被葬者が特別扱いされる人物であったことを示している。

なお、ベンガラの散布されている土壙墓での副葬遺物の出土率が80%強であることは先に述べた。各墓群内の土壙墓におけるベンガラの被散布率は、墓群Aが7%、墓群Bが25%、墓群Cが20%であり、墓群BとCでは副葬遺物の出土率と逆転している。このことは、ベンガラが散布される被葬者と、遺物が副葬される被葬者との間に強い相関々係は認められるものの、遺物が副葬されることと、ベンガラが散布されることの意味が同一ではないことを表していると考えられる。副葬遺物はあるがベンガラが散布されない土壙墓と、その逆の土壙墓がそれぞれに存在している。

墓群A・B・C内での土壙墓の長軸方向は、墓群B・C間では、東西軸・南北軸の比率の上では差があるものの、それ以外の方向が無く、両者共に長軸方向の決定が強い規制の下に行われていたことは明らかである。これに対し、墓群Aではそれほどに強い規制が働いていたとは見えない。ここで前述したような副葬遺物の有無が、ムラ集団の中における単位集団や、それに属する個人の地位や役割あるいは貧富等の差を表象するものと仮定すれば、副葬遺物の出土及び内容やベンガラの散布から見た各墓群の序列は、高い方から、墓群C→B→Aの順であると考えられる。そして、以上2つのことはムラ集団内の序列の高い単位集団ほど、埋葬頭位の決定に当たり強い規制を受けたことを示している。このことはつまり、埋葬に当たっての方位決定に対する規制は、ムラ集団内の序列の高い単位集団ほど強く受け、その規制は、そのような単位集団こそが守らねばならない類のきまりだったのではあるまいか。さらに、最も高い序列にあった墓群Cの中でも、SK91の被葬者は、墓群Cを率いていたことは勿論、ムラ全体を統括する立場にあった人物と見ることができる。そして、SK104の被葬者などは、この人物に強いつながりを持つ者だったことも想像に難くない。

以上見て来たように、墓群A~Eは、縄文時代晩期前葉に形成された1つのムラの埋葬区(の一部)の中における各単位集団の墓所であったと考えられる。五つの墓群は、ほぼ同時に墓所としての埋葬スペースが用意され、土壙墓と土器棺墓という埋葬施設が作られて行ったのであろう。そして、晩期の前葉から中葉に移ろうとする頃に何らかの要因のもとに、他に埋葬区を設けるべく、この地を去ったと考えられる。それはちょうど、各墓群内の埋葬スペースがほぼ飽和状態となった頃と時を同じくするのかもしれない。

以上、虫内Ⅲ遺跡の発掘調査によって検出された埋葬施設としての土壙墓と土器棺墓、それらがまとまった形での墓群及び埋葬区について述べて来た。しかし、今回の調査の成果はこれ

に留まるものではなく、他にも大事だとは考えられるものの触れることのできなかった事柄も 多い。また、埋葬に関しても、本遺跡内のまとめに終始し、同時期の他の調査例との比較・検 討を全く行うことができなかった。埋葬以外のことを含め今後の課題としたい。

なお、今回の発掘調査は、本遺跡の推定範囲のうち、北端部を対象としたにすぎない。調査 区の南側にどのような遺構・遺物が拡がっているかは不明で、それらが明らかになれば、遺跡 全体の構造がより具体的に見えてくるかもしれない。

また、本遺跡の西〜北西側にある虫内 I 遺跡は、平成3・4・5年の3ヶ年にわたって発掘調査が実施された後期後葉〜晩期前葉を中心とする遺跡である。調査では、厖大な量の遺物が包含された捨場を中心に、多数の土壙墓や土器棺墓を主な埋葬施設とするより規模の大きな墓地の存在することが判明している。さらに、虫内 I 遺跡の西側に続く虫内 II 遺跡・小田 IV 遺跡からも、ほぼ同時期の土壙墓群や土器棺墓群が検出されている。このことから、本遺跡を東側、小田 IV 遺跡を西側とする4つの遺跡で、東西約450mにも及ぶ広大な墓地が形成されていたと見ることができる。しかし、該期の墓地が検出されている本県内の平鹿・梨ノ木塚・湯出野・地方・藤株等の遺跡同様、本遺跡・虫内 I・II 遺跡・小田 IV 遺跡からは、この広大な墓地を形成した人々の集落が検出されていない。そして、仮に、それらの遺跡の未調査区に集落(居住区)が存在するとしても、これだけの規模の墓地を形成するには小さすぎる集落であろうと推測される。したがって、これまでのところ、このような広大な墓地は、複数の集落によって形成された共同墓地とするのが妥当と考えられる。複数の集落による縄文時代晩期前葉の大共同墓地、それは将に、虫内沢を中心に広がる「死者の谷」という形容が合う景観だったと思われる。

註1:ここで一応、人が葬られた場所と施設としての墓の集合の名称について、現段階での概念を示しておく。墓地は、墓のあるところ、墓の集まっているところを指し、集落全体の中での墓地を墓域とする。従って墓地は、主に集落内に含まれない場所に造られた墓の集まりを指す。そして、墓地(墓域)の中でいくつかの最小単位がまとまっている部分を埋葬区と呼ぶ。埋葬区と埋葬区は、地形的もしくは妥当な物理的距離をもつ空間や構造物によって区画されていると考える。墓群は、埋葬区の中での最小単位であり、個々の土壙墓や土器棺墓、配石墓等から構成される。

註2:小林達雄「縄文集団における二者の対立と合一性」『論苑考古学』 坪井清足さんの古稀を祝う会 編 天山舎 1993 (平成5年)

註3:山内清男「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄紋式土器の終末」『考古学』第1巻第3号 1930(昭和5年)

註4:榮一郎氏の教示による。

- 註5:中村大「秋田県柏子所貝塚からみた亀ヶ岡文化」『考古学ジャーナル』No368 1993(平成5年)
- 註 6:秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』10・11 1992(平成 4 年)、1993(平成 5 年)
- 註7:秋田県埋蔵文化財センター『秋田県埋蔵文化財センター年報』11 1993(平成5年)
- 註8:秋田県教育委員会『平鹿遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第101集 1983(昭和58年)

秋田県教育委員会『梨ノ木塚遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第63集 1979(昭和54年)

秋田県教育委員会『湯出野遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第53集 1978(昭和53年)

秋田市教育委員会『秋田新都市開発整備事業関係埋蔵文化財発掘調査報告書-地方遺跡・台B遺跡-』1987 (昭和62年)

秋田県教育委員会『藤株遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第85集 1981 (昭和56年)

註9: 虫内 I 遺跡の平成3年度調査に関する岡村道雄氏のコメントから。1992.10.18 朝日新聞記事

第6章 虫内III遺跡から検出された遺構に残存する脂肪の分析

(株) ズコーシャ総合化学研究所 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏 帯広畜産大学生物資源化学科 中野益男

動植物を構成している主要な生体成分にタンパク質、核酸、糖質(炭水化物)および脂質(脂肪・油脂)がある。これらの生体成分は環境の変化に対して不安定で、圧力、水分などの物理的作用を受けて崩壊してゆくだけでなく、土の中に住んでいる微生物による生物的作用によっても分解してゆく。これまで生体成分を構成している有機質が完全な状態で遺存するのは、地下水位の高い低地遺跡、泥炭遺跡、貝塚などごく限られた場所にすぎないと考えられてきた。

最近、ドイツ新石器時代後期にバター脂肪が存在していたこと、古代遺跡から出土した約2 (2) (3) 千年前のトウモロコシ種子、約5千年前のハーゼルナッツ種子に残存する脂肪の脂肪酸は安定した状態に保持されていることがわかった。このように脂肪は微量ながら比較的安定した状態で千年・万年という長い年月を経過しても変化しないで遺存することが判明した。

脂質は有機溶媒に溶けて、水に溶けない成分を指している。脂質はさらに構造的な違いによって誘導脂質、単純脂質および複合脂質に大別される。これらの脂質を構成している主要なクラス(種)が脂肪酸であり、その種類、含量ともに脂質中では最も多い。その脂肪酸には炭素の鎖がまっすぐに延びた飽和型と鎖の途中に二重結合をもつ不飽和型がある。動物は炭素数の多い飽和型の脂肪酸、植物は不飽和型の脂肪酸を多く持つというように、動植物の種ごとに固有の脂肪酸を持っている。ステロールについても、動物性のものはコレステロール、植物性のものはシトステロール、微生物はエルゴステロールというように動植物に固有の特徴がある。従って、出土遺物の脂質の種類およびそれらを構成している脂肪酸組成と現生動植物のそれとを比較することによって、目に見える形では遺存しない原始古代の動植物を判定することが可能である。

このような出土遺構・遺物に残存する脂肪を分析する方法を「残存脂肪分析法」という。この「残存脂肪分析法」を用いて虫内III遺跡から検出された遺構の性格を解明しようとした。

1. 土壤資料

秋田県平鹿郡山内村に所在する虫内III遺跡の土器棺墓および土壙墓から採取した土壌試料を分析した。各遺構内外での試料採取地点を100図に示す。試料No.1~No.3は土器棺墓SR12のもので、No.1を棺内中層、No.2を棺内下層、No.3を遺構外地山から、試料No.4~No.6は土器棺墓構SR16のもので、No.4を棺内中層、No.5を棺内下層、No.6を遺構外地山から、試料No.7~No.

表 6 土壌試料の残存脂肪抽出量

試料No.	採取遺構	湿重量(g)	全脂質(mg)	抽出率(%)
土器埋設遺	構			
1	SR12-4層	193.7	115.6	0.0597
2	" -7層	217. 1	84. 4	0.0389
3	″ -26層	244. 4	39. 6	0.0162
4	SR16-2層	488. 9	120.0	0.0245
5	" - 3層	387. 7	73. 7	0.0190
6	" -6層	235. 7	47. 6	0.0202
7	SR54-1層	170.3	176. 3	0. 1035
8	" -2層	185. 9	69. 7	0.0375
9	" -7層	148.8	17. 1	0.0115
10	SR56-1層	295.0	408. 1	0. 1383
11	" -2層	115.3	30. 2	0.0262
12	" -2層	123. 2	40. 9	0.0332
13	SR85-2層	196. 5	33. 1	0.0168
14	" - 4層	150.5	36. 8	0. 0245
15	″ -10層	271. 0	25. 8	0.0095
土坑				
16	SK19-5層	139.7	29. 9	0.0214
17	" -5層	148. 9	27. 9	0.0187
18	" -8層	124. 2	35. 8	0. 0288
19	SK23-2層	306.0	88. 7	0.0290
20	" - 3層	206. 4	54. 9	0. 0266
21	SK91-12層	387.7	65. 4	0.0169
22	″ -12層	514.6	73. 9	0.0144
23	SK 125-7層	291.7	28. 0	0.0096
24	" -7層	289. 8	22. 8	0.0079
25	″ - 7層	341. 1	23. 5	0.0069

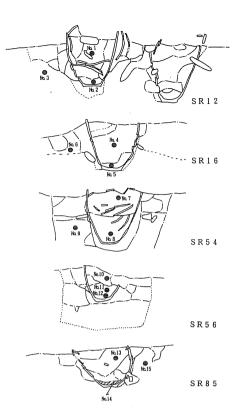
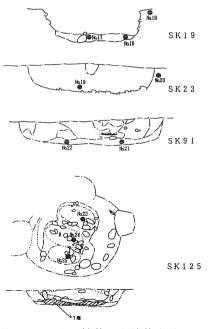


表7 試料中に分布するコレステロールとシトステロールの割合

試料10.	コレステロール(%)	シトステロール(%)	コレス テロール/ シトス デロール
1	8. 07	27. 97	0. 29
2	6. 97	43. 31	0. 16
. 3	5. 19	50.00	0. 10
4	7. 70	31. 84	0. 24
5	7. 20	41.81	0.17
6	4.02	62. 56	0.06
7	8. 78	21. 30	0.41
8	17. 00	27. 75	0.61
9	7. 96	32. 98	0. 24
10	8. 09	23. 76	0. 34
11	8. 95	18. 09	0.49
12	9. 71	22.44	0.43
13	6. 74	37. 29	0.18
14	7. 03	34. 57	0. 20
15	7. 93	32. 33	0. 25
16	8. 67	22. 95	0. 38
17	7. 31	19. 70	0. 37
18	7. 26	30. 63	0. 24
19	8. 75	28. 31	0. 31
20	7. 61	37. 64	0. 20
21	6. 20	38. 68	0. 16
22	7. 01	43. 46	0. 16
23	4. 51	38. 19	0.12
24	7. 92	33. 88	0. 23
25	5. 87	40. 26	0. 15



第100図 土器棺墓・土壙墓内外での 土壌試料採取地点

9は土器棺墓構SR54のもので、No.7を棺内上層、No.8を棺内下層、No.9を棺外地山から、試料No.10~No.12は土器棺墓構SR56のもので、No.10を棺内上層、No.11を棺内中層、No.12を棺内下層から、試料No.13~No.15は土器棺墓SR85のもので、No.13を棺内上層、No.14を棺内下層、No.15を棺外地山から、試料No.16~No.18は土壙墓SK19のもので、No.16とNo.17を土壙内底部、No.18を土壙外地山から、試料No.19、No.20は土壙墓SK23のもので、No.19を土壙内底部、No.20を土壙外地山から、試料No.21、No.22は土壙墓SK91のもので、No.21、No.22を棺内底部から、試料No.23~No.25は土壙墓SK125のもので、No.23~No.25を壙内底部から、それぞれ採取した。

2. 残存脂肪の抽出

土壌試料115~515gに 3 倍量のクロロホルムーメタノール(2:1)混液を加え、超音波浴槽中で30分間処理し残存脂肪を抽出した。処理液を濾過後、残渣に再度クロロホルムーメタノール混液を加え、再び30分間超音波処理をする。この操作をさらに 2 回繰り返して残存脂肪を抽出した。得られた全抽出溶媒に 1 %塩化バリウムを全抽出溶媒の 4 分の 1 容量加え、クロロホルム層と水層に分配し、下層のクロロホルム層を濃縮して残存脂肪を分離した。残存脂肪の抽出量を表 6 に示す。抽出率は0.0069~0.1383%、平均0.0304%であった。この値は全国各地の遺跡から出土した土壌、石器、土器等の試料の平均抽出率0.0010~0.0100%よりは高いものであった。

残存脂肪をケイ酸薄層クロマトグラフィーで分析した結果、脂肪は単純脂質から構成されていた。このうち遊離脂肪酸が最も多く、次いでグリセロールと脂肪酸の結合したトリアシルグリセロール(トリグリセリド)、ステロールエステル、ステロールの順に多く、微量の長鎖炭化水素も存在していた。

3. 残存脂肪の脂肪酸組成

分離した残存脂肪に5%メタノール性塩酸を加え、125℃封管中で2時間分解し、メタノール分解によって生成した脂肪酸メチルエステルをクロロホルムを分離し、ヘキサンーエチルエーテル一酢酸(80:30:1)またはヘキサンーエーテル(85:15)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで精製後、ガスクロマトグラフィーで分析した。

残存脂肪の脂肪酸組成第101を図に示す。残存脂肪から8種類の脂肪酸を検出した。これらパルミチン酸(C16:0)、ステアリン酸(C18:0)、オレイン酸(C18:1)、リノール酸(C18:2)、アラキジン酸(C20:0)、エイコサモノエン酸(C20:1)、ベヘン酸(C22:0)、リグノセリン酸(C24:0)をガスクロマトグラフィーー質量分析により同定した。

各試料中での脂肪酸組成パターンを見てみると、試料No.1、No.7、No.10、No.11、No.12、No.23、No.24以外のすべての試料がほぼ同一の組成パターンを示した。このうち炭素数18までの中級脂肪酸の分布割合について見てみると、試料No.1、No.10、No.23、No.24では主要な脂肪酸がパルミ

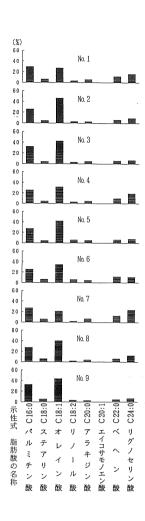
チン酸とオレイン酸でほぼ同程度分布していた。試料No.7、No.11、No.12では主要な脂肪酸はパルミチン酸で、次いでオレイン酸が多く分布していた。これらを除くすべての試料中では主要な脂肪酸はオレイン酸で、次いでパルミチン酸が多く分布していた。一般に考古遺物にはパルミチン酸が多く含まれている。これは長い年月の間にオレイン酸、リノール酸といった不飽和脂肪酸の一部が分解し、パルミチン酸が生成するためで、主として植物遺体の土壌化に伴う腐植物から来ていると推定される。また、オレイン酸の分布割合の高いものとしては、動物性脂肪と植物性脂肪の両方が考えられ、植物性脂肪では特に根、茎、種子に多く分布するが、動物脂肪の方が分布割合は高い。ステアリン酸は動物体脂肪や植物の根に比較的多く分布している。リノール酸は主として植物種子・葉に多く分布する。

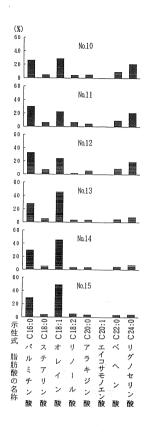
一方、高等動物、特に高等動物の臓器、脳、神経組織、血液、胎盤に特徴的にみられる炭素数20以上のアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸などの高級脂肪酸はそれら3つの合計含有量が試料No.15、No.21、No.22、No.23を除き約15~43%であった。通常の遺跡出土土壌中でのアラキジン酸、ベヘン酸、リグノセリン酸の高級脂肪酸3つの含有量は約4~10%であるから、上記試料No.15、No.21、No.22、No.23を除くすべての試料中での高級脂肪酸含有量が34%以上特に、試料No.1、No.4、No.7、No.10、No.11、No.12では高級脂肪酸3つの合計含有量が34%以上という大変多いものであった。また、遺構の内外試料を比較すると、概して遺構内試料の方が高級脂肪酸3つの合計含有量が多かった。

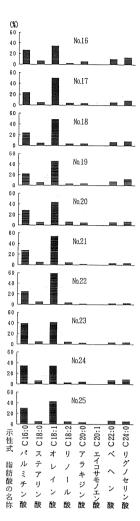
以上のことから、虫内III遺跡の試料中には主としてオレイン酸が多く含まれているものが多く、高級脂肪酸も全般的にすべての試料中で多く含まれていた。特に、試料No.1を採取した土器棺墓SR12の4層、No.4を採取した土器棺墓SR16の2層、No.7を採取した土器棺墓構SR54の1層、No.10、No.11、No.12を採取した土器棺墓SR56には高級脂肪酸が非常に多く含まれていた。従って、遺構内に動物遺体が存在していたと推定される。試料No.21とNo.22を採取した土壙墓SK91では、高級脂肪酸3つの含有量が約7~9%とあまり多くないため、動物遺体の存在については明確ではない。

4. 残存脂肪のステロール組成

残存脂肪のステロールをヘキサソーエチルエーテルー酢酸(80:30:1)を展開溶媒とするケイ酸薄層クロマトグラフィーで分離・精製後、ピリジソー無水酢酸(1:1)を窒素気流下で反応させてアセテート誘導体にしてからガスクロマトグラフィーにより分析した。残存脂肪の主なステロール組成を第102図に示す。残存脂肪から15~20種類のステロールを検出した。このうちコプロスタノール、コレステロール、エルゴステロール、カンペステロール、スチグマステロール、シトステロールなど8種類のステロールをガスクロマトグラフィーー質量分析により同定した。





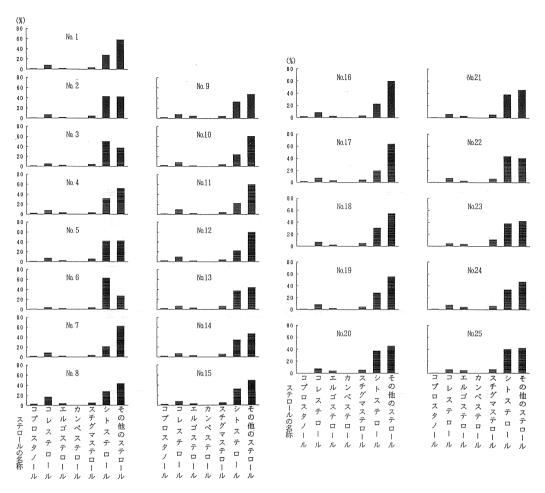


第101図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成

試料中のステロール組成をみると、動物由来のコレステロールは土器棺墓SR54の試料No.8を除くすべての試料中で約4~10%分布していた。試料No.8では約17%分布していた。通常一般的な植物腐植土中にはコレステロールは4~8%分布している。従って、試料No.8を除くすべての試料中でコレステロールはさほど多く含まれてはいなかった。

植物由来のシトステロールは試料No.6で約63%と多く分布していた以外は、すべての試料中で約18~50%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはシトステロールは30~40%、もしくはそれ以上分布している。従って、若干少なめのものもあるが、試料中でのシトステロール分布量は通常の土壌並みであった。

クリ、クルミ等の堅果植物由来のカンペステロール、スチグマステロールは、すべての試料



第102図 試料中に残存する脂肪のスチロール組成

中でカンペステロールが検出されず、スチグマステロールが試料No.23の約11%を除き、約3~7%分布していた。通常の遺跡出土土壌中にはカンペステロール、スチグマステロールは1~10%分布している。従って、試料中に含まれている植物性ステロールは、通常の遺跡出土土壌中でよりも少なめといえる。

微生物由来のエルゴステロールはすべての試料中に約 $1\sim5$ %分布していた。これは土壌微生物の存在による結果と思われる。

哺乳動物の腸および糞便中に特異的に分布するコプロスタノールは、試料No.18、No.20、No.23 で検出されず、残るすべての試料中に約0.3~3%分布していた。通常コプロスタノールが10%以上含まれていると、試料中に残存している脂肪の動物種や性別、また、遺体の配置状況などが特定できる場合があるが、今回は含まれていても3%以下の微量であるため、それらの判定はできなかった。しかし、わずかではあるがコプロスタノールが残存しているということは、

試料中に哺乳動物の脂肪が残存していることを示唆している。

一般に動物遺体の存在を示唆するコレステロールとシトステロールの分布比の指標値は土壙で0.6以上、土器・石器・石製品で0.8~23.5をとる。試料中のコレステロールとシトステロールの分布比を表7に示す。表からわかるように、分布比は試料No.8が0.61を示した以外はすべて0.6以下であった。従って分布比から見る限り、試料No.8以外は動物遺体の存在を明確に示さなかった。しかし、対照土壌試料である地山試料と土器棺墓および土壙墓内試料とを比較すると、土器棺墓SR12の地山で0.10、SR16の地山で0.06、SR54の地山で0.24、土壙墓SK19の地山で0.24と、概して分布比は同一遺構では遺構内よりも遺構外の地山試料の方が低い値を示していた。このことから遺構内試料が微量ながら動物遺体の痕跡を示していると考えられる。

以上のことから、試料中に含まれているコレステロール量やコレステロールとシトステロールの分布比は、土器棺墓SR12、SR16、SR54、SR56、および土壙墓SK19、SK23に動物遺体が残存していたことを示唆していた。

5. 脂肪酸組成の数理解析

残存脂肪の脂肪酸組成をパターン化し、重回帰分析により各試料間の相関係数を求め、この相関係数を基礎にしてクラスター分析を行って各試料間の類似度を調べた。同時に土器棺墓や土壙墓にヒト遺体が直接埋葬されていたと判断した同じ秋田県内の虫内 I 遺跡、桂の沢遺跡、出土土器を幼児埋葬用甕棺と判定した静岡県原川遺跡、ヒトの体脂肪、出土土壙を再葬墓と判定した宮城県摺萩遺跡、人間の骨油試料など、各種遺跡試料や現生試料の脂肪酸の類似度とも比較した。予めデータベースの脂肪酸組成と試料中のそれとでクラスター分析を行い、その中から類似度の高い試料を選び出し、再びクラスター分析によりパターン間距離にして表したのが第103図である。

図からわかるように、虫内III遺跡の土器棺墓SR12の試料No.1、SR16の試料No.4、SR54の試料No.7、SR56の試料No.10~No.12は桂の沢遺跡の試料No.3と共に相関行列距離0.05以内で非常によく類似しており、A群を形成した。虫内III遺跡の他の試料はすべて相関行列距離0.05以内で非常によく類似しており、E群を形成した。他の対照試料はそれぞれB、C、D、F、G群を形成した。このうちヒト遺体を直接埋葬した試料と類似した脂肪が残存していると判断した虫内I遺跡、桂の沢遺跡、原川遺跡の試料が形成するB、C、D群とA群は相関行列距離で約0.2の所にあり類似していた。特に、同じ県内の虫内I遺跡、桂の沢遺跡の試料が形成するB、C群とA群とは相関行列距離0.15以内でよく類似していた。E群の試料は骨葬に関わる試料が形成するF群と相関行列距離0.1以内で類似していた。これらA、B、C、D群とE、F群は相関行列距離で約0.25以上離れていた。

以上のことから、虫内III遺跡中の試料No.1を採取した土器棺墓SR12、試料No.4を採取した土

器棺墓SR16、試料No.7を採取した土器棺墓SR54、試料No.10~No.12を採取した土器棺墓SR56はヒト遺体を直接埋葬した試料に、それ以外の試料はすべて再葬墓などの骨葬に関わる試料に類似していることがわかった。

6. 脂肪酸組成による種特異性相関

残存脂肪の脂肪酸組成から種を特定するために、中級脂肪酸(炭素数16のパルミチン酸から炭素数18のステアリン酸、オレイン酸、リノール酸まで)と高級脂肪酸(炭素数20のアラキジン酸以上)との比をX軸に、飽和脂肪酸と不飽和脂肪酸との比をY軸にとり種特異性相関を求めた。この比例配分により第1象限の原点から離れた位置に高等動物の血液、脳、神経組織、臓器等に由来する脂肪、第1象限から第2象限の原点から離れた位置にヒト胎盤、第2象限の原点から離れた位置に高等動物の体脂肪、骨油に由来する脂肪がそれぞれ分布する。第2象限から第3象限にかけての原点付近に植物と微生物、原点から離れた位置に植物腐植、第3象限から第4象限に移る原点から離れた位置に海産動物が分布する。

土壌試料の残存脂肪から求めた相関図を第104図に示す。図からわかるように、試料No.1、No.4、No.7、No.10~No.12は第1象限内に広く分布し、A群を形成した。他の試料は主として第2象限に、一部の試料は第1象限、第3象限に渡って広く分布し、E群を形成した。A群の分布位置は試料中に高等動物の脳、神経組織や臓器等に由来する脂肪が残存していることを示唆する所である。E群の分布位置は試料中に高等動物の体脂肪や骨油または植物腐植土のいずれかに由来する脂肪が残存していた可能性を示唆している。

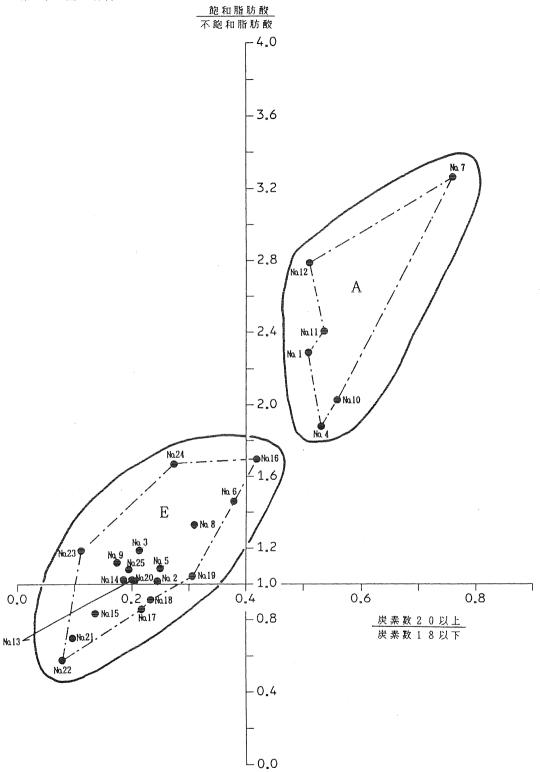
以上のことから、土器棺墓の試料No.1、No.4、No.7、No.10~No.12には高等動物の脳、神経組織や臓器等に由来する脂肪が残存していることが明らかであったが、他の試料中には高等動物の体脂肪、骨油、植物腐植土のいずれかが残存してはいるが、植物腐植土の占める割合が高いために、明確に断言はできなかった。

7. 総括

虫内Ⅲ遺跡から出土した土器棺墓および土壙墓の性格を判定するために、遺構内外の土壌試料の残存脂肪分析を行った。残存する脂肪酸分析の結果、試料中にはオレイン酸が主要な脂肪酸として分布しているものが多く、高級脂肪酸も全般的にすべての試料中で多く含まれていた。 土壙墓SK91を除くすべての遺構の試料中に動物遺体が存在していた可能性があった。

脂肪酸組成の分布に基づく数理解析の結果、クラスター分析では虫内III遺跡の試料のうち土器棺墓SR12の試料No.1、SR16の試料No.4、SR54の試料No.7、SR56の試料No.10~No.12はヒト遺体を直接埋葬したことに関わる試料と類似していた。また、種特異性相関からもこれらの試料に高等動物由来の脂肪が残存していることがわかった。虫内III遺跡の残る試料はクラスター分析では骨葬に関わる試料と類似しており、種特異性相関からも骨油やヒトの体脂肪、植物腐植土

197



第104図 試料中に残存する脂肪の脂肪酸組成による種特異性相関

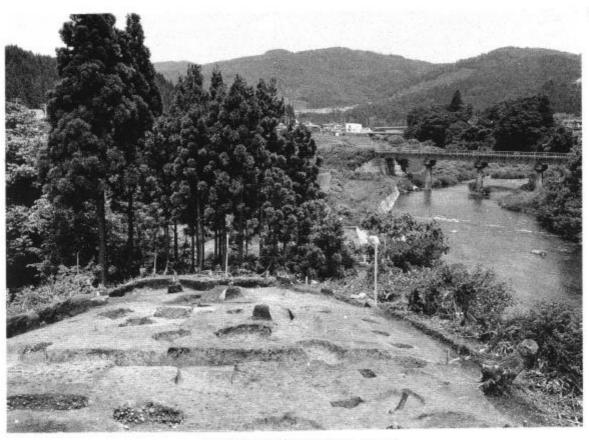
のいずれかに類似していることがわかった。これは残存する脂肪酸分析で、殆どの試料に高級脂肪酸が多く含まれており、動物遺体が存在していたという結果とは必ずしも一致しなかった。 残存するステロール分析の結果、土器棺墓SR54の試料No.8を除くすべての試料中で動物性コレステロール含量は少なく、コレステロールとシトステロールの分布比も0.6以下ではあったが、土器棺墓および土壙墓内試料と対照試料である地山試料との比較によれば、土器棺墓SR12、SR16、SR54、SR56、土壙墓SK19は高等動物遺体の存在を示唆するものであった。

以上の成績から、土器棺墓SR12、SR16、SR54およびSR56については直接遺体を埋納した甕棺であり、土壙墓SK19、SK23およびSK125 は土壙墓と推定された。しかしこれらの土器棺墓は再葬墓などの骨葬にも近い結果を示した。土器棺墓SR85および土壙墓SK91ははっきりと動物遺体の残存を示さなかった。動物遺体をヒトと判定するには、今後ヒト抗体を用いた免疫反応で精査する必要がある。

参考文献

- (1) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: 「Food identification of samples from archaeological sites」 『Archaeo Physika』、10巻、1979、pp260.
- (2) D.A.Priestley、W.C.Galinat and A.C.Leopold:「Preservation of polyunsaturated fatty acid in ancient Anasazi maize seed」、『Nature』、292巻、1981、pp146.
- (3) R.C.A.Rottländer and H.Schlichtherle: 「Analyse frühgeschichtlicher Gefäβinhalte」、『Naturwissenschaften』、70巻、pp33.
- (4)中野益男:「残存脂肪分析の現状」、『歴史公論』、第10巻(6)、1984、pp124.
- (5) M.Nakano and W.Fischer: The Glycolipids of <u>Lactobacillus casei</u> DSM 20021」、『Hoppe-Seyler's Z. Physiol.Chem.』、358巻、1977、pp1439.
- (6) 中野益男:「残存脂肪酸による古代復元」、『講演収録集-新しい研究法は考古学になにをもたらしたか』、第3回「大学と科学」 公開シンポジウム組織委員会編、1989、pp114.
- (7) 中野益男、伊賀 啓、根岸 孝、安本教傳、畑 宏明、矢吹俊男、佐原 真、田中 琢: 「古代遺跡に残存する脂質の分析」、『脂質生化学研究』、第26巻、1984、pp40.
- (8) 中野益男:「真脇遺跡出土土器に残存する動物油脂」、『真脇遺跡ー農村基盤総合設備 事業能都東地区真脇工区に係わる発掘調査報告書』、能都町教育委員会・真脇遺跡発掘 調査団、1986、pp401.

- (9) 中野益男、根岸 孝、長田正宏、福島道広、中野寛子:「ヘロカルウス遺跡の石器製品 に残存する脂肪の分析」、『ヘロカルウス遺跡』、北海道文化財研究所調査報告書、第 3 集、1987、pp191.
- (10) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「虫内 I 遺跡から出土した遺構に残存する 脂肪の分析 | 、『未発表』、秋田県埋蔵文化財センター.
- (11) 中野寛子、明瀬雅子、長田正宏、中野益男:「桂の沢遺跡の配石遺構に残存する脂肪の 分析」、『未発表』、秋田県埋蔵文化財センター.
- (12) 中野益男、幅口 剛、福島道広、中野寛子、長田正宏:「原川遺跡の土器棺に残存する 脂肪の分析」、『原川遺跡 I -昭和62年度袋井バイバス(掛川地区)埋蔵文化財発掘調 査報告書』、第17集、(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所、1988、pp79.
- (13) 中野益男、福島道広、中野寛子、長田正宏:「摺萩遺跡の遺構に残存する脂肪の分析」、 『未発表』、宮城県教育委員会.



虫内Ⅲ遺跡前期調査区全景(南→)



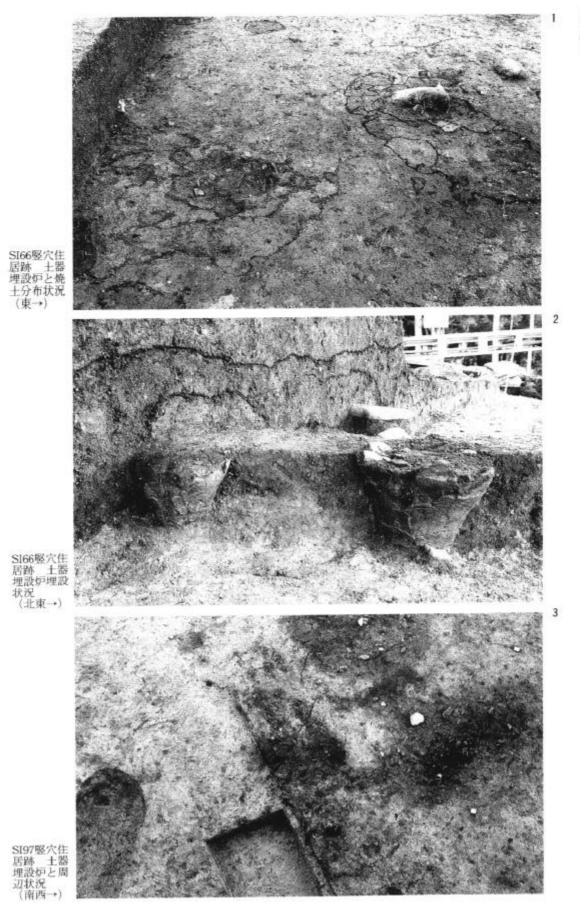
後期調査区全景 (南→)

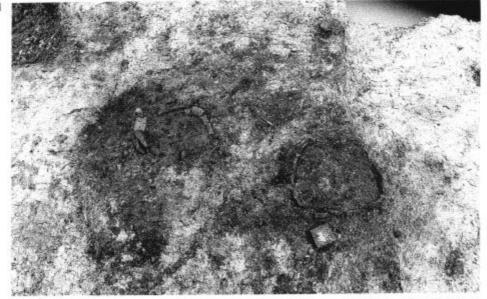


調査区南部中央の土壙墓群 (西→)



実測風景

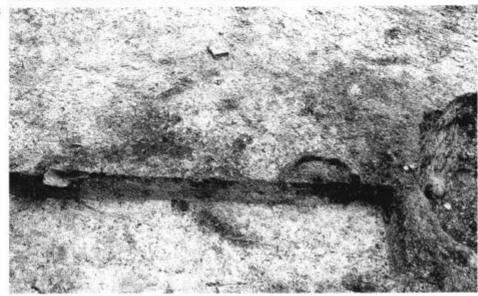




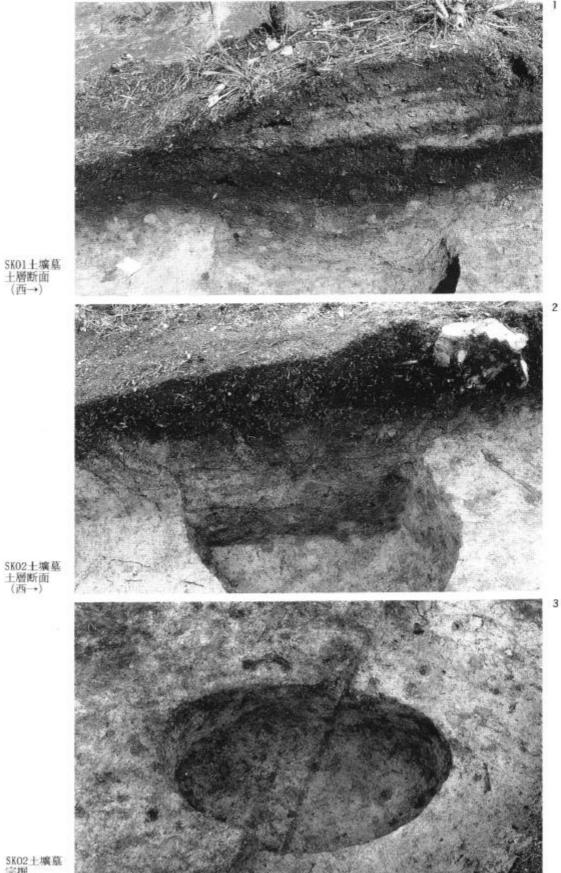
SI97竪穴住 居跡 土器 埋設炉の 検出状況 (北→)



SI100竪穴住 居跡 土器 埋設炉の 検出状況 (北西→)



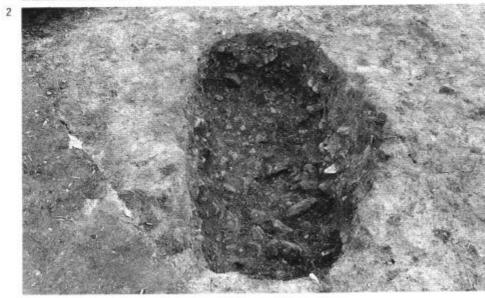
SI100竪穴住 居跡 土器 埋設炉の 断面状況 (南→)



SK02土壤墓 完捆 (北西→)



SK08土壙墓 土層断面 (北西→)



SK08土壙墓 完掘 (北東→)



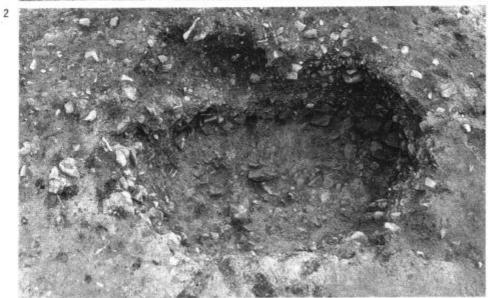
SK10土壤墓 • SQ09配石 遺構 検出 状況 (北東→)



SK15土壙墓 完掘 (南→)



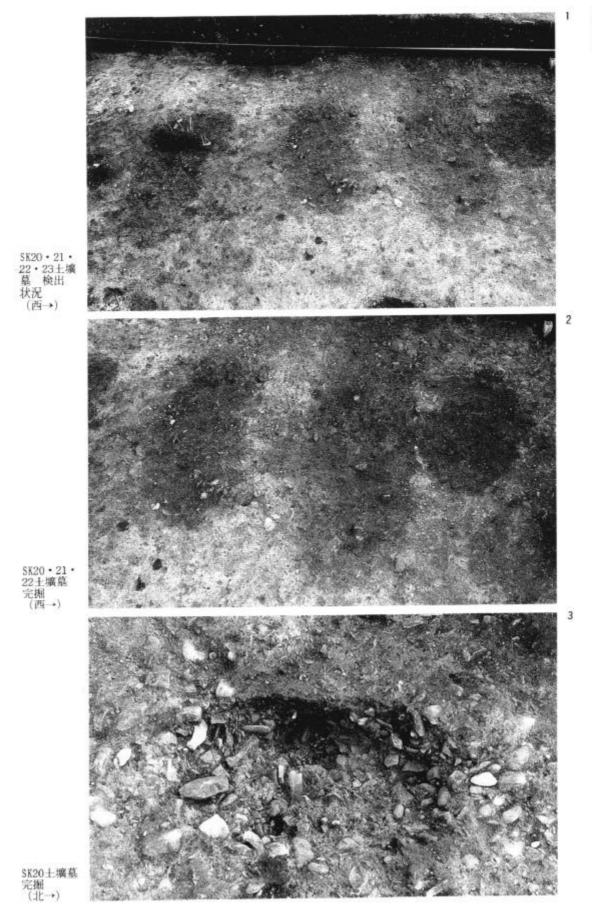
SK17土壤墓 完据 (北→)

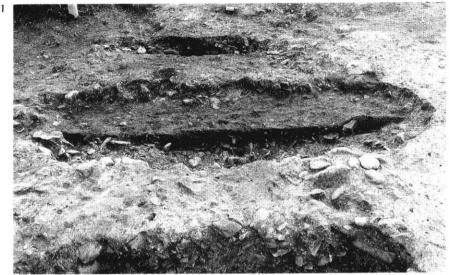


\$K19土壤墓 完掘 (北東→)



SK19±壤墓 北西隅部小 玉出土状况 (南東→)





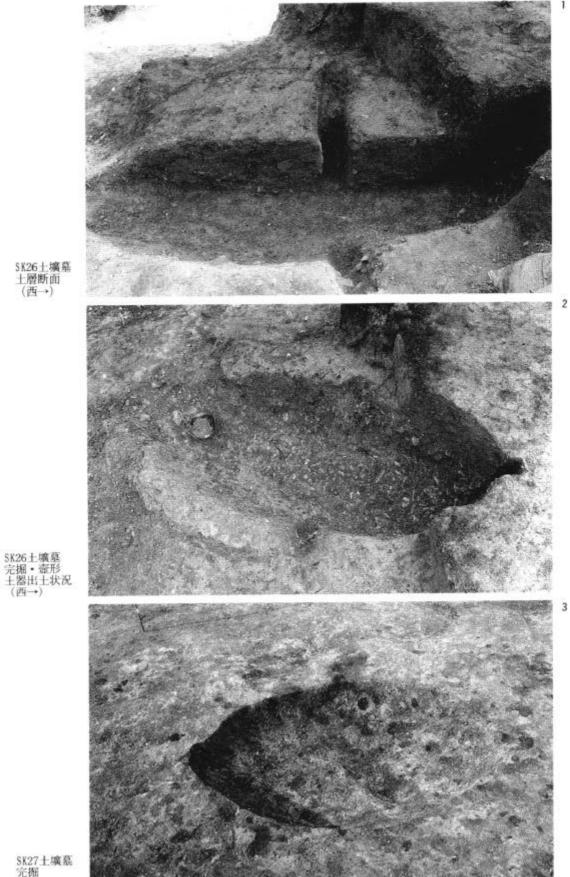
SK21土壙墓· 土層断面 (北→)



SK22土壙墓 完掘 (東→)



SK23土壙墓 完掘 (南→)



SK27土壙墓 完掘 (南→)